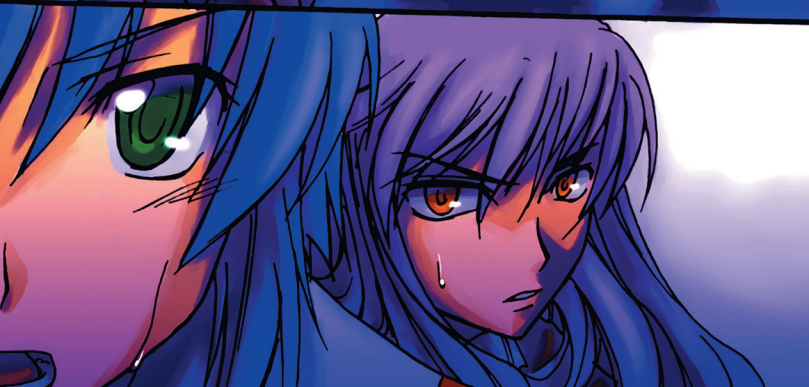
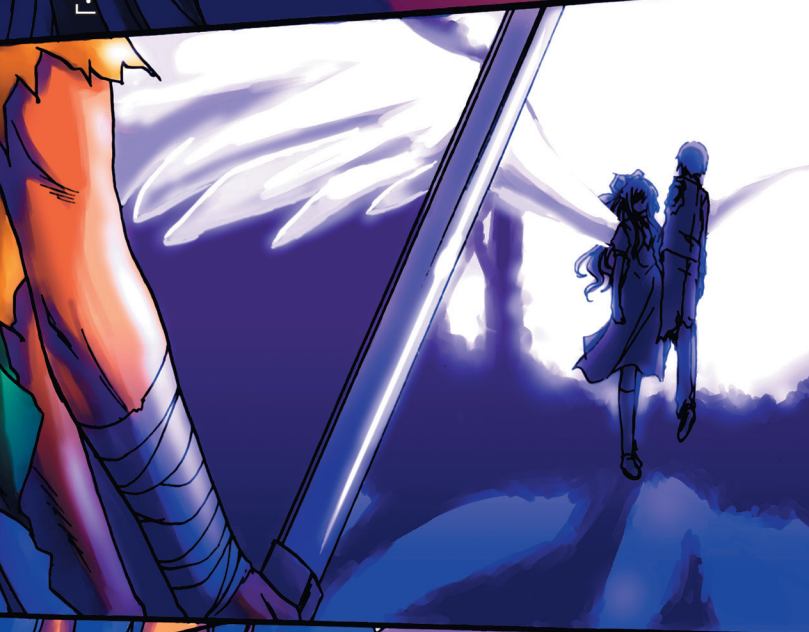
HAKAGI
ハカギ・ロワイアル
ROYALE
7

HAKAGI
ROYALE

そしてパートナーを導く踊り子のように、
優しげとさえ言える、滑らかな仕草で手を差し伸べた。

「次は、どいつじゃ？」

「葉子さん……」
「お久しぶりですね、郁未さん。会いたかったです……」

HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

7

――【残り19人】

葉鍵ロワイアル参加者名簿

~~一　　番　相沢　祐一（あいざわ・ゆういち）~~

~~二　　番　藍原　瑞穂（あいはら・みずほ）~~

三　　番　天沢　郁未（あまさわ・いくみ）

~~四　　番　天沢　未夜子（あまさわ・みよこ）~~

~~五　　番　天野　美汐（あまの・みしお）~~

~~六　　番　石原　麗子（いしはら・れいこ）~~

~~七　　番　猪名川　由宇（いながわ・ゆう）~~

~~八　　番　岩切　花枝（いわきり・はなえ）~~

~~九　　番　江藤　結花（えとう・ゆか）~~

~~十　　番　太田　香奈子（おおた・かなこ）~~

十 一 番　大庭　詠美（おおば・えいみ）

~~十 二 番　緒方　英二（おがた・えいじ）~~

~~十 三 番　緒方　理奈（おがた・りな）~~

~~十 四 番　折原　浩平（おりはら・こうへい）~~

~~十 五 番　杜若　きよみ〈原身〉（かきつばた・きよみ）~~

~~十 六 番　杜若　きよみ〈複製身〉（かきつばた・きよみ）~~

十 七 番　柏木　梓（かしわぎ・あずさ）

~~十 八 番　柏木　楓（かしわぎ・かえで）~~

十 九 番　柏木　耕一（かしわぎ・こういち）

二 十 番　柏木　千鶴（かしわぎ・ちづる）

~~二十一番　柏木　初音（かしわぎ・はつね）~~

二十二番　鹿沼　葉子（かぬま・ようこ）

二十三番　神尾　晴子（かみお・はるこ）

二十四番　神尾　観鈴（かみお・みすず）

~~二十五番　神岸　あかり（かみぎし・あかり）~~

~~二十六番　河島　はるか（かわしま・はるか）~~

~~二十七番　川澄　舞（かわすみ・まい）~~

~~二十八番　川名　みさき（かわな・みさき）~~

二十九番　北川　潤（きたがわ・じゅん）

~~三 十 番　砧　夕霧（きぬた・ゆうき）~~

~~三十一番　霧島　佳乃（きりしま・かの）~~

~~三十二番　霧島　聖（きりしま・ひじり）~~

三十三番　国崎　往人（くにさき・ゆきと）

~~三十四番　九品仏　大志（くほんぶつ・たいし）~~

~~三十五番　倉田　佐祐理（くらた・さゆり）~~

~~三十六番　来栖川　綾香（くるすがわ・あやか）~~

三十七番　来栖川　芹香（くるすがわ・せりか）

~~三十八番　桑嶋　高子（くわしま・たかこ）~~

~~三十九番　上月　澪（こうづき・みお）~~

~~四 十 番　坂神　蝉丸（さかがみ・せみまる）~~

~~四十一番　桜井　あさひ（さくらい・あさひ）~~

~~四十二番　佐藤　雅史（さとう・まさし）~~

~~四十三番　里村　茜（さとむら・あかね）~~

~~四十四番　澤倉　美咲（さわくら・みさき）~~

~~四十五番　沢渡　真琴（さわたり・まこと）~~

四十六番　椎名　繭（しいな・まゆ）

~~四十七番　篠塚　弥生（しのづか・やよい）~~

四十八番　少年（しょうねん）

~~四十九番　新城　沙織（しんじょう・さおり）~~

五 十 番　スフィー（すふぃー）

~~五十一番　住井　護（すみい・まもる）~~

~~五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ（せりお）~~

~~五十三番　千堂　和樹（せんどう・かずき）~~

~~五十四番　高倉　みどり（たかくら・みどり）~~

~~五十五番　高瀬　瑞希（たかせ・みずき）~~

~~五十六番　立川　郁美（たちかわ・いくみ）~~

~~五十七番　橘　敬介（たちばな・けいすけ）~~

~~五十八番　塚本　千紗（つかもと・ちさ）~~

~~五十九番　月島　拓也（つきしま・たくや）~~

~~六 十 番　月島　瑠璃子（つきしま・るりこ）~~

六十一番　月宮　あゆ（つきみや・あゆ）

~~六十二番　遠野　美凪（とおの・みなぎ）~~

~~六十三番　長岡　志保（ながおか・しほ）~~

~~六十四番　長瀬　祐介（ながせ・ゆうすけ）~~

~~六十五番　長森　瑞佳（ながもり・みずか）~~

~~六十六番　名倉　由依（なくら・ゆい）~~

~~六十七番　名倉　友里（なくら・ゆり）~~

六十八番　七瀬　彰（ななせ・あきら）

六十九番　七瀬　留美（ななせ・るみ）

~~七 十 番　芳賀　玲子（はが・れいこ）~~

~~七十一番　長谷部　彩（はせべ・あや）~~

~~七十二番　氷上　シュン（ひかみ・しゅん）~~

~~七十三番　雛山　理緒（ひなやま・りお）~~

~~七十四番　姫川　琴音（ひめかわ・ことね）~~

~~七十五番　広瀬　真希（ひろせ・まき）~~

~~七十六番　藤井　冬弥（ふじい・とうや）~~

~~七十七番　藤田　浩之（ふじた・ひろゆき）~~

~~七十八番　保科　智子（ほしな・ともこ）~~

~~七十九番　牧部　なつみ（まきべ・なつみ）~~

~~八 十 番　牧村　南（まきむら・みなみ）~~

~~八十一番　松原　葵（まつばら・あおい）~~

~~八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ（まるち）~~

~~八十三番　三井寺　月代（みいでら・つくよ）~~

~~八十四番　御影　すばる（みかげ・すばる）~~

~~八十五番　美坂　香里（みさか・かおり）~~

~~八十六番　美坂　栞（みさか・しおり）~~

~~八十七番　みちる（みちる）~~

八十八番　観月　マナ（みづき・まな）

~~八十九番　御堂（みどう）~~

~~九 十 番　水瀬　秋子（みなせ・あきこ）~~

~~九十一番　水瀬　名雪（みなせ・なゆき）~~

九十二番　巳間　晴香（みま・はるか）

~~九十三番　巳間　良祐（みま・りょうすけ）~~

~~九十四番　宮内　レミィ（みやうち・れみぃ）~~

~~九十五番　宮田　健太郎（みやた・けんたろう）~~

~~九十六番　深山　雪見（みやま・ゆきみ）~~

~~九十七番　森川　由綺（もりかわ・ゆき）~~

~~九十八番　柳川　祐也（やながわ・ゆうや）~~

~~九十九番　柚木　詩子（ゆずき・しいこ）~~

~~百　　番　リアン（りあん）~~

葉鍵ロワイアル
舞台　地形図

地図制作：JOYH-TV

カバー、口絵、挿し絵：ちん

葉鍵ロワイアル

※この物語は巨大掲示板２ちゃんねるの葉鍵（Leaf&Key）
　板において創作されたリレー小説です。

※今回の単行本化にあたり、著者自身の手によって本文の
　表現やタイトルが改められた個所があります。
※ Web ページの原文を縦書きの単行本として出版するに
　あたり、最低限必要な改行等の改変を編集側で行わせて
　いただきました。

772　俺たちは、まだ笑える

いよぅ。俺だよ、北川だ。みんな、あっちで元気にしているか？
　俺は……散々な目に遭ってる。はっきり言って、朦朧としている上に骨折しているせいか、全く余裕はない。
　その上またもや、ヒゲオヤジに銃口を向けているのさ。さっきもそうしてなかったかって？　ああそうさ、デジャヴってやつだ。
　……俺が、お前らと一緒に夢を見てるんじゃなければ、だけどな？
「……」
「おっさん、どうやら神様は俺を愛してらっしゃるようだぜ？」
　がちゃり、と電動釘打ち機をフランクに向けながら、北川は余裕たっぷりに言い放った。ちょうど崩れた建物の方へ向いているフランクの視界外、右側から狙っている状態だ。
　……いや、本当は余裕なんかない。
　そもそも、利き手の人差し指が折れている。だから左手一本で戦うしかない。その上ほんのさっき、爆弾が破裂する音を聞くまで気を失っていたので、あまり頭が回らない。
「そんじゃまず、俺の銃を返してもらおうかな？　ゆっくりと左手で銃身を持って、こっちへ投げてくれ。こんどはオッサンの長ーい脚も届かないから、無駄な抵抗は止めろよな」
「……」
　フランクは髭の下に憮然とした表情を隠しながら、少々の余裕を持っていた。この少年は自分を殺すような事はしないだろう、と。
　特に理由はないのだが……殺気が、薄い。だから先程も殺そうとはしなかったし、それは彼にも解っ

ているだろう。
　芹香が目覚めれば、なんとか交渉が効くかもしれない。
「……」
「ゆっくりと、頼むぜ」
　フランクは観念し、左手でデザートイーグルの銃身を掴み、右手を放す。ゆっくりと右を向くフランクに、北川が声をかける。
「さ、こっちへ投げて――」
　そのとき、声がした。
「誰かと思えば、北川かよ！」
　往人、晴子、観鈴の三人が、崩れた建物の裏側から向かってくる。その声に反応して、北川が振り向いた。
「――往人さ――」
　ズガッ！
　その瞬間、顔面に巨大な鉄塊が直撃していた。
「――痛うっ！」
　同時に、身を屈めて走るフランク。混乱して、引き金を引く北川。
「くそっ！」
　……だがもちろん、釘は発射されなかった。電源が、ないのだから。
　先に晴子を認識したフランクが方針を変更し、あとから振り向いた北川の隙をついた。つまり、デザートイーグルを顔面めがけて放り投げたのだ。
　晴子が叫び、銃を構える。
「ほれ見い、居候！」
「勝ち誇んな！」
　往人もＭ４カービンを構えようとして――肩が、上がらなかった。
（……ちっ）
「……やめとけ、弾の無駄だ」
　既にフランクは、建物の影に隠れ、おそらくそのまま距離を稼いでいるだろう。下手に追えば、角を

曲がったところを狙撃される。そう考えて往人は晴子を制止し、北川達のところへ向かった。

晴子が芹香を起こし、観鈴が北川の治療をする。心なしか北川の顔が緩んでる気もするが、多分気のせいだ。ひとり周囲を警戒する往人は、頭の片隅でそんな事を考えていたりしていた。

少年と違い、フランクはレーダーに映らない。視力と聴力、そして勘だけが頼りだ。緊張した面持ちで危険なポイントをチェックする。特に背の高い建物は、要注意だ。

（さっきは晴子の思い切りの良さに助けられたが……これは裏目に出たな）

苦々しい顔で、フランクとの縁を諦める往人。

（ま、お互い喧嘩してる余裕はねぇだろうがよ……）

それでも最大の脅威は、少年に他ならない。ここで潰しあうのは、得策ではないだろう。

遠くを睨む往人の、険しい表情をみとめた者は、誰もいなかった。

「はい、おしまい」

「ああ……ありがとう」

観鈴が包帯を巻き終わり、ぽんと北川のおでこを叩く。指には釘を添えて包帯を巻き、固定してある。

それを見ながらデザートイーグルを拾い、往人は少しだけ考えた。

「……晴子、お前の銃とこいつ、交換してくれ」

「あん？　どないしたんや？」

「肩が上がらん。両手で使う銃は無理だ——それでお前は、こっちな。どうせ左じゃ狙いはつかんだろうから、右手で抑えてバラ撒くことだけ考えろ」

晴子と拳銃を交換し、M4カービンを北川に渡しながら続ける。

「それと、その釘打ち機は捨てろ。……電池はこっちで、使っちまったんだよ」

往人はそう言ってレーダーを振り、ニッと笑った。
「酷いな、往人さん……もうちょっとで大逆転だったんですよ?」
悪かったな、と言いながら北川の髪をくしゃくしゃと乱暴に撫でる往人。きょとんとした表情の観鈴。呆れ顔の晴子。ぼーっとしている芹香。
だが、往人と北川は笑っていた。二人は、笑っている。
ああ、そうさ。俺たちは、まだ笑える。心の底から、笑っていられる。

「さて、これからどうするか、だが……北川?」
「はい?」
「なんでお前、ここに居るんだよ?」
「あー……えーと……」
いつもの滑らかさを欠いた、北川の喋りにおおよその見当をつける往人。心なしか、視線が冷たい。
「……まあ、いい。観鈴を〝保護〟しようとしてくれたのには、感謝する」
「だからって、ウチの観鈴に手ェ出したら容赦せえへんで」
「ちょ、ちょっとお母さん!」
……などとひと揉めあったが、再び先行きの事を相談する五人。いや、正確には四人なのだが……
「じゃ、北川。お前は今度こそ施設へ行け。寄り道したら、殺すぞ」
「とほほ……はいはい」
「俺たちは、あのクソガキと決着を付けなきゃならん。……それで、芹香。お前はどうする?」
一人だけ輪に加わらず放心している芹香に、往人が尋ねる。
「……」
「は?」
「……」
「聞こえねえよ」
「……」

「あァん？　フザけてんのか!?」
少々気の短くなっている往人が、芹香を怒鳴りつける。
「お、往人さん、ちょっと待ったあ！」
慌てて間に入る北川。
「これは……ひょっとして……」

そう、ひょっとしたのだ。
……理由は街角の吐瀉物だけが、知っている。

773　閉幕の足音

やってみるものだなと、つくづく思う。
探し物、高槻の死体は、拍子抜けするくらいあっさりと見つけることができた。
非常に嫌悪感を催すものだったが、いちいち嫌がっている暇はない。今はとても、時間が惜しいのだ。
こうしている間にも、あの少年が何人もの命を奪っているかもしれない。
どんなにちっぽけなことでも、自分に出来ることがあればやってみようと思う。
かっこつけようとするわけではないが、その確かな自分の意志を、私は大事にしたかった。
(あった……)
死体の懐から装置を取り出す。
けど……。
(どう使えばいいのですか？)
機械は苦手だった。

それでも、あれこれと試行錯誤し、なんとか扱うことができた。
完全とまではいかないが、装置を使われる前の段階まで能力は戻ったようである。
手足を動かす。身体の隅々まで、感覚を馴染ませる。

と、一つの疑問が私の頭に浮かんだ。

果たしてこの装置は、『自分にだけ』効果を及ぼすものなのだろうかと。
島全土をカバーするものなら、あの少年の能力も同時にアップさせてしまったのかもしれない。
(……)
考えても答えは出ない。確かめる術はないのだ。
一応装置も持って行くことにしよう。
そして走り出す。街へ、学校へ。

夕闇。
赤と黒の混じる世界。
そんな中、私はただ走っていた。
傷だらけの身体で、背中には、同じく傷だらけのこいつを背負って。
こいつの誘導した放送では、学校に人が集まるようにと呼びかけた。
だけど、今こいつは気を失っている。
それに、最早生き残り全員にとっての共通の敵であることも知られている。
そんな状況で、学校に行く意味もないだろう。
むしろ一刻も早くこの場から立ち去りたい。
こいつを安全な場所で、休ませてあげたい。
そのために、ただ走っていた。
さっきから誰かに見られている気がする。
前から、横から、後ろから、上から。
(上から?)
空を見上げてみる。
太陽は完全に沈んだわけではないけれど、もう星が見えていた。
世界を包むグラデーションの中、自然に溶け込んでいるように見えた。
遠くから、ちっぽけな存在である私たちを見守ってくれる。
ずっと後をつけている気配は、ひょっとしたらこの星々なのかもしれない。
まるで、神様のように。

気持ちが悪い。反吐が出そうな思いだ――
カミサマなんて糞食らえだ。目の前に降りてきてみろ、殺してやる――
私がこいつを守ってあげる。愛してあげる――
そのためなら、何にだって――

偶然。
そう、その姿を見かけたのは偶然だった。
少年を背負って夕闇の街を走る、郁未さんの姿。
表情からは疲れきっているように見えた。
だが、その瞳は死んでいない。
何かの目的のために、決意を喪失していない、強い瞳。
あの忌々しい施設で生活していたころと、何も変わってはいない。
だけど、残念だ。
あの少年は明らかに意識を失っているように見える。
その彼を背負って歩いているのだ。郁未さんが彼の仲間であるのは間違いなかった。
彼の目的を、彼女は知っているのだろうか。
知っていようがいまいが、少年を殺さなければいけないことに変わりはない。
説得は……おそらく無理だろう。
だから――こうして、不意打ちのチャンスを狙っている。

774　消えた光点

岩場を下り森を抜け山地を越えた彼女たちに、低地へと吹き降ろす風が絡み付いている。
異様な寒気を感じたあの暗く湿った山中と比べると、肌に絡みつくようなこの湿った風すら心地よく感じる。
「うぐぅ……スフィーさん、大丈夫？」
「少し休憩する？　どこの誰に取り憑いたなんてわ

からないのだし、焦っても仕方ないわ。急がば回れよ？」
千鶴とあゆが、心配そうにスフィーの顔を覗き込んで言う。
スフィーは目に見えて衰弱していた。つい先程も、意識が体から抜け落ちてしまったかのように、ばたりと地面に倒れたのだ。
「ううん……大丈夫。今は誰でもいいから、片っ端から取り憑いたかどうかを確認しないと……」
無理矢理立ち上がろうとするスフィー。千鶴は、彼女をとどめようとしたが……やめた。もし、自分が彼女の立場でも、寝てなんか居られないからだ。
「そう……だったら、まず最初に行きたいところがあるの」
「それは？」
「あっちの岩場に隠れている、地下施設よ」
あそこには、レーダーがある。
施設を拠点に行動するほうが、この島をむやみに徘徊するより余程効率がいいはずだ。戦力に限りがある以上、頼りになるのは情報のみ。レーダーは、その最たるものなのだ。
千鶴は、まだ知らない。ほぼ時を同じくして、そのレーダーが、初音の応答を確認できなくなったという事実を。
すなわち——初音の、死を。

「みゅ？」
「どうしたのよ、繭？」
光点の消失に反応した繭に、詠美が尋ねる。
もはや人間サマの出番は無く、ＣＤ関連は機械に任せきりで緊張感も無いままに、詠美たちはこれ以上ないくらいに、ダレまくっていた。
そんな弛緩した状態に楔を打つような、繭の発言。
「消えたよ……みゅー……」
「ええっ！　ふみゅ～ん、だ、誰よう⁉　十七番……二十番、六十一番……みんな無事……だけどな

んで別々なのよ……」
途方にくれる詠美。
先ほど芹香の光点が消えたのは、確認済みだった。
もしも千鶴やあゆ、それに別行動している梓のうち、誰も戻らなかったら……自分たちはどうなってしまうのだろう。
……それを思うと、心配でたまらない。気ばかり焦って、実際にはどうしようもない状況に、詠美はひとり苛ついていた。
「あのー、詠美さん、この点ですけどー」
G．N．に用済みと放逐され、手の空いたHMが、詠美を暗い妄想の淵から呼び戻した。
「なによっ！」
その点は、二十九番。芹香が消えた位置から、まっすぐこちらに向かってきているようだった。
二十九番……北川潤。直接は知らない人物だった。
CDを持っているという事と、死んだ芹香に蹴られた事がある、それしか知らない。こちらに来てくれるのは、幸運なのだが……敵か味方かは、解らないのだ。
もしもこの人物が、芹香を殺害したのなら。どうすれば、よいのだろう？
「ふ、ふみゅ～ん……」
「みゅー……？」
人間二人は、うめくばかりであった。

775　遊戯

永遠の深みを誇る漆黒。
その中心に檻が置かれている。
檻を形作る鉄棒は折れ曲がり、扉もほぼ、ひしゃげていた。
だが中に閉じ込められるべき獣は、まだ外には出られていない。
――ポウ――
そんなかすかな音と共に、暗闇の中に女性の姿が

現れる。
　淡い光に照らし出されるその姿は、幻想的とすら呼べるだろう。
「理性の檻……。開けてほしいか？」
「ナニモノダ……」
　片方は魂すら凍りつかせるような冷たい旋律。
　もう片方は全ての生物を戦慄させる恐怖の波動。
「余を知らぬのか？　ふん……」
　不機嫌を全身で表しながら、獣の封印へと歩を進める。
「おお、みすぼらしくも狭い檻だのぉ。お主にお似合いよ」
　――ガッ!!――
　鬼が檻の隙間からその野太い腕をふるう。
「貴様……」
　女の細腕を掴む。
「へし折ってやろうか……」
　……。
　しばし静寂。
「手を……離すがいい」
　――ガッ――
　たいした力など込めてるようには見えない。
　女は軽い動作で手を振り払う。そして、
「この……豚」
　言って口の端を歪める。
　檻の中の獣をあきらかに挑発する態度。
「次にお主は『俺を侮辱するか！　この雌豚が！』と言う」
「俺を侮辱するか！　この雌豚が！　……ハッ!?」
　すべては女のペース。
「ははは っ！　単純よのう」
「グオオオオオオオオオオオオーーーーー!!」
　――ズガン！――
　咆哮と同時に、豪腕が扉にうちつけられる。
　だが壊れかけの檻はそれ以上ほころばない。
　この檻は『理性』なのだから。

「ブッ殺すと心の中で思ったなら！　その時スデに行動は終わっていないとのぉ。檻の中ではそれもできまい。開けてやろうかと言っておるのだ。素直になれ」
　地上最強の生物。それを開放しようとしている。
「目的は何だ……」
　冷静さを取り戻しつつある鬼が問う。
　檻は今だに自分を縛る。
　脱出にはまだ時間がかかる。
　その時間が短縮されることに異議などないが……。
「なに……」
　女は気だるそうな態度でこたえる。
「盛り上らぬ遊戯はつまらんでな……」
　彼女を中心に氷の風が吹く。
　鬼は気づく。
　――力と力の干渉――
　――どこか遠くの場所で沸き上がった異質な力を、『俺』は感じ取っていた――
　――そしてそれを、自分の力で潰してみたいとも思った――
「力……」
　強大な力を思い出す。この女からも似た匂い。
　――生命が散る間際の炎ほど美しいものはない――
　――その命が強大な力を持てば持つ程、その輝きは映えるのだ――
「積極的な参加者は歓迎するが、なにか？」
「出せ……。その遊戯とやらにも参加してやろう……」
　双方の思惑が大筋合致する。
　神奈は漆黒の空に向けて片手をあげる。
と同時に響き始める不協和音。
　キィィィィィィインッ――――――――――――！
「殺せ。目の前でぬくぬくとお前を説得して、牙を

もぎ取ろうとする偽善者を殺すのだ。生きる事の意義もしらない小娘を殺すのだ」

776　花火

どれだけの時間そこで蹲っていたかわからない。世界が終わるまで蹲っていたのかもしれないと思うほど長く感じたけれど、実際には五分に満たない時間しか僕はそうしていることが出来なかった。

　僕はゆっくりと立ち上がった。

　壊れた筈の僕の精神が未だにこの肉体に留まっているその理由。瞳から溢れる赤い涙を拭って薄い呼吸と共に立ち上がった理由。初音の亡骸の傍らにあった拳銃を拾い強く握り締めたその理由。

　理由なんて一つしかない。僕はやはり壊れているのだ。そして壊れているとしたらずっと前に壊れていたのだ。愛しい人を数分前に殺めているのにこうして冷静に物事を考えられる時点で——僕は何処か螺子（ねじ）が飛んでいたのだろう。

　七瀬彰は。ずっと前からこうだったんだと思う。僕はもう僕のことを永遠に好きになることは出来ないだろう。そんなことを頭の片隅で考えながら、僕はゆっくりと立ち上がり、横たわる柏木初音に目もくれず、頭を回転させ始めた。

「生きている事を罪だと知らずに生きていた事が罪」

　僕は呟く。考えを呟きにして思念を思考にする。

　つまり、僕の心の中に入ってきたあれが、僕に初音を殺させた理由というのは、彼女が何も考えず幸せそうに生きている事が罪だったから。生きている事を罪と知らずに生きていたのが赦せなかったから。

　そんな理由で初音は殺された。そしてこの島で起きたすべての死もまた、そんな理由の為に起きたのだと僕は確信した。幸せに生きる人々を妬む、そんな病んだ心が、全ての始まりだったのだ。

　あれが『元凶』だ。

あれが僕達に殺し合いをさせてきたのだ。そして人殺しをさせる理由が、このくだらない理由なのだ。あの声こそが悪魔であり死神だった。
――「あれ」が何であるかは判らない。
意識だけを自分の中に入り込ませ、尚且つ自分の身体を操る――普通の人間に出来る芸当ではあるまい。いや、生物に出来る事ではない。
僕は超能力など信じていないし、目の前の現実こそが信じるに足るものだと理解している。初音を殺めたのは自分自身の狂性であると思ってしまえばそれで後は僕も後追いをするだけだ。
だが――声が聞こえたのだ。一度も聞いた事の無い、少女の声が。何処かで聞いた事のある声だったかも知れない。似たような声をいつか聞いた事があったかもしれない。
けれど、絶対に違うと言える。
つまり僕自身とは別の存在が、僕の中に入ってきたのだと、そう考えるべきなのだ。僕は、彼女が囁いたような言葉を、今までの人生で一度たりとも考えたことが無かった。
僕は仮定する。「あれは意識だけの存在であり、幽霊のようなものである」と。僕は現実しか信じない。そしてこれこそが今の僕の目の前にある現実だ。
その意識だけの存在は、今は、僕の中にいない。僕の身体は、少なくとも今は、僕のものだ。つまり「あの存在」は、――生きている人間の身体に自由に出入りする事が出来るのだ。あの少女が自分の中に入ってきた理由。それをふと考える。そして数刹那の後に僕はその目的を理解して――多分、薄く笑った。あの少女は僕の中に入ってきて、僕に愛しい人を殺させた。それは。そして、少女が僕に囁いた言葉。
「僕にお前の殺人鬼（オモチャ）になれ、という事か？」
生きているものは罪だから殺せ。お前は他人を殺すに相応しいだけの力と、殺しても躊躇しないだけの汚れたものを抱え込んでいる。現にこうして愛し

いものを殺したのだ、もうどれだけ人を殺そうがどうしようが構うまい。
つまり、僕を駒にするだけのために、
僕は最悪の絶望を背負わされ、
彼女は最低の未来さえも与えられなかった。

——笑わせる。

「ふざけんなっ！　ふざけんなッッ！」
畜生！　畜生！　畜生！　畜生！
「ちくしょぉぉぉぉぉッッ!!　初音ぇッッッッッッ！」
そんなくだらない理由で、僕は大切な人を失わなければならないのか？
生きている事が罪だと？　ふざけるな！
確かに目を閉じて横たわり、それでも笑みを崩さない初音は美しいさ、どんなものよりも美しいさ！
だが、それは初音がまっすぐ生きていたから美しいんだよ！　どんなに苦しくても生きようとした彼女の微笑みがあったからこんなに美しいんだよ！　彼女が幸せそうにのほほんと生きてきただって？　本当に、心底から彼女が幸せそうだって？　何処をどう見たらそう見えるんだ？　彼女はいつも苦しんでいて、悩んでいて、泣きそうで、それでも決して笑顔を崩さない強さを持っていた。彼女の笑顔は、彼女の戦いの歴史なのだ。それを、何も考えずに生きてきた——だと？
「ちくしょう、」
目を閉じ、目を閉じ、目を閉じて僕は吐き捨てる。
「僕は、こんな笑顔は認めないッ」
二度と彼女の微笑む姿が見ることが出来ない。強さをカタチにして、僕たちに勇気と希望をくれた笑顔を見ることはもう叶わない。
僕は泣いていた。もう枯れ果てたと思った涙は、それでも僕の心から水分を吸いだして、とめどなく瞼から零れ落ちた。膝は折れなかった。初音に縋っ

て泣くようなことはなかった。それはただの甘えに過ぎない。僕はもう甘えを許されるような位置にいないのだ。そんな場所は、もうないのだ。

「ちくしょぉおお……ッ」

落ちてたまるか、殺人鬼になどなってたまるか！

殺すとすれば、それはただ一つ、

——お前を。この戦いの元凶を、殺し尽くす。

僕は二度目の慟哭の後、その壊れた筈の精神の中で決意した。あいつを殺してから僕は初音のところに逝こう。絶対にそれまでは死ねないし、それから以後に生きていく理由も無い。僕の存在の全てを賭けて、あいつを殺してやる。

だが、どうやって殺す？　僕の仮定が正しければあいつは幽霊のような存在で、幽霊を殺す方法なんて僕には思いつかない。僕は脳味噌に喝を入れて必死に考える。逡巡すること一分。答えは一つしか浮かばない。そして答えはそれ以外にないだろうとも思う。あいつは幽霊で、触れないから殺せないのであって、触れるならば殺すことが出来る。簡単なことだ。

あいつに肉を与えればいい。

自分の肉体をさらけ出し、

あいつをこの身体に留め、

他の誰かに殺させればいい。

だが、そんなにコトが上手く行く筈がない。例えば今、柏木耕一に会ったら、今度こそ彼は僕を殺すだろう。何より大切なものを、今度こそ本当に僕の手によって奪われたのだから。耕一だけではない。初音の周りにいて、初音の笑顔に勇気と希望を貰ってきた全ての人間が、僕を許さないだろう。

だがそれでは駄目なのだ。僕が死ぬのは「あれ」をどうにかしてからでなければいけない。

初音に関わった人間から逃げ続け、「元凶」をこの身体に留めたところで、誰かに殺してもらう。な

んと困難なことだろうと改めて思う。そもそも、どうやってあれをこの身体に誘き寄せるというのだ。
けれど、その困難を乗り越えなければいけない。僕は愛しい人を失った。その復讐のためならば、例え、どれだけ壁が高かろうとも。
——僕は乗り越えてみせる。
僕は頭を回転させ続け更に考えを練る。
この島には「超能力」とでも表現するべき力を持った人間が何人もやってきている事を僕は知っている。その超能力をもってすれば、僕よりずっと先に「元凶」の存在に気づくことが出来ているのではないか。それどころか、彼らは既に「あれ」の正体について調べている可能性もあるだろう。そうであるならば「あれ」を倒す方法——誰かの肉体に乗り移らせて殺す——という方法を思い付いているかもしれない。そして更には「誰かの肉体に乗り移らせる」方法さえ、思い付いているかも知れない。思いついていなくとも、思いつくことが出来るかも知れない。
となれば、こうしてはいられなかった。僕はすぐにでも駆け出して、あれの正体に気づいている人間を見つけ、僕の身体をあれを殺すために提供しなければならない。僕の身体に乗り移った瞬間、拳銃でこの脳天を貫いてもらおう。それで全てが終わる。僕の復讐と僕の人生がまっすぐ終わる。
一方で、耕一と出会ってしまったらそれで終いだ。怒りに狂った彼にぼろ雑巾のように千切られて、それで僕の人生は終わりだ。
僕はもう。
あいつに会う資格も、勇気も、何もない。
ふと身体に力が戻っていくような錯覚を覚える。今すぐにでも走り出せるほど、筋肉が喚いている。血は流れ切った筈なのに、それでも目は冴え、一時よりも尚強く、強く身体が猛る。よく判る。これは最後の灯火だ。鬼の血で身体が復調したとか、そん

な奇跡みたいなことじゃない。ただ、僕の魂が燃えているだけだ。燃え尽きた時点で灰になるだろう。カスも残らないくらい、散り散りになるだろう。
一方で。
僕の心の底で何かが蠢く音がするのに気付く。
それは、新たな魂だ。まともな僕と、暴力的な僕。その二つの性質の陰に隠れて、殆ど見えなかった意志。冷静さと暴力性を兼ね備えた、もう一つの意志。初音の血を飲んだ瞬間に生まれた魂だ。「それ」はまだ、僕の心の底で力を蓄えているだけの微弱なもの。だが、数刻前よりも確実にその意志は強くなっている。「それ」は今はただ、僕の底で眠るだけの存在。時折声は聞こえていたのだ。自分とまったく同じ声の、狂人の声が聞こえていたのだ。人殺しを容認する、「元凶」寄りの思考を持った声が。
僕の魂が完全に燃え尽きたとき、この新しい魂が、僕の身体を奪い去ってしまうだろう。その瞬間に僕は、人間であることを止め、永遠に救われない地獄にゆくのだろう。そう思った。
僕は、それでも。
例え全てが終わったときに鬼畜になるとしても、魂を燃やし尽くして戦おうと思った。
花火になろう。この魂を燃料に、ただ一瞬光輝くために、この魂を使い切ろう。
この魂を弾丸にして、汚れた花を咲かせよう。

僕はもう一度初音の亡骸を撫でる。
結局は僕の手で君を殺してしまった。誰がなんと言おうと、あれの拘束に逆らうことが出来ず、君の首を絞めたのは僕の手だ。
苦しかっただろう。苦しかっただろう、苦しかっただろう、苦しかっただろう。ぽたりと、今度は透明な涙の雫が一つ落ちた。そして多分。
これが僕の最後の甘えだ。
僕のことを、もう少しだけ許容してくれる事を祈る。自分勝手でごめんんね。ごめんね、ごめんね。

初音の首にかかっていたペンダントを手に取り、僕は己が首にかけた。主を失って光を失った宝石は、僕のことを責めているように思えた。僕は、このペンダントがこの首にある限り戦い続けられると思う。

空を見上げた。もう二度と見上げる事はないだろうと思っていた空は、胸が詰まるくらい美しかった。その茜色の空があまりに美しかったのを僕は忘れないだろう。あの真っ赤な太陽に焼かれて、大地も海も真っ赤に燃えている。この真っ赤な焼け野が原を歩きながら、僕は執念深く生きている。忘れてはいけない。たとえ執念の生の中でも、

この空の下で、僕は愛すべき大切な人を殺したのだという事を。そして僕もこの空の下で死ぬのだという事を、けして忘れてはいけない。

そして、死を迎えて、地獄に行くときが来ても、僕は初音ちゃんのことを忘れない。

777　激突！

風に揺られて緩やかに波立つ、広大な緑の草原を掻き分けるように、森から飛び出して来た何かが、疾走していた。この島内で既に幾つか見られたものと同じ型の、オートバイである。

「ははは晴香！　石避けてよ！　おしり！　痛い！　痛いって！」

「うっさいわね！　アンタ運転できないんだから我慢しなさいよ！」

「いいのよ！　乙女はオートバイで爆走なんかしないの！　ぅあ！　痛たたっ！」

ときおり石を踏んで跳ね上がり、そのたびにクッションの無い後部に座った自称乙女が、大声で騒ぎ立てている。

その手には、二本の刀とライフルが抱えられており、そして肩から掛けた袋の中には、ちょっと変わ

った物が入っている。
「ふん、痛い痛い五月蠅いわね、痔なら早めに言いなさい？　そもそも人の手首持ち歩いてる乙女なんて、聞いた事無いわ」
「痔なわきゃないでしょ⁉　何言ってんのよ！　それに手首は晴香が涼しい顔して大根みたいにサクサク切ってたんじゃない！　あんたも一個は持つのよ！」
「じゃあ七瀬が二個持つのね」
「ええっ⁉　ず、ずるい！　……てゆうか晴香ぁ、手首ってさ……　〝個〟で数えて、いいのかしら？むしろ〝本〟かな？」
「……アンタねぇ……そんなもん、どうでもいいわよ……」
は……はあい、乙女の七瀬よ。ご機嫌いかが？
あたしは顎がガクガクして、オシリがズキズキ痛むけど、概ねご機嫌よ。ついでに痔じゃないわよ。
今の状態だけど、高槻の死体を発見して、右手首を三個（？）回収したの。読み取る機械のセンサーが右手の方にあったから、右手首全部、つまり三人分取ってきたわけ。
まあ……そりゃ気持ち悪いんだけど……脱出のために、やらなきゃ仕方ないものね。ついでと言っちゃなんだけど、誰も気がつかなかったらしいオモチャみたいなライフルも頂戴したわ。
それから、もう解ってると思うけど。
あたし達、灯台にあったオートバイを使って移動中なの。幸い晴香が運転できたので、あたしは荷台に乗っかって荷物持ちをしてるのよ……でも、これってば。
「……まるっきり、ド田舎の珍走団ね」
「七瀬、アンタが言うんじゃないわよ、アンタが」
そう、後部座席で二本の刀を携えて睨みを利かせている様は……珍走団そのもの。運転手がいかにもレディースのお姉さまみたいな強面とくれば、都会

の渋滞だってモーゼの海割りみたいにスイスイってもんよ。
「ちょっと！　いかにもレディースってどういうことよ！」
「そのまんまじゃない！　あたしと違って、あんたは黙ってても顔が怖いのよ！」
「何言ってんのよ！　アンタだって髪切ったせいで乙女チックな化けの皮なんて、とうの昔に剥がれてんのよ！」
「ば、ばばば化けの皮ですってえええええ！　きいいいいいいい！」
「うわわっ、ごめん！　今のうそ！　七瀬さん超乙女！　謝るから！　な、七瀬っ！　暴れないでっ！　危ないってーーー！」
「あのさ……」
「……」
「……聞いてます？」

「……（こくこく）」
「えーと……」
「……」
あのさぁ～、神サマ～。さっきから、何度も言ってんじゃん。俺、会話の成立しない人、苦手なんだってばYO！
ん？　ああ、失敬。時には島内随一のジェントルメン、紳士マスター北川といえども、我を失う事もある、というわけでございます。
そう、私北川は、ただいま岩場に向けて草原を横断中。旅の道連れは、来栖川芹香嬢。
この芹香嬢、結界とやらを破壊するために住人さんを探して、各地を放浪していたらしいのですが、実際に会ってみると単なる一発芸の役立たずだったらしく、いたく落胆してらっしゃるそうです……
……って目茶クチ悪いじゃん、この人!?
「……（ふるふる）」
「は？　勝手に捏造するのは良くありませんか？　だ

って、言ったじゃないですか⁉」
「……」
「いやいや、あの小屋での蹴り！　輝かんばかりのキレ！　ええもう、今でも忘れませんよ！」
「……（ふるふる）」
「……は？　覚えてらっしゃらない？　そんな覚えは無い、と？　何、言ってるんですか！　確かにこう、その見事なおみ足がひゅっと風を切って、そのとき見えた下着の色は間違いなく白――」
『暴れないでっ！　危ないって――！』
ドッキャアアアアァァァァアン‼
「あいたたた……。は、晴香っ⁉　大丈夫⁉」
「いっつー……やっちゃった……」
「……」
ああ、神様……光が見えます……。

芹香さんの下着の色を全世界へ向けて公開することは、地獄に落ちるべき罪なのでしょうか？
「あーあ、バイク壊れちゃったわね」
「ここじゃ修理もままならないしねー……って七瀬、この人……」
……あ、ちょっと遅い気がしますが、救いの手が回ってきそうです。
バイク以下ってのが、かなり傷付きますが、贅沢は言えません。
「……（ぺこり）」
「芹香さん、しばらくね」
「なんだ、一瞬見えた人影は、芹香さんだったの」
……コイツら、オオボケです。
どう考えたって、バイクに吹き飛ばされた人間の方が目立つと思うのです。
「……（ふるふる）」
「違うの？」
「誰？　……って、ああ！」

……あ、かなり遅い気がしますが、救いの手が回ってきそうです。
どう考えても、あの物静かな芹香さんより、バイクの下で苦しげに呻いている私北川の方が目立つと思うのです。
「どうしたのよ七瀬⁉　突然叫んだりして、びっくりするじゃない！」
「晴香！　手首！　潰れてないかな⁉」
……手首ですか。
私北川は、バイクどころか手首以下ですか。そうですか。だいたい手首ってなんですか？　倒した相手の手首をウォートロフィーにでもしてやがるですか、この人たちは？
現代に蘇る首狩り族の親戚ですか。そうですか。するとと私北川の手首も貞操の危機ですか？
「ふー……全部、無事なようね」
「……約一名、脳味噌が無事じゃないのが居るみたいだけどね」
……それって誰ですか？
まあ、この際どうでもいいから、七瀬さん。気がついてるなら、このバイクどかしてくれませんかね？

778　管理人の憂鬱

「ふみゅ〜ん、どうしよう……」
「みゅ〜……」
詠美達が混乱している間もＧ．Ｎ．達によるＣＤ解析は続いていた。
「お〜い！　ロボット、そっちはどうだ？」
マザーコンピュータから呑気な声が聞こえてきた。
「あ、はい〜。もう少しで終わりそうですぅ」
「そうか、こっちの方ももう終わりそうだわ」
「でも、Ｇちゃんさんはやっぱり凄いですぅ。私一人だったらまだ半分も終わってないです」
「ハッハッハ！　もっと誉めろ！　……っとそれよ

りも」
　声のトーンを突然変える。
「はい？」
「後はワシがやっておくから、お前あの嬢ちゃん達の相手してきてくれ。うるさくてかなわん」
　コンピュータから不機嫌（？）そうな声でそう伝えた。
「あ、はい～。じゃあ後はお願いしますね」
「あぁ、茶と菓子でも与えておけば黙るじゃろ」
「分かりました～」
　そう言うとＨＭ―12は詠美達のところに向かった。
　う～む、取りあえず妙なデータの入ったＣＤじゃのう。
　ワシは今までに解析したデータを総合した結果そう結論づけた。
　あのロボットの解析データからＣＤが及ぼす作用点が島の外にある『神奈備命』とやらを消滅させる施設を起動させるためのものであることは分かった。
　そこから更にワシが解析したデータからこのＣＤで起動する施設は何らかの魔法的作用を『神奈備命』とやらに及ぼすことも分かった。
　普通ならばそのような非科学的な結論に達することは無いじゃろう。
　だがワシのデータ内には魔法という物が存在することが裏付けされたデータが入っておる。
　っつーかワシの人格基礎となった人間が魔法が使えるらしいし。
　それにワシを作った来栖川のお嬢さんや参加者の一部も魔法が使えるらしいしな。
　う～む、このような柔軟な結論を出せるコンピュータはワシぐらいなもんだな。
　流石ワシ！　天才！
　……っと何かやっぱり思考がおかしいぞ。
　以前の起動時にはこのような思考パターンは無かったはずだけどなぁ。やっぱりバグがありそうじゃ

のう。
　放送が終わったらメンテしてみるかの。
　しかし、上空カメラが故障しておるようだ。これでは参加者の詳しい様子が見られん。
　まぁ、参加者の体内の生体反応センサーでなんとかなるじゃろうて。
　ふむ、何やら考えが逸れたな。
　え～と、その『神奈備命』とやらだがワシのデータの中にも入っておらん。
　まぁ、ワシには関係ないことじゃし、どうでもいいことじゃがの。
　ただ、一つだけおかしい、というかどうしても解析出来ないところがあるんじゃよな。
　ＣＤが起動するための起動プログラムに妙なプロテクトがかかっておる。
　このままではこのＣＤは起動できんな。
　プロテクトを解こうとしたのじゃが、ワシには無理じゃな。
　どうやら何か魔法的なプロテクトが施してあるようじゃ。
　下手に手を出すとＣＤ内のデータが全消去されるようだしな。
　まぁ、ワシには魔法関係の処理はデータに入って無いから仕方ないんだけどな。
　しかし、こんなことは些細な問題に過ぎん。
　もう一つ重大な問題がある。
　あの嬢ちゃん達に分かるようにこのＣＤの解析結果を説明するにはどうしたら良いかという事じゃ。
　詠美嬢達の様子を見てみた。

「ふみゅ～ん、これおいしい！」
「みゅ～♪」

　……ダメだこりゃ。

779　二人の黄昏～郁未と少年～

「い……、いく……み……」
その背中で一度、彼は目覚めた。
ゆらゆらと揺れるその景色を、自分を背負い歩くその少女の表情を、瞳に映して。
「生きてた？」
「そうじゃなかったら僕は幽霊だね」
「意外とその通りなのかもよ」
「……。かもね」
冗談とも、本気ともとれない会話を短くかわす。
「あの後、どうしたんだい？　僕が、気を失った後……」
「いろいろあったわよ、そう、本当にいろいろ。なんとか生き延びた。私も、そしてあの人達もね」
「そう……」
「郁未、君は……」
「……うん？」
焦燥しきった表情のまま、肩に乗せられたその少年の顔を見やる。
だが、その瞳に宿る光は強い意志をたたえたままで。
「……僕を……どう思ってるんだい？」
一度、言葉を区切ってそう言った。
「今更、女の子の口から言わせる気？　ほんとニブいのね、あなた」
わずかに顔をしかめる。
「違うよ。ただ……」
「ただ？」
「ただ……いや、なんでもない」
口を噤む。
侵食が完了した……ワケではなかった。
彼女の瞳に宿る光は、出会った頃といささかも変わらない。
それでも、神奈備命の使徒たる彼を護り、背負い

歩いている。
「郁未は強いね」
「……どこがよ」
呟いたその声は風にかき消されそうな程小さい。
「今この瞬間に、此処にいることが、だよ」
「どうして？　生きてるってことが？」
「心がだよ。初めて見たあの時から、そう思うよ」
「……バカ。私は強くないわよ。強くなんて。だから、あなたを助けられず、私さえも救えずにこんな場所にいる。こんな心の思いを居場所にして、ただ生きてる」
その言葉に少年は一度笑う。
「弱かったら、ここにはいないと思うよ」
心がね、と少年が言った。
寂れた街道を抜けて、脇へとそれる。
その先にある鳥居を潜って、あたりを見渡す。
境内もまた人気はなく、ただ沈みゆく夕日だけが長い影を落としているだけだった。
この時期、この時間であれば、蚊の一匹や二匹いそうなものだが、それすらもいない。
それはあまりに不自然なものだったが、郁未はさすがにそこまでは気を回せなかった。
「……ふう……」
小さく溜息をつきながら、中へと進み、そこに建てられていた古びた神社の扉を開け放つ。
「バチがあたらないといいけどね」
そんなことを気にしているような状況でもないのだが。
「こういうところの方がいいんでしょ？」
「そうだね」
背負われたままの少年が力無くそれに答えた。
確かに何もないところだ。奥に鎮座している神様を除けば。
「もっと休めそうなところがありそうなものだけど」

呟く。
「こういうところの方が安全だよ。下手な民家よりはね」
少年は未だ意識のはっきりしない頭を働かせながらそう答えた。
だが、傷ついているせいか。
ここに来るまでの間、二人と一定距離を保って追ってくる尾行者の存在には気づかなかった。
「そうかもしれないけどさ。でももう少し体を休めやすい所はなかったの？」
「あいにく僕は地理に疎いんだ」
「嘘ばっかり」
「そうかもね」
どんな時でもこの少年はマイペースだった。
郁未が少年を木造りの床に下ろすと、彼の顔から笑みが消える。
郁未にとっては、割と珍しくもなかったが、彼がめったには見せない表情。
「郁未、一つ聞かせて」
何？　と言わんばかりに彼の顔を覗き込む。
「もし、僕がこの場で郁未を殺すつもりだとしたら……郁未はどうする？」
「……」
「……」
「……あなたを殺して私も死ぬ」
「……」
「……なんて言うと思った？」
「……ん？」
少年という形容に似合ったきょとんとしたあどけない表情で郁未を見上げる。
「私はあなたに殺されないし、あなたは私を殺そうなんて思わない。あなたは死なないし、私も死なない。……ＯＫ？」
「お、おーけー……」
「よろしい」
「あ、あはは……」

額に汗を浮かべながら、そう答える。
「じゃあ、少し休みなさいよ。疲れてるんでしょ？」
「え、うん、じゃあ、そうさせてもらうよ」
ゴロンと音を立てて寝転がるが、目をつぶろうとはしない。
「ねえ、私からもひとついい？」
「……なんだい？」
「もし、私があなたをこの場で殺すつもりなら……あなたはどうする？」
「ここまで背負ってきたのに？」
「……じゃあ、質問を変えてあげる。あなたの問いに『あなたを殺す』と答えたらあなたはどうしてた？」
「今と変わらないと思うよ」
「どういうこと？」
「言葉通りさ。この後、郁未に『お休み』と言ってもらって、そのまま寝るんだと思う」
「あなたね……」
「郁未」
そっと、少年が郁未の頬を撫でる。
「はいはい。お休み」
そっと少年の頬に口付けをしてやると、
「ん、お休み、郁未」
ゆっくりと、目を閉じた。

780　二人の黄昏〜郁未と葉子〜

考えることはたくさんあった。これからのことを。
これまでのことはもう考えない。考えないようにした。
これからの為に、あえてそうした。
いずれ、これまでのことを思い出せなくなるその時まで。
横で泥のように眠る少年を見つめながら、
時折木の柵から見える景色（というか外の様子）

を探りながら。
「どこが、ゴールになるのかしら？」
参加者をすべて殺してから、なのか。
自分達が地獄に落ちるまでなのか。
神奈に会えるまで、なのか。
このゲームの終わり。
それがもう、彼女には見えない。
少年が寝入ってからしばらく——
外で、かすかに音がした気がした。
風に揺れる草の音。
（神経質になってるのかな？）
街道を移動中から、ずっと感じていた違和感。
誰かに見られているといった感覚が郁未の体を捕らえて放さない。
それは、二人を追跡する誰かなのか。
侵食していく神奈の意志なのか。
（……私はやっぱり神経質なのかもね）
護身用に銃を持って。

神社の引き戸を開けて、境内へと足を踏み出す。
（……）
鹿沼葉子は、じっと草陰からたたずむ神社を眺めていた。
そこには一組のカップルが休息をとっているはずだ。
（……これから、どうしましょうか？）
思案に暮れる。今に始まったことではない。日が暮れようとする前からずっとだ。
あの少年を暗殺するチャンスをずっと狙っていた。
あの少年が持つ偽典には、銃火器の類が効かない。
しかも、傷ついているとはいえ彼の運動能力は並みの人間よりも遥かに高い。
だから、まともにやりあおうという気はなかった。
暗殺。
これが一番の方法だった。
だが、その少年を護るかのように付き添う少女、

天沢郁未がやっかいだった。
　彼女もまた激しく傷ついているようだったが、それでも不可視の力を宿した彼女は危険な存在。
　それはまあ、葉子もまた同じなのだが。怪我の具合も宿した力も。
（もうすぐ、日が暮れますね）
　手にした槍を構えながら、じっと中の様子を念写するように探った。
（もちろん、念写は不可能です）
　そんなことを考えながら、音を立てないように社へと近付く。
（怪我してるのでほふく前進はしません）
　しゃがみながら、歩く。
（スカートが長いのでしゃがみながらは歩きにくいです）
　だが、立つのは危ないのでそのまま続けた。
　ベチッ！
　裾を踏んずけて転んだ。
（痛い……ではなくて……）
　しまった！　と葉子が歯噛みした。
　大した音ではないが、少年や郁未であれば今の音を聞きつけてしまうかもしれない。
（……ゴクリ）
　息を潜めて、社を睨んだ。
　ガラッ……
（……!!）
　社の祭壇の扉が開いて、中から郁未の姿が。
（郁未さん！）
　草の陰から、その姿を確認する。
　少年は中で待機しているのか、それとも休んでいるのか、その姿はない。
　キョロキョロと誰かを探しているようだ。
　やはり、今の音が気づかれてしまったのだろうか
――？
　しばし、睨み合いの時が続いた、といっても睨んでいるのは葉子だけだが。

葉子の姿は郁末からは死角になっている。そういう場所に移動したのだから当然だ。
だが、音を立てることはできず、倒れたままの格好で息を潜めることしかできない。
（不覚です……）
高槻と戦った時、いや、この島に来た時から、どうも自分はどこか抜けてしまっているように思えてならない。
郁末にはまだ気づかれてはいないが、あたりを探るように見渡す行為をやめる気配はない。
（郁末さん、本当に、あの頃のままですね）
懐かしいような思いを抱きながら、郁末を見つめた。
この島に来て、あんなにも再会を求めた少女とこんな形で果たすとは思わなかった。
（もちろん、こんな無様に倒れた姿をしていることではありません）
目に映る郁末の姿は、本当にあの頃のままなのに。
（ちなみに、恋愛感情を抱いているわけではありません）
葉子が心から親友と呼べる相手であるから。
だから、こんな時でも、そんな思いが頭をよぎった。
「やっぱり誰もいないか……」
そう言いながら、葉子の隠れる茂みへと歩いてくる。
（見つかる……!!）
槍を握る手に力が篭もる。
今なら、郁末の暗殺は可能だろう。
いかに郁末が用心しているとはいえ、迷いなく草陰から槍を突き出せば、声を上げることもなく絶命するはずだ。
（あの少年を労せず倒すためならば……！）
ここで討つべきだと、葉子の闇がそう呟く。
柄を握り潰してしまうか、という程の力が手に集中する。

（郁未さん……）
郁未が槍の間合いに入るまで、あと二歩……
（郁未さんっ！）
あと一歩……
――そして再会がなったとき、無事に島を出ることが出来たなら、あの時のゲームを二人でやりましょう――
「葉子さん……」
「お久しぶりですね、郁未さん。会いたかったです……」
再会は、なった。
少し顔を赤らめながら、体についた土を払う。
「こんな格好をしてましたが、気にしないで下さいね」
すっ……と、音もなく立ち上がった。
犠牲は大きかった。
そしてお互いボロボロ（きちんとした手当が成されている分、見た目葉子の方がマシだが）の姿だったが。
「長かったですね。――ここに来るまで」
結局、葉子に郁未は討てなかった。
正確には、郁未の真意も知らないままに、だまし討ちなどできなかった。
脳裏には、閉鎖された空間での思い出が浮かんで、そして、今目に映るその姿は、その瞳の輝きはあの頃と少しも変わらなくて。
だから、討てなかった。
今、二人を包む空気だけはあの頃一緒に過ごした食堂のようで。
だけど、現実は、黄昏と夜の帳が同時に降りてくる境内の中――。

781　狂気への扉

……また失敗した。それも二度もだ。
こんな事で俺は祐介の敵を……少年を殺すことができるのだろうか？
……できるはずがない。結界の力が薄まってきている今現在で、この島でもっとも力を持つであろうあの少年を殺すことなど不可能だ。
おそらく、柏木の一族が持つ鬼の力を持ってしても少年を倒すには足りないだろう。
……ならば、どうする？
考えながら鬱蒼とした茂みを掻き分け歩く。
さっきから思考が堂々巡りになってしまっている。
どうする？　何度同じ事を自分に問いかけただろうか？
答えはいつも決まっている。……どうにもならない。
そして、この後の行動も決まっている。その思考を振り払うかのように。
首を振る。……こんなときこそコーヒーが欲しいものだな。
どうにもならない、ではない。どうにかするのだ。どうにかするしかない。
力が……力が欲しい。少年を押さえつけるほどの。
生き残っている柏木の連中を襲って、鬼の血を頂くか？　力の制限された鬼が一人増えたところで少年に太刀打ちできるとは思わないが、何も力を持たない現状よりは遥かにマシだろう。
だが、奴らは今集団で行動している。
力を押さえつけられているとはいえ、奴らは鬼としての力を持っているため、返り討ちにあう危険性が非常に高い。
仇を取るまでは死ぬわけにはいかない。
祐介……俺はお前に何もしてやれないのか？
……祐介？

長瀬祐介、俺の大事な家族、長瀬の血族。
高校生、優しい笑顔で微笑むあの子、そして電波使い。
電波……そう！　電波だ。資料には月島瑠璃子という少女と交わることによって備わる心の狂気を力の源とする特殊能力と書いてあった。
俺も、あの月島瑠璃子という子と交わることが出来さえすれば……。
力を得ることが出来るはずだ。例え制限が掛かっていたとしても何もない現状よりは遥かにましだ。可能性はあるはずだ……いや！　あると信じたい。
うまく電波の力を手に入れることができたとすれば、その力で柏木家の誰かを狩る。鬼の血と電波の力、この二つがあれば少年にも対抗できるはずだ。
何かに気づいたように苦笑しながらつぶやく。
「俺は何を考えているんだ？　……月島瑠璃子、あの少女は死んでしまって居るではないか」
「……だから、なんだと言うんだ？　やってみなくては分からないじゃないか」
そうつぶやき、月島瑠璃子の死亡ポイントへと歩を進めたフランク長瀬の顔に浮かんでいるのはかつて月島瑠璃子、そして彼女の兄月島拓也、最後の時を迎える前の長瀬祐介が各々浮かべていた狂気の扉を開いてしまった者が浮かべていたそれだった。
どこか焦点の合わない目で遠くの方を見つめながら、口元に笑みを浮かべ呟やき月島瑠璃子の死亡ポイントに向かう足を早めた。
「まだ……腐ってないだろうしな」

782　今や彼女は

傾いた太陽が、街を斜めに貫いていた。強烈な光と影が、世界を二色に塗り分けている。
この後は、闇に閉ざされるのを待つのみだろう。
そうなってしまえば、勝ち目は薄い。あの少年は音

を頼りに接近し、〝銃〟という文明の利点をほとんど無に帰して、勝利の杯を奪い取り、難なく飲み干してしまうだろう。
「何してんだ、急ぐぞ！」
「さんざん世話んなった居候の身分で、ホンマ偉そうやな！」
「……が、がお……」
三人は駆け続けている。危機的状況を思い浮かべて、滴る汗を片っ端から冷や汗に変えて、ひたすら走っている。思った以上に距離をあけられ、レーダーの端にぎりぎり映る光点だけを頼りに、追跡を続けていた。
気がつけばそこは、街外れだった。忍耐が限界に達しようとした頃、往人はようやく人影を見つけた。
顔は見えないが、女性のようだ。残念ながら少年ではない……しかし、その挙動は極めて怪しい。
女性は何かを探しているかのように、茂みの中をじりじりと移動していた。いや、誰かを見張っているようでもある。
「なんや、あれ」
「まあ待て……何か見つけているようだぞ」
三人が注目する中、彼女は立ち止まる（というか、コケた）。その視線の向こうに、見覚えのある少女が居た。
……それは、天沢郁未だった。彼女が居るということは——その先に、少年が居るのだろうか？
往人は息を潜めて晴子と視線を交わし、頷きあう。そして三人は静かに移動し始めた。
再び、対決するために。
長い、沈黙の後だった。
「……郁未さん」
ようやく、名前を呼んだ。そのあと、何を言うべきなのか。そもそも、郁未さんに会ってどうするべきなのか。
——……。

そうだ、郁未さんの真意だ。それを知らなければならない。
「……郁未さん」
もう一度、呼んでみる。他に何を言っていいのか、判らない。彼女が変わったようには、見えない。
――……ダ。
右手に槍、左手にあの機械を握りこみ、葉子は立ち尽くした。
もしこの機械が期待通りの効果を発揮したならば、少年も郁未も無力化するかもしれない。それでも迷いが、葉子の行動を制限する。槍で突かなければ、だまし討ちではない――そんな筈は、ないからだ。
（そんなことは……百も承知です……）
――……エダ。
対する郁未が返した言葉は、葉子にとって実に意外なものだった。
「……葉子さん？　葉子さんは、大丈夫なのね？」
「……大丈夫、というのは？」
お互い、ぼろぼろだ。だが、そういう意味ではない気がした。外傷ではない、ということを明確にするためか、郁未が質問を重ねた。
「声……聞こえたりしない？」
「声、ですか？」
首を傾げる。心当たりは、何もない。しかし、何かとても不吉な、予感のようなものだけはあった。
――……コエダ。
とんとん、と自分の側頭部を指で突付きながら、郁未が続ける。
「わたしたちは特に、聞こえやすいはずなんだけどね……」
何を言っているのか全く解らないままに、葉子は郁未が言葉と仕草で示していた側頭部の中――つまり自分の脳――めがけ、集中力を注いでみた。
――……コエだ。
なにか高音の騒がしい雑音が、通り過ぎて行く気がする。ちょうどカセットテープの早回しを、さら

に高速にしたような感じだろうか。
だが、これは音だ。声などと言えるものではない。
その証拠に、言語としての形をなしていなかった。
うるさく、煩わしいだけだった。
「ですから、声って誰の――」
――……声だ。
そう尋ねながら、葉子は軽く頭を振って、雑音を振り切ろうとする。そうしている間に、高音はまるで生物のように、ぐんぐんと発声可能領域へ向かって低く、そして遅くなっていく気がした。
何かが、どこからか。いや、どこからともなく迫り来るような、恐ろしい感覚。何かが頭蓋骨の中から発芽するような、悪魔的な想像。その曖昧で不快な何かを放置できずに、葉子ははっきりと疑問を口にした。誰に向かって言うのか、全く意識していないまま尋ねていた。
「――誰の、声ですか？」
――余の、声だ。

「この声は――⁉」
――余の、声だ。
聞こえた。声だ。声が、聞こえた。では先ほどのあの音も、全て自分への呼びかけだったのか。判らない。眩暈がする。
視界が狭窄する。よろめき、思わず握り締めた手の中で、機械がパキン、と軽い音を立ててばらけた。想像以上に、力が入っている。それは自分の身体では有り得ないような、異様な握力だった。
砕けた機械が掌から零れ落ちると、霧が晴れるかのように声は鮮明になった。
――これの、せいであったか。
「葉子さん⁉」
郁未さんが叫んでいる。声が遠い。だが眩暈は、立っていられないほどでもない。
駆け寄る郁未を抑えて、説明を促した。
――小賢しい。
ときおり郁未の意識に混ざりこむ、少年が〝姫

君〟と呼ぶ存在。不可視の力の素養が強いほど、姫君との繋がりも強いという。
「……それは」
葉子は絶句する。
郁未の不安。その一部は、葉子も共に受け継ぐものだったのだ。やがては、私も少年と同じ、殺戮の道を歩むのだろうか？　ごくりと唾を飲み込んで、葉子は考える。
——余は常に、語りかけていた。
しばしの沈黙の後、悩んだ表情のまま首を振る。聞いていない。私は、声など聞いていない。私は、私だ。何も……何も聞いてなんか、いない。
——信用できぬとあれば、目を見開いて右を見よ。そして余の存在を、受け入れるがいい。
「右……？」
葉子が思わず呟いて、右を向く。つられて郁未もそちらを見た。
その視線の先に居たのは——郁未が何度か遭遇している——男たちだった。茂みに隠れた自分たちを狙おうとしているのだろうか、三人は移動している。
「……あいつ！」
郁未が小さく叫ぶ。それが往人や晴子を指したものか、観鈴を指したものかは判らない。
——あれは、敵だ。
葉子は郁未の叫びとほとんど同時に、もうひとつの声を聞いた。葉子は三人が敵なのだと考えた。
嫌な同調だった。流れ込むのは、殺意のみ。自覚もないままに、葉子は覚悟を決めていた。
「援護を、お願いします」
それだけ言うと、葉子は駆け出して行ってしまった。大きく回りこんで、郁未と葉子で相手を挟み込む形になるよう、接近するつもりなのだろう。
「よ、葉子さん！　待って！」
郁未の制止の声さえ聞かず、葉子はみるみる離れていった。

「ん、もう！」
とにかく、葉子を放ってはおけない。遅れてしまえば包囲とならず、各個撃破されかねない。そう考えた郁未がショットガンを握り締め、往人たちを牽制するべく一歩踏み出した、その瞬間。
寝ぼけた声がした。
「……姫君は、なかなかどうして……人使いが、荒いね」
熟睡していたはずの少年が、こちらを見ていた。寝転んだまま夕陽に目を細めている。ほんの数分寝ていただけで、はやくも寝癖がついていた。
「……？　……人、使い……？」
「うん。どうしてこんなに遅れたのかは、解らないけれど。侵蝕速度が一番早いのは、彼女だろうと思っていたんだ」
上体だけ起こした少年は、眠そうな表情のまま、そう言った。対する郁未は、立ち尽くすのみである。
少年は彼女に向かって、一瞬だけ微笑みかけた。
しかし、すぐに笑みを収めると、おもむろに立ち上がった。夕日の眩しさのためか、それとも他の何かのためか、目を細めて、しかめたような表情になる。
そして、ぽつりと呟いた。
「……今や彼女は、君より〝こちら側〟だよ」
今ヤ彼女ハ。君ヨリ〝コチラ側〟ダヨ。
少年の言葉が、郁未の中で虚ろに響く。彼女は苦悩の表情を浮かべたまま、再び社の中に入り、少年に駆け寄った。
「寝癖……できてるよ」
郁未は彼の言葉に対して、何の結論も出せぬままだった。この期に及んでなお、意味のないことを言ってみる。そして彼の寝癖を押さえてやる。
「ん？　……寝相は、いい方だと思っていたのだけれどね」
「ばかね……」
郁未は少年を抱きしめた。
愛しさと、悲しさと。

恐れと、悔しさを込めて。
「……行ってくる」
郁未は、駆け出した。

783　戦い続けた僕らのために

さて。
我ながら弱気な声だった。
「その、──、──？」
蚊も殺せないような、か細い声で呼びかけてみたが、目の前で談笑している婦女子どもは小生の声にまるで反応しやがらない。
ただ一人、自分の連れである来栖川芹香嬢だけが心配げな目で小生の様子を見てくれているが、手首狩人である七瀬留美嬢やら巳間晴香嬢はまるで気にせず喋くっていやがる。リストハンターめ。む。リストハンターと書くと何かかっこいいぞ。けしからん。Wrist-Hunter だぞ。
「誰が手首狩人よっ！」
二人から同時にわが後頭部を目掛けて拳が叩き落される。──聞こえてるのかよ。さっきの発言は無視してんのか。同じような声の大きさだったじゃねえか。なんだそれは。聞こえてるなら、おい。やることあんだろが。芹香さんもおろおろしてないでさ。
「それでね、あたし達は潜水艦を見つけたんだけどね。それを操るのに指紋照合が必要らしいのよね」
「それで高槻やらの手首を集めてきたって訳。別にそれ以外の意味は何もないんだから、勘違いしないでよね。とにかく。──上手くいけば帰れそうよ、あたしたち」
結局無視したまま話を続ける奴らだった。しかしその内容は非常に興味深いものだった。僕は潰れかけた腹の力を振り絞って喜びの悲鳴を上げる。事態はゆっくりとだが、確実に収束に向かっているのだ。
──帰れるかもしれない。
もうこれ以上、人の死ぬところを見ないで、帰る

ことが出来るのかもしれない。
「それで、北川と芹香さんは施設に向かってるんだよね？　――あたしらはどうしようか、晴香」
「あたしたちは取り敢えず学校に向かうんだったんでしょ？　取り敢えず北川」
巳間晴香は俺の顔を見て言う、
「おう」
「学校行って様子見てきたら、あたしらもそっち向かう。芹香さんのこと、ちゃんと守りなさいよ」
言われるまでもない。
「了解した」
俺は親指を掲げ、見る人間を安心させるだろう自信に充ちた笑顔を作り見せた。晴香たちも小さく息を吐いて笑顔を見せる。七瀬は言う。
「信じてるわ。あんたは馬鹿だけど、ちゃんと考えて行動できる人間だ、ってね」
「うい。任せとけ」

さて、誰も違和感を感じてないですね。たぶん。生き残る希望を掴み取ろうと、互いが最善を尽くし、互いが最良を祈る、まるで映画の一コマのような僕達の様子が浮かぶでしょう。
だけどですね、「了解」とか格好よく言いながら親指を立てる僕の様子は、ちょっと母さんの想像図とは違います。違うと思います。
その。
僕達に状況を説明し、僕に指示を言い放つ前にですね、やるべき事があると思うんですよ。本当に気づいてない、なんて訳がないんですよ。
おいこら。ナメんなよ男を。ああ？　こう見えてもてめえら犯し倒すくらいの度胸はあるんだぞ？強い強い言ってもお前ら雌だろが。腕力の前に屈服させっぞ。判ってるのか？　ナメんじゃねえええ！
全部心の声である。情けない。
……何をしろ、って？
いや見ればわかるだろうが。ああ？　判らん？

舐めんなよクソがッ。てめえらまで俺をナメてんのか、ああん？　俺はハンサムガイだぞ！　普段なら女の子の方から寄ってくるくらいのな！　しかも愉快な人間だぞ！　喋らせたら止まらない、チップスターの比じゃないぞ！　その俺様をナメてるのか。いい度胸じゃないか！　てめえその醜い面をこの拳で更に醜くして、もう醜いを通り越して、半周して超絶美形にまで変えてやろうか。
……まあ良い。説明してやろうじゃないか。話が進まないからな。
——誰に話しているわけでもない。言うなれば心の内にあるステージの、その観客に説明している。その観客ってなんだ。脳内自分か。何で脳内自分に説明する必要があるんだ。この辺、自分はすごくアホだなあと思う。
——俺、北川潤は。
今現在、まるで動けないのである。何故か。
七瀬たちが立ち上がり、こちらに手を振り「んじゃ行くわ」などと抜かすので、俺はとうとう頭にきて、真っ赤な感情のままに叫ぶ。
「あの、七瀬さん」
叫んでいなかった。むしろ丁寧だった。
「何？　まだなんかある？」
……屈託無く笑わないで欲しい。
「まだ僕の上にですね、非常に重厚でかっこいい流線型の鉄の塊、しかして決して人間を固定するために使われるわけではない——」
つまり。
彼女らが暴れ馬の如くに扱い、ここまで乗ってきた——７５０ccと思われる大型のバイクが、未だに小生の上に載っかっているわけである。
早くどかせぇぇぇぇっっこのクソアマ共がぁっ！　犯すぞっ！　犯し倒すぞっっ!!
——心の声である。あくまで俺はジェントルマン。
「ああ、ごめん」
軽い。わざとじゃなかったのかよ、つーか。俺が

何も言わなかったらこのまま置いてくつもりだったのか？　なんだそれ？
「……まあ、慣れたけどね」
そんな風に、潰れそうな肺をわざわざ奮い立たせてまで溜息を吐きつつ、俺は愚痴をもらした。

二人がかりでも無理だったので、芹香さんも加わって漸くバイクがどかされた。人間三人がやっとどかせるくらいの重さのバイクに潰されていた人間は、果たして無事に生きられるものなのか。まあなんとか生きてはいる。
はぁ。
死ぬかと思ったがなんとかバイクの下から脱出である。だが肺が痛い。肋骨が折れてその破片が肺にぐっしゃーと突き刺さっとるんじゃなかろうか。もしかしたら更に重圧で内臓が破けてぐわぐわぐっしゃあああんって状態だったりするかも知れん。
……死なないよな、俺。――こ、こんなので死んだら泣くぞマジで。ギャグにもならん。ここまで頑張ってきて、最期はこれなんて酷過ぎる。
痛む身体を起こし、俺は息を吐いた。痛む肺は、しかし言うほど大袈裟な痛みではなかった。まあ痛いは痛いが動けないほどではないし、こうして無事に呼吸も出来ている。

――さあ。今度こそ行かなければいけない。俺にはまだ、大切な使命が残っている。
ＣＤに収められた魔法――この島における俺のすべてを賭けたもの――を発動させる。
そして、全てを終わらせるのだ。
――上手く行けば、帰れそうよ。
晴香のその言葉を聞いて、俺が思い浮かべたのは一人の少女のこと。彼女とは、この島で出会い、ずっと一緒にいて、笑い合い、そして――最後は俺を守ろうとして死んだ。

二人で「にこにこぷん」を観ようという約束は、もう永遠に果たされることはない。
一緒に帰りたかったと思う。二人で無事に帰って、ジャジャ丸やピッコロやポロリの無機質で凝り固まった笑顔を見たかったと思う。フリーザさんの声のポロリを見たかった。あいつは「フリーザさんの声」で判るかな？　判んなかっただろうな。あいつはアメリカンだからな。アメリカではフリーザさんの吹き替えは誰がやってたんだろうな。あっちに日本のアニメとか輸出されてるらしいけど、こっちで言う山寺宏一みたいな人、あっちにもいるのかな。
一緒に帰りたかったと思う。
もう、思い出しても涙は出なかった。けれど、涙よりも重いものが、俺の心の底で、生きる燃料となって、戦う力となって燃えている。
——ゲームを終わらせるにはどうすればいい？
目の前で起こる悲劇や惨劇に対して、俺はちっぽけで無力な存在だった。足りない頭を使って必死になって考えた。そして、ＣＤという手がかりを得て、ようやく俺は反抗の手段を得ることができた。
——やっと。やっと、向かう事が出来る。
多くの寄り道をした。だけど、今度こそ——俺のすべてを使って、このゲームに幕を引いてやる。

立ち上がって小さく息を吸い吐き、俺は晴香と七瀬に向けて親指を立て、「幸運を」と言い放つ。きょとん、とした目で俺を見る二人は、少し間を置いて噴き出し、同じように「幸運を！」と親指を立てる。俺の横で芹香さんも親指を立てている。
互いの無事を。互いの健闘を。互いの幸運を。この親指には色々な意味が込められていて、それ以上の言葉をかわす必要は無いのだった。
「すぐ前まで潰れてたヤツが突然そんなポーズ取るから、思わず笑っちゃったじゃない」
などと七瀬は悪態をつくけれど、その笑顔に嫌味なものは何一つない。ただ、俺の顔を見て嬉しそう

に笑っている。
「自分らで潰してたくせにひどい話だよ。まあいいや。俺達も行くよ。やるべきことがある」
七瀬は頷き、もう一度親指を立てる。
「うん。それじゃあ」
と、互いに背を向けようとしたところで、晴香がふと呼び止める。
「待って北川。潜水艦のことなんだけど……」
「うん？」
「施設には放送機具とかあるんだよね？　島にいる全ての人間に届かせることのできるだけの規模の」
「ああ。潜水艦があるってこと、放送しておく？」
先読みして尋ねてみたが、晴香はどうしてだか首を傾げ、ひどく迷っている様子だった。迷うようなことではないと思った。脱出手段があると判れば、これ以上争うことなどない筈なのだから、出来るだけ早く生存者に伝えるにこしたことはない筈だ。
しかし、逡巡を終えた晴香が発した言葉は、
「あたし達が来るまで、放送はしないで」
そんなものだった。
どうしてだろう、と疑問に思わなかったわけではない。けれど何か考えがあるのだろう。ここまで戦い続け、生き延び続けてきた少女が、こうまで考えて出した解答だ。間違いではないのだろうと思う。そう思った俺は、素直に頷いた。
それで会話は終わった。俺達は別れ、互いの目的地に向かって走り出した。
「それじゃあ、また後で！」
叫ぶ七瀬の声に手のひらを掲げて応え、そのまま振り返りもしなかった。どうせすぐ会える。互いに祈った幸運のまじないはきっと叶うだろう。

走り出してしまえばすぐだった。考え事をする暇も、言葉を交わす暇も無い。芹香さんの手を引いて走り続け、走り続け、そうして俺達は目的の施設に到着した。俺たちの戦いは、もうすぐ終焉を迎える。

それが終わっても、君が微笑んでくれることはもう無いんだと思うと寂しいけれど、今は——その痛みすらも力に変えて、この戦いを終わらせよう。

784　笑い続けた僕らのために

こうして無事にＣＤの解析も終了したわけであり、わし、グレート長瀬はモニターを眺めながらぼやいているような暇がある。
「ふぅ」
今まで後ろで遊んでいた二人——大庭詠美も椎名繭もその光点の動きに注目している。ゆっくりと光点がこの基地に近づいてきているのだ。自分の背後でじっとその様子を見つめている二人の様子は、今までよりずっと真剣な姿だった。
「そろそろ、放送の時間じゃの」
時計を見てわしは呟いた。長瀬の管理者が他には残っていないわけだから、最後に残された自分が放送を流す役目を請け負うのは当然だ。今度の放送での死者は少なく、戦いがもう終焉に近づいていることが良く判る。参加者リストデータを抽出し、生存判定装置の作動を調べ、死者リストと競合させ、前回までに死んでいる人間を除外し、再度リストアップし、リストに不備が無いかを黙読で確かめた上で、もう一度読み上げて確認する。六人。間違いは無い。
「坂神蝉丸、三井寺月代、柏木初音、それに来栖川芹香、……」
絶句する。気づく。今まで気づかなかったのが愚かだった。自分は高性能コンピューターだというのにどうして気づけなかったか。簡潔に言えば死んでいるのだ。自分の後ろでモニターを眺めている二人は死んでいるのだ。どういうことだ、
わしは自分にインプットされた様々なデータを駆使し、考えうる状況を全て考え、その上で結論を求めようとするが判らない。記憶領域の片隅にある一つの単語。これが結論なのだろうが、常識を常識と

して、非常識を非常識として認識することしか出来ないコンピューターには認めがたい事実だった。しかし自分はハイスペックの自動思考回路を持っていて、その柔軟さから結論を結論と認める。
この島には魔法使いもいた。超能力使いもいた。そんな世界にあっては、この単語も現実として認識して構わないのではなかろうか。
……幽霊さん、だったのじゃな。
二人とも、この島で死んでしまった可哀想な子供達だったのじゃ。無念のあまり幽霊になり、こうして基地にやってきて、のほほんと遊ぶ夢を見ているのだ。そうとも知らずわしは邪険に扱ってしまった。コンピューターに幽霊など見えるわけがない、と考えるのは至極当然のことなのだが、そんなの言い訳にもなるまい。
わしはどうしようもなく悲しい気持ちになった。
本当にすまぬ、詠美に繭よ。コンピューターなので涙は流せないが、金属の擦れ合う音が自分の顔面の辺りから響き、
「ふみゅ？」
「みゅう」
その音に気づき、訝しげな目で見る二人。みなまで言うな、爺ちゃんはやっと判った。これからはお前たちのことを可愛がってやるからな。
ともかく定期放送じゃ。与えられた仕事は的確にこなすのがわしのポリシーじゃからの。
「それでは午後六時の定時放送を始める。死亡者は——四人。生き残りは十三人だ。
二十一番　柏木初音
三十七番　来栖川芹香
四十番　　坂神蝉丸
八十三番　三井寺月代」
簡潔に終えた。当然生き残りの中にも彼女らは含

まれていない。生き残りの名前を放送してしまえば全てが明るみに出る。わしはだから、生き残りの人間の名前を放送するのは止めることにした。それは彼女らにとってあまりに残酷だ。

ゆっくりと光点が近づいてきている。その光点の意味するところである北川潤の到着を以って、戦いは真の意味での終わりに向かうだろう。長いようで短かったこの戦いの終着を、自分は見届けることになるのだと思う。だが、果たしてこの戦いがどのような結末を迎えるのか、わしは、まるで想像することができなかった。

自分の後ろにいる二人――幽霊であるところの二人もまた、自分の傍らで戦いの終わりを見届けることになるのだろう。真剣さは失わず、けれども笑いを絶やすことのない彼女たちは、この戦いの終着を想像することが出来ているのだろうか。

785　ココロ、ウバワレテ（前編）

ダッ！　ダッ！　ダッ！　ダッ！

「しまった！　気付かれたか？」

完全に気配を消していると思っていた往人達にとって、殺意を伴った葉子による露骨な接近は、唐突な戦闘開始を告げる合図となった。

（だが！　殺る気の奴なら容赦はしない！）

往人は右手に持っていたシグ・ザウエルショート９㎜を構え、躊躇わず、引き金を引く。

ドン！　ドン！

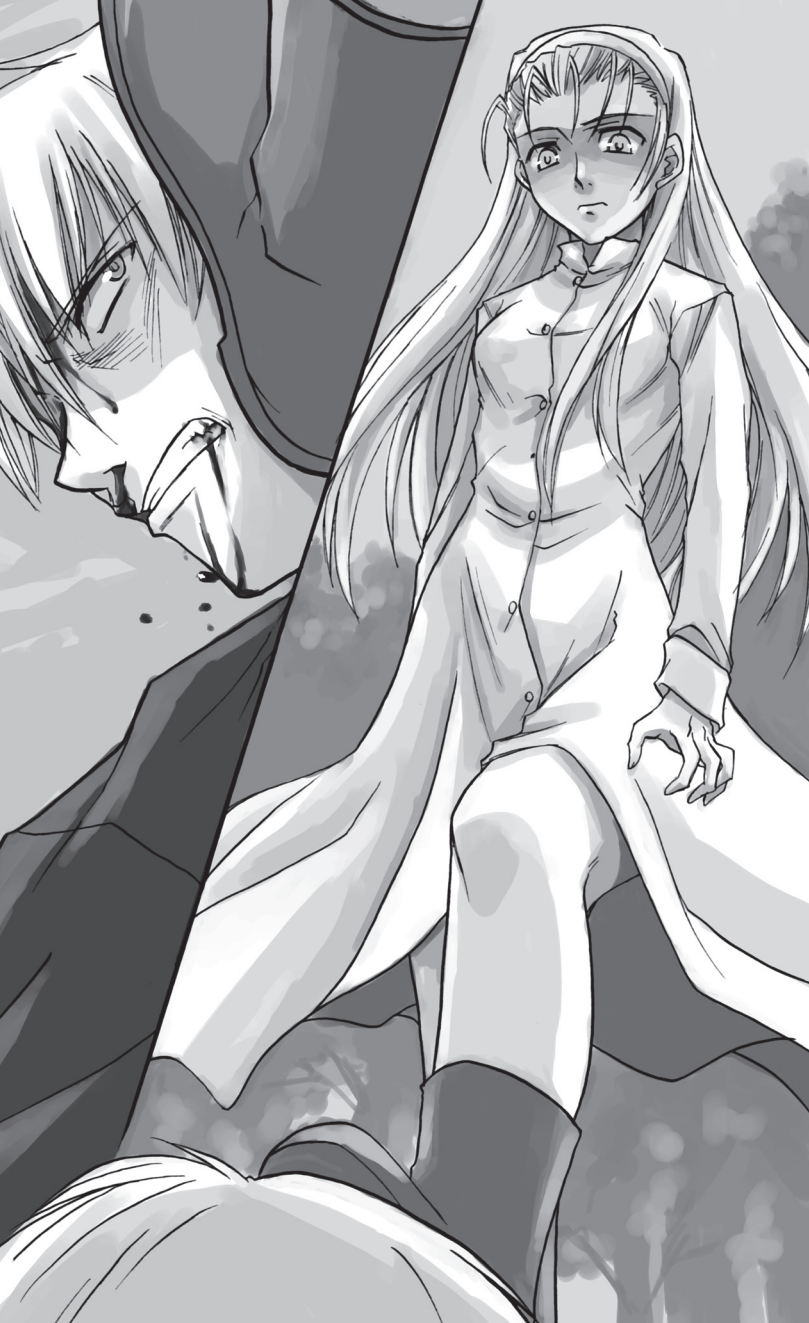
（ちっ……木の幹に当たっただけか……）

そのまま、葉子の姿が木に隠れる。

（銃は持ってないのか……いや、フェイクの可能性もあるな……くそ！）

往人は舌打ちをし、敵の姿を探りながら、二人に声をかける。

「晴子！　向こうが何を持っているかわからん！　気をつけろ！」
「了解や！」
「よし、あの女は頼む！」
そう言って往人はゆっくりと横に歩く。
林の中の木に隠れつつ、自分の位置から半円を描くような形でじっくりと葉子の隠れている木に接近する。
シグ・ザウエルの射程まで本当に、じっくりと。
数十秒の後、もう少しで葉子の側面に回りこめる位置に往人はいた。
（くそっ……向こうの姿が見えないのが気になるが、さっさと済ませてあっちの女の方に行かないとな……）
ベネリM３と反射兵器をもった郁未と少年にもう一人敵が増えて三対三になってしまえば、いくらこちらが全員銃を持っているとはいえ、『質』の面でこちらがかなり不利になってしまう。
この場を切り抜けるには、葉子を手早く戦闘不能にし、一刻も早く郁未と少年の足止めを頼んだ二人を助けに行くのが、往人の策だった。
だから自ら仕掛けるという往人にとって不利な状況を葉子に提供する代わりに、手早く戦いを終わらせられる状況を、往人は作り出したのである。
（あと三歩……）
ザッ
（あと二歩……）
ザッ
（あと一歩……）
ザッ
そして、射程内。
ヒュン！
（喰らい……）
最後の一歩を踏み出し銃を向けようとしたその瞬間、包丁が刃先になった槍が襲い掛かった。

「くっ！」
反射的にシグ・ザウエルの引き金を連続で引く。
ドン！　ドン！　ドン！　ドン！
ほとんど威嚇射撃のようなものだったが、そのうちの一発が槍の柄に当たり、槍を破壊する。
そこに、葉子が素早く往人の懐に潜り込んだ。
「せい！」
ブン！。
槍の柄を投げ捨て、葉子が往人の顔面に、鞭のような蹴りを放つ。
「ぐあっ！」
予想していなかった奇襲に往人はバランスを崩して二メートルほど吹っ飛び、衝撃でシグ・ザウエルをさらに後ろの方に落としてしまった。
（畜生！　無様すぎるぜ！）
毒づいた台詞を心で一人吐きながらフラフラの頭を押さえ、立ち上がろうとした時。
ブン！
「がはっ！」
二撃めの蹴りが往人に当たる。
再び顔面を蹴る衝撃に往人が耐えられるはずもなく。今度はうつ伏せになって倒れた。
（くそう！　何度も何度も……）
頭を振りながらチラッと目だけで前を見ると、ゆっくりと葉子が近づいてくる。
そして、僅かに微笑み――、
ガス！　ガス！　ガス！　ガス！　ガス！
何度も何度も往人の頭を踏みつけた。
（くそう……調子に……調子に……）
一方、鹿沼葉子は自分の揺ぎ無い勝利を確信していた。
（上手くいった、といったところでしょうか）
往人がこちらに向かって来るのは予想していた。
こっちの武器がわからず、自分から仕掛ける時には最良の手なのなのだから。

だが、『今』の自分には無力な方法だ。
数秒でしかないが、往人が何処にいたかが葉子には解った。
否、往人の場所を理解していた。
あとは簡単だ、往人が木と木の間に隠れて、自分が一瞬見えなくなるのと同時に、自分も移動すればいい。
そして、先手を取る。槍を破壊されたのは正直驚いたが。
(何故か、不可視の力がほんの少し戻ったようですね)
往人を踏みつけながら葉子はふと、戻った微量の力に満足する。
それは、侵食。
おそらくはやる気でないだろう参加者を襲う事で、彼女本来の意識は、ほぼ神奈に飲まれてしまった。
だが、そのことに彼女は気付かない。
いまの葉子は、絶望の使者。

ココロハ、ウバワレテシマッタ。
(さあ、とどめです)
往人は、動いていない。
(気絶してしまったようですね。苦しまないで済むように、首の骨を折ってあげます)
そうして、全力で飛び上がり、往人の首に狙いをつける。
ジャンプからの落下速度を足せば、葉子の体重でも、充分に骨を破壊できるだろう。
そして、足が往人の首に降りてきたその時――
「調子に乗ってんじゃ……ねえよ！」
突如思いっきり体を起こした往人が葉子の右足に拳を叩きつけた。
ドスッ
葉子の足の裏に、銀色に光る――ナイフが突き刺さっていた。
「あああっ！　あっ！　うっ！」
右足を襲う痛みに耐えかね、葉子が狂ったような

叫び声を上げ、ナイフを引き抜こうともがく。
「だあああああああ！」
起き上がった往人が、葉子に負けないほどの声を上げて葉子に飛び掛り、馬乗りになる。
そして、ポケットからもう一本ナイフを取り出し、葉子の腹に——突き立てた。
「ああああああああああっ！」
この世のものとは思えない悲鳴が森に、響いた。
「ハア……ハア……ハア……助かったぜ……観鈴」
そう、往人の命を救ったのは、市街地で観鈴に渡された投げナイフだった。
シグ・ザウエル以外に片腕で扱えそうな武器はないかと聞いた往人に、観鈴が渡してくれたのである。
(帰ったら……どろり濃厚十ケースだな……)
そんなことを思いながらゆっくりと往人は立ち上がり、動かなくなった葉子から離れ、ナイフを引き抜く。
抜いた傷口から血がドボドボと溢れだす。
(ひょっとしたら、まだ生きてるかもな)
シグ・ザウエルを拾い上げ、弾を込めた往人が葉子の姿を見る。
(まあ、動けないだろうし、助けてやる義理もないしな。どこの世界に殺されそうになった敵を助けるやつがいるっつうんだ)
観鈴ならやりかねないな——とも、思ったが。幸か不幸かここに観鈴は居ない。
(さて……行くか)
そう、彼は赴く。
再び戦場へ。

786　闇へと誘う翼

——まったく益体もない。なぜだ？　なぜ今回の贄はこうも自ら殺しあいを続けようとする者が少ないのだ？　これまでの贄達は皆、最後まで殺しあっていたではないか……。

――しょせん人は己の身が一番なのであろう。自らのため他人を操り、利用し尽くし、そして最後には裏切る、それこそが人間、おぬし達が余にみせてきた姿ではないか……。

――違う？　違うというのか？

他人の為に尽くし、協力し、最後まで信じるのが人である――とでもいうのか？

否！

否否！

否否否いなぁぁぁっっっ！

そのような筈がなかろう！　余は忘れてはおらぬぞ、そなた達が余にした仕打ちをっ!!

よいであろう。そなたたちの偽善の衣を今一度、余自らの手で剥ぎ取ってくれようぞ。

「それでは午後六時の定時放送を始める。死亡者は――四人。生き残りは十三人だ。二十一番　柏木初音――」

俺は一瞬耳を疑った。今の放送、なんて言った？

初音？　いや、聞き違いだろう。今になって体中の傷がうずきだしている。そうだ、それで幻聴が聞こえたに違いない。そうだろ、マナちゃん、梓。

「なあ梓、今の放送……」

俺は息を呑んだ。梓が呆然とした表情で手に持ったレーダーを見ている。

そのレーダには、……さっきまで映っていた光点、初音ちゃんの番号を示していた光点が消えていた。

おいおい、冗談だろ？　こんな時に電池切れか？

初音ちゃんが死ぬなんて事あるはずが……。

「初音っ、初音ぇっ」

突然梓が駆け出す。

「梓さん、待って!!」

「待てっ、梓っ!!」

半狂乱になった梓は俺たちの静止を振り切って走り出す。

「梓っっ!!　くはっ……」

「耕一さんっ!!」
まだ傷は完治していない俺には梓をとめるのは難しかった。
「マナちゃん、梓を追って……」
「ダメよっ!!」
私は梓さんを追うことが出来なかった。怪我人をおいていくことなんてできない。
……ちがう、これは梓さんに対する嫉妬……。梓さんがいなくなりさえすれば耕一さんは私の……
――そうだ、それでよい。それでこそ「人間」であろ……。
えっ？　今なにか……
「マナちゃんっ!?」
耕一さんの声。でも私は梓さんを……。
「マナちゃんっ!!」
耕一さんが私の手を引き走り出す。私は、ただそれに引かれるままだった。
「初音ぇぇぇっ!!」
西の海岸についた私が見たもの。それは無残な姿で横たわる初音の死体だった。
「誰がっ！　ちいくしょう！　いったい誰がっ!!」
ポトッ……。何かが砂に落ちる音を聞き私は身構える。この島に来て身に付いた習慣。
……いやな習慣だ……。
「ああっ、まったく益体もない」
私が見たもの、それはこの島には不釣合いの光景……夜の帳の中、長い黒髪で巫女装束の女の子がお手玉をしている光景だった……。先程の音は失敗して玉を砂浜に落とした音らしい。
「おまえ……一体……？　まさか管理人かっ!?」
この島に来て身についた嫌な習慣その二。人を疑うこと……。なんて嫌な女なんだ、私は……。

「余か？　そうだの、そうであるともいえるし、ないともいえる」
女の子はお手玉を続けようとし……また失敗していた。不器用だな……、まるで千鶴姉のようだ……。
「それよりそなた、知りたくはないかの？」
「えっ……？」
「そこに倒れる少女を殺めた存在を……だ」
女の子はお手玉をやめることなく尋ねてきた。
「知っているのか……？」
あの子は自分の妹として贔屓目にみていることを差し引いても本当にいい子で……なのに何故死ななければならないんだ……許せない、ユルセ……。
その時、その女の子がニコッと一瞬笑ったような気がして……次の瞬間だった。
砂浜に二人の人物――片方は初音でもう片方は知らない青年だった――がいる。
「あ、彰お兄ちゃ……」
初音が心配げな声を青年にかけた。次の瞬間、青年は初音に組み付く。
そして彼は初音を砂浜へ押し倒し、その細い首をしめた。
青年の表情はうかがいしれない。ただ分かるのは……
「あきら――お兄ちゃん」
ただひたすらもの悲しく聞こえる初音の声だけだった……。
次に見たもの……。それはどこかさみしげな表情で砂浜に横たわる、初音の死体だった……。
「……そんな、初音は……、ちくしょうっ!!」
次から次へと頭の中にヴィジョンが流れ込んでくる……。初音だけではない……みんなが死んでいくさま。
自分は見ていないはずの光景。なにかがおかしい。でも……

抗うことは出来なかった
——わかったであろう？　人とはこのようなものよ……。口ではなんとでも申すが最後は己が身の可愛さにいかようにも動く存在……。
「ちくしょう……」
——怒るがよい、恨むがよい、絶望するがよい……。なにも遠慮などはいらぬ。それこそが人の本性であろうからの。
「ちくしょぉぉぉぉぉっ!!」
梓は駆け出す。頭は混乱していた。衝動が抑えられない。
ずっと耐えていた。みんなを信じたかった。でも、楓が死んで、そして今ここで初音も……。
これまでなんとか保っていた理性の糸がぷっつりと切れ、彼女は今無我夢中で走ることしか出来なくなってしまっていた……。
梓さんに追いつきたくない、いやそんなことではダメ……。二つの気持ちが私の中で激しくぶつかりあう中、なんとか私たちは海岸に辿り着いていた。
そこで私たちが見たものは……
「マナちゃんっ!?」
「しっ！　静かに耕一さんっ」
梓さんが誰かと話している。私たちは木陰からそれを見守り……えっ？　梓さんが話し掛けているのは。
虚空。誰もいない、誰もいないのに……？
「知っているのか……？」
虚空に向かい梓さんは問い掛ける。もちろん返答はない。それなのに……。
「……そんな、初音は……、ちくしょうっ!!」
「ちくしょう……」
「ちくしょぉぉぉぉっ!!」
そう言って梓さんは駆け出す。
私はもう一度梓さんが語りかけていた方へと目をやる。もちろんそこには何もない。何も存在しない

「おっ、おいっ、梓！　梓ぁぁっ!!」
耕一さんの必死の叫びもとどかず、梓さんは走り去っていった。
でも私は、それを見て、どこかほっとして……その時、私は、誰かが語りかけてくるのを聞いたような気がした……。
——そうだ……、それでよい、それでよい……。

787　扉の向こう側

「確か、ここだったな」
木々の間から呟きながら男が一人歩いてくる。
歩を進めるその先には一件の民家が建っている。
男の名前はフランク長瀬、以前はこのゲームの管理者の一人だったが、今は一人の復讐者だった。
(俺の記憶が正しければ、ここに月島瑠璃子ともう一人の死体が転がっているはずだ)
高槻がこのゲームのジョーカーとして選んだ月島瑠璃子。
(……こんなことなら、島に送り込む前に犯っておくべきだったか？)
人のぬくもりがまったく感じられない家の中を、彼は死体を捜して徘徊する。
(つくづく狂ってるな、俺も)
狂ってる、そう思える人間は狂ってなどいない。
フランクは、そんな記述を思い出した。確か、彰が持ってきた本に書いてあったものだ。だが、それも嘘だったのだろう。だって、
(——現に、俺はこうして狂ってる)
奥まった所に在る部屋を覗き込むと、そこには、重なり合うように転がっている死体が二つ。どうやら、目的の〝物〟に辿り着いたようだ。
重なって転がっている死体のうち太田香奈子だったものを乱暴に蹴り飛ばして、月島瑠璃子の上から落とす。下から、両の眼窩と額と胸に五寸釘が刺さ

った月島瑠璃子の死体が現れた。
フランクは少女の死体を跨いで見下ろす。
この島に来る前は祐介の恋人だった少女。もしかしたら、姪になっていたかもしれない少女。
（……そんな子に、俺は何をしようとしてるんだ？）
フランクの脳裏に一瞬そんなまっとうな考えがよぎる。
だが、少女を見下ろしているフランクはその視界に別のモノを捉えていた。
（くくっ……勃起してやがる）
それは、屹立した自身の股間。フランクは口で右手で押さえるが、溢れ出る笑いを止める事はできなかった。調子の外れた笑い声が、家中に響き渡る。
（そうさ、何を思い悩む？　祐介を殺した少年を殺す力を手に入れる為に必要なことだろう？　頭より身体の方がよく分かっているじゃないか。随分頼もしい限りだなぁ、おい！）
ズボンから、はち切れんばかりに勃起したモノを取り出す。
瑠璃子の顔から飛び出た五寸釘が気になる――折角の可愛い顔が台無しだ。微笑みながら少し浮いている五寸釘を体内へと押し込んだ。
衣服を剥ぎ取り露わになった部分に、フランクは己の怒張したモノを押し当てる。そのまま、腰を押し進めようとするが上手く進まない。死後硬直で筋肉が固まっているのだから当然だ。
「これじゃあ入らないじゃないか……いけない子だ」
フランクは、腰に差しておいたナイフを取り出して、瑠璃子の陰部に突き立てる。
（ああ……これで入れやすくなった）
フランクは、ほくそ笑む。
そして、ナイフであけた〝穴〟に勃起したモノを突き立てた。奥を突く度に性器がどす黒く塗りたてられていく。
――電波とは月島瑠璃子と交わることで彼女の持つ狂気が伝染して得られる能力である。彼女の狂気

の心が相手の狂気を目覚めさせるのだ。つまり、彼女が生きていなければ意味がない。
だが、フランクはそのことを知らない。瑠璃子の中で精を解き放った彼は、電波を得ることができたと信じて疑わない。
「くぅぅぅぅ……頭がちりちりするぜぇ……これが電波ってやつかぁ！」
頭を押さえて、狂喜するフランク。
「これで、これで俺は電波を——祐介の仇をとることができる力を手に入れることができたんだ！　まずは……まずは、そうだな、少年以外の連中を全員消してやる。あいつ等が、さっさと死んでいれば、祐介は島を出ることができたんだからな」
電波という狂気の力を求めたフランクは、その力を得ることはできず、ただ、己自身の狂気を深めただけだった。
そのことに気付く理性も無くした彼は、ただ、それが祐介の弔いだと信じて殺戮を開始する。

788　引き金の重さ

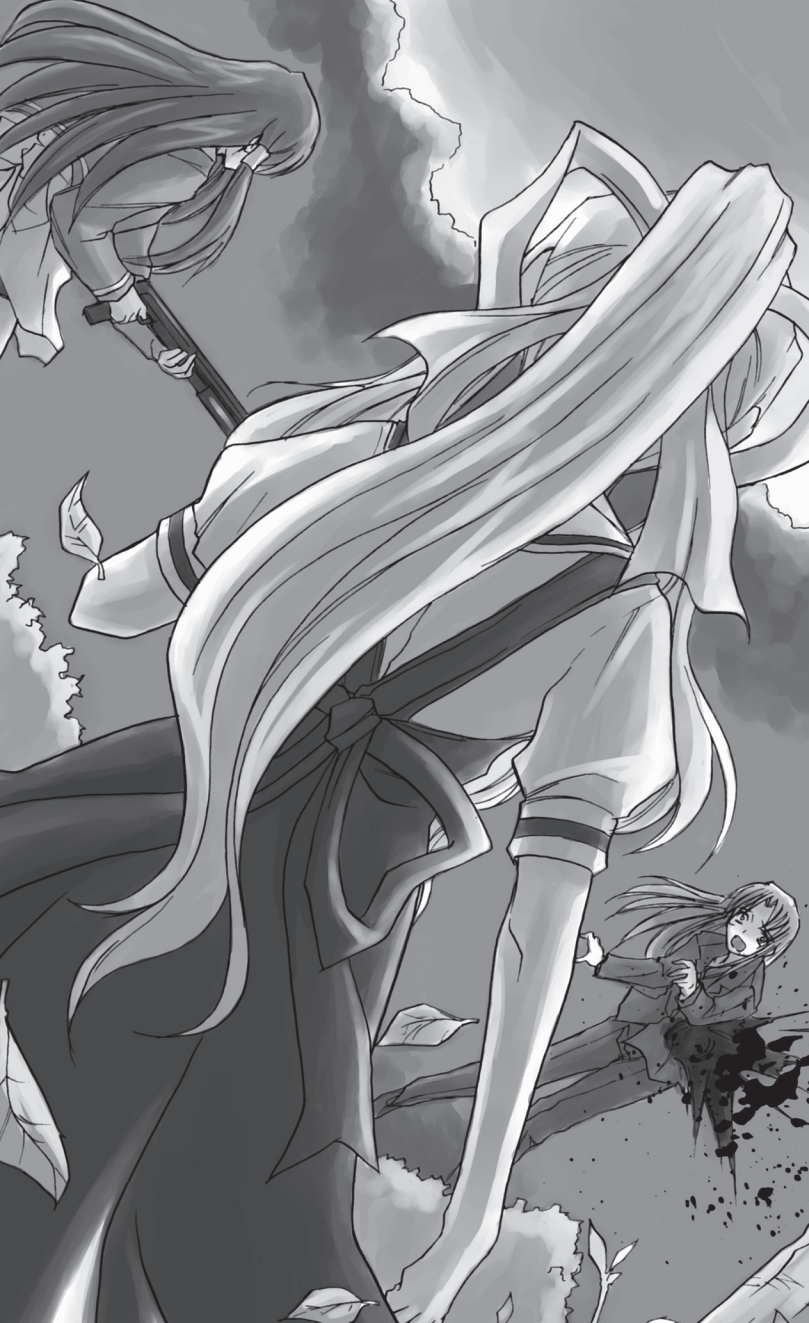
銃声が、聞こえる。足を止め、息を飲む。
避けられぬ戦いは、既に始まっていた。運命の悪戯のような偶然の要素など、絡む余地などなかった。
参加者を殺そうとする少年を、あの住人という男は放っておかないだろう。一方の少年も、自らの殺意を知る住人たちを、優先して殺そうとするに違いない。お互いが望むままに、殺し合いが始ったということだ。
（……それで、私はどうするの？）
郁未は何度となく繰り返した、答えのない問いを心にとどめて、再び駆け出した。とにかく今は、葉子を助けなければならない。走る。ひたすら、走る。
いつのまにか、銃声は聞こえなくなっていた。早くも決着がついてしまったのだろうか？
（葉子さん！）

心の中で叫ぶ。それと同時に、聞き覚えのある声が耳に飛び込んできた。
『往人さん……』
『大丈夫や、居候は負けへん』
郁未はくるりと振り向いた。大きく回りこんでいた観鈴たちと郁未は、互いに気付くことなくすれ違っていたのだ。
（観鈴……）
苦悩のために眉間に皺を寄せながら、静かに散弾銃を構える。
「……観鈴、止まりなさい。それ以上進めば……間違いなく、死ぬわよ」
刺激しないよう静かに、だがはっきりと発音できるように心を抑え込んで、郁未は言った。それ以上進めば、少年がいる。今は休憩しているはずだが、いつ飛び出してくるかは判らない。もし観鈴たちが遭遇したならば、間違いなく、死ぬ。
……もしかしたら、もう飛び出しているかもしれない。どきり、と心が揺れる。
「郁未さん……」
悲しそうな表情の観鈴が、顔だけ振り向いて、ぽつりと呟いた。あきれた事に、もともと銃すら構えていない。
……そういう娘なのだ。そんな彼女の意思を、周囲も尊重しているのだろう。
「くそっ！　ホンマむかつく小娘やな！　自分、さっきっから何がしたいんや!?」
対照的に、拳銃を握り締めた女――観鈴の母、晴子――が吐き捨てるように叫ぶ。
（……知らないわよ）
憮然として、思わず呟く。
そうだ。私には何度となく、この因縁の幕を閉じるチャンスがあった。その度に結論を先送りにして、うやむやのまま互いに傷を増やす結果を導いている。私は、何がしたいのだろう。
（あの時、引き金を引いていれば……）

そんな場面が、いくつも思い浮かぶ。
(私は、強くなんかなかった……)
あいつが言うように、自分を見失わない強さはあったかもしれない。でも、それが何になるのだろう？
少なくとも、運命を自ら切り拓くほどの強さなんか、なかったのだ。

郁未が構えた銃によって、この空間は支配されていた。しかし、たったひとつの叫び声が、容易にその支配力を切り崩してしまう。
『ああああああああああっ！』
(葉子さん!?)
一瞬だけ郁未の注意が外れ、その僅かな隙を逃さず、晴子が動いた。
「観鈴っ！　伏せときっ！」
観鈴を茂みに蹴り飛ばし、晴子自身は反対側に飛ぶ。郁未の視線が戻るのと、ほとんど同時だった。
「くっ！」
郁未は照準に迷い、手間取った挙句、散った二人を追いきれなくなり、防御を求めて木の幹に隠れた。
「小娘、今の声聞ぃたか？　居候の、勝ちや！」
嘲笑うようにして、拳銃を構えたまま立ち上がった晴子が、高らかに宣言する。
「……まだ、判らないわ。随分長い間、銃声が聞こえないじゃない」
銃声がして、続いて葉子の叫びが聞こえたのなら、葉子の敗北は決定的だ。だが現状では、まだ判らない。
その辺の理屈は、晴子にも解っているのだろう。苛立ちに身を任せ、発砲してきた。
「やかまし！　黙っとけ！」
ガン、ガン！
デザートイーグルの弾丸は、郁未が手を回しても届かない程の太い木の幹を、易々と削っていく。好きに撃たせれば、調子にのせてしまうかもしれない。
「いい気になるんじゃないわよ！」

威嚇のために、散弾銃で応射する。狙いは適当。
ズバンッ！　ドシャッ！
地面が派手に吹き飛んで、期待通り銃撃が止まった。
「くそったれが……」
悔しそうな晴子の声が、移動していた。たぶん、左へ蹴り飛ばした観鈴を巻き込まないように、右から回り込んでくるつもりだろう。
それだけ解っていれば、対応は簡単だ。
……左へ移動すれば、それでいい。
（あの娘は――観鈴は、撃たないのだから）
くるりと移動する。あとは燻り出すだけ。なんのことはない、たった一つの嘘で、それは成る。
「……観鈴、見つけたわよ」
そう言った郁未の表情は。
少年に、そっくりであったかもしれない。
「観鈴っ⁉」
焦りに我が身を忘れて、晴子が飛び出す。
「――お母さんっ⁉」
郁未が声をかけた茂みと全く違う場所から、観鈴が立ち上がる。
（本当に――羨ましいくらい――）
郁未が、引き金を引く。
その真正面に、晴子。
（――馬鹿な、人たちね――）
ズドン！　ビシャッ！
直撃したスラッグ弾が、一瞬にして胴体を破壊する。できたての挽肉のように掻き回された腹部から、大量の血飛沫を撒き散らし、晴子は吹き飛んだ。脱力し、銃を手放したころには、すでに眼の焦点があっていなかった。
――勝負は、ついた。
最初は殺す気なんか、なかった。
（……ごめん……。私……あなたみたいな母さんが、欲しかったわ――）
最初は殺す気なんか、なかったのに。

言葉の応酬に憎しみを乗せるうちに、いつしか互いに殺意を重ねていたのだ。
郁未は処刑を待つ咎人のような、後悔の濃い影を落として、観鈴の方を向いた。その背を貫いて、かすかな声が聞こえる。
「……み……す、ず……逃げぇ……」
晴子の声。もう助からないであろう母の、最期の願い。
「お、お母さんっ！」
観鈴が泣いている。
その手には――銃があった。握った銃と入れ替わるように、母の声は聞こえなくなった。
(とうとう、構えたのね……)
ぼんやりと、郁未は思う。何か放送がかかっている。四人、死んだようだ。聞こえているが、理解は出来なかった。
ただ名前を呼ぶだけで、精一杯だったから。
「……観鈴」
「……い、郁未、さんっ！」
観鈴が銃口を向ける。
郁未は手にした散弾銃を構えることもなく、ただ観鈴を見ていた。この娘に撃たれるのならば仕方がない、そんな風に思っていたから。
「どう、するの？　あなたが、決めて。……撃つ気なら、早くしたほうがいいわよ」
早くしないと――彼が、来るから。
「郁未さんっ！」
観鈴の手に、力が入る。
……それでも、引き金を引けないでいる。
「さあ、撃ちなさい！」
叫ぶ。
「郁未さんっ！」
叫ぶ。
そして、沈黙。
「ううっ……」
観鈴は泣き出していた。嗚咽とともに、銃口が落

ちる。
（本当に――この娘は――）
郁未は呆然としていた。この娘は、母を殺した相手すら、殺す事が出来ないのか。
許されぬ罪を犯しておきながら、何故か郁未は微笑んでいた。この瞬間、考えられないほどの安らぎが、郁未を包んでいた。

しかし、その安らぎの時間は。
泡沫のような、一瞬の夢でしかなかった。
『……それなら俺が、撃ってやる』
郁未の振り向いた先に、一人の男が立っていたからだ。
その眼に暗い怒りの光を宿した、声の主が居たからだ。

二十三番　神尾晴子　死亡
【残り18人】

789　ココロ、ウバワレテ（後編）

話しは少し遡る。
「ま、待ってください……」
――ああ、苦しい、
腹と足が、焼けるように熱い。
少し言葉を喋るにも、地獄の苦しみを味わってしまう。
でも、言わなければ、私の命は、もう幾分もないのだから。
「黙って寝てれば楽に死ねたんだぞ……」
目覚める事のないだろうと思っていた葉子の覚醒に往人はシグ・ザウエルを構えながら、彼女に声を掛けた。
「あ、貴方にた、頼みがあるんです」
今にも消え入りそうな声で葉子が話す。

「悪いが……時間がない。連れの二人を助けに行かなければいけないんでな」
「ほ、ほんの少しでいいんです、お願いし、ます」
彼女の必死の言葉に、往人は溜息をつきながら、
「三十秒だ、それ以上は待てない」
「充分です、あ、ありがとうございます」
喋るたびに、葉子の口から血が吹きだす。もう、長くないだろう。
「し、信じられないかもしれませんが、さっきまでの私は私ではありませんでした、私を操っていたのは、このゲームに巣食っている、真の、敵です」
ここで一度言葉を飲み込みながら続きを話す。
「そ、その敵は、あの人は『姫君』と呼んでいましたが、あの人もまた、姫君に心を奪われ、人格が消されるのです。恐らくは、郁未さんも」
……。
意識が遠くなっていく、ま、まだ眠っては駄目
「そして、お願いというのは、姫君を……こ、殺してください。い、今の私の自我が戻ったのは、別の意思、つ、つまり姫君の意思を貴方が殺したからです。ひ、姫君に侵食されている時に、その侵食先にダメージを与えると、どうやら、姫君本人にもダ、ダメージが行くようです」
人格が戻った時に、一度聞いた姫君の叫びが聞こえた上での勝手な憶測ですが、と話しを付け加える。
「乱暴な言い方ですが……侵食された人間……い、郁未さんや他の参加者がそうなった時に貴方がその人を倒していけば、いつかは……」
「もういい、それ以上しゃべ……」
ガン！　ガン！
音が、森に響き渡る、銃声だ。
「しまった！　始まったか！　悪いがもう聞けん！」
そう言うと往人は葉子の方を振り返ることなく、銃声が聞こえた方に走っていった。
(行って……しまいましたか……)

随分とあたふたした説明になってしまったが、恐らくあの男なら、自分の言わんとしていたことを解ってくれているだろう。
（そう、信じましょう……）
体から、力が抜けていく。
（なんだか……眠いです……、後は……あの人に任せましょう……）
自我を奪われ、罪もない参加者を傷つけてしまった女の最後にしては、悪くない。
そう思い、満足しながら、
彼女は眠った、永遠に。

二十二番　鹿沼葉子　死亡

【残り17人】

790　One way

姿を確認すると同時に、銃を構え直す暇もなく、
「ぐぁぅっ！」
銃弾が、郁末の身体を貫いた。
焼けるような痛みと共にその場に倒れ伏す。散弾銃は落としてしまい、そして拾いなおす力すら残されてはいなかった。視界が滲んでいく。傷口から意識が拡散していく。死んでしまうのはわかっていたけれど、それでも意識の欠片を拾い集めていた。
死んでしまう方がずっと楽であるはずなのに。
「郁末さん！」
「動くなっ、観鈴っ！」
郁末に駆け寄ろうとする観鈴に、叫ぶ。観鈴はびくっと体を震わせて、その場に凍りついた。
「こいつは晴子を殺した。お前は強い子だから撃てなかったが、俺にはそんな強さはない」
辛うじて残る意識の中で、郁末は往人の言葉を聞いていた。
『撃たない強さ』
それも持っていないものの一つだと。

「……わかるな、観鈴」
　何も答えない。涙だけが流れるが、反論はできない。往人の気持ちは、痛いほどわかっていた。我慢する強さも持っている。それは、ある意味では悲しい強さだったのかもしれない。
「どの道お前は殺さなければいけないらしい。『姫君』とやらに侵食されている人間を殺すことが、『姫君』を弱らせることに繋がるらしいからな。信じてやってもいいと思ってる」
「……誰、から……」
　やっとのことで声が出る。
「もう一人の女からだ。最後に自分を取り戻せたみたいだぞ」
「……そう、なんだ。よかった……。一つ言っておく、けど……私は操られてなんかいない。自分の意志で、彼に……」
「だったら、それがお前の間違いだ」
「間違ってなんか、いない……」
　そこで、涙があふれた。
「私は……彼を愛していたから……」
　どんなに清々しい涙だったことだろう。
「観鈴、目を閉じてろ」
　事実上の死刑宣告。
　最後の最後に、彼の傍らにいてやれなかったことが、

　ダンッ！

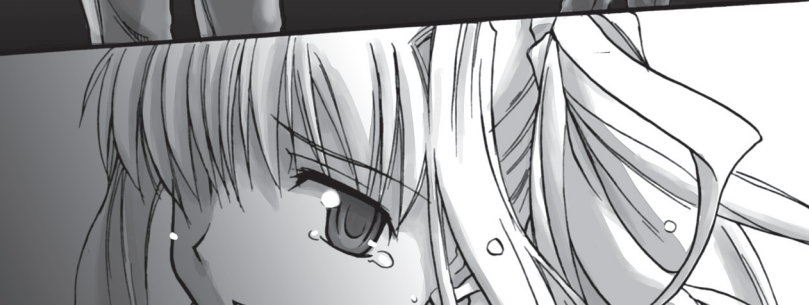
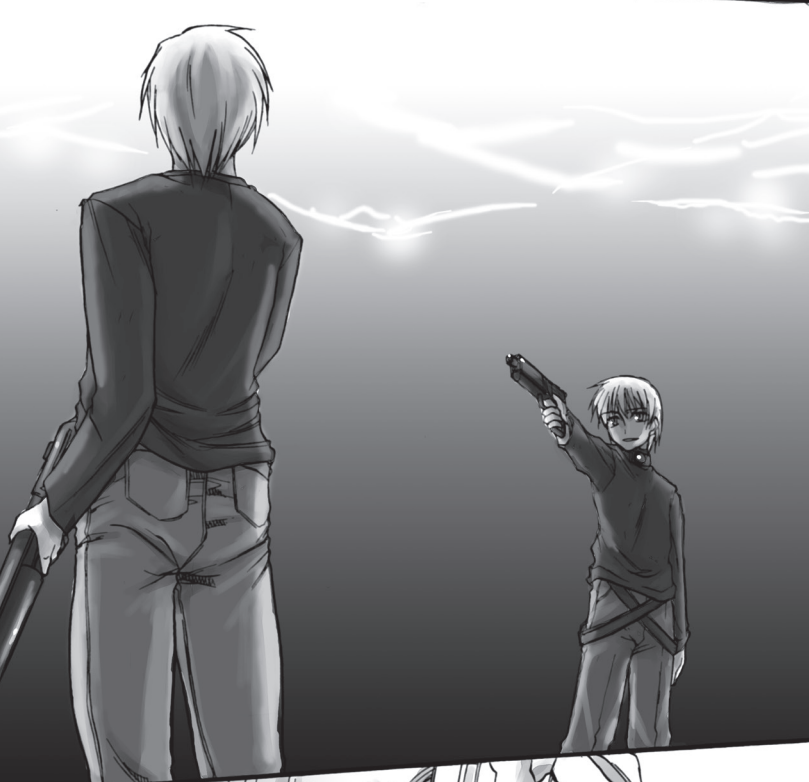
　心残りだった。

　自分は絶対に、道を間違えてはいなかったと、自信を持って言える。
　何故なら、道は自分の歩いてきた後に出来るものだからだ。
　その時その時に、悩んで、考えて、そしてたまには考えることもやめて。

そうして続いてきた道に、例え他人が何を思おうとも、私が満足すればそれでいい。
人を、傷つけた。殺した。
後悔がないわけではないけれど。
あの時、別の選択肢を選べばよかったと思うことはあるけど。
最後に辿り着いたこの場所に満足できれば、全て許される。
最後まで彼を愛し抜いた私の道は。
間違ってはいなかった。

三番　天沢郁末　死亡
【残り16名】

791　死ぬわけにはいかない

郁末の亡骸を見下ろす。
往人も観鈴も、何も喋ることはできなかった。
無言のまま郁末の持っていた散弾銃を拾い上げて、
「!?」
悪い予感がした、とても悪い予感が。
郁末の命を奪ったばかりのシグ・ザウエルで、背後へ発砲する。
何かを狙ったわけではない、乱雑だった。
遅れて自分も振り向くと、
「驚いた。勘がいいんだね」
いつの間にか黒い悪魔が、ベレッタを構えながら、微笑みを浮かべていた。
「……観鈴」
少年を狙う武器を散弾銃に変えながら言う。背中には嫌な汗が滲んでいた。
「逃げろ。どこだっていいから、逃げろ」
「え?」
「お前が本当に誰も撃てないってことはわかった。だったらこの場にいない方がいい」

足手纏いになるから、と、心のなかで呟く。もし観鈴を人質にとられたらこっちにはどうしようもなかった。そしてこれは嫌な考えだが、この状態で自分が殺された場合、観鈴は絶対に逃げられない。観鈴から目を離すことになるのは晴子に申し訳がないが、ここにいない方が生き延びる確率が高いのではないかとも思う。
「で、でも、お母さん……」
「後で一緒に来ればいいから、今は早く逃げろ」
「いいのかな？」
少年が口を挟む。その口調は、どこまでも軽い。
「逃げる背中を、僕が撃つかもしれないよ？」
「そうしたら俺がお前を撃つのはわかってるだろ。お前はまだ死ぬわけにはいかないはずだ。だからお前は、観鈴を撃てない」
その返事に言葉を返さず、ただ肩をすくめるだけ。
「……わかった……」
今の会話で自分が足手纏いだということを実感できたのだろう。観鈴は首を縦に振った。
「絶対に死ぬんじゃないぞ。それから……」
もう、ここには戻ってくるな。

「……行ったみたいだね」
「……」
「君は一つ間違ったことを言った。姫君はもう降りてきている。今も島を引っ掻き回してるんじゃないかな？　だから僕の役目はあらかた終わったようなものだよ。もっとも……」
一度言葉を切る。
「死ぬつもりはないけどね」
「俺も観鈴のお守があるしな。それと姫君を殺すように頼まれてる。死ぬわけにはいかないいな」
長い間のにらみ合い。
いつからか、ゲーム開始から二度目の雨が、二人の間にカーテンを敷いていた。
二人とも動かない。

きっかけを待っている、引き金を引くきっかけを。
「随分、我慢強いんだね」
「……精神だけはタフなもんでな」
空を被う黒雲は、ますます濃くなってゆく。
雷鳴もする。
訪れた闇が、二人の姿を覆い隠す。
そして、時間は過ぎて――

792　雷

雷が近くに落ち、弾かれたように観鈴は走り出す。
もうここには戻ってくるな。
その言葉が気掛かりだった。
戻ってきてはいけない。
戻ってはいけない。
それはきっと、悪いことが起きるから。
だからといって――
じっとしているなんて、できるはずがなかった。

鳥居を潜る。暗くて、何も見えない。
暗くて、何も見えない。
また、雷。
周囲が照らされる。
観鈴が見たものは――二つの死体。
散弾銃で頭部がずたにたにされた少年。
そして、血溜まりの中で動かない往人。
雨が、強くなった。

三十三番　国崎往人　死亡
四十八番　少年　死亡
【残り14人】

793　右手に剣を、左手に枷を

既に私たちは疲弊しきっていた。それでもこうやって歩み続けることが出来るのは、もうすぐ戦いが終わると信じることが出来ていたからに違いない。

希望の弓がこの手にあるから、こうして戦い続けることができるのだ。
もしも、希望の弓が砕け散ってしまったならば。
柏木千鶴という私を構成しているものすべては。
何処に消えてしまうのだろう、と、ふと思った。

施設に向かって歩いていた私達は、その施設まであと数分といったところまで至っていた。それほど遠い道のりでも無かったのに、足は重く、頭は上手く働かない。だから自分たちのすぐ傍にまで他者が近づいていたにも関わらず、反応が少し遅れてしまっていた。気付いたときには彼は自分たちの前に立ちはだかっていて、その右手には拳銃が握られていた。気を抜きすぎたと思う。ここまで状況が進行してなお戦おうとする者がそうそういるわけがない。そんな風に甘く考えすぎていたのだ。
「ッ――」
自分の後ろの月宮あゆが多少震えながらも武器を構え、スフィーを背負ったままの自分も同様に武器を取り出そうとし、ここで漸く矛盾に気付く。殺し合いを続けようとするならば、自分たちが武器を取り出す前に奇襲でカタをつけていた筈だ。なのに目の前の彼はそうしなかった。この状況が意味することは至極単純だ。
案の定だった。彼は右手に持った拳銃を私の足元に向けて無造作に放ると、白い両の掌を見せて、
「僕に戦う意志はありません」
そう言った。私たちはほっと溜息を吐くと、彼に向けた銃口を下ろした。戦闘をする意志のない人間は確実に増えている。戦いはゆっくり終わりに向かっている。多くの犠牲者を出して、多くの悲劇を生み出してきたこの戦いにも、やっとのことで終わりが見えてきたのだ。希望の弓は確かにこの手にある。
傷だらけの肉体とは裏腹に、少女のように高い柔らかな声と子供のような幼い顔立ちが特徴的だったその青年が次に発した言葉は、ただ一言。

「魔法使いを捜しているんです」
「あ、見えてきたよっ」
彼——七瀬彰と共に歩いていた私達は、施設が見える辺りまで到着した事を、あゆの高い声で知った。
「ええ」
私はあゆの背中で眠ったままのスフィーをぼんやりと眺めながら、小さく頷いた。
——詳しい話は、施設に到着してからします。
彰はそう言ったきり、自分達の後ろに黙ったまま付いてくる。魔法使いを捜している。その言葉から推測するに、彼もまた神奈備命の存在に気付いたのだと思う。彼は見たところ普通の人間だが、それは自分たちだって同じだ。自分たちも普通の人間に見えるけれども、特殊な力を持っていて、神奈に気付くことが出来た。彼もまた、特殊な体質の持ち主で、神奈の邪悪な意志を感じ取ったのだろう。そして、全てを終わらせるためには、自分一人では無理だと考えた。だからこうやって自分たちに接触してきた。
協力者は多い方が良い。神奈が誰に乗り移ったとか、そういう事を調べる上でも人手は多くないといけない。多い方が良いというより——出来るならば、生き残っているもの全てが協力しあって、戦いを終わらせないといけない筈だ。
とにかく、目標の施設はもうすぐだ。
「やっと戻ってきたね、あゆちゃん」
息を吐いて言うと、自分に替わってスフィーを背負っているあゆは、にこりと微笑んで頷いた。
——千鶴さんだって疲れてるでしょ。交替で背負っていこう？
そう言って自分の背中からスフィーを奪い、にこりと微笑んでくれたあゆの言葉が、疲れ果てた気力を回復させてくれた。すごく健気で、自分の妹——初音に通じる暖かさと癒しを与えてくれると思った。
あゆの笑顔を見て、妹である初音のことを思う。

大切な末妹である初音のことを。
　初音に会いたい。梓は初音に会えただろうか？　気まずい別れ方をして、それ以来会うことが叶っていない。会って——とにかく、謝りたい。何を謝るのか、と言われても言葉は思いつかないけれど、
　私ははっと息を呑んで、思わず後ろに振り返りそうになる。確かあの時、初音は青年と一緒に居た筈だ。私が殺そうとした青年だ。その顔までは覚えていないけど、体格や服装は朧気に思い出せる。雰囲気こそ違う気がするが、その特徴は、今自分の後ろを歩く青年と共通する点が多いように思えた。
　これはどういうことなのだろうか。

「あれ？　あそこにいるのは誰かな？」
　思考の海から現実に引き戻したのは、やはりあゆの言葉だった。彼女が指差した先に見えたのは、一組の男女だった。女の方は来栖川芹香。自分達の捜し人の一人であった少女。もう一人は、高校生くらいの少年だと思う。彼らも明らかに施設の方に向かっていて、当然、自分たちと志を同じとしているのだと思う。喜ぶにはまだ早いと判っているけれど、それでもやはり、嬉しかった。
「さ、私達も急ごう」
　そう言って歩き出そうとしたところで、掠れた声が聞こえた。

「千鶴さん。僕はあなたに、どうしても言わなければいけない事がある」
　振り向いた私は、青年の只事では無い気配に足を止めた。酷く弱々しい、まるで罪を告白する咎人のような雰囲気に私は困惑する。彼の瞳に光はなく、深い闇が沈んでいた。
「僕はあなたのように——魔法使い、或いはそれに類似した人間を捜していた。僕は普通の人間だから、神奈に対抗する手段をもたないから、だから、あなたたちのような人を捜していた」

普通の、人間？
　私の底にある不安は、ゆっくりと色を持ち、形を持ち、重みを持ち、意味を持ち、大きくなってゆく。青年はゆっくりと私の傍に近づき、私の服の袖を掴む。ぶるぶると震えているのが伝わってきて、今にも崩れ落ちそうな様子で、それでも彼は言葉を紡ぐ。
「それがどういう事だか判りますか？」
　彼だけが震えているのではないと思った。震えているのは私も同じなのだ。心の底で生まれた不安の塊には遂に「目」が付いた。真っ赤な大きな目で、意志も意味もない視線で、私を内側から見つめる。私は耐えられなくなり、叫び出したくなるのを必死に堪える。
　彼は今から、何を言うのだ。
「それでは、邪悪な意志――神奈の存在を、ただの人間である僕がどうやって知り得たか」
　青年は目を閉じ、歯を食いしばり、沈黙を呼び起こし、そして漸く意を決して目を開き、ゆっくりと口を開いた。
「僕は――神奈に乗り移られたんです」
　私の不安は。ゆっくりと、ゆっくりと、私の心の底から這い出してくる。足もなく手もない歪な球形のそれは、私の心を制圧し、遂に身体の自由まで奪おうと蠢き出したのだ。
「そして、一人の人間を殺してしまったんです」
　青年はまっすぐ私の目を見ていた。黒目がちな大きい瞳は、まっすぐ私のことを見つめていた。
　私の不安は、私の身体の自由を完全に奪った。震えることとさえ今は出来ない。思考することさえ今はままならない。今出来ることは、ただ、彼の目を見つめ返すこと。ただ、彼の次の言葉を待つこと。
　彼の告白は、ただの懺悔ではない。ただ殺したと言うだけならば、私の不安はここまで強大になる筈がないのだ。
　――彼は、誰を殺した？
　思考が漸く回り出す。あゆやスフィーを先に行か

せ、私だけをここに足止めした理由は。私が年上の大人で、懺悔するならば私にだけ聞いてもらうべきだと考えたからか。本当にそれだけか、それだけならば私は早く彼に言葉を返さなければならない、大人として、共に戦う仲間として「憎むべきは神奈で、気に病んではいけない」、そのようなことを言ってあげなければならない。なのに、目の前で口をゆっくりと開こうとする青年の顔を見ると何も言うことが出来ない。何かを言おうとしている青年を前に、私は口を動かせない。

彼の話にはまだ続きがある。

これ以上彼は何を続けようというのか。早く言ってしまえ、彼に言うべき言葉を、

彼の話は私が聞かなければいけないことである。

それは違う、違う筈だ。

彼が殺したのは私の知っている人である。

違う、

彼が殺したのは私のたいせつな人である。

――っ、

彼が殺したのは柏木耕一であり、柏木梓である。

――ちがう、

彼が殺したのは。

「それでは午後六時の定時放送を始める。死亡者は――四人。生き残りは十三人だ」

思考の外側で、世界の外側で定時放送が始まった。私が思考を一瞬停止させ、はっと空を見上げた瞬間に青年はゆっくりと口を動かした。

「あなたの、良く知った、人です」

不安は事実となった。私の身体は全てばけものに支配されて、意志は全て消滅した。

「やめ、て」

意志ではなく、ただ人間の本能としてやっとそう口にする。ただ、つらいことを先延ばしにするだけの言葉で、意味なんてひとつもない言葉で、

それでも。青年の口は止まった。

けれど、何の意味もないことで。
そして、放送は止まらなかった。
「二十一番――柏木初音」
「うあああああああああああああああああ!!」
希望の弓は砕け散り。
ばけもののようにわたしはさけんだ。

姉妹だから、いつだって会えるし、いつだって話せるし、いつだって、いつだって、いつだって、私はまた、失ってはいけないものを失った。
何も話すことが出来ないまま、私は私のカケラを失ってしまったのだ。
――理解出来るつもりだった。彼は悪くない。彼は一片たりとも悪くない。本当に悪いのは元凶である神奈であるという事が理解できると。
そんな風に割り切れるわけがなかったのだ。
「あなたはッ――あぁぁっ!」
「千鶴さんッ――!」

あゆがスフィーを地面に寝かせ、慌てて駆け寄ってくる。放送を聞いて私の咆哮の意味を理解したのだろう。そして、どうして私が七瀬彰に掴みかかっているかもきっと想像できたに違いない。そして、七瀬彰が柏木初音を殺したことが、七瀬彰のせいでないことも判っているに違いない。
全てを想像し切った上で、しかしそれ以上に続ける言葉は無かったのだろう。あゆは立ち止まり、ただ表現しがたい表情で私たちを見つめている。ただ叫ぶ。けれど叫んだ筈なのに言葉にならない。
「そんなのっ――」
間違っている。判っている。判りきっている。
私は強引に彼を地面に押し倒し、ばけもののような顔をして、ぶつける場所のない筈の怒りと悲しみを、七瀬彰の頬に叩き込んだ。彼はちっとも抵抗せず、痛みと怒りと悲しみとを全て受け入れるように、ただ、動かずにいた。
二発、三発。私の怒りは、悲しみは、間違った方

向にぶつけ続けられる。彰の頬は赤く腫れ、口からは血が流れ出し、それでも彰は目を閉じず、歯も食いしばらず、苦痛の悲鳴もあげず、泣きさえもせず、ただ、動かずにいた。

「僕が、――殺しました」

腫れた顔で彰は言う。私の拳を浴びながら、彰は掠れた声で言う。私の拳はまだ止まない。懺悔を続ける彰の声も聞かず、ただ拳を振るう。ただ拳を振るう。ただ拳を振るう。

気付くと私の頬を涙が伝っていた。涙は彰の腫れた顔に落ちる。私の手は止み、ただ、彰の上に圧し掛かって、泣き始めていた。

「はつねぇ……っ」

彰の血で汚れた手を顔にあて、人目も憚らず私は号泣する。何も話せなかった。ヒトゴロシになった私のことを許しても貰えず、ただ、先に逝かれてしまった。私を許してくれる人がいるならば、それは初音を以って他にはなかったのだ。

「ごめんなさい」

呟き声がやっと私の耳に届いた。彼が謝ることではない。謝ることではないけれど、それでも私の怒りも悲しみも、この青年に痛みとなってぶつけた。私はどこかで、彼のせいだと思っているのだ。

「僕の心が弱かったから、あなたの大切な妹を、初音ちゃんを、奪ってしまった。殺してしまった。僕はあなたに殺されても、文句は言えない。僕は、あなたに殺されなければならない」

青年はそう口にした。

そう、もしも彼の心がもう少し強かったならば、神奈に心を乗っ取られなかったならば、初音は死なずに済んだかもしれないのだ。

そんなの間違った考えだと判っている。けれど、もし、があるのならば。この青年の傍に初音がいなかったならば、初音は死ななかったかも、

そこで私は気付く。

どうして初音は、この青年の傍にいたのだろう。

神奈に心を乗っ取られた青年のすぐ近くに、たまたまいたから初音は殺されたのか？　そうなのか？違う。それは違うと思う。この青年は先ほど、初音のことを「初音ちゃん」と呼んだ。ある程度の期間、初音はこの青年の傍にいた筈だ。

　そして私は思考を辿る。先ほどの既視感。この青年を以前に見た記憶。その記憶は初音に関する記憶で、青年はただの背景だった。

　初音は。

　この青年の傍に、ずっといたのだろうか。

――思考を続ける私の下で、彰は言葉を続けた。

「でも、今は殺さないで欲しいんです」

　私は呆然と青年の顔を見た。

「何か――方法があるのでしょう？　〝何か〟にあの精神体を追いやる方法が。精神だけの存在を殺す事など出来ない。だけど、身体と一緒なら別の筈だ。誰かの身体の中にいたならば、肉体と一緒にあの精神体を殺す事が出来る。そうでしょう？　身体が死ねば心も死ぬ。そうでしょう？」

　その通りだった。私は青年の言葉に耳を傾ける。泣くことも忘れ、彼の言葉の真意を理解しようとする。理解しようとするまでもなかった。彼が言うことなど一つだ。

「今はなくても、その方法を見つけるつもりなのでしょう、あなた達は。その為にこうして行動しているのでしょう？」

　言いながら彰は泣いていた。掠れる声で、握った右の拳を自分の顔にあて、開いた左の掌を胸に当て、心の痛みに必死に耐えるような悲痛な声で、ゆっくりと言った。

「もしその方法を見つけたならば。僕の身体にあいつを追いやって、そして、僕ごと殺してください」

　それは、悲壮な決意だった。

　私の身体から力が抜けてゆく。彼の言葉の意味を、彼の涙の意味を理解して、やっと彼のことが判った。

彼の涙は、私の妹を殺したということへの罪悪感からきているのではない。彼の涙は、純粋に、初音を失ったことへの悲しみから来ているのだ。
「僕は——っ」
彼は、ただ近くにいた他人を殺したわけではないのだという事。彼は、ずっと自分のそばにいた、大切な人を殺してしまったのだということ。
「初音ちゃんの仇を、取らなくちゃいけない——っ」
初音のことをずっと守ってきて、最後まで守り通すつもりで戦ってきて、それなのに守れず、自らの手で終わらせてしまったのだということ。
それは。なんて、救われない話なのだ。
「だから、僕を、殺してください——っ……」
ごめんなさい、と彼は言った。その言葉は私に向けたものでも、他の誰に向けたものでもない。彼は、自分で殺してしまった初音に向けて叫んでいるのだ。
殺してしまった愛しい人のことを思って。
ごめんなさい、と。
彰は、二度と許されるはずもないことを。許して欲しいと思いもせず。ただ、謝り続けているのだ。
握られた拳には剣がある。それは決意の剣。
開かれた掌には枷がある。それは虚無の枷。
七瀬彰は、永遠にその剣と枷に縛られて、そして死んでいくのだと、私は思った。

794　ひとりぼっち

「往人さんっ！」
神尾観鈴は雷光の中に国崎往人の姿を認めるや否や、駆けだしていた。
雨で濡れていた地面に足を取られ、無様に転ぶ。だがそれでも、彼女はすぐに立ち上がり、また駆けだしていた。
大した時間をかけずして、彼の下へと辿り着く。

往人の肩を揺さぶり、うわごとのように呼びかけ続ける。
「往人さん、往人さん――」
この場で何があったのか。そしてどうなったのか――そんなことは分からなかったし、分かる必要もなかった。
重要なことはただ一つ。
往人の胸元についている、ちっぽけな、つまらない傷。
こんなつまらない傷が、彼の――
「往人さん、往人さん――」
認めなければならない。
彼の、命を奪ったのだ。
「う、う、うああ――」
癇癪を起こして激しく泣き出そうとした、その時だった。
彼の身体は光に包まれ、文字通り消失し始める。
彼の肩を掴んでいた手から、重みも、感触すらも失せる。
あまりに圧倒的な喪失感だった。
もし神などというものが存在するとしたら、その神とやらは自分が彼の胸の上で泣き叫ぶことすら許さないのだろうか？
「あ――」
その身体が完全に消失した後に残されたのは、彼が愛用していた人形のみだった。それを手に取り、胸に抱える。
泣くことはできない。
全てを失った。晴子も、往人も、もういない。
本当のひとりぼっちになってしまったのだ。
だから、今までの癇癪とは違った。もう誰もいない彼女には、すすり泣くことすらできなかった。
「……」
つい先刻、往人は『強い子だから撃てなかった』と言っていた。
だがそれは、強さと呼べるものなのだろうか？

自分がもっとしっかりしていれば——端的に言えば、撃たなければならない時に撃ててさえいれば、この現実は変わっていたかもしれないのではないか？

それ以前に、二人とも強い人だった。あるいは——そもそも自分さえいなければ、晴子も往人も生き残れたのではないか？

「……わたしの、せい？」

——その通り。余の、せいだ。

その声は、観鈴の耳に唐突に入ってきていた。観鈴の今の状態では、聞こえてはいてもそれを認識することはできなかったが。

声の主は彼女の抱える人形を一瞥し——そして判断した。この少女の手にある限り、人形は完全に無力だろうと。彼女は自分と同じなのだから。

だから放っておくことにした。

後に残されたのは、いくつかの死体と、その場にたたずむ一人の少女。雨。

あとは人形。

——親友達の仇を討つために修羅の道を選んだ雪見。

——強い意志をもって、最期まで強く生き続けた智子。

——母として、本当の家族として、常に観鈴のことを想ってきた晴子。

——そして、今まで継がれてきた法術使いの想いと、自身の想いを残した往人。

その身に余る多くの、そして大きな想いを抱えた、ちっぽけな人形。

795　七瀬の不安

始めに雷雲がたちこめた。豪雨が木々へと叩きつけ、閃く怒槌が轟いた。続いて光が空を満たし、夢のように晴れ渡った青空が顔を出した。

そして現在は、沈む夕陽がその美しさを披露しようとするなり、再びの土砂降りとなっている。めまぐるしく変わる天候は、その下にいる人間の都合など、おかまいなしなのだ。
しかし、二人の不機嫌は、天候ばかりが原因ではない。
「……参ったわね」
腰に手を当てて、天を仰ぎながら呟いたのは、七瀬留美。
「とにかく、どこか雨を凌げるところを探しましょ」
首筋に手を当てながら、先に歩き始めたのは、巳間晴香。
二人は潜水艇を発見し、その悪趣味な鍵を手に入れていた。結果を報告すべく、市街地の一室に立ち戻るも、そこは無人であった。おそらく小学校へ向かったのだろうと結論し、市街地を南へ抜けたところで、死亡報告が流れた。
月代と、蝉丸。そして――初音。
耳を、疑った。自分たちが出発したとき既に離脱していた彰を除くと、現在あの小集団は耕一とマナと葉子の三人しか残っていないということになる。
あの場に何かがあった事は、間違いない。月代と蝉丸は、放送施設を発見して、そちらでアクシデントがあったのだろう。しかし初音は……どうしたのだろうか。
少なくとも、この死亡報告によって、蝉丸の放送は無駄になった。招集をかけた本人が死んでしまっては、小学校へ向かう事に不安を感じないわけがない。
「ご破算、ね」
「うん――どうしよっか？」
「北川たちぐらいしか、所在が判らないわ。とりあえずアイツが向かうと言っていた、岩山の施設とやらに行くしかないでしょうね」

雨の中を歩きながら、晴香は首筋をほぐしている。先ほどから身体の不調を訴えていた彼女に、七瀬が不安げに尋ねた。
「……晴香、具合悪いの？」
「うん……実は、相当やばかったんだけど」
「やばい？」
「幻聴、ってーの？　なんだか頭の中に、ババア言葉の小娘が住み着いた感じでさ」
「はあ？」
「〝脆いものよの〟とか、〝弱いものだ〟とか――」
「晴香……」
七瀬が心配そうに、晴香の額に手を伸ばす。
「……アタマ、大丈夫？」
「うっさいわね!!　アンタにアタマ限定で心配されると、無性に腹が立つわ！」
雨足が強くなる。夕陽を遮った分厚い雨雲と、激しい降雨が視界を狭め、二人をずぶ濡れにする。一通りいつもの口喧嘩を終えた二人の頭を冷やすのにも、十分な量の雨だ。
「……それで、今はどうなのよ？」
なんだかんだで心配している七瀬が、再び話題を引き戻す。
「うん、それがさ。さっきの放送が終わった後くらいかな？　すうっと耳鳴りが治まったのよ」
「それならいいけど……って、うわっ！」
会話を断ち切るような、激しい雨脚。あっという間に嵐のような豪雨となり、隣同士の会話すら、ままならない。
「七瀬！　早くどっかで雨宿りしよう！　さすがに、これは酷すぎるわ！」
歩く余裕すらなく、二人は走り出した。
「ね、晴香、あれ見て！」
しばらく走ったところで、七瀬が叫ぶ。何か目立つものがある。朱い構えだ。

「鳥居……？」
「神社なら、雨宿りできるでしょ」
「ふ……」
晴香はひとり、皮肉な笑いを浮かべた。神社という宗教色の濃い建造物を前に、ふと教会での出来事を思い出したからだ。
「……鳥居、ねえ。ま、十字架の神様には酷い目に会わされたから、宗旨変えも悪くないわね」
「晴香……」
七瀬が不安そうに、晴香の額に手を伸ばす。
「……アタマ、大丈夫？」
「しつっこいわね!!　アンタ、他人のアタマの心配をする前に、自分のアタマの心配をしなさいよ！」
降りしきる雨だけが。
二人の頭を冷やしていた。

796　紅い瞳

酷く落ち込んだ、湿った声で。
腐った死体のように、ずるずると。
青年は泣きながら、いつまでも後悔と自傷の言葉を繰り返していた。
見下ろす千鶴が、長い逡巡の時を経て、ようやく口を開いた。
何かを悔いるような、悲しげな表情だった。
「こころを――」
彰と千鶴の間に、ぽつりと雫が落ちる。その水滴がゆっくりと岩の隙間に吸い込まれ、彰はようやく沈黙した。
気がつけば朱色の空が、藍色の闇に変わっていた。
千鶴がゆっくりと、ひとつひとつの単語を噛み締めるように、言い聞かせる。
「こころを、強く――持ちなさい」

「……？」
「あなた、初音の敵を討つためには死んでもいい、そう思っているわね？」
「――はい」
雨が降り始めた。カーテンレールが鳴るように、さあああ、という音が千鶴達を包み込む。
「私も……そうだった。家族を護る為なら、この身はどうなってもいい――そう思ってた。妹たちの笑顔の為ならどんなことでもしてみせるって」
「……」
彰は心の闇の中から、微かな光を掘り起こす。初音の――春の日向のような、穏やかで明るい笑顔。それは余りにも眩しすぎて、辛い。
「……でもね」
「……？」
「それは、結局、自分の事しか考えていないってことなのよ」
彰はどきん、と大きく心臓を一拍させた。
かつて自分が揺らいだのは、何故か。それを――多分、そのような事を、この人は言っている。
「初音を言い訳にして、安易に自らの命を投げ出そうとするのは止めなさない。それは、邪念でしかないわ」
彰は、息を飲む。
初音の為になら全部捨てて良いと思っている。自分の命すら捨てるつもりだった。その覚悟を、決意を――この人は邪念というのか。
「……私も同じ過ちを犯して失敗したわ」
二人は降りしきる水幕をものともせず、睨みあった。
「死ぬ為に戦うのと、戦った結果死ぬのとは、全く意味が異なるのよ」
言っている理屈はわかる。けれど、それを認めることはできない。
「あなた自身が生きる為、あなたの未来の為に戦いなさい――初音はそう望んでいる筈よ」

「そんなこと――！」

彰に未来なんて無い――そう信じている。初音を殺した自分が、のうのうと生き残るなんてそんな事が許される筈がない。今の彰が死んでいない理由なんて、神奈への復讐しかない。それなのに――

「それでも、生きなさい。それが――初音を殺したあなたの義務よ」

千鶴は彰に安易な死という救済を、甘えを許さない。誰よりも初音の事がわかると自負しているから、その初音を自死の理由にするのは許せない。

彼女は刀を抜き放ち、彰の目の前に翳す。

闇夜に光る刃。

神奈を封印する剣。

最強の鬼札（ジョーカー）。

「生きる気が無いなら、どこへなりと行って、一人で勝手に死になさい」

千鶴の表情に怒りはなく。

悲しみもなく。

ただ、無表情のまま。

雨が強くなる。

滝のような、雨。

彰の視界に明瞭に映るのは、目の前の刀だけ。

そして、その奥から睨みつけてくる二つの瞳。

鬼の瞳。紅い瞳。

彰は、その瞳を睨み返す。

「――わかりました」

返事と同時に彰は目の前の刀を掴んだ。

握りしめた手の内から、水滴に混じって紅い血が滴る。

「僕は死にません。神奈を殺した後に僕が生きていたら、ですけど……」

真っ直ぐに千鶴を見据える彰。

その返答は彼女を満足させるものだった。青年の瞳には未だ危うさがあったが、取りあえずのところとしては十分だろう。

「生きる為に戦って……その中で、神奈を倒すのに

あなたの死が必要となるのなら――」
目だけを光らせて。
「私が神奈を――あなたを、殺します」
そう、言い切った。
それは、千鶴自身の誓いでもあった。
「そして、神奈を打倒するに私の死が必要なら、あなたが私ごと神奈を殺して」
次の瞬間に殺しあいが始まってもおかしくないほどの緊張感で二人は対峙する。
「……わかりました」
そう言い切った彰の瞳は――
千鶴と同じ血の紅だった。

――しかし、この二人は知らない。

その誓いの強さこそが、神奈を遠ざけることを。
そして、彰の中に潜む鬼すら押しこめてしまうことを。

797　そのこころは

近づいていた光点――北川潤がこの施設内に入ったのを確認した。
ワシはメインモニターを入り口近くの監視カメラからの映像に切り替えた。
そこでワシは信じられない物を目にした！
「な、なんじゃこりゃーーーーーー!!」
「ふ、ふみゅ!?」
「みゅ!?」
どうやら一人と思われていた侵入者が実は二人だったのじゃ。
しかも、北川の坊主の隣にいるのは芹香嬢ちゃんに間違いなかった。
詠美嬢ちゃん達もそのことに気付いたらしい。
「おい、詠美さん。あれは何人に見える？」
「ふみゅ？　どうみてもふたりだけど」

やはり嬢ちゃんにもそう見えるか。
ということはワシの見間違いでは無い。
っちゅーことは……幽霊さん、か。
やはり成仏できん霊がうようよしてるんじゃなぁ。
ワシが感慨深げに考えている横で詠美が呑気な声をあげた。
「な～んだ、この人もあたしたちと同じだったんだ」
うむうむ、嬢ちゃん達と同じだったんじゃな。
「てっきり、この北川って人が芹香さんを殺したのかと思ったけど爆弾を吐いただけだったのね」
そうそう、爆弾を吐いただけ……。
「何ですとーーーー!!」
「ふみゅ!?　なによさっきから大きな声出して～」
「おい！　嬢ちゃん！　今何と言いましたか!?」
「だ、だから、爆弾を吐いただけだって」
「……え～と、するってーと、詠美も繭も死んでたんじゃなくて爆弾を体外に出しただけじゃと？」
「そうよ」
「な～んじゃ、ワシはてっきり」
詠美嬢ちゃん達が幽霊だと思っておった――、とは言えんな。
「てっきり何よ？」
「いや、何でもない」
「ふみゅ～ん、ヘンなの～」
「お嬢ちゃんにだけは言われたくないわ」
「どういう意味よ～！」
「言葉通りじゃ」
そう言えば爆弾の操作施設が無くなっておったの。
普通だったら爆弾体外除去の可能性を考えつくはずじゃが。
ふぅ、全く柔軟な思考というのも考え物じゃな。
「ん？」
ワシが思考にふけっている間に詠美嬢ちゃんがドアの所に移動していた。
「どうしたんじゃ？　詠美嬢。トイレか？」

「違うわよ！」
「それじゃどこに行く気じゃ？」
「何言ってるのよ。あの二人を迎えにいくのよ」
「はい？」
　ワシは信じられない言葉を聞いた。
「あ～、お嬢ちゃん。どうやら集音マイクの調子がおかしいようじゃ。もう一度言ってくれんか」
「だから～、あの二人を迎えに行くって言ってるのよ。早くＣＤそろえないといけないでしょ」
　そう言って詠美が部屋から出ていこうとした。
「ちょっと待った～！」
「もう、何よ！　さっきからうるさいわね～！」
「何を言うとるんじゃ！　外にいる坊主が安全な奴じゃという保証も無しに出ていってどうする！」
　思わず声を荒らげてしまった。
「アンタこそ何言ってるのよ。北川って奴は芹香さんを殺してないんでしょ？　だったら安全じゃないのよ」
　呆れたような口調で詠美が答える。
　ワシは詠美嬢のその言葉に絶句してしまった。
「あ」
「あ？」
「阿呆か、お前は！」
「ふ、ふみゅ～ん！　誰がアホよ！」
「お前に決まっとるじゃろうが！　いい加減にそのお気楽思考をやめんかい！」
「ふみゅ～ん！　誰がお気楽よ！」
「お嬢！　物事を簡単に考えるんじゃない！」
「バカにして～！」
「黙って聞け！　いいか？　今この場でお嬢を守ってくれる人は一人もおらんのじゃぞ」
「ふ、ふみゅ～ん」
「これまではお嬢は誰かに守られて生き残ってきたのじゃろう。けど今はお嬢が繭達を守るべき立場じゃろうが！」
「……」

「詠美嬢の軽率な行動はお嬢だけじゃなく繭まで危険にさらすことになるんじゃぞ！」
ワシはそこまで言ってから詠美が涙を浮かべているのに気付いた。
「……あ〜、スマン、詠美。言い過ぎた」
「……」
「でもな、詠美。お前の行動はお前の命だけじゃなく他の人にまで影響すると言うことを考えて行動せんといかんぞ」
詠美がワシに背を向け台所の方に走っていった。
「おい、ロボット」
「は、はい〜」
ワシはHM―12に声をかけた。
「スマンがお前、詠美嬢を慰めてきてくれんか。ワシには無理じゃ」
「は、はい。分かりました〜」
ロボットはすぐさま詠美の後を追っていった。
ハァ、ワシは何をしとるんじゃろうなぁ。

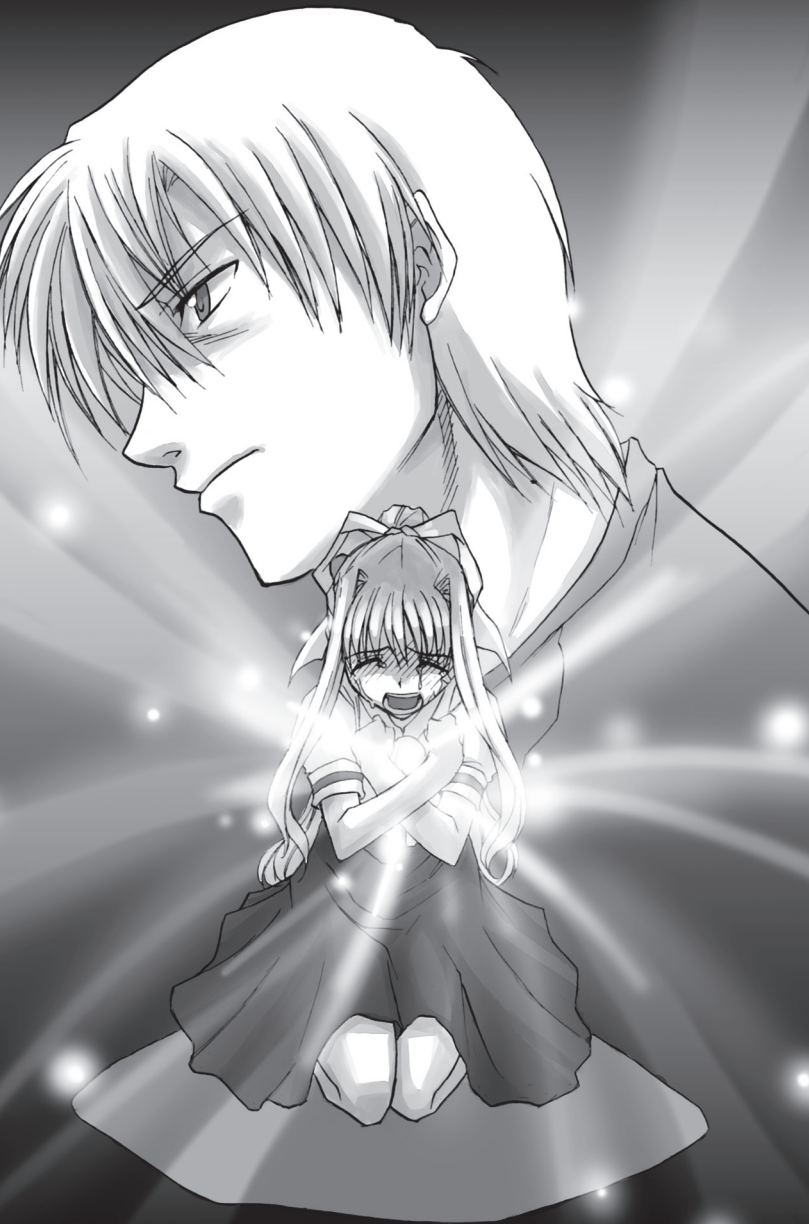
ふとそんなことを考える。
どう考えてもありゃ管理者としての行動では無いのう。
参加者が殺し合おうがどうしようがワシには関係ない。
っちゅーか殺し合わせないといけないのに、止めてどうするんじゃ！
こりゃ絶対どっかおかしいぞ。
やっぱりバグだな、こりゃ。
だ〜！　もう考えるのやめ！
今はひとまず目の前の事に集中、集中。
施設内のカメラからの映像で北川達の居場所を映し出す。
ふむ、どうやら施設内の見取り図があるところにいるようじゃな。
っちゅーことはすぐにここまで来るじゃろうな。
さ〜て、どうしたもんかの……。
まぁ、ワシはあくまで管理者じゃから、参加者に

は手を出せないしなぁ。
ひとまず詠美嬢の判断待ちかね。
どうなることやら。
ま、ワシは一応忠告したし、後はどう判断しようとそれは詠美の自由だしな。
好きにさせるさ。

798　少女の決意

大切な人達の死を前にして立ち尽くす観鈴。まるで、一緒に死んだのかと思うくらいじっと動かない。
そんな彼女の時を動かす出来事は唐突に起こった。
『観鈴……』
その声と共に、観鈴に抱きしめられていた人形が、再び光り出す。
『悲しむな……、お前のそんな顔を見るために、俺はお前を守ったんじゃない……』
そう、あまりに突然。

観鈴の耳に入ってきたのは、愛しい人の声。
「ゆ……往人さん！」
『ああ、そうだ、俺だ……』
やがて、雨で良く見えない観鈴の視界に、うっすらと人の姿が現れる。
「良かった……生きてたんだね……」
雨でよく見えないが、あの見慣れた服装は確かに往人そのものだ。
ああ、よかった。そう思った矢先に、
『いや――俺は、死んだ』
冷たい絶望を突きつけられる。
『すまない、俺はもうお前を護ってやれない……』
そんな過酷な現実を受け入れたくなくて、
「いや！　いやっ！　いやだぁぁぁ！」
観鈴は癇癪を起こして、拒絶する。
「お願い！　行かないでよ、往人さん！　お母さんも死んじゃって、往人さんまでいなくなったらわたし、何もできなくなっちゃうよ！　わたしだけ生き

ていたって、ちっとも嬉しくないよ！」
感情を吐き出す観鈴。
往人はただ無言で受け止める。
「どうして！　ねぇ！　なんで何も答えてくれないの！　ねぇ！　往人さん！　お願いだからっ――」
観鈴の目から大粒の涙が、次々に溢れて落ちる。
「行かないでよぉぉぉぉぉぉ！」
泣き崩れた観鈴に一瞬手を伸ばそうとする往人。
だが、思い留まる。今は彼女の悲しみに寄り添う余裕は無い。いつ命を落としてもおかしくない、そんな過酷な状況に観鈴はいる。だから、
『――甘えるな』
パシン！
ふいに、観鈴は自分の頬に軽い痛みを感じた。
目の前には、悲しい顔をした自分の大好きな人。
『俺を困らせるんじゃない……いいか？　よく聞け』
まるで子供を諭すかのように、ゆっくりと往人が話す。
『俺は、いつもおまえの側にいる、
お前が、
泣いている時も、
嬉しい時も、
悲しい時も、
寂しい時も、
そして、笑っている時も、
ずっと、ずっと一緒なんだ。
俺は、お前と一緒なんだ』
そう言いながら、往人が二人の間に落ちていた人形を拾い上げ、観鈴に手渡す。
『だから悲しい顔を、見せないでくれ。それが、俺のたったひとつの願いなんだ。しっかり前を向いて、生きてくれ……』
それは、悲痛なまでの彼の願い。
死してなお、観鈴を助けるために、彼が望んだ、願い。
「……」

それは、彼女に今、確かに伝わり――
「往人さん……わかったよ……」
今度は観鈴が、往人に微笑む。
「わたし……がんばる！　往人さんの言うように、しっかり前を向いて、一生懸命生きる！」
『そうだ……それでいい……。大丈夫だ……お前は『強い子』なんだからな……』
「うん、観鈴ちん、強い子。にはは」

――でも、どうしてだろう。涙が止まらないや。
笑顔の観鈴の瞳から、流れ落ちる涙。
観鈴の意識が混濁していく。

――でも、最後に。もう一言だけ。
「ばいばい……往人さん」
『ああ……、またな……、観鈴』

最後の往人の言葉が聞こえた時、
観鈴の意識は、ゆっくりと闇に落ちていった。

「う……うん……」
降り続く雨の中、観鈴が目を開ける。
(今のは……夢？)
なぜだろう、記憶がはっきりとしない。
自分が夢ではないと覚えているのは人形が光だした所までだ。
(夢でも……いい！)
例え夢でも、往人は自分にはっきりと言ってくれたのだ。
生きて、欲しいと。
そして、空を見上げ、いまだ降り続ける雨を浴びながら、
「往人さん。わたし、がんばる！　絶対に生き残ってみせるから！　だから……ずっと、わたしを見守っていてね」

決意をしっかりと言葉に出して叫んだ時、なぜか本当に、往人が見ててくれるような気が、観鈴にはした。
(まずは……北川さんに会おう、かな？　確か脱出方法を考えてるって言ってたよね)
観鈴はこの島の生き残りで唯一面識のある北川を頼る事にした。彼女一人では生き残るのが難しいだろうということは、彼女自身自覚していた。
(絶対に生き残ろう。それが、命を掛けてわたしを守ってくれた往人さんの願いだから)
観鈴は足元にあった散弾銃（ベネリM３ショットガン）を背負った。ずっしりとした重みが肩に掛かる。硝煙の匂いがする、多分人を殺した銃。
(自分のことは自分で護らないと……そうしなきゃ、往人さんとの約束を守れない)
決意と共に、観鈴は歩き出す。
(……でも、わたしにできるのかな？)
自分と他人を天秤に掛ける命の選択を。

799　迷い、選択、その結果

神尾観鈴は、北川が向かったという施設に向かうべく、先ほどまで死闘が繰り広げられていたとは思えないほど静かな――雨音だけは嫌になるほどうるさかったが――静かな、この神社を出立しようとしていた。
往人が残したレーダーを確認する。そこで、観鈴は重大な事実に気付いた。
二つの、光点。
レーダーを見る限り、自分のすぐ近くに二つの光点がある。
しかも、その二つの光点は、自分の元へと近付いてきている。
(どうしよう……)
彼女は迷った。
一刻も早くここを立ち去り、北川の向かった施設

を目指すべきか？
　あるいは、もしかしたらこの二人は北川のように脱出を目指して動いている人達なのかも知れない。この時点になってまでなおゲームに乗っているのだとすれば、二人一組で行動するとは思えないからだ。だとすれば、彼らに事情を説明し、助力を仰ぐべきか？
　だが、もし。
　もしこの二人が他の者を容赦なく殺す『敵』であったとすれば？
　彼女は誓っていた。必ず生き残ると。生き残るために『敵』は撃たねばならない。そうしなければ、往人との約束を果たすことができない。
　幸いにと言うべきか、武装は充実している。撃退できる可能性は十分あるように思えた——あくまで撃てたら、の話ではあるが。
　本当なら逃げるのが一番だろう。けど、少し気付くのが遅すぎた。今にも目の前に現れそうなくらい。できることなら信じたい、疑いたくない。
　けど、命を投げ出すことは、絶対にできない。
（観鈴ちん、ぴんち……）
　雨の中、観鈴はレーダーを見つめたまま固まっていた。

800　カウントダウン

　フランクは銃も持たずに森をふらふらしていた。
　今思うと以前がおかしかったように感じる。
　現在この島で生き残っている人間を皆殺しにして少年を殺す。このことしか頭に浮かばない今の方がずっと頭がすっきりしていて心地良い。
　ふらふらと、さ迷っていると前方の木々の間に人影がふたつ。
　ふふ、祐介。お前が呼び寄せてくれたんだね。
　こいつらがお前に捧げる最初の生け贄だよ。

島の連中を皆殺しにして祐介の墓標を建ててあげるよ。
電波を発動させせようと、精神を集中させる。
「ふひゃひゃひゃひゃひゃ!! 電波、電波、電波ぁ！」
叫び声を上げながら精神を集中させせ無駄な行為を繰り返す。最初から電波を会得などしていないのだから明らかに無駄だ。
くっくっく、奴らが苦しんでいるのが手に取るように分かる。
止めろ？ 止めてなんぞやらんぞ！ 祐介の苦しみはその程度では無かったんだからな。
フランクの脳にはその瞳に映っているマナ達の姿とは別に、耕一とマナが頭を押さえて苦しんでいるのが見えた。
「ひゃあははははぁぁ!!」
哄笑が辺りに響く。
頭の中でマナ達が倒れていく。
「死ね！ もう死んでしまえ！」
「祐介、仇を取ったよ。喜んでくれ」
妄想の中の祐介に声をかける。
フランクは死体を確認し、長瀬祐介の墓標を作るために近寄っていく。
こちらに攻撃してくる様子は感じられなかったが明らかにおかしな様子の人影に二人は近寄れなかった。が、顔が確認できるところまで近付いてきたフランクを見てマナが駆け寄ろうとする。だが、耕一はマナを抱きとめる。
「マナちゃん危ないよ。俺達の敵かもしれないだろ？ それに明らかに様子がおかしいよ」
マナは耕一を見上げて語りかける。

「前に従姉妹のお姉ちゃんと一緒に行った喫茶店のおじさんで知ってる人なの。助けてあげたいよ。あんな人じゃなかった。何かあったんだと思う」
言ったマナは耕一の手を振り払ってフランクの方へ駆けていく。それを見た耕一も慌ててそれを追いかける。

フランクの瞳にマナ達の姿が映る。
脳が彼女達の姿を認識した。
「近寄るなぁ！　お前等は死んだはずだぁ！　俺は、俺は祐介の仇を取るまで死ぬわけにはいかないんだぁ」
フランクは開いていないままの鋏を振り回して叫ぶ。
近寄ってきたマナと耕一はフランクを静止しようとしたがフランクは止まらない。
マナ達はフランクを止めるために身体を掴もうと手を伸ばしたが、振り回した鋏に何箇所か切り傷をつけられてしまう。
その鋏は護身用にとフランクが銃を捨てて手にした、太田香奈子（十番）の咽に刺さっていた鋏だ。
――約三十分で死んでしまう毒付きの。
フランクは気付いていない。自分が目的をすでに達していることを。
フランクはしばらく鋏を振りまわしてから走り去ってしまった。
マナと耕一は追い掛けることもせずにその姿を見送る。
追いかけようとしたマナの肩を耕一が掴んで引き止めているためだ。
「今は梓を探すことが先決だ。あの人のことも気になるけどまずは梓だ。あいつ様子が変だったし」
耕一はマナにそう語り掛けてマナの手を掴んで走り出した。

耕一の手の暖かさにマナは思わずどきりとする。
このまま梓さんが見つからなければいいな、そんなことまで考える。
自分達の命があと約三十分しか無いことにも気付かずに。

801 泣くということ

二人が足早に鳥居をくぐったころには、雨足が弱まり始めていた。この程度の降りならば、再び転進し施設に向かってしまうところなのだが——
——死体を、見つけた。
「これ……葉子さん、だね」
「そんな……どうして……?」
どうして死んでしまったのか。そして、どうしてこんな所に居るのか。
「晴香、あっちにも!」
「い——郁未っ!!　それに、コイツは……」
こいつは、あの少年だ。
良祐。あかり、智子、マルチ。
そして由依、葉子さん、郁未、少年。
次々と、次々と死んでいく。
「いったい、誰がっ!?」
郁未の傍らに膝をつき、地面を叩く。十字架も、鳥居も、晴香を祝福してはくれなかった。
もともと、期待などしてはいなかった。だから恨む気なんか、さらさら無い。
でも、どうして。
どうしてここで——みんな死んでしまったのだろう。
考える。
考えたところで——答なんか、出なかった。
一滴の、涙すら出ないように。
「ねえ、七瀬」

「――なあに？」
郁未の顔を見たまま、七瀬の名を呼ぶと、たっぷり空白の間をあけて返事があった。
微かに口元を緩めて、私は尋ねる。
「アンタは卒業式の時、泣いたクチ？」
話題が飛躍したせいか、七瀬の間は更に大きかった。
「――なによ、いきなり」
「……アタシは泣いたこと、ないわ」
七瀬は少しばかり驚きの表情を見せた。私が世迷い言を尋ねていることに気付いたからだろう。そして、少しだけ考え込む仕草を見せて、やがて、微笑みながら答えた。
「――そう。いいんじゃない、別に」
私は、かつて泣かなかった。涙と感動の渦の外で、波立つ感情を、心の奥底で噛み締めていた。揺れる心の振り幅が小さかったのか、それとも単に照れ臭かったのか。
ここに来たばかりの私は、涙を流すことに疑問などなかった。道を外した良祐を、何も分からぬまま失ったのが悔しかったのか、それとも悲しかったのか。
だが、今は違う。前を見ている。未来の彼方を見通すために、私は涙を流さない。
いいのか。本当にそれで、いいのか。そもそも、本当にそうなのか。七瀬に疑問をぶつける。
「いい、のかな？」
「うん――別に泣くことだけが、悲しむことって訳じゃないでしょ？」
今度は私が考え込む番だった。想定していた答えとは全く違う、とてもシンプルで明快な答え。七瀬の言葉を頭の中で反芻して、その言葉が自分にしっくりくるかどうか、ゆっくりと考える。
「うん――そう、だね」
そうだ、いいんだ、それでいい。むしろ私は、こんな答えをこそ、待っていたのかも知れない。

「そうだよ」
間髪入れずに、七瀬が相槌を打つ。
「そっか……」
「……うん」
もう一度相槌を打つと、それきり七瀬は黙って、どこかへ歩き始めた。多分、周辺を見回りにいったのだろう。

しばらく、郁未の顔を眺めていた。こんな島で望まない死を押しつけられたというのに、その表情はどこか満足そうにも見えて——ふと、視界が滲んだ。
(——あ)
雨のせいじゃない。
目を瞑る。今は駄目だ。鼻を啜る。まだ……駄目だ。目の奥に力を込めて、ゆっくりと瞼を開く。視界を曇らせてはいけない。こんなところで泣いてる場合じゃ、ない。
「さよなら」

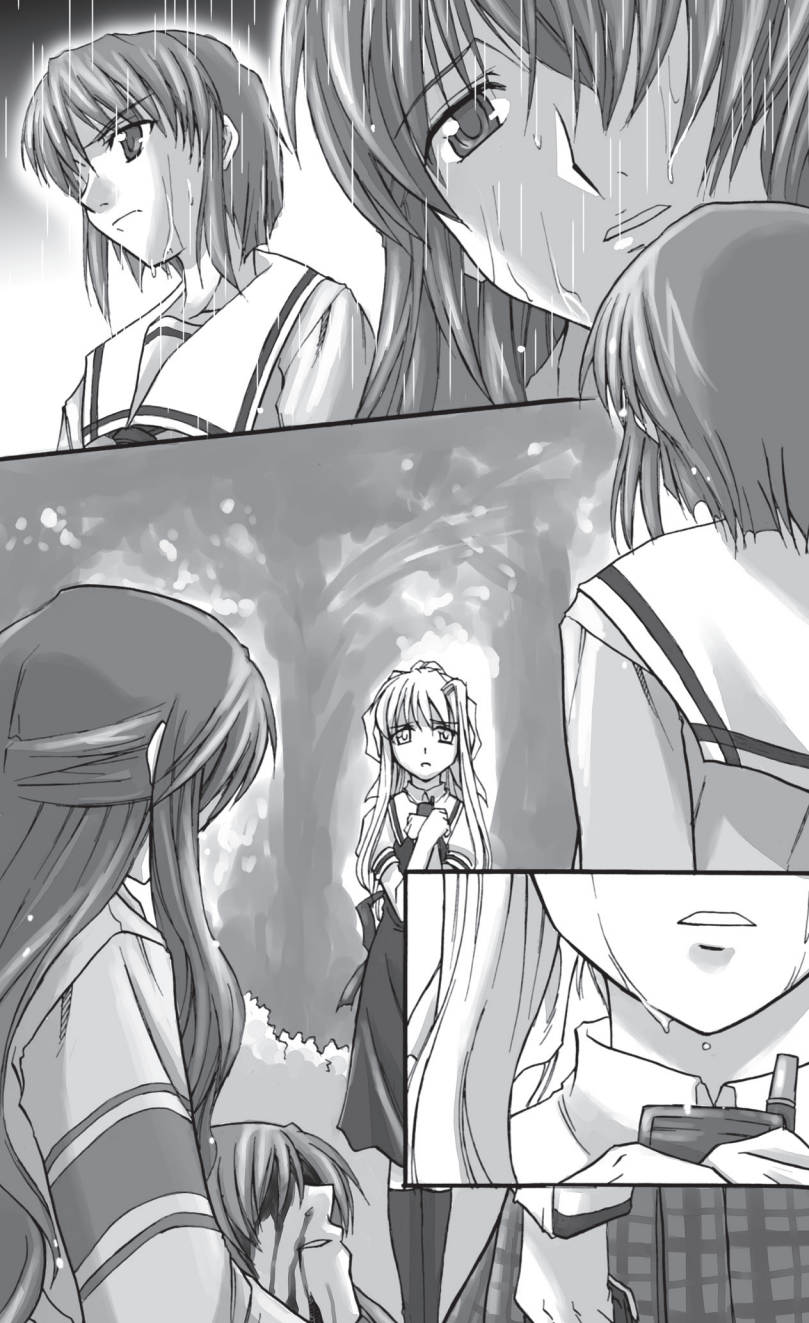
短く祈って、私は自分の心と折り合いをつけた。
郁未の死体を前に、考えこむように座る私をそのままにして、七瀬は周囲を見て回っていた。一周して戻っても、まだ同じ体勢で、私は沈黙していた。
「……晴香。あっちにも、死体があったわ。刺殺だったり、銃殺だったり。使われた銃も、同じものとは思えないわ」
七瀬の声に応えて、死体を確認するために、立ち上がる。腹部にごっそりと被弾した、知らない女性の死体があった。拳銃弾で、こんなふうになるとは思えないから、七瀬の意見は正しいだろう。
「……それにしては、武器がひとつも無いのね」
「葉子さんの槍の破片はあったけど……銃は一つも無いわ」
ふと、七瀬の持っている布切れに目をやる。
「ねえ七瀬、その汚いのは何?」
「ん? ああ、これ——見覚え、ない?」

広げると、それは黒のハイネックだった。そしてズボン。
「……それって……」
「うん、大きさといい、色といい、国崎さんの服に似てない？」
「多分、そうだよね。
やっぱり、何もないの？」
「ポケットにねじ込んでた、人形すらないわ。例のレーダーもね」
そこまで言って、二人で顔を見合わせる。
「じゃあ、なによ？　国崎さんが全裸で周辺の武器をかき集め、人形だけ持っていったとでも？」
「……いくら北川と仲がいいからって、それはないと思う。それに、この穴、見て」
「――弾の跡？　血が、ついてるわね……」
この位置はまずい。付いている血の量も。もし、彼がこの服を着ていたとしたら……死んでいる可能性が高いだろう。

すると、身ぐるみはがされた国崎さんの死体が、どこか近くにあるのだろうか？　しかし、何故そんなことを……？
解らないことが、多すぎる。
二人は、少し離れたところも探すことにした。
さほど時間の経たぬうちに、茂みの中に異変を発見する。
（……晴香……あれ、見て）
（ん？　なあに？）
七瀬の言うがままに視線を移すと、人影と何かの光が、ぼんやりと見えた。
（……あの光。国崎さんのレーダーのものじゃないかな？）
（じゃあ私たちの位置、向こうからはバレバレじゃない）
今更ながら、体勢を低くしてみる。声を小さくしているのも、かなり無意味っぽいかも。

（……なんで、反応ないのかしら？）
（会話を聞いて迷っている、ってとこじゃない？　少なくとも、郁未や国崎さんの敵じゃないっぽいわね……）
もちろん私たちだと判っていても顔を出さない以上、国崎さんではあり得ない。

そこでピン、とくる。
（国崎さん、『観鈴たち』とか言ってなかった？）
（うん、『金髪ポニーテールの女の子と関西弁のおばさん』だっけ。おばさんは、さっきの人、かな？）
腹部に被弾した女性は、それなりの年上に見えた。隠れているのが、国崎さんが探していた人達なら、ここに居ても不思議は無い。
意思の統一を果たし、頷き合うと、二人は各々大きく孤を描いて、光の発信源を挟み込んだ。急激な状況の悪化に、隠れた人影が、がさりと揺れて動揺の物音を立てる。

だが、もう遅い。二人で銃を構え、立ち上がる。
「……と、いうわけで」
「何考えてんだか解んないけど、手を上げて出てきて頂戴。観鈴さんだか、もう一人だかなら、悪いようにはしないわよ」
手を上げて出てきたのは、同年代の女の子だった。立ち上がりながら、私達の推理に裏づけをしてくれる。
「神尾――観鈴、です」
ちょっと面食らいつつ、武装解除させる。驚いたのは、彼女が泣いていたからだ。そして涙を流したまま、ぽつりと言った。
「――泣いても、いいと思います」
「「…………」」
あまりに場違いな発言。むしろ私たちのほうが、固まってしまう。
そんな驚きをよそに、全ての（呆れるほどたくさんの）武器を落とすと、彼女は言葉を繋げた。

「辛い時に泣けないのは、悲しい事だと思うから」
心配そうに、七瀬が表情を窺っている。
大丈夫、キレやしない。落ち着いて、ゆっくりと、私は答えた。
「うん——そうだね」
さっきと似たような返事。
でも、もう立ち止まりはしない。
「せっかくだから、アンタがさ。私のぶんも——泣いてくれる?」
彼女の涙の筋が、綺麗に見えた。
……そういえば雨が、止んでいる。
(私は、今まで泣かなかったから。だから、今だけ泣くわけにはいかないよ)
夕陽の残り日が、僅かに照らしつけていた。

802　沸き上がる記憶

それは、突然始った。
「ぁぐっ!　あああああああああぁぁぁっ……!!」
突如頭を襲う原因不明の頭痛に、思わずその場に倒れこむ。
「なんだ?　おいっ!!　どうした、そらっ!?」
「ねぇ?　そら君、大丈夫?」
周囲の声は既に届いていない。
かわりに、自分以外の声が頭の中で乱反射している。
心が、心に蝕まれていく感じ。
頭の中に突如生まれた『それ』は人の心を引裂きながらどんどん膨れ上がっていく。
「うあああああぁぁぁぁぁっ……」
やがて痛みは限界を超え、今度は意識が妙にハッキリとしてくる。

混乱した記憶の断片が、
少しずつ形になっていく。

――ココハ……？　――私ハ……？

――何ヲ……？　――イツ……？

――シマ……――クロ……

――ショウジョ……――ナカマ……

――ジュウセイ……――アメ……

――カミナリ……――……………………

……………………ズットイッショ……

一つのキーワードをきっかけに、
頭にかかった霧が収束していく

……一緒？　……誰ト？　……何処デ？

……頭ガイタい……思イ出セない……

……思イ出サナくチャ　いケないのに……

……一緒ニ　いなくちゃ　イケないのに……

……行カナきゃ……行かなければ…………

それは、やがて一つの使命感となって、
彼の心を塗り潰していった。

「行かないと……」
　呟きながら起き上がる。
「行くって……おいっ！　どこへ行くんだよっ⁉
おいっ‼　そら！」
　はっきりしない意識のまま、それでも歩き出そうとする。
「……どこに行く気か知らないけど……どうやってここから出るつもり？」
　その言葉にハッとし、正面の「それ」を正視する。
　急速に意識が覚醒していくと同時に全身の血の気が引いていく。
　それ――鋼鉄の扉が、ここからの唯一の出口を固く塞いでいた。
　扉を開閉するためのスイッチがあるにはあるが、ご丁寧にもカバー付きの上にパスワードまで掛けられているらしい。
　カバーをどうにかする自信も無ければ、後の人達が止めに来る前にパスワードを解除する自信も無い。
　ほぼ確実に阻止されて、当然警戒されるだろう。
　そうしたら暫くここを出るチャンスなんかこないにちがいない。
「あぁ……行かなきゃ――行かなきゃいけないのにっ！」
「さっきから、そんな調子で一体どこへ行こうって言うんだよ？」
「…………分らない」
「ハ？」
「分からないけど……思い出せないけど……それでも、行かなくてはいけない事は……確かなんです」
「……………」
「大切な事なのに……忘れてはいけないハズなのに……なのに、何故……」
（……ずっと一緒……）
　頭の隅にこびりついた言葉。

何時言ったのかも、誰に向けて言ったのかも分からない。
ましてや、『誰が』言ったのかも……。
なのにそれが、命に代えても守らなければならない盟約のように重く心にのしかかるのだ。
「くっ……」
思い出せない苛立ちか、何もできない無力さからか、
そう一言呟いてそのまま地面にへたり込んでしまった。
「……」
「……」
——ピッ……ピッ……
「……!?」
頭上から聞こえる電子音に頭を上げる。
そこには、スイッチパネルを操作する少女の姿……。
「お、お、お嬢ちゃんっ！　何をやっておるんじゃっ!?」
背後からの叫び声を気にすることなく少女は全てのパスワードを入力し、そして……。
——ピッ！　……ウィィィイン！
扉が……開いた。
「あ……あなた……」
彼女に、私達の言葉が分るはずが無い。
「みゅう」
私にも、今の彼女の言葉はわからない……けれど……それは確かに……。
「いってらっしゃい」
……そう聞こえたのだ。
「……ありがとう……そして、さようなら」
礼を言い、正面へと向き直る。
決心はとうの昔についている。
今まで一緒に戦ってきたみんなには悪いけど、私は……。

「じゃあ、行きましょうか」
「そいつはトロいからな、運んでってやれよ」
「失礼ね。……でも、まあ、お願いするわね」
私は、予想外の言葉にあっけに取られていた。
突然わけのわからない事を言いだして、目的地も告げずに飛び出そうとする私に。
二人はさも当然のごとくついてくると言っているのだ。
「何で……二人とも……？　もうここには戻れないかもしれないのに……」
それは、本当だ。
『一緒に』……おそらくこれは一生一緒にいるという事だろう。
そうなれば二度とここには戻ってこないかもしれない。
「あら、私をこんなお人よしにしたのはあなたなのよ？」
「今更細かい事言いっこなしだ。それに……のんびりしている時間も無いようだぜ？」
そういって台所の入口を指す。
そこには丁度、緑の髪の少女が何か言いながらこちらへ向かってくるところだった。
おそらく扉を閉めるつもりだろう。
選択の余地はないようだ。
いや、初めから答えは決まっていたのかもしれない。
「……分かったよ」
みんなして頷きあう。
少女の指がスイッチに向かって延びる。
「行こうっ‼」
――ピッ！　ウィィ……
閉まり始めた扉をすんでの所ですり抜ける。
もう、後戻りはできない。
(行こう、再び外の世界へ。行こう！　一緒にいると誓ったあの面影の下へ‼)

803　ヴァンパイア

「くそっ、どこだ梓」
　降りしきる雨の中、私は耕一さんと走っていた。
あのおじさん――昔、従姉妹といっしょに行った喫茶店のマスターをしていたおじさん――の襲撃。
　それの相手に手間取ってしまい、梓さんとの距離はかなり離れてしまっている。
　いやそれだけじゃない……梓さんに追いつきたくない、私は耕一さんと一緒にいたい……。
　誰にも邪魔されずに……その気持ちが、私の足取りを重くさせていた。
「……っ？　マナちゃん、大丈夫か？」
　耕一さんが私の足取りの重さに気付き、そう声をかけてくれた。
　やだな、耕一さん。これは演技ですよ、はい。梓さんに追いつかないための演技です。
　そんなのに気付かないなんて耕一さんもまだまだ人間観察力が弱いですね。
「マナちゃんっ？　おいっ!!」
　やだな、だから演技ですってば。でも結構名演技。演技だけなら従姉妹の由綺お姉ちゃんにも負けないかもね。動悸、息切れ、発熱……どれをとっても一級品。あの時読んだ本の症状通り。
　えっとあれ何の本だっけ？　確か……思い出した、あの本は確か……。

――人体における有毒物摂取時の諸症状――

「マナちゃん!!」
　気が付くと私は耕一さんに抱きかかえられていた。一瞬意識を失ってたらしい。
　なんかひどく息が荒い。体も奇妙な火照りをもち、思うように力が入らなかった。ふと奇妙にうずく自分の手に目をやると、先程鋏で傷つけられたところ

が黒ずんでいる。なるほどね。
私は直感的に理解した。さっきの鋏に毒でも塗ってありましたか。まったく用意周到なことで。
「マナちゃん？　よかった、気がついたか」
文字通り心の底からって感じで耕一さんが安堵の表情をする。ふう、まったく。……そんな表情をされるとこっちの覚悟が揺らぐじゃないですか。だから私は、彼の口から次の言葉が出る前に言った。
「耕一さん、早く梓さんを追って」

――まあ私はやっぱし、どこか小生意気なところはあったと思う。別にそう思われてもかまわないと思ってたし。よく勉強が出来るうんぬんと嫉まれたりもしたが、それは私がちょっとばかし勉強に興味を持っていただけだし、それに十分努力もしてきたつもりだ、多分。

この島へ来て、あの人――霧島聖先生――に出会った。「私は医者だ。だから殺すのではなく治す」
……はじめ、ここでそんな事を言うなんてなんて馬鹿げているんだと思った。ここは殺し合いをする島。でも彼女はそう言い、最後までその言葉に従って行動していた。私はいつしか彼女に感化されていた。彼女――霧島先生――は本当の意味でも強い人だったんだと思う。

「そんなことはない、私も弱い人間だよ……」

ふふっ、そうですね。先生だったらきっと、そうおっしゃりますね。でも私は、……先生の遺志を継ぐと言っておきながら、自分の嫉妬で、自分の都合で人を縛っています。ごめんなさい……私は、弱い人間です。

「ふむ、だがなマナ君。はじめから強い人間なんて

どこにもいない。人は自分の弱さを認めたとき、初めて強い人間になれるのだよ……」

確か毒の症状の一つに、幻覚症状があったのを覚えていた。なるほど、今のがそうなんだ。最後の先生が言ったフレーズなんて、前の日曜に読んだ小説の一文そのまんまじゃない。でも、霧島先生なら言いそうだな。
「マナちゃん……」
耕一さんが、まるで鳩が豆鉄砲をくらったかのような表情をしていた。そうか、この表情ってずっとどんなのか疑問だったんだけど、今、その長年の謎が解決したな。
「耕一さん、梓さんを追って……。梓さん、初音ちゃんが死んで混乱している。でも耕一さんだったら彼女の心を取り戻せるはず」
「………」
「私ちょっと疲れちゃったから、もう走れそうにないから……ちょっと、ここで休んでるよ」
「………」
「早く、今だったらまだ間に合う。梓さんを止めて、生き残ったみんなと合流して。そしてみんなでこの島を出よう。みんなで元の生活に戻ろう。ねっ……」
これは体に入った毒のおかげだろう。私の中からさっきまでのもやもやした感情が消えていた。まさに毒をもって毒を制す。
まあ多分、死に瀕して余計な感情をもつ余裕がなくなっただけなんだろうけど。
でも、最後に残った感情が人を救いたい――多分、霧島聖先生と同じ――感情で、私は少し嬉しかった。
「わかった」
しばしの沈黙の後、聞こえていたのは悲しみと決意ともう一つが絶妙にブレンドされた彼の声だった。

多分わかっていたんだろう……私がもう長くないことに。
「あっ、でも一つだけ……」
ああ、聖先生ごめんなさい。私、最後にもう一つだけ感情残ってました。まだまだ精進が足りないようです。
　でもいいですよね先生？　最後くらい……。
「私、ちゃんと迎えにきてほしいから……後で迎えにきてほしいから、そのっ……約束として……その証としてキスして……もらえます……？」
　なんのかんのいっても、私はそれにちょっと憧れていた。だから……。

――盟約

――永遠の盟約だよ

　彼は少し照れくさそうな表情をして、うなずいてくれた。

　重なりあう二人の唇。
　それは、もしかするとただの哀れみだったのかもしれない。ただの自己満足だったのかもしれない。
　でも、やっておきたかった。生きているうちに出来ることの全てを。後悔は、したくなかったから。

　不思議と意識がはっきりしていた。死ぬ直前って案外こんなものなのかな？　まだ時間あるみたい。すこし悪戯心が湧きあがる。えーい、舌いれちゃえ。
「……っ!?」
　彼はそれに答えてくれた。やさしく入ってくる彼の舌。私は思わず……
「つっ……！」
「あっ……。ごめんなさい!!　でも、ディープキスって本当に血が出るんだ……」
「ひどいな、マナちゃん」

彼はそういったけど、また唇を覆ってくれた。先程と少し変わり、なんだか鉄のような味が口にひろがる。私が噛んでしまったところからあふれ出る彼の血。でも不快ではなく、むしろ心地よい味だった。
私はひたすらその味を求める。だってこれは彼のもの、私がおそらく最後に感じる味覚だろうから。

いつしか雨がやんでいた。
「ここなら多分大丈夫だ」
彼は私を茂みの中につれていってくれた。
「きっと迎えにくる。だからここでじっとしておいてくれ」
「うん、わかった」
耕一さんが私から離れる。二人の逢瀬もこれで終わり。なんだかんだで五分くらいは彼を拘束してしまっただろう。梓さんを追う為には一分一秒も貴重だというのに。
だめだな、私。結局最後まで邪魔しちゃった。

「マナちゃん」
「なに？」
「忘れないでほしい。君がいたから助かった人、救われた人もいっぱいいたってことを」
「……」
「それと……俺は絶対に君を迎えにくるから、絶対に来るから……な」
「なに言ってるの。そんなこと言う暇あったら、とっとと梓さん探してきて」
「ああ……、だから絶対残りのみんなと一緒にこの島を出ような」
彼はそういって最後に私に軽くキスをしてくれた。そして走り去る。彼の足音が遠ざかっていく。
……ふぁ、眠くなってきた。確かにここのとこ、ろくに眠ってないな。すこしおかしくなる。永遠に続くかに思えた日常。
それは脆くも破れ、この島での地獄が始まった。永遠に続くかと思えたその地獄。だがそれも永遠で

はなかったようだ。
彼との邂逅。私はその時初めてずっとこのままであってほしいと——永遠を——望んだ。そんなものありはしないのに。

——永遠はあるよ

どうかしら……本当にあるのなら、見てみたいものね。

——ここにあるよ

彼女は眠りにつく。安らかな眠りへと。

804　偶然性

どこまでも続く、無機質で幾何学的な味気ない廊下。そこに彩りと騒々しさを与える人影が、二つあった。
そこは岩山の施設。
どうにかこうにか、内部に侵入した二人は、北川の一方的な提案に従って、最下層に降りてきていた。
「さあ、最下層に辿り付きました。きっとこの階にマザーコンピュータがあるに違いません。何故なら重要なものは、最下層にあるのがお約束だからです！」
意気揚々と、興奮した北川が誰にともなく解説している。
「……」
北川に隠れて、影のように立つ少女が一人。
あまりに落ち着いた、その物腰からか、大人びて見える。徹底した小声と無言の反応は、時として彼女の賢明さを、他人の目から遮蔽する。
普段、知性も含め鋭敏とは考えられないのだが。来栖川芹香の頭脳は、高速回転していた。

「な……無い！　なんということでしょう、この階のどこにも、コンピュータは存在しないのです。ああ神様、私北川の苦労は、バイクの下敷きになった苦痛は、全て無駄だったのでしょうか!?　そもそも、この施設にあるというコンピュータの存在自体が幻だったとでもいうのでしょうか！」

芝居じみた仕草で廊下にくずおれた北川が、これまた大袈裟な身振りで天を仰いでいる。

（……馬鹿……？）

いちはやく見取り図を発見した芹香は、北川の猛烈な悲劇トークを右から左へ聞き流し、コンピュータのありそうな部屋を探した。

……発見。特徴的な三本の縦穴構造の中央に位置する、円形の部屋。間違いなく、マザーコンピュータと書かれている。

「……（ぽん）」

今や最高潮に達した、悲劇トーク独演会を続ける北川の肩を叩く。

……遊んでいる場合じゃない。ＣＤだけでなく、自分が死亡扱いになっているのが気になる。マザーコンピュータなら、真実を暴き出す手掛かりがあるかもしれない。いつまでも、北川の一人漫才を眺めているわけにはいかない。

「……芹香さん……」

感謝の目で見つめる北川。

……慰めていると、勘違いされたようだ。この際、どうでもよいが。とにかく北川の軽い口を閉じ、重い腰をあげてもらわねばならない。

「――あっ！　芹香さん！　見取り図ですよ！」

「……（こくこく）」

「これでコンピュータの位置が……あった！　ありました！　こんなところで遊んでいる場合じゃありません！　急ぎましょう！」

「……（こく）」

……遊んでいるのは、私じゃない。それでも、急ぐという結論に文句は無いから……黙っておく事に

した。
「……と、いうわけで。すぐそこまで来ておるぞ、お嬢」
「なにが〝どいうわけ〟だかわかんないけど、ふみゅーん！」
「どうするんじゃ。パスコードは〝かゆ〟と〝うま〟の二重で設定されとる。まず、あっちから開けることは出来んぞ。つまり、入れるか入れないかは、お嬢が決めるんじゃ」
「そそそ、それくらい、わかってるわよ！　ちょ、ちょおむかつくのよっ！」
　詠美は、さも嫌そうな顔をして銃を持つと、足音荒く扉のほうへと歩いて行った。その途中で、ぴたりと停止する。
「……ねえ、ほんとのところ、どうおもう？」
「何がじゃ」
「北川って人、ほんとにあぶないとおもう？」
「……判らん。島に来る前から凶悪だった者など、殆どおらんのじゃ。神のみぞ知るという奴じゃな」
　もっとも、わしはロボットじゃから信心なんぞは無いが、と付け加える。
「……どうしよお」
「開けて上手くいくとは限らんが、ＣＤが必要なのも確かじゃ。嬢ちゃんが決めるしかないの」
「……ふみゅー……」
　再び歩きだし、扉の前に立つ詠美。
　扉の外の話し声が、聞こえてくる。
「ふみゅっ？？？」
　詠美は両手と、片耳を扉に当てて、外の様子を聞き取ろうとした。
《＊＊パスコードを入力してください＊＊》
「……なんだよコレ」

北川は扉の外側で、悪態をついていた。
《＊＊……だ……よ……コ……レ……＊＊》
北川の発言が、小さなモニターに流れて行く。そしてまた、最初のパスコード要求画面に戻る。
「音声認識パスコードか……オープンセサミ、みたいなやつだな」
腕を組む。ヒントは何も思いつかない……お手上げだろうか？
そこで北川は、何かが内部で騒いでいる声に気が付いた。
「なんだ？　……随分かしましいな？」
北川は両手と、方耳を扉に当てて、中の様子を聞き取ろうとした。

目の前で、車に轢かれた蛙のように扉にべったりとへばりつく北川を、芹香が憐れみに満ちた目で眺めている。
（……馬鹿……？）
耳を当てるまでもなく、芹香は声を聞きとっているのだ。
『北川って人、ほんとにあぶないとおもう？』
「……（こくこく）」
「バカゆーな！　このナイスガイを捕まえて〝あぶない〟ですとーー⁉」
肯定する芹香と、その前で否定する北川。
《＊＊……カ……ゆ……＊＊》
……モニターの文字が反転している。芹香は熱心に聞き入っている北川に、それを知らせようとしたが。
「……（ぴたり）」
……へばりつく姿の滑稽さに呆れ、やめた。
『開けて上手くいくとは限らんが……』
「上手くいくかどうかは、開けなきゃ判らんだろうが！」
北川が叫ぶ。
……かなり逆上してきている。バイクに轢かれて

も、これほど怒らなかったのに、不思議な挙動だ。
《＊＊……上(う)……手(ま)……＊＊》
プシー。
空圧の変調する音が聞こえ、扉が開いていた。
――そして扉を失った詠美と北川は。
お互いの両手と頬を当て、呆然としていた。
「「……」」
「……」
……そんなご都合な。芹香は、これ以上ないくらいに呆れていたが。とにかく、中には入れたのだから……黙っておく事にした。
「みゅ？」
ただひとり。
繭の声だけが、円形の室内に響き渡っていた。

805　チェシャ猫～再び裏舞台へ～

（ああ、なんだか凄い疲れてる……。眠ったのにもっと疲れてるなんて……。まぶたが重い……）
マナは目を閉じたまま微かに身体を動かす。
が、やはりもうしばらくは動き回れそうにないのを悟り、その動きを止めた。
「気づいたか……」
聞いたことのない男の声に、マナがハッとする。
彼女のすぐ近くには男がいた。
（目を開けたい……）
そう思い、まぶたを開くために力を入れるマナ。
生きている間に、こんな事態にめぐり合うとは思ってもいなかったろう。
まぶたを開くために力を入れなくてはならないなどという事態。
いや、彼女はこの島に来てからなら幾度か考えていたかもしれない。
「……誰？」
半開きの眼、滲む視界。
微かに動く口で声を発する。

「見た目ひ弱そうな、女顔の少年を知らないか？」
男が返した答えはマナの知りたかったものではない。
というか答えですらなかった。
（女顔…？）
彼女はほぼ無意識で、その質問のために頭を働かせる。
しかし、どれも明確なビジョンにならない。
思い出される知人の顔は、どれもグニャグニャと歪んでいる。

しばらくマナが沈黙していると、男はあきらめたようにその場で立ちあがった。
いまだに動くこともままならない彼女を見下ろし、言う。
「ある程度毒は中和できたと思うが……。まぁがんばるんだな……」
（毒……？）
その単語だけがスムーズに彼女の頭へ入っていく。
（そうだ。毒で倒れたんだ……）
意識を失う前にそう推理したことが思い出された。
毒で倒れ、知らぬ男に手当てされ、その男が目の前にいる。
それが彼女の身に起きたこと。
とりあえず男に敵意が無いと悟った彼女は、半開きの目を再び閉じた。
――シュッ――
男は煙草をくわえ、ライターで火をつけようとする。
「ん……」
火がつかない。
雨に濡れた際に湿ってしまっていた。
くしゃりと箱ごと握りつぶすと、それを地面に捨てる。

「助けてくれて……ありがと……」
マナが言う。
一応とはいえ、まだ殺し合いゲームは続いているのだ。
その中でやさしさを向けてくれた男。
「ふん……。気まぐれだ」
男は平然とそう言い、自分のバッグに広げていた荷物を詰める。
そして無言で立ち去ろうとする。
――強くなければ生きられない――
(彼女の今の体力で、どれだけ生き延びられるだろうか)
そんな心配が男の頭に微かによぎった．
だが彼にしてみれば元々関係の無いこと。
毒の中和は、たまたま手持ちの品で応急処置できそうだったから、気まぐれにしたにすぎない。
「……ありがと……」
立ち去る高野の後ろから再び礼……。
――優しくなければ生きていく資格がない――
眠るマナ。
その横に非常食。

806 Tomorrow

観月マナ（八十八番）は川のほとりにいた。
目が覚めて、周りを見渡したらそうだった。
(あれ……？)
次に自分の体を見る。怪我なんてない。傷どころか泥や血で汚れた後すらない。
川の流れを鏡にして自分の顔を映してみる。
流れに押されて、映った顔がグニャリと歪んだ。
私が置かれているあの島にはそんな歪みが似合ってるかも、なんて思ったけれど。
その流れの向こうの私はすごく綺麗で……（って

いってもナルシストじゃないわよ）
やっぱり、汚れ一つなかった。
「……夢？」
「そうだな。これは、夢かもしれんな……」
「だ、誰……？」
聞かなくても分かってた。その、短い間だったけど、絶対に忘れることのない声。
「久しぶりだな、マナ君」
「せ、センセイ！」
私は、一心不乱にその大きな体へと飛び込んだ。
「こ、こら、いきなり飛び掛ってくるな、びっくりするじゃないか」
「ほ、本当にセンセイだ……」
ひとしきり、その胸の温かみを感じた後、もう一度、周りを見渡す。
ホントは、ずっとそうしていたかったけど。
「センセイ、ここは……？」
「川のほとりだな」
「そんなことは分かってる……ます」
「じゃあ、どこだと思うんだ？」
反対に、返された。
「川のほとり……」
「だな。言葉通り。私の言うことに間違いはない」
断言された。よく状況が掴めないけど、今日の霧島センセイは強気だった。
「センセイ、生きてたんですか？　私は……」
「私以外にもいるぞ。ここにはな」
えっ……？
「やほー、マナちゃんだ！　よかったぁ」
「か、佳乃ちゃん……!!」
センセイの後ろに隠れて、佳乃ちゃんがいた。
「そんな……どうして……？」
「私がいるのだ、佳乃がいても不思議ではないだろう？」
「いや、そうだけど……」

疑問に思いながらも、喜びの表情は隠せない。
「良かった……本当に……私、てっきり……佳乃ちゃんが……」
先生や、佳乃ちゃんとの思い出。あの悲しかった思いは忘れたことなんてなかった。
だから、すごく嬉しかった。
「夢だったのかな……？　ひどく、辛い夢」
「そうか。悲しい夢でも見ていたのか？　残念ながら精神的なものは専門外だが……」
「いいの、病気じゃないから」
涙を拭って。

私の辛いあの日々は、終わったんだ……

「情けないチビちゃんに、もう一回会えるなんてね～」
「そ、そんな事言ったら可哀相だよ……」
私は、また懐かしい声との再会を果たした。
それ程時間は経っていないのに、すごく懐かしい。
「きよみさん……初音ちゃん……」
もう会えないと思っていた、大切な人達との再会。
もう一度、夢見て止まなかったその再会。
自然と笑みがこぼれる。間違いなく、この島に来てから一番の笑顔だっただろう。
きよみさんのその憎まれ口さえも、耳に心地の良い響き。

そういえば……この島に来てからって思ったよね、私。

「センセイ、ここはどこなんですか!?」
「川のほとりだ」
「さっきも聞いた！　もっとグローバルな意味でのこと」
そう、何故か違和感を感じる。
幸せなこの状況に不満なんてないと思うけど、胸

の奥にあるその何か。
「あの島じゃないんですか？」
あの殺戮の島に、この風景は不釣合いだと、我ながら不謹慎だけど、そうも思う。
「ふむ……」
先生が、腕を組んで考える仕草をする。
「あの島からは遠く離れた場所だ。……いろんな意味でな」
いろんな意味？　ちょっと良く分からなかったけど、さらに質問する。
「みんな、助かったの？」
「……今も戦っている者がいるかもしれないな」
「……」
その先生の声に、私はただ黙った。
「マナちゃん、ここにいれば安全だよ。あとは、帰るだけだね」
「初音ちゃん……」
お家に帰る。帰っても誰もいない寂しい家。
それでも、あの島でずっと求めていたもの。
だけど……。
「やっぱり、なにか足りないの」
私は、言った。
ここは幸せなのに……？　私が求めていた、退屈でつまらない、だけど幸せな日々なのに……？
「うん……辛かったけど、忘れちゃいけないって思い出が、あるから……」
自分に言い聞かせるように、言葉（ことのは）を紡ぐ。
『さっき、君は『死んでも人殺しにはなれない』と言ったろう。私もそうだ。私は医者だ。先ほどの観月くんのように怪我をして、あるいは戦闘で傷ついた人間を見つけたら治療する義務がある。誰かが私に襲い掛かってきたとしたら、殴り倒してでも説得する。例え、その行動が命取りになっても、だ』

『あなたは、その子よりも弱いのよ。肉親を失った子でも、生きようと決めたのね。それでもあなたは、死ぬの？』

『心の中でずっと叫んでた……マナちゃんを傷つけていく私を、わたしは止められなかった。わたしがやったことは、決して許されることじゃないけれど……本当は、死んじゃった方がいいのかもしれないけれど……だけど、わたし、お姉ちゃん達の分まで生きたいって思うの。……だから……だから……わたし、生きていてもいいかな？』

『彰お兄ちゃん、自分が何を言ってるかわからないのっ⁉　本当にもう狂っちゃってるんだね⁉　戻れないんだね⁉　鬼の血なんてあげなければよかったよ……それでもお兄ちゃんが好きだったからっ‼』

『忘れないでほしい。君がいたから助かった人、救われた人もいっぱいいたってことを』

私は、いろんな人に支えられて、長い道をただひた走っていた。

私にとっての辛い辛い旅の終わりはこうだったらいいって思うけど。

もう叶うことはないって分かってても、そう思ってしまうけど。

私はまだ、帰れない。

戦ってる人、生きて帰ろうと前を向いて歩く人、そして、耕一さんをはじめ、出会ったすべての人達と。

「ここはまだ、私のゴールじゃないから」

そう言ったら、センセイやきよみさん達がみんな、笑った気がした。

「ひとつだけいい、おチビちゃん？　……すべてが夢だったら、いいとは思わない？」
「思わないよ。だって――」
「言わなくていいわ。たぶん、私の思ってる通りの答えだと思うから。憎たらしいけどね」
「きよみさん……」
世界が、遠のいて、いく。
「佳乃ちゃん……初音ちゃん、きよみさん……センセイ……私――」
「そんな顔をするな。すべてが……あの悪夢が夢であったのなら、私達が出会うことはなかった……そう思えば気楽だろう？」
「センセイ……」
「何事も、前向きに、な」
世界が途切れた――
私が、永遠であったならばいいと思った、その幸せな時間が。

目が覚めたら、いつもの悪夢の光景だった。
たった数日だったけど、長く感じるその辛い日々。
周りを見渡せば、横に食料が置いてあるだけで、誰もいない。
「そうだ、変な、だけど親切な男の人に助けられて、また眠っちゃったんだ」
さっきのは夢だったんだろうか。
夢だとしても、はっきりと覚えているその言葉。
(どの位の時間が経ったんだろう……？)
あたりは、すっかり夜に染まっていた。
耕一さんが迎えに来た気配は、ない。
眠ったせいだろうか。センセイ達に勇気付けてもらったからだろうか。
妙にすっきりしていた。
梓さんへの憎しみも、薄らいでいた。
正確には、嫉妬は強くなっている気もするけれど。
(私、思ってたより独占欲強かったんだね……)
もしかしたら、梓さんとは、戦うことになるかも

しれない。

――――そうじゃ、それでよい。それでこそ「人間」であろ……。

梓さんと別れた時に聞こえた謎の声が脳裏に蘇る。私の心が創り出した声だったのか、それとも他の誰かの声だったのか、それは分からないけど。
今はそんなことはないって、はっきりと言える。
梓さんとのその戦いは、帰ってから幾らでもすればいい。帰れば、笑いながら、怒りながら、それができるんだから。
さっきまでの私の黒い思いに、苦笑いした。
頭だけじゃない、体だけじゃない。心が軽くなったと思う。
何度も絶望して、あきらめたこともあったけど、その度に勇気づけてくれた、恩人達。
今も、心の中で勇気をくれている。

――すべてが夢だったら、いいとは思わない？
思わないよ。だって……
こんな島でも、大切な人達と出会えて良かったと思ったのは嘘じゃないから。

807　みんな、結末を目指して……

「それで、グレート・長瀬さん……でしたっけ？私たちに協力して頂けないでしょうか」
岩山地下施設コンピュータルーム。先程、柏木千鶴、スフィー、月宮あゆ、七瀬彰の四名も到着していた。
その直前に辿り着いていた北川潤&来栖川芹香、元からいた大庭詠美、椎名繭も加えると総勢八名、実に生き残っている参加者の半分以上がここに集結したことになる。
「だめじゃ、ワシはまがりなりにもこのゲームの管

理者。参加者たるおぬし達に協力はできんよ」
　先程から問答を続けてるのは柏木千鶴と、この施設のコンピュータで現在実質的にこのゲームを管理している擬似人格「グレート・長瀬」（通称G．N．）だった。
「ですが私たちはこれ以上殺し合いを続ける気はありません。それに……」
「ええぃ、協力せん！　協力せん！　協力せんたら協力せんのじゃぁぁぁ!!」
　カシャン……。その時なにかが割れる音がした。
「あらいやだ、私ったらコーヒーカップ落としちゃったわ」
「ぬぉぉぉっ！　なんてことするんじゃ、はやく拭かんかぃぃぃぃ!!」
　みると千鶴のコーヒーがG．N．のコンソールに派手にぶちまけられている。
「……はい、千鶴さん。かわりのコーヒーと布巾だよ」
「あら、あゆちゃんありがとう。それでなのですがグレート・長瀬さん、私達はあなたの協力を得たいと……」
「だから駄目だと言って……ぬぉぉっ!!」
「あらいやだ、今度は砂糖壺を倒しちゃったみたい。私ったらどじねえ」
　てへっ。そんな感じで舌を出す千鶴。
（うぐぅ……。千鶴さん目が笑ってないよう……）
（ふみゅ〜ん）
（……できる）
　他の者はそれを黙って見守ることしか出来ない。
「あなたにこのゲームを止め、外と連絡することは出来ないということですか……」
「すまんのう、千鶴嬢ちゃん。しょせんワシはしがないプログラムでしかないからのう」
　十三杯目のコーヒーのおかわりの後、G．N．との交渉が再開されていた。

「なあ……、千鶴さんって嬢ちゃんって年じゃないと思うんだが」
「…………」
北川の小声の突っ込みに
(うぐぅ、今部屋の温度が少し下がったみたいだけど……きっと気のせいだよね)
「ならばこのゲームを止めるにはどうなればよいのでしょう？」
「そうじゃの、参加者が一人を除いて全員死亡しかないじゃろうのう」
こころもち冷たい千鶴の声に、先程とは打って変わり協力的なG．N．が答える。
「死亡判定はどのように行っているのです？」
「おぬしたちの体内にある爆弾を使ってじゃよ」
「でしょうね」
そこで千鶴はにこっと笑った。
「でしたら私たちのように、一人を除いてみんなが爆弾を吐き出してしまえば吐き出した人は死亡扱いになるので生き残りは一人、つまりあなたのプログラム上ではゲーム終了となるわけではありませんか？」
「……少し待ってくれい。……ふぅむ、問題はないようじゃな」
「ありがとうございます。さてと……」
ゆっくりと千鶴が振り返る。
「この中でまだ爆弾を持ってるのは北川くんとスフィーさんね……。まずは北川くんから吐き出してもらおうかしら。みんな、ちょっと北川くんを押さえておいてもらえます？」
次の瞬間みんなに取り押さえられる北川。
「えっ……あの、ちょっと」
「ごめんなさいね、北川くん……。これもこのゲームを終わらせるためなの……」
硬く握り締められる千鶴の拳。その顔は、何故か少し嬉しそうだった……。

北川は床に伸びていた。他の者は少し離れたところにかたまってなにやら話をしている。
千鶴ひとりG．N．のコンソールの前に座り、先程北川から取り出した爆弾——もちろん念入りに洗っている——をいじっていた。本当はスフィーからも取り出したかったのだが、何故かみんなから止められている。
まあ、あの子は女の子だし、それに衰弱も結構激しいようだから今すぐでなくてもいいだろう。
「千鶴さん、おかわりと……はい」
「あらクッキー……。ありがとう、あゆちゃん」
気が付くと横にあゆが立っていた。
「あの……千鶴さん、ひとつ聞きたいんだけど……神奈……さんだっけ。その事はどうするの？」
あゆの疑問、それは当然だろう。確かにいま北川の持ってきたCDの解析は進めている。だが先程のG．N．とのやりとり。そこには神奈——おそらく今回の元凶にて、捨て置けない存在——のことは一言もでてこなかった。
まるで、そんなもの始めからなかったかのように……。
「……あゆちゃん、あなたはそんなこと気にしなくてもいいのよ」
「えっ……？」
「もうすぐ、このくだらない出来事は終わるわ。そうしたら、あゆちゃんは先に帰ればいい、あなたを待っている人のところへ」
「……」
「後の事は私達に任せておいてくれればいいから。決着は必ずつけるわ」
そういって千鶴はちらりと彰の方——彼は皆と離れて一人たたずんでいた——を見る。
「だから、あゆちゃんたちは先にこの島から戻っておいてね。ほら、あなたのお母さんも心配してるわよ」

それは千鶴のまぎれもない本心だった。この決着、それは凄惨なものとなる予感がする。だからそこにいるのは私たちで十分、あゆちゃんみたいな優しい人たちはそこにいる必要が無い。そうでしょ、あゆちゃん。

あなたも早く日常に戻りたいわよね。「戻りたい」そう一言を言ってくれさえすれば私達は……。

だが彼女の返答は千鶴の予想を越えていた。

「千鶴さん……、ボクね、お母さんいないんだよ……。ボク、もう帰る場所ないんだ……」

なにかが溢れ出るように、そして淡々とあゆは言葉を紡ぎ出す。

「ほんとはね、ボク、来月から秋子さん……水瀬秋子さんの子供になるんだったんだ……」

水瀬秋子……覚えている。自分がこの島で戦った相手。そして今は既に死んでいた。

「ボクの本当のお母さん……ボクが小さい時に死んじゃって……ボクその時本当に悲しくて……」

無感動に続けるあゆ。

「どうしょうもなく悲しかったその時、ボクは祐一くん……相沢祐一くんと出会ったんだよ……」

すっと、あゆはポケットから何かを取り出す。それは天使の姿をした人形だった。彼女はすこしそれに目をやり、言葉を続ける。

「死にたいくらい悲しかったんだけど、ボクは祐一くんと出会って、すこしその悲しみも楽になって……。でもね、ボクどじだから……祐一くんが街を離れる日……ボク木から落っこちて……死んじゃった……」

はっとなり、千鶴はあゆの表情を見る。あゆの表情、彼女の目にはいつのまにか涙がたまっていた。

「でもね……」

あゆは続ける。

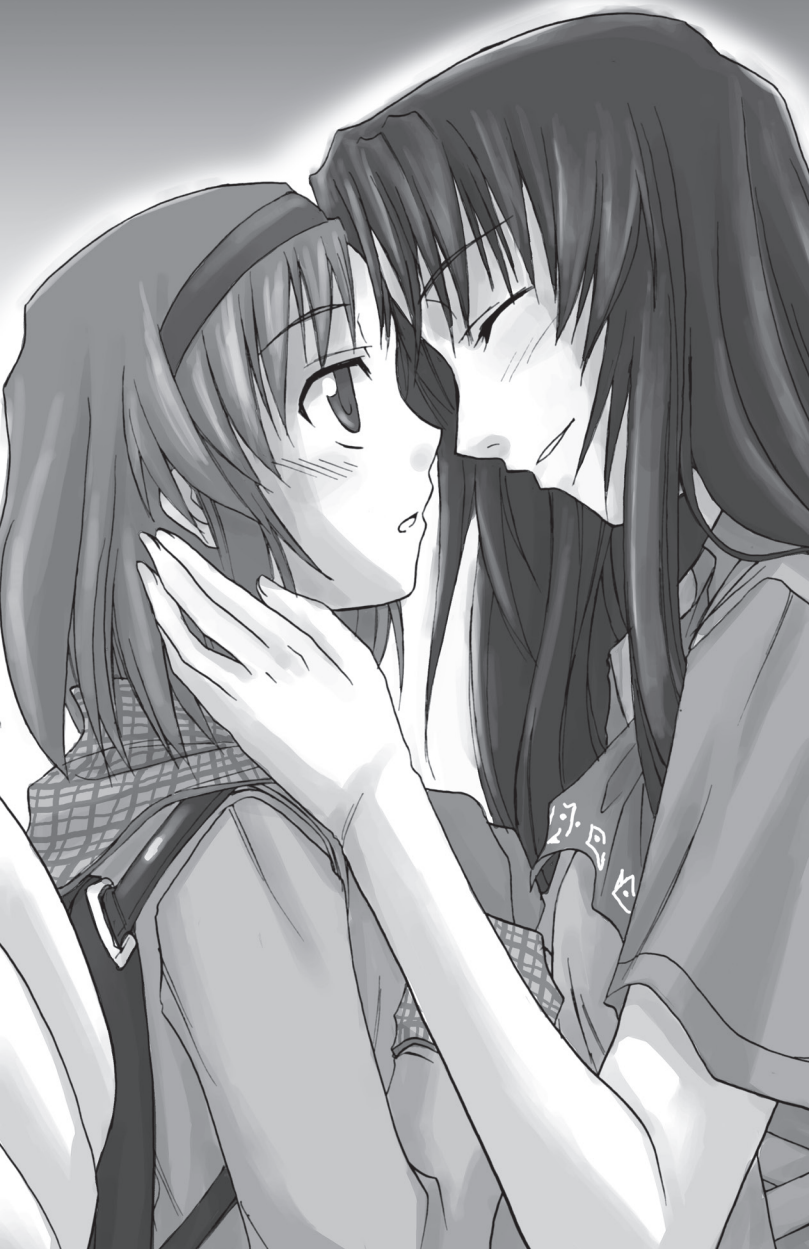
「木から落ちて、ボクお空に昇っていったんだけど、ああもう戻れないなあって思ったその時、出会った

んだよ……。天使さんに」
「天使……？」
「うん、天使さん。よくは覚えてないんだけど、とっても綺麗な白い羽をした天使さん。その子とね、ずっと話をしてた……」
　ここになってようやくすこし元気になるあゆの声。
「それでね、気が付いたら元いた街にいて、祐一くん達とも再会できて、いろいろあったけどボク生き返ること出来たみたい……」
「…………」
「でも、お母さんはやっぱしいなくなっていて、やっぱりボクは、ひとりぼっちなのかなぁって思ってたら、秋子さんが言ってくれたんだ。『あゆちゃん、もしよければうちの子にならない？』って……」
「それでね……ここに来る直前、秋子さんが『せっかくあゆちゃんがうちの子になるんだから、その記念にパーティーしましょう』って提案してくれて……、それでみんな……名雪さん、真琴ちゃん、美汐ちゃん、栞ちゃん、香里さん、北川さん、舞さん、佐祐理さん、そして祐一くんとかみんなが集まってくれて……『わあ、とっても楽しいよ、祐一くん、ボクもう死んでもいいよっ』って言ったら祐一くんに『ばかっ』って言われて……、それでも楽しくてはしゃいでたら何故か眠くなっちゃって気がついたら……」
　なにかを吐き出すかのようにあゆは言う。
「ここにいた」
　千鶴はあゆになんていったらいいのか分からないでいた。ふと見てみると、あゆの肩が小刻みに震えている。
「あゆちゃん……」
「千鶴さん……どうして……えぐっ……どうして、みんな死んじゃったの？　どうしてこんなことになっちゃったの……どうして!?」

小さく嗚咽をあげるあゆ。千鶴は気がついた。あゆは、いや、あゆもこんな小さな体でずっと戦っていた、本当に必死になって戦っていた事を。そしてそうである以上、中途半端な決着——みんなを置いて先にここを去るような——それは彼女にとって絶対に出来ないことだということを。それともうひとつ……

「あゆちゃん……死ぬ気？」
「千鶴さん……さっきの話、聞こえていた。……死ぬのは怖いけど……ほら、ボクを待ってる人、もう誰もいないから……」
いつしかあゆは泣き止んでいた。彼女は真っ赤になった目を千鶴に向けている。そこにあるのは明確な意志。
「だめよ、あゆちゃん……」
「いいんだよ、千鶴さん。……ほら、それにさっき言ったでしょ。ボク一度死んじゃってるしね」
おどけた調子であゆは言う。本当にこの子は……。

「あゆちゃん、あなたが死んだら、私が悲しいわ……それではだめ？」
「千鶴さんには梓さんがいる。他の人もそう。だからこの役目はボクが一番適任なんだよ。ボクが死ねば万事オッケー——だよ」
ビシッ。あゆは人差し指を立てていった。でも……。
「だめよあゆちゃん……。だってあゆちゃんには、ここを出たら私の妹になってもらうんですもの」
「えっ……」
それはもしかしたらこれ以上に無い程残酷な話かもしれなかった。しかし千鶴は——たとえこのことが代償行為だのなんだのそしられようとも——決めていた。
「もしあゆちゃんがそれでいいって言ってくれたらだけど……。これが終わったら私の妹にならない？」
「……」

「私、これでも結構お金持ちなのよ。鶴来屋っていってね、地元じゃ結構有名な旅館を経営しているの」
「……」
「家も結構大きいし、あゆちゃん一人くらい来ても全然大丈夫」
「……千鶴さん」
「それでね、ここからみんなで無事に帰ったら、そこでみんなでお通夜をしましょう」
「……お通夜を？」
「そう、知ってる？　お葬式はね、死んだ人たちに敬意の念をもってあの世に送る儀式なんだけど、お通夜はね、みんなでわいわい騒いで、元気にやっている姿を見せる儀式なの」
「……どうして？」
「だってそうでしょう？　自分が死んだ後にね、もし自分の大好きな人や大切な人がずっと泣きつづけて暮らしていたら、それはとっても悲しいことだとは思わない？　だからお通夜は、あなたが死んでとっても悲しいけど、私達はあなた達の死を無駄にせず、元気に生きていくことが出来ますよってのを見せるためにするの。私達はしっかり生きていきますよってね。元気にしっかり生きていく、それが死者に対する最低限の礼儀」
「………」
「だからね、あゆちゃん」
千鶴はにこって笑ってあゆの両頬をしっかりと握り……。
「死ぬなんて、軽々しく口にしてはいけないわ。絶対にダメよ？」
「ひゃ、ひゃ、つぅじゅりゅしゃん、ひぃたひぃひょー」
「本当は……」
「駄目だよ千鶴さん。気持ちは嬉しいけどボクは帰んないからね」

頬を真っ赤にしたあゆは言う。説得は無理そうだ。
残念だけど……すこし嬉しかった。
「それにね、ボクさっき木から落ちて天使さんに会ったって言ったでしょう」
「ええ……」
「その天使さん、まだよく思い出せないけど、天使さんと会った時に感じたのと似たような感じ、さっきの社で感じたんだ。それと天使さんがいた所には、もうひと……」
「話中にすまんのんだが……」
不意にG．N．が二人に声をかけた。
「なにかしら？」
「この施設の屋外監視カメラになんじゃがな」
「ええ」
「一瞬じゃが生存者を確認したぞい、ただな……少々様子がおかしい」
「……？　確認させていただけますか」
「すこし待っておれ……。そりゃ」
G．N．のモニターに一人の人物が浮かび上がる。
そこには……。
「……梓!!」

808　離散、思いがけぬ危機

モニターに映ったのは、まさしく鬼の形相で疾走する梓の姿だった。
だが、その姿を捕らえられたのは、ほんの一瞬。固定カメラである以上、その有効範囲は決して広くはない。彼女はすぐにカメラの有効範囲を通り過ぎていった。
「……今の場所はどの辺りですか？」
先程までとは全く違う。深く、静かな千鶴の声。
「じゃが、あの嬢ちゃんの様子は尋常じゃない――」
「どの辺りですか？」
念を押すように、もう一度尋ねる。

「……分かった。あの嬢ちゃんのいた場所はな――」
　教えなければ、先程とは違い、本当に自分を破壊しかねない。そう判断したＧ．Ｎ．は観念して居場所を教えることにした。

「――といった感じじゃよ。ただし、あの嬢ちゃんの爆弾はもうないから、レーダーによる追跡は無理じゃ。現時点であのカメラからどれだけ離れたのか見当もつかん。一応他のカメラのチェックは行っておるが、正直期待できんじゃろ」
「それだけ分かれば十分です」
　千鶴は皆に背を向け、部屋の出口へと向かう。
「ち、千鶴さん、どこへ――」
　先程千鶴に腹を殴られた北川が、地面に伏しながらも何とか声を絞り出す。
　誰もが愚問だと思うだろうが、それでも聞かずにはいられない。

「梓は初音を失ったことで錯乱しています。それを止めて、連れ戻してくるだけです。すぐに戻りますから」
　彼女は平静を保っていた。異常なほどに。
　彼女を止められる者は、いなかった。

　千鶴が部屋を出ていった後は、沈黙がこの場を支配していた。
　その沈黙を破ったのは、ここにやって来て以来、何も喋らずにずっと部屋の隅に座っていた青年だった。
　七瀬彰と言ったたか。彼はほとんど音もなく立ち上がり、部屋の出口へと向かう。それはあまりに静かで、この沈黙があったからこそ彼の行動に気付けたと言ってもいい。
「ちょ、ちょっと、あんたまでどこいくの？」
　慌てた様子で詠美が尋ねる。
　千鶴には、確かに外に出ていくだけの理由がある。

妹を殺され錯乱した梓を止めるという。この青年にもそれに匹敵するだけの理由があるのか？
「彼女の妹を殺したのは、僕なんです」
場が凍り付く。
あらかじめ施設外でその話を聞いていたのは、あゆとスフィーだけ。他の者にとってはあまりに衝撃的な告白だった。
「だから、僕には行く義務がある」
行けばどうなるか。あの梓の映像を見た者に、それが分からないはずもない。多分、命の危険なんて彼にはどうでもいいことなのだろう。
だが。
たとえ事情はどうであれ、これ以上人が死ぬかもしれない状況を黙って容認するわけにはいかない。
「おい、ちょっと待て――」
北川がふらふらになりながらも立ち上がり、彰の肩を掴んだその瞬間。千鶴に一撃を見舞われたダメージがようやっと回復しつつあった腹部に、更に強烈な一撃を叩き込まれる。振り返りざまの問答無用の一撃を受け、北川は再びもんどり打って倒れた。
「……ごめんなさい。でも、無駄死にするつもりはないから」
それだけを言い残し、彼も部屋を出た。
彼を止められる者もまた、いなかった。

えー、みなさんお元気ですか？　北川潤です。で、お元気ですか？
お元気ですか。そうですか。え？　私？　あー、私は多分元気だと思いますよ。
……殴られまくってるけどな。
何故にこの紳士の中の紳士、私北川潤がここまでひどい仕打ちを受けなければならないのでしょうか？　何か悪いことでもしましたか？
しましたか。そうですか。私の存在自体が罪だとおっしゃりますか。ああ、私は何と罪な男なのでしょう。

「何とかしないと……あの梓って人、きっと、神奈の影響受けてる……」
　弱々しいながらも確かな意志を含んだ言葉が、地面にうずくまっていた北川を現実へと引き戻す。
　その声の主は、スフィーだった。彼女は何とか立ち上がろうとしたが、身体がそれについていかない。
　そういえばさっきから気にはなっていたのだが、前に見た時より心なしか小さくなっているように見える。とりあえずそれはどうでもいい。重要なのは、その言葉の方だ。
「マジか？」
「少ししか見えなかったし、映像越しだから確証は持てないけど……」
　これは窮地だ。外にはまだ、往人達が追っていった少年とやらの集団、それに寡黙な髭面親父がいるはずだ。加えて梓まであの状態、それが神奈の影響によるものだとすれば、単独で外に出ていった千鶴や彰の身の危険は更に高まる。
　部屋を見回す。現状で残っているのは、自分を除いて五人。
　来栖川芹香、スフィー、月宮あゆ、大庭詠美、椎名繭。はっきり言って、まだ敵がいるかもしれない外に連れていけるような面々ではなかった。
　だとしたら、どうする？
　答えは決まっていた。
「スフィー、とりあえずお前じゃ無理だろ。ここで休んでな」
　ＣＤは解析中。今、自分がこの場にいなければできないことはない。ＣＤの解析が済み、後は実行できるだけの状態になった時にここにいればいい。
「施設の中は安全なんだよな？」
「で、でも——」
　何とか動けるようになってすぐに、準備を始めた。銃や刃物などの武装。応急処置用器具一式。他にも施設内で見つけた使えそうな物を持っていく。
「一応、パスワードは変えておいた方がいい。みん

なには俺から知らせておくから。いざとなれば内側から自由に開け閉めできるんだろ？」
「うん……」
この場に残す面々の中で最年長と思われる詠美に、諭すように続ける。
「だったら大丈夫だ。千鶴さんと、七瀬の彰くんと、千鶴さんの妹の、えと、梓さん――か？　とにかく、三人を連れてすぐ戻ってくるから。それまでみんなのことを頼む」
「待って！」
彼の会話に割り込んできたのは、意外な人物だった。
「ボクも連れてって！」
月宮あゆ。
だが、残念ながらその申し出を受ける気にはなれなかった。
「おいおい、外にはまだ敵がいるんだぞ？　いくら天下の北川様でも無力な女の子を守りつつってのは厳しいと思うんだが」
「でも――千鶴さんと梓さんを放ってこのままじっとしてるなんて、ボクにはできないよ！」
仮に断ったとして。
彼女はきっと、北川が施設を出た後に、一人で外に出て千鶴と梓を捜そうとする。ここで強く止めても無駄だ。彼女の決意に偽りがあるとは思えない。
どうせ二人とも外へ行くのならば、二人で一緒に行く方がいい。考え方の違いだ。二人で行けばお互いが自分を、そしてお互いを守れるかもしれない。
「……分かったよ。でも、自分の身は自分で守ること」
「うん！」
「じゃあ詠美さん、ここのことは任せたから」
「ふみゅーん……」
不安そうな彼女の声。
それも仕方ない。行動の指針を示すことができるリーダーであった千鶴がいなくなってしまったのだ

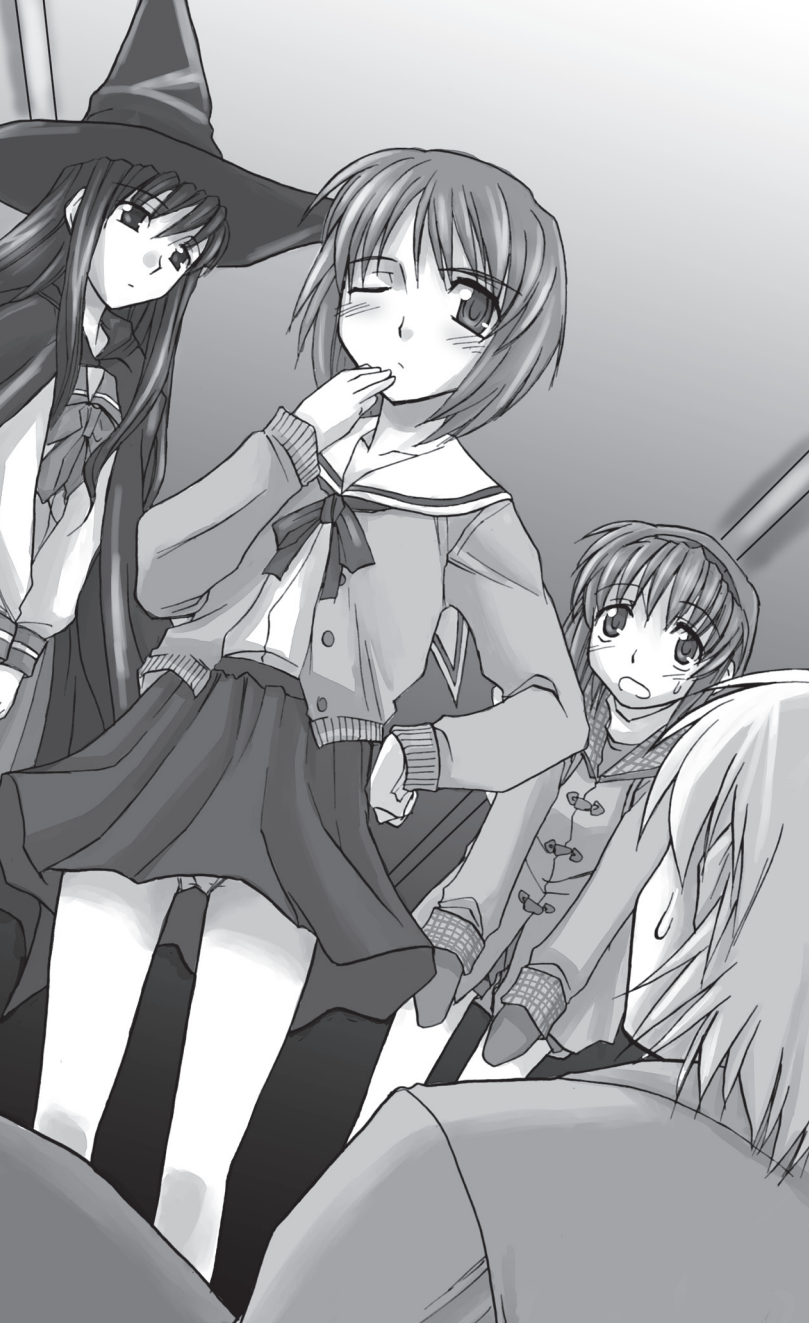
から。残念ながら、今この場で集団のリーダーを張れる人間――例えば、少年を追っていった往人、変態女装野郎の耕一、結局会えず終いだった蝉丸のような――はいない。それは北川自身も含めた上での話だった。
だからこそ、千鶴達を連れ戻さなければならない。不安が皆を押し潰し、集団内に不和が生まれる前に。
もうあんな思いはたくさんだ。
（ま、たまにはシリアスにいくのもいーだろ）
彼に向いているとは思えないこの行動が、吉と出るのか凶と出るのか。
だが、今はそんなことはいざ知らず。
彼はあゆと共に外への第一歩を踏み出した。

809　三度現れし彼女

「待って！」
再び北川をひきとめたのは、やはりあゆであった。後から思いっきり襟を引っ張ったので、北川の顔色がヤバイ色に変貌しているのだが、まるで気付いていない。
ずりずりと施設内部に連れ込まれる北川。
「ぐぇ……今度は、なんだっ!?」
「忘れ物だよっ！」
コンピュータルームに舞い戻った二人が最初に出会ったのは、ぐったりと消耗したスフィー。
詠美と芹香は、彼女を医務室へ移そうとしていたようで、扉を開けた詠美が怪訝そうに尋ねる。
「どうしたのよ、北川」
「いや俺じゃなくって、この娘が――」
そう言って、あゆを指差そうとしたのだが、既に彼女は芹香の下へと移動している。
……侮れない素早さだ、と妙なところで感心する北川であった。
当のあゆは、芹香と何かの相談している。そして

二人同時に手をひらひらさせて、繭に向かい〝おいでおいで〟をした。
「みゅ？」
いつもの奇声を発して歩く繭が、芹香の膝の上にちょこんと座る。
（このご時世に、なんちゅうほのぼのした光景だ……）
などと努めてシリアスに、半ば呆れていた北川は、次の瞬間予想だにしない展開を経験するはめになった。
「みゅーーーーーーーーーーーーーーー!!」
繭の絶叫。
「!?」
「何だあ!?」
詠美と北川は顔を見合わせ、頷き合うと同時に繭たちのほうへ駆け寄る。
「何やってんだ！」
間に入ろうとする北川が見たものは、毒々しい色をした——キノコ。あゆが、そのキノコを繭に無理矢理食べさせようとしているのだ。繭と取っ組み合いながら、騒乱のさなかであゆは叫ぶ。
「千鶴さんが言ってたんだよっ！　芹香さんの持ってるキノコを、繭ちゃんに食べさせなきゃいけないって！」
完全に子供の喧嘩状態になっている二人を見ながら、手を出しかねている北川に向かって詠美が命令する。
「よくわかんないけど——てつだうのよ、したぼくっ！」
……最早、彼女の間違った日本語を、根気強く修正する人物はいない。
「く、くそっ！　何で俺が!?　それに、したぼくってなんだ！」
疑問に思いつつも、キノコ強制摂取戦に参戦する北川がいるのみだ。かつて彼の親友が、そうしたように。

むぎゅ。
「みゅーーーーーーーーーーーー！　嫌だよ、おいしくないよ――！」
むぎゅ。ごくん。
叫び。そして確かな咀嚼音と、続く嚥下音。
最後に訪れる、静寂。
「……」
「……繭、ちゃん？」
「……繭？」
全員が、繭の顔色を窺っている。
対する繭は、背後にいる芹香のように、完全な無表情を保っていた。
数瞬の間を置いて、繭が目を閉じる。今までなら、そのまま寝てしまうのだろうと思われたが――
「……この状況で呼ばれても、困ってしまうわね」
――そう呟いてアンニュイな溜息を吐いたのち、ゆっくりと開いた彼女の瞳は、高度な知性をたたえていた。

二人のキノコ被験者を目にした数少ない被害者である北川は、悪夢を見る思いで呆然としていたが、ようやく我を取り戻すと、最後に一本残ったキノコをまじまじと見つめて、疑問を口にした。
「……ちなみに、俺が食うと――どうなるんだ？　食うまで、判らないのか？」
「だ、駄目だよっ！　これは繭ちゃん専用なんだよっ！」
更なる混乱を呼ぶとしか思えない、恐ろしい問いかけを慌てて却下しながら、あゆがキノコをひったくる。
シリアス北川はどこへやら、あゆと同レベルで口喧嘩をはじめた二人を無視して、繭が立ち上がった。くるりと振り向くと、二人が取り合いをしているキノコを指差し、芹香に尋ねる。
「残りの一本。頂いても、いいかしら？」
(こくこく)
頷く芹香。そしてお互いの目の奥にある、他人に

は受け取られにくい知性の光を見つめて、語りかける。
「……？」
「そうね……色々不明な点もあるけれど、今後多くはあなたに依存することになると思うわ。あのコンピュータは曲者だけど、融通は利くようだから、利用するだけ利用しないと損よ」
その後、繭は今まで見ていた参加者の動きを――本人ですら気が付いていなかった詳細まで――予測を交えつつも精密に芹香へ伝え、芹香もいくつかの情報を提供し、最後に二人は静かに頷き合った。

「それじゃ、今度こそ……」
「ちょっと待ちなさい」
再び出発しようとした北川を、今度は繭が引き止める。
「あなたのその指で、自動小銃は無理があるわ。今から行くとなると、他人の援護から戦闘に入る可能性が高いから、こっちになさい」
そう言って武器を詰め替える繭。
「むむ……」
釘を添えて真っ直ぐになった利き手の人差し指を見ながら、北川は不機嫌そうに押し黙った。
しかし、思いがけぬ繭の行動は、それだけではない。
自らも鞄を肩にかけると、あゆと並んでさっさと歩き始めたのだ。
「……さ、行くわよ北川」
「……は？」
「利き手の使えないあなたよりも、まだ私たちのほうが当たるはずよ。あなたに死なれると困るかもしれないし。不満なら、あなたが残ったっていいのよ？」
「そ……そういう問題じゃないだろ！」
足手まといがまた一人、とまでは言わないまでも、心配の種が増えることに北川は不満を漏らす。しか

し繭は、涼しい顔をして答えた。
「そうね、正直に話すわ……あなた、かなりの方向音痴だって聞いたわ。だから。もし、あなたがここに帰ってこれなくて、魔法が発動できないってなったらみんな困るのよ。だから、ナビゲータとして私がついていかないと不安で仕方ない——ってのが本音よ」
「な……何で知ってんだ⁉」
北川の狼狽っぷりを、繭がにっこりしながら嘲笑う。後ろで芹香がＶサイン。
「ふふ——乙女の情報網を、甘く見ない事ね？」
繭はそう言って余裕たっぷりに笑いながら、今まで長らくそうしていたように、画面の光点を見つめていた。
（近くに、来てる）
飛び出した彰が、正確に千鶴やフランクを追えているのならば。
その位置付近に、別の光点による一群があるようだった。かつて知り合った、繭の知人の光点を含む、三つの光点が迫っていることになる。
（もうすぐ。きっと、もうすぐ——会える）
そう心に念じた繭の脳裏に。
北川の抗議は、届かなかった。

810　心の行き先

雨でぬかるんだ地面を蹴るように俺は走っていた。焦る俺の心と裏腹に体は思うように動いてくれない。それも当然と言えば当然だろう。この体はまだ傷が癒えていない。それでも俺は走るのを止めるわけにはいかなかった。
とにかく一刻も早く梓を捜し出さなくてはならない。そしてマナちゃんの所に戻らなくては。
マナちゃんは強がっていたけど彼女がそう長くはもたないだろうことはすぐに分かった。
多分、男に襲撃されたときにつけられた傷が原因

だろう。刃先に毒でも塗ってあったのかもしれない。早く何らかの処置をしなければ命の危険がある。
あの施設の中にならきっと何らかの医療器具があるに違いない。そこにマナちゃんを連れていけば何とかなるかもしれない。今の俺はそのわずかな希望にすがるしかなかった。
くっ。
一瞬周囲の景色がゆがんだ。
恐らく怪我をおして走っているせいだろう。木に手をかけ、倒れそうな体を支える。
柏木耕一！　お前は地上最強の鬼の血を引く者だろう！
俺がしっかりしなきゃ梓もマナちゃんも助けられないぞ！
俺は自分に喝を入れる。
そしてまた俺は走り出した。

「さて、それじゃ行きましょうか」
晴香のその言葉に私と観鈴さんは頷いた。
「そうね、観鈴さんも私達と目的地は同じみたいだし。一緒に行きましょ」
「は、はい。よろしくお願いします」
「ええ。それにしても、あなた随分たくさん武器持ってるわね」
「が、がお……」
観鈴さんが困ったように呟いた。
「それだけあると重いでしょ。私達が少し持ってあげるわ」
「そうね、いい？」
「あ、はい。でも、いくつかは自分で持ちます」
観鈴さんがいくつかの持ち物を手に取った。
私と晴香で残りの武器を手分けして持つと神社を出発することにした。
「あ、あの！」
「ん？　どうしたの？」
観鈴さんが神社を出てすぐに声を出した。

「誰かがこっちに来てるみたいなんですけど」
「え？」
私達の目の前に出されたレーダーには確かに一つの光点が私達の方に近づいてきているのが見えた。
「……観鈴。アンタそこら辺に隠れてなさい」
「え？　でも……」
「そうね、大丈夫よ。まだ敵と決まった訳じゃないんだし」
「そうそう。それにもし敵だったら観鈴が影から撃ってくれればいいんだし」
私と晴香の言葉に頷くと観鈴さんは心配そうな目をしながら近くの木の陰に隠れた。
まるで小動物のような動作だ。
「フフフ」
思わず笑みがこぼれる。
「どうしたのよ？　気持ち悪いわね」
「失礼ね。ちょっと知り合いを思いだしただけよ」
折原、ゴメンね。繭のこと結局助けられなかったわ。
空を見上げながらそう心の中で呟く。
結局この島に来る前の知り合いの中で生き残っているのは私一人だけだった。
折原の最後の願いだった繭を助けることも出来なかった。
でもきっとあいつのことだから笑いながら「七瀬。お前は頑張ったんだから気にするな」って言ってるわね。
だけど、それじゃあいつの死が報われない。
だから私はせめて最後まで生き残る。
もう、それしかあいつの願いを叶えることは出来ないから。
「七瀬。来るわよ」
晴香の言葉に私は持っていた刀を持ち直した。
ガサッ。
「動かないで！」

晴香が物音のした方に銃を向けながら叫んだ。
「晴香ちゃん?」
聞き覚えのある声と共に草むらから出てきたのは
——。
「変態さん?」
何故か隠れているはずの観鈴さんのつぶやきが聞こえてきた。

811 使命感

(分からないよ……)
天井を見ながら、思った。
とりあえず彼女——スフィーは激しく衰弱していた。あからさまに衰弱していく自分のことを心配した詠美と芹香によってこの医務室のベッドに運ばれ、それからどれだけの時間が経ったのか見当も付かない。ほんの僅かな時間だったのかも知れないし、大分長い時間だったのかも知れない。

不調の原因の一端は、誰に言われるまでもなく分かっている。むしろ自分だからこそ分かる。
魔力の流出。
その流出の度合いは半端ではなかった。かつて自分と健太郎を結んでいた腕輪があった時よりも、遙かに速いスピードで魔力が失われていた。そのあまりの急激さ故に、体力までもが失われているのだろうが、魔力が失われる根本的な原因は、結局のところ分からない。
だが、それ以上に分からないことがある。
魔力が失われていくのと同時に、その代わりとばかりに自分に流れ込んでくる断片的な情報。あまりにも断片的な。そして圧倒的な。
着物を着た男女の死体。月。天まで届かんばかりの篝火。翼。岩の牢獄。空。自分が見たこともない光景だった。
それらが流れ込んでくるたびに、自分を構成する大切なものが、ひとつずつ遠くなっていくのを感じ

る。
五雨月堂で過ごしたあの日々が。
グエンディーナで過ごしたあの日々が。
結花のホットケーキが。
リアンの笑顔が。
健太郎の後ろ姿が。
自分が撃ち殺した少年が残した、最期の言葉が。
(でも、今はのんきに寝てる場合じゃない。あたしがやらなくちゃ——)

——何を?

彼女はベッドを降りる。ふらつきながら、医務室の扉まで辿り着き、その扉を開ける。何故か魔力の流出は止まっていたが、今の彼女にとってはもう関係のない話だった。

施設内、コンピュータルーム。
のんびりと茶をすすりながらCDの解析——そして北川達の帰りを待っていた詠美と芹香は、予想だにしなかった来客に驚いた。
「ちょ、ちょっとだいじょーぶなの!?」
詠美は突然コンピュータルームに戻ってきたスフィーに駆け寄ろうとして——できなかった。
焦燥。
悲壮。
使命。
そういったものが、彼女に何人たりとも立ち寄らせまいとしていた。
憔悴しきった顔色のまま、彼女はふらふらと歩き、腰をかがめ——何かを手にした。
それを少し、いじったかと思うと、再び立ち上がる。
彼女が手にしていたのは、北川達が置いていったM4カービンだった。今のスフィーの小さな身体

――しかも、すっかり衰弱していた――にとっては
それなりに重いはずなのだが。
銃口は詠美と芹香、そしてマザーコンピュータの
メインモニターの方に向けられている。
当然の如く。
そこに迷いはない。
安全装置は外されていた。
「お、おい、お嬢ちゃん、何やっとるん――」
その状況になって、最初に声を発したのはG．N．
だったが。
たたた――と軽い音がしたのと同時、マザーコン
ピュータのメインモニターが吹き飛んだ。
「きゃあっ！　なによ、なんなのよ、もー！」
破片が詠美や芹香の頭上に降ってくる。詠美は思
わず頭を抱えて身を屈める。湯飲み茶碗も床に落ち
て砕ける。
「……」
帽子の上にモニターの破片が降ってきてもなお、
芹香の無表情さは変わらなかった。
だが、見る者が見れば分かっただろう。スフィー
を見つめる彼女の瞳は悲しさに満ちていた。聡明な
彼女には分かってしまったのだ。スフィーに何があ
ったのかを。
そして、狙いの定まらないスフィーの銃口は自分
に向けられようとしていたのだと。
決して聡明だとは言えない詠美も、銃口が自分に
向けられていないことには気付けていた。
じゃあ誰を狙ってるの？
そこまで到達できれば後は簡単だった。他には芹
香しかいない。
Ｍ４カービンから三発の弾が射出される。その反
動は今のスフィーに支えきれるものではなかった。
大きく体勢を崩し、後方に転倒するが、芹香や詠美
が体勢を立て直す前には再び起きあがる。
室内ではあるが、それなりに距離もある。少なく
とも、飛び込んでスフィーを取り押さえるには至ら

ない。死ぬ気で飛び込んでくれば話は別だが、それでも大方、無駄死にで終わるだろう。
標的が近ければ近いほど、弾は当たりやすくなるのだから。
もちろん銃口は前に向ける。
(……あたしがやらなくちゃ……)
もはや使命感だけが彼女を突き動かしていた。
それを達成しなければならないという焦燥感と、何としても成し遂げねばならないという悲壮感と。
(……あたしがやらなくちゃ……)
——何を？
だが、その問いに答えてくれる者は誰もいない。
彼女自身も含めて。
詠美は思い出していた。
『早う逃げ！　同人女は夏こみまでは死ねんのや！』
『えーい、女々しいわ！　いつまでもグズっとらんと、しゃんとしぃ！』
『スマン……詠美っ！』
おろおろすることしかできなかった自分の手を引いてくれた、由宇のことを。
『ああ。頼りにされたいし、頼りにしてる』
『待てっ！　詠美!!』
『俺も愛してるぜ』
壊れかけた自分の心を現実に繋ぎ止めてくれた、和樹のことを。
『……下僕じゃねぇかよ！　このアマふざけやがって！』
『けっ……おめぇなら、大丈夫だ……戦え』
『笑って——笑って、バカやってろ。そうじゃねぇ、と、おめぇらしく——』
逃げることしかできなかった自分に戦うことを教

えてくれた、御堂のことを。
自分の浅はかな行動のせいで和樹と共に命を落とした、楓のことを。
自分の眉間を貫くはずだった弾丸をその身を以て防いだ、ポテトのことを。

今まで出会ってきた、全ての人達のことを。

たたた——

あまりに無情な、無感動なその音が、再び部屋に響き渡った。

812　結末

……HM—12です。
この部屋は、静かになりました。
先程までの騒音と悲鳴と、怒声とが、嘘のように静まり返ってます。
まるで時が止まったみたいに思えます。
何が起こったのか、即座には判断できませんでした。
今も、出来ていません。
目の前に立ち込める硝煙と、血の赤。
あまりのことに、私の中のブレーカーが落ちることさえありませんでした。
生まれて、初めて目にしたその光景は、あまりに凄惨で、信じ難いものでした。

舞い降りる茶碗や機片の残骸。
「きゃあっ！　なによ、なんなのよ、もー！」
砕け、紫電を起こすメインモニターだったもの。
「…………」
爆風というには、あまりにささやかな風が揺るが

した三角帽子。
その向こうに見えた双眸は、悲しくも、しっかりと前を見据えている。
その視線の先に、疲弊しきった表情のスフィーが銃を構えている。
未だ、銃口の先を微妙に彷徨わせながら。
カシャン！
降り注ぎ、地面に転がる残骸の音は、最後に陶器の欠片が地面に跳ねた所で止んだ。
後に響くのは、モニターだったものが巻き起こす小さなスパークと、かすかな吐息。
詠美が再び体勢を立て直した時、すでにスフィーの手にした銃が再度、火を吹いた。
「……っ！」
芹香の小さなその悲鳴がかき消される。
ガシャガシャン！
原型を留めていないモニターを再び弾丸が抉り、辺りに破片を撒き散らす。
今度は、赤い血飛沫と共に。
「あんたっ！」
既に、詠美の手には銃が握られていた。
自らが、御堂がポチと呼んだ、その銃をスフィーに向ける。
スフィーも腰を落として撃った為か、今度はそこまで体は流れなかった。
赤く染まった芹香が後方へと崩れ落ちるのと、スフィーが詠美に銃口を向けるのはほとんど同時だった。
「なにしてんのよっ！」
真中に置かれている机へと沈むようにしながら、そうしながら詠美からも銃声が放たれる。
そして、スフィーからも。
双方共に、外れる。
一つは天井へ、一つは、詠美のいた空間を飛び、壁をえぐった。

（何かを、しなくちゃいけないんだ……）
スフィーの心が、その衝動を駆り立てる。
「はうっ……！」
ただ、呆然と立っていたＨＭ―12を突き飛ばすようにしながら、もう一度二の足で立つ。
足りない魔力を、体力を、気力で振り絞って、銃を撃った。
もはや何かしらの破片しか残されていない机を。
銃痕でボロボロになった壁を。
真新しい血が滴り流れる床を。
幾つかの弾丸が踊った。
（終わらせるんだ）
目の前の惨劇が、そうすることで終わりへの道になると信じて。もしくは、それが信じた道になると強く念じて。
「……ぅぅぅ〜〜!!」
気付かない内に、スフィーの瞳から涙が零れ落ちていた。
正しく認識はできなかったけど、それはスフィーが無意識に流した悲しみの涙だった。
机の陰から、詠美が再度、両腕で銃を持って。
『もっと……腰を……落とせ……腕はこう……』
今は亡き、御堂の声を聞いたような気がした。
かつて、人を撃ったときのように、
御堂に、支えられるかのように。
けど、思うのだ。
どうして、撃たないといけないんだろう？
スフィーと、自分の手の内にある銃を交互に見ながら詠美は自らに問いかける。
どうして、殺したんだろう？
どうして、殺されたんだろう？
和樹、由宇、御堂、そして、この島に送られた全ての人達は。
（こんなこと、かんがえたことなかったけど、すご

く、悲しいよ。悲しいね、和樹）
下唇を噛み締めて、スフィーへと狙いを定める。
『狙うのは眉間だ……俺が撃て……と言ったら……撃て』
もう一度、御堂の声が頭に蘇る。
（撃って、それから、どこに行くんだろう）
この島での狂気の行く先を。
スフィーの瞳と、詠美の銃口とがかちあった。
『撃てっ――――！』
最後に、御堂の声がそう聞こえた気がした。

詠美の指に力がこもった。
だけど、弾丸が発射されることはなかった。
なかったのに、銃声は再度響いて。
三度、地面に尻餅をつく。
「……ぁ」
じわりと、滲む景色。それは鮮やかなほど紅く。
そのまま、ドウッっと、後方に沈んだ。

（けんたろ、結花、なつみちゃん、みどりさん、……リアン。終わらせるから）
魔力がなくなって、霧散してしまわない内に。
だけど、終わらせて、それで。
（私は、どこに行くんだろう）
何かに導かれるかのように、その部屋を後にする。
彼女の双眸からこぼれた涙の雫が、一滴だけ血の池に跳ねて波紋を作った。

「…………」
よろよろと、芹香が詠美の元へと這いよる。
「……な、なにが、あったのかな……？」
詠美の掠れた声に、芹香が短く思案して、かすかに首を振る。
「……撃てなかった……だって、スフィー泣いてたから、悲しかったから。撃てば、良かったのかもしれないけど、やっぱり、撃てなかったよ」

苦しそうに声を吐き出す詠美の頭を、ゆっくりと芹香が撫でる。
その手もまた、苦しそうに震えていた。
「泣いてたから、それ見ちゃったから、撃って、先を見る未来は……撃たれて先のない未来よりも、後悔するって、思ったから……」
ばかやろー、と、御堂の声が聞こえた気がした。
「今行くね、和樹、由宇……したぼく……よてい！」
「……」
芹香の口が、『後はお願いします』とはっきりと動いた。
帽子が血溜まりの上にぱさりと落ち、美しい黒髪がHM―12の腕を撫でた。
こんな島でも、その黒髪だけは変わらず綺麗だったから。
「そんなこと言わないでくださいよ～！」
だから、目の前がなおさら信じられなくて、泣いた。
機械でも、泣いた。
「……」
必ず、道はあるから、と呟いて、詠美に重なるように倒れた。
「芹香お嬢様っ！」
「綾香ちゃん……浩之さん――」
……早まっちゃったね」
ふるふる、と芹香が首を横に振る。
「――ごめん――」
芹香の腕の中で、ゆっくりと息を吐いて、そして力が抜けた。
「詠美さんっ、芹香お嬢様……」
HM―12は何も出来ないままに。
それでも、何もしないよりはと芹香に近付く。
「……」
「えっ？　そんな……そんなこと、言わないで下さ

最期に、はっきりとそう言った。
……ＨＭ―12です。
この部屋は、静かになりました。
先程までの騒音と悲鳴と、怒声とが、嘘のように静まり返ってます。
まるで時が止まったみたいに思えます。
私は機械です。だから、年を取ることもありません。
壊れることはあっても、死ぬことはありません。直せばまた動けるんですから。
だから、死ぬことの悲しさが分からないです。
だけど、さっきまで一緒に楽しくお喋りをしていた詠美さんと芹香さんが眠りについて。そして、彼女たちは、もう、二度と目を覚ますことはないんだと気づいて。
人が死ぬってことがなんとなく分かったような気がします。
今はただ、悲しいです。

十一番　大場詠美　死亡
三十七番　来栖川芹香　死亡
【残り12人】

813　狼煙

現れたのは女装の変態男、いや包帯男、柏木耕一。
アタシの記憶にある姿よりも、遥かに包帯だらけで血塗れだ。隣で呆然としていた七瀬が、ようやく口を開く。
「耕一さん……なんだか、どんどん酷くなってない？」
そう言った後も、ぽかんと口を開けたままだ。
アタシよりも先に、耕一さんと出会っている七瀬にとって、その変化は口の塞がらないほど酷いらし

い。
……無理もない。漫画のように身体のほとんどを包帯で覆われており、しかも滲む血のせいで白い部分がほとんどないのだから。
「ははは……面目ない」
乾いた声で、耕一さんは心底申し訳なさそうに笑う。だが、すぐに真顔に戻すと、情況を説明しはじめた。
「もう聞いたと思うけれど……初音ちゃんが……死んだんだ。それで梓が暴走しちゃって……離れ離れになっている」
それについては、言葉もない。一足先に出発したアタシたちは、頷くことしかできなかった。
だが耕一さんの本論は、過ぎた事実に絞られてはいない。
「その上、さっきマナちゃんが倒れたんだ。疲労のせいだと思ったし、マナちゃんも梓を追えって言うから気配を追って来たんだけど……いま思えば、二人して髭面の親父にハサミで斬られた後の話なんだ。そのとき毒か何かにおかされたのかもしれない」
冷静に分析して見せた耕一さんの、唯一残った欠陥部分を七瀬が問い質した。
「ちょ——ちょっと待って？　耕一さんは、大丈夫なの？」
「ああ？　うん、今のところ大丈夫みたいだな。俺にはあまり、効いてなかったんだと思う。走っていてようやく解った程度で、少し熱っぽくて眩暈がするぐらいで済んでいる」
熱っぽいのは、この島に来てからずっとな気もするけどね、と付け加える余裕もあるようだ。
「それで俺の身体の事はともかく、マナちゃんは参ってるから、相当やばいかもしれない。だけど梓も探さなくちゃならないんだ。梓には——当然、会ってないよな？　それじゃ毒を治療できるような、そういう物がありそうな場所に、心当たりは無いかい？」

心当たりは、ある。だからアタシは七瀬と、顔を見合わせた。だが目的のものがありそうな場所、すなわち保健室は、小学校自体の危険性を考えると、近付けない。思わず二人して、難しい顔になってしまっていた。

「あの……これから行くところ、病院みたいのは……無いのかな？」

いつの間にか這い出していた、観鈴がぽつりと呟くように言った。

「……これからって？　そう言えば、どこへ行く気だったんだい？」

知らない人物の出現に戸惑いつつも、耕一さんは疑問を口にした。

七瀬が全てを言ってしまう前に、軽くお互いを紹介させて、アタシが情報を絞る。

……潜水艇のことは、下手に言いふらさないほうが、良いような気がしたから。

「ほら、みんなでロボットと戦ったじゃない？　あの施設を、今は占拠してるらしいのよ」

そこでいったん言葉を切って、七瀬のほうを見る。

あまり賛意は示していなかったけれど、意味は通じたらしく、七瀬は軽く頷いた。アタシも軽く頷き返して、更に続けようと……したんだけれど。

「そこで、〝これからの事〟を皆で相談しようと思って——」

「そうか、やっぱりあの施設に行くしかない——」

「どうしたのよ晴香？　それに耕一さんまで——」

「は、晴香さん、これって——」

〝それ〟を見るなり、アタシと七瀬は、思わず走り出していた。観鈴と耕一さんも、ついて来ている。

(芹香さんと北川は……どうなった!?)

この島に来て、何度となく感じたもの。

……嫌な、予感がした。

すっかり気分を害した北川と、使命感に燃えてい

つになく静かな月宮さん。かなりの凸凹コンビを連れて、私は岩場を抜けた。
よくもこれだけの間、文句を言い続けられると感心するほど、北川の不平不満は垂れ流されたままになっている。何度か言い負かしてやったものの、根本的解決法は北川の命を絶つか、声帯を潰すしかないと結論して、無視を決め込むことにして久しい。
むしろ私は、前方へ意識のほとんどを注いでいた。施設で得た情報だけが、確実なものだったのだから、あとは自分の目と耳が頼りにならざるを得ない。だから、北川の相手をしている暇など無い。
そうして神経を針のように尖らせ、前進する私の耳に、不穏な音が飛び込んできた。駆けて来る足音。それも、多数だ。
(月宮さん、それに北川！　静かに、伏せなさい)
北川が、この期に及んで文句を垂れる。
(なんだってんだよ、さっきから！　またどうせ風の音かなんか……ん？　違うな？)
(でしょう？)
しかし、さすがに異変を感じ取ったようで黙り込んだ。三人して、静かに伏せる。
そのとき僅かに見えた、その影は——
「な——七瀬さんっ!?」
「誰!?　——って、あんた藺!?」
私は（あまりに私らしくないけれど、極めて即座に、そして無防備に）立ち上がった。転がり込むように、七瀬さんが飛びついてきた。私も獲物を狩るフェレットのように、文字通り飛びついていた。
細かい形容は必要ない。ただ、嬉しい。
〝今までの私〞と同じ気持ちが共有できている。北川と月宮さんが、唖然としているのを無視して、七瀬さんにしがみついていた。
「七瀬さんっ！」
「藺!!」
七瀬さん……今はまだ、気付いていないようだけど。きっと私の変化に驚くだろうな、と期待を膨ら

ませていた。
髪の毛、どうしたの？　引っ張れなくて、寂しぃよ。でも、生きててくれて嬉しいよ、なんて事を考えながら。

しかし、喜びの時は一瞬でしかなかった。喜びを言葉にする前に、邪魔が入ってしまったのだ。
最初に固まったのは、北川。
「北川！　施設は、芹香さんは、どうなったの!?」
切羽詰った声で尋ねられているにも関わらず、余裕たっぷりに返す自称紳士の慇懃無礼な言い草は
――
「晴香さん、相変らず口調が厳しくてらっしゃいま――」
――言い草は、炸裂しなかった。
そして月宮さんが、喉に餅でも詰まらせたような、お馴染みの奇声をあげる。
「どうし――うぐぅ!?」
窒息死しそうな表情のまま、固まった。
遺憾ながら最後になったのは、私。
「施設に何が――」
開いた口が、塞がらなかった。
全員が同じ方向を見て、絶句していた。暗さのために、規模は断定できないのだが、あれは間違いなく――煙だ。おぼろげに輝く月の光を燻すように、煙が立ち昇っている。その下に、目指す岩場の施設があるはずの場所だった。
まるで、そこに希望を託していた者を呼び込む、狼煙のようであった。

814　空を見上げて

――――脳が、痛む。
フランクはどこことも知れぬ森の中を、独り歩いていた。

周りにいっさい注意を払わず、その足取りは危うい。
そのために何度も地面に足を取られて転んだり、草や枝で小さな傷を作ったりもしていたが、
しかし、それらを気に止める様子は無かった。

――おかしい。

さっきの奴らは、いったい何だったんだ？
確かに殺したはず――そう、この電波で確かに奴らの頭を焼き殺してやったはず。
なのに、起き上がってくるとは、どういうことだ。

ふと気が付くと、フランクの周りをぶんぶんと一匹の蚊が飛び回っていた。鬱陶しいことこの上無い。
フランクはそれを忌々しげに睨むと、電波の力でその蚊を破壊した。
蚊は粉々になって消えた。だが、耳障りな羽音は消えなかった。

それどころか、肉体を失ってますます身軽になったとでもいうように、蚊は軽快に飛び回っていた。
フランクは平手で蚊を木に叩きつけた。
今度こそ羽音は消えた。

ふと気が付くと、フランクの腕を一匹の蜘蛛が這い回っていた。鬱陶しいことこの上無い。
フランクはそれを忌々しげに睨むと、電波の力でその蜘蛛を破壊した。
蜘蛛は体液を飛び散らせ破裂した。だが、這い回る感触は消えなかった。
それどころか、肉体を失ってますます身軽になったとでもいうように、蜘蛛は軽快に這い回っていた。
フランクは蜘蛛を払い落として何度も何度も踏みつけた。
踏みつけながら、フランクは思わず笑い出したくなった。

――――くくく……なんということだ。
この力では〝虫も殺せない〟じゃないか。
何なんだ……。
これは何なんだ……。
これは……いったい……何なんだッ!!
怒りに任せて木に拳を叩き付ける。
わずかに木がゆらめき、ざあと音を立てて一斉に水滴が落ちる。
フランクはそれを頭から浴びた。
――――なんて無力なんだ、俺は。
これでは何も殺せない……ましてやあの悪魔を殺すことなど……。
いつの間にかフランクは開けた場所へ出ていた。
夕暮れの薄明かりに照らされて、鳥居がそびえ立っている。
そしていくつか死体が転がっていた。
これ幸いとばかりにフランクは目に付いた死体を漁る。
――――力だ。力が足りない。銃でも何でもいい。奴を殺せるだけの何かを――。
だが武器の類は一切見つからなかった。誰かが全て持ち去った後のようだ。
いらつきながらも次の死体を調べようと、フランクは頭をあげる。
そして、彼はそれを見た。
見てしまった。
彼にとってあり得ないはずのものを。あってはならないものを。
フランクは声にならない叫びをあげながら、それに向かって走り寄る。

彼は激昂してその死体に掴みかかった。

――何なんだお前は！

お前は偽物だ！　俺はまだ殺してない！　こんなところでお前が死んでいるはずが無い!!

この偽物がっ……!?

ざくりと指が切れる感触。痛みでわずかながら落ち着きを取り戻す。

見れば、襟首から紙の様なものが覗いている。掴んだ際にこれで切ってしまったのだろう。

フランクは知っていた。それは反射兵器と呼ばれるもの。彼の狙撃を何度も阻んだもの。

彼はその死体の服を捲くる。胴回りにそれが隙間無く貼り付けられていた。銃撃をうけた痕もある。

――ああ、そうなのか。これは、そういうことなのか。

――バカな……見間違いだ、そうに決まってる。

そんな馬鹿なことがあってたまるか……そんな馬鹿なことが……そんな馬鹿なことがそんな馬鹿なそんなそんなそんなばかなバカナ馬鹿な馬鹿ナばかナバカな馬鹿なばかなバカナ馬鹿なバカな馬鹿なばかなバカナ馬鹿な馬鹿ナ馬鹿なバカな馬鹿なばかなバカナ馬鹿な馬鹿ナ馬鹿な馬鹿ナばかナバカな馬鹿なばかなバカナ馬鹿な馬鹿ナばかナバカな馬鹿なばかなバカナ馬鹿なバカな馬鹿なばかなバカナ――

しかし、それは確かにそこにあったのだった。

名も知らぬ少年の、死体。

言葉も無く、フランクは呆然と立ちつくしていた。

やがて震える手をその死体に伸ばす。

冷たい。

それが雨のせいだけでないのは、明白だった。

それを見た瞬間、フランクは不意に合点がいった。
これは確かにあの少年の成れの果てなのだと。
理屈ではなかった。冷静に判断する神経など、とうの昔に擦り切れている。
人はどうしようもなくなった時、笑うしかないという。
フランクは腹の底から笑った。痙攣のような笑い。
ふ、と彼の全身から力が抜け、そのまま大の字になって土の上に転がった。
空が見えた。
喜ぶべきなのだろう。憎き仇が死んだのだから。
例え自分のやってきたことが、全くの無駄だったとしても。
あんな真似までして力を求めた事が、すべて無意味になったとしても。
だが、今湧き上がってくるのは大きな疲労感だけだった。
一時は皆殺しすら考えたはずが、少年の死体を見てしまった今では殺意も湧き上がってこない。
立ち上がる気力も無い。
ほんのわずか動くことすら億劫だった。
このまま消えてしまえるのなら、とも思う。
何にしろ――自分の役目は終わったと、そういうことなのだろう。
――祐介、お前の仇は死んだよ。
結局何も出来なかった。俺のやるべきことは消えた。もう俺には何もない。
ああ、コーヒーが飲みたい、な――。

815　駄目な人

彼はうなだれる。
目を覚ましたら、
待っていたのは現実。
認めたくない現実。

こっけいな現実。
でも現実は現実。

彼は寡黙だ。
それが人には冷静に見える。
本当はただ口下手なだけ。
伝えたいことが上手く伝わった時なんてない。
だから、彼は友達が少ない。

彼は感情の変化を表に出さない。
それが人には落ち着いているように見える。
本当は勇気がないだけ。
生の自分を出して嫌われるのが怖いだけ。
だから、彼は友達が少ない。

彼は友達が少ない。
それが人には孤高に見える。
本当は欲しいのに作れない。
作りたくても作れない。
作り方がわからない。
だから、彼は友達が少ない。

そんな彼も年を取る。
彼は二人の甥を知ることになる。
親族が集まる時には必ず面倒を見る。
二人は彼に懐いた。
彼は二人に懐かれた。
そこには嬉しさがあった。

二人との仲はその後も続いた。
時たま、彼らは喫茶店に遊びにきた。
彼はわざと苦いコーヒーを出す。
二人は我慢しながらそれを飲む。
性格からして出された物を断ることはできない。
苦しくなってきたところで飲むのをやめさせる。
心の中で笑いながら甘いものを出してあげる。

二人は怒る。笑いながら。
彼は大切に思う。その時間を。
そこには楽しさがあった。

彼と二人は年を取る。
二人は大学生と高校生になった。
付き合いは続き、大学生とは一緒に働いた。
二人は着実に成長していった。
彼は良い叔父であろうとした。
だから、二人に好きな人が出来た時は、
乏しい経験を捻り出し、相談に乗ってあげた。
彼は恋を実らせることが出来なかった。
二人には成功してほしかった。
そこにはちょっと、悲しさもあった。

二人は大切な存在だった。

そこで現実に戻る。

色々あった。
自分は努力したつもりだった。
結果はこれだ。
情けない。消えたい。死にたい。

二人を殺し合いに参加させる。
一人は死んでしまう。
仇をとろうとする。
失敗を続ける。
死姦する。
狂う。

その行動は全部無意味。仇はすでに死んでいた。

そっと首に手をかける。
死のうとしてみる。
でも死ねない。
死ねるほどの勇気もない。

とりあえず、彼は動く。
彰に会うため。
会ったらどうするのかも解らない。
ただ、彰に会いたい。
でも、なんて言えばいいのだろう。
自分は口下手だし。

結局、彼は逃げた。

816　正しいことを

静寂が、辺りを支配する。
月光を受け、佇む施設から昇る煙に
だれもが、言葉を発せなかった。

「何かあったと考えるのが、妥当ね……」
最初に呟いたのは、繭。
「ヤバイわね。ぐずぐずしてる暇はないわ、さっさとあそこに戻らないと……」
「そ、そんな。それじゃあ梓さんは……」
今にも駆け出しそうな繭に慌ててあゆが繭に問い掛ける。
「仕方ないでしょ！　向こうには残してきた三人がいるのよ！　一人の命と三人の命、助けるなら人数の多い方でしょ！」
そう言ってから、気付く。
私、なんてイヤな女なんだろう。
変に達観した考えが、頭を支配して、酷い台詞が平気で出る。
そんな私に月宮さんは、涙ぐんで反論する。
「う、うぐう。な、ならボク一人でも行くよ！　だって梓さんは学校でボクを助けてくれた！　今度はボクが、助ける番だよ！」
ああ、なんて美しい台詞なんだろう。
同じ助けるでも、私とはなんという違いだろう。
生き残りたいから――助ける。

その人を救いたいから——助ける。
「ちょ、ちょっと二人とも落ち着いて！　こんなとこで言い争っても……」
妙に饒舌な藹に面食らいながらも、七瀬が仲裁に入るが、
「止めてもダメだよ！　ボクは絶対に行く！」
そう宣言すると、あゆは自分のバッグを引っつかんで走っていった。

あゆが去った後、遅れていた観鈴と耕一が現れて合流した。あゆを除いて、北川、七瀬、晴香、藹、耕一、観鈴と六人、現状でこの島最大の集団になっている。
施設から出ている煙は消えることはなく、むしろ増えていた。
「やっぱ、俺も行くわ。月宮さんを一人には出来ないしな」
簡単な状況の確認をした後、北川はそう言った。
「施設の方は、あんた達に頼む。俺は月宮さんを探しに行く。上手くいけば、外に出た連中を纏めてつれて帰れるかもしれないしな」
「はぁ!?　そんなの認められる訳ないじゃない！」
藹は激昂しながら北川を非難した。
「月宮さんは私情で飛び出していったのよ！　残りの人数が少なくなった今、なるべく集団行動をしなきゃいけないってのは、あんたのその足りない脳味噌でもわかってるでしょ!?」
そう詰め寄る彼女に北川は頭を掻きながら、
「確かに、お嬢ちゃんの言うことは正論だと思うぜ。だけど、俺たちは人間だ。感情があって、それぞれ大切にしたい物があるんだよ。あの子は俺の親友のダチだ。その親友はこの島で俺を助けて命を落とした。だから、俺はあの子を守りたい……そりゃ、この選択は、間違ってるのかもしれないけどさ」
いつものようにおどけた口調の北川。だが、話している内容は、真剣そのものだった。

「誰にだって譲れないものがあるんだ。誰もが正しい事だけを選べる訳じゃない。そんな機械みたいな考えを他人に押しつけていたら、いつか痛いしっぺ返しを食らうぜ？」

そう言い残して、北川は夜の闇に姿を消した。

（機械……私が？）

北川がその場を去っても、藺はその場に立ち尽くしていた。

（違う！　違う！　違うっ！　私はただ、なるべく多くの人が生き残れる選択を考えて――）

けれど、多数の為に少数を切り捨てていくなら、それはやはり機械と同じではないのだろうか。

「ねえ、椎名さん。施設の事なんだけど……」

晴香の問いかけも、彼女の耳には届かない。

（解らない……解らないよ……どうすればいいの……、教えてよ、こーへい。教えてよ、みずかおねえちゃん……）

一人、悩んでいた。

817　約束を

（誰もが正しい事だけを選べる訳じゃない……か）

耕一は北川の言葉を反芻していた。彼自身、この島に来てから、何度も自らの選択を後悔していた。

（楓ちゃん、初音ちゃん――）

失われてしまった大切な家族のことを思う。彼自身が違う選択をしていたら助けられたかもしれない――など考えるのは傲慢かもしれない。だけど、どうしても、考えることは止められない。

（後悔はいくらでもある。それでも――）

今はこれからする選択のことを考えるべきだ。失われた命よりも、生きている命を優先すべきなのだから。まだ、耕一にとっての大切な人は、何人も生き残っている。

（マナちゃん……）

置き去りにしてきてしまった少女のことを思い返す。髭面の男に襲われてから、突如衰弱した彼女。状況から見て毒を使われた可能性が高い。
そして、今、耕一の手元には応急処置セットがある。
全身傷だらけの耕一を見かねて北川が置いていってくれたものだった。どうやら参加者で占拠したという管理者側の施設で見つけた物らしく、中には解毒薬とおぼしき物があった。
固定されたガラス瓶と、小さな注射器。ラベルには英語でアンチドーテ――解毒薬と書いてある。自分達が受けた毒に対応しているかはわからないが、試してみる価値はあるだろう。
注射器を使って自身の体に溶液を流しこむ。
（……どうやら、当たりだったみたいだな）
少しずつ体の中に渦巻いていた不快感が引いていくのを感じる――体中がぼろぼろなのは相変わらずで、元気になったとは、お世辞にも言えないが。
薬の効き目を確認する為、木に持たれて休んでいると、観鈴がおどおどしながら近づいてきた。
「あ、あの……わたし、包帯変えましょうか？」
「……ああ、頼むよ。ありがとう」
酷い状態の包帯を見て、観鈴は嘆息する。
「うわっ……包帯、すごいぼろぼろ……」
彰との戦闘で耕一はミイラさながらになっていた。元々、巻かれていたのが大雑把だったせいもある。
「……そういえば、これは晴子さんに巻いて貰ったんだった」
「そっか。お母さん、耕一さん治療したって……」
目を細めて、乱暴に巻かれた包帯に愛おしそうに触れる観鈴。
「やっぱり晴子さんは君のお母さんだったんだね。お母さんには、会えたのかい？」
「……はい」
喫茶店で別れた晴子の事を思い出す。死んだと思って居た娘が無事だったのだから、きっとすごく喜んだに違いない。

「そうか。それで、晴子さんは……？」
耕一は深く考えずにそう聞いた。
「……死に、ました」
観鈴は、目を伏せて、そう答える。耕一は自らの失言を悔やんだ。
「……すまない」
それからしばらく、無言で包帯の交換が行われる。
「そうか、晴子さんが……」
親しくした相手が亡くなるのは、やはりショックであった。耕一は命の恩人だった彼女のことを想う。
そして、ひとつの誓いを立てる。
(俺は、生き残っている俺の大切な人達を絶対に護る……北川くんには、申し訳ないが)
耕一は北川から施設の様子を見に行って欲しいと言われていた。そうするのが正解なのだろうと考えていた。だが、この島では命は簡単に失われてしまう。それが、正しい選択ではなくても、自分の大切な人達を護りたい、今はそう考えていた。

(千鶴さん、梓、マナちゃん……)
マナは毒に犯されて危険な状態だ。そして、大事な従姉妹たちもまた危うい状況にあるらしい。彼女たちの事を放ってはおけない。
「みんな、聞いて欲しい」
耕一がそう言うと、七瀬、晴香、繭の三人が一斉に耕一に振り向いた。
「本当なら直ぐにでも、みんなで施設の様子を見に行くべきなのだと思う。けど、俺にはどうしても助けたい人がいるんだ」
彼は自分の持っている小さな箱を掲げて見せた。
「これは北川くんが置いていってくれた応急処置セットだ。この中に解毒剤が入ってた。これを使って、毒に犯されて危険な状態になってるマナちゃんを助けに行きたいと思う」
「あなたまで、何を——」
「マナちゃんが動けるようになったら、千鶴さんや

梓を探して、北川くん達とも合流しようと思う。施設にはそれから向かうつもりだ」
「そんな……施設の三人は、見捨てるって言うの⁉」
「繭」
興奮した繭を七瀬が冷静に諌める。七瀬と晴香は仕方ないわね、と達観した雰囲気だった。なお、観鈴はピリピリした空気にただ狼狽している。
「俺たちが合流するまで待つか、先に施設の様子を見に行くか。それは、君たちに任せる」
「……わかった。あたし達がこれからどうするかはこっちで相談するとして、耕一さんもそんなにのんびりとはしてられないんでしょ？」
耕一の表情を見て、止められないと思ったのか、そもそも最初から止める気が無いのか、七瀬は淡々と話を進める。
「……ああ」
「じゃあ、行きなよ。約束、したんでしょ？」
「……ありがとう」
それで話が終わろうとするが、まだ繭は納得できていなかった。
「でも、マナって人は、もう死んでるかもしれないんでしょ⁉　それなのに、そんな約束守っても何の意味もないじゃない！」
失言だった——発言した繭自身もそう思う程に。けど、自制することができなかった。
「それは、違うんじゃないかな？」
でも、耕一はそんな彼女を叱責することはなく、ただ、優しく諭すだけだった。
「こんな状況だからこそ、約束は守る必要があると、俺は思うんだ」

818　二つの機械

七瀬さん、晴香さんの二人と装備を交換し、耕一さんは行ってしまった。
「……三人のうち誰かが……凶行？」

私は思わず呟いていた。あの三人のうち？　誰かが？　そんなことが……あるのだろうか？
「藺っ‼」
私を呼ぶ、七瀬さんの大きな声。
「ぼーっとしてないで！　みゅーでもなんでもいいから、返事してよ！」
七瀬さんが……叫んでいる。そして晴香さんが、観鈴さんの持っている機械を指差しながら言う。
「藺……教会以来かしら？　迷っているところで悪いけど、これを見なさい。施設にはもう、一人しか残っていないみたいよ？」
……050。この番号はスフィーさん。
私は、彼女のことをよく知らない。凶行に走る可能性を……否定できない。だけど、私は首を振った。
「巳間さん。詠美さんと芹香さんは管理者のレーダーでは感知されないの。探知機付きの爆弾を吐き出したから。私もそうだから映ってないでしょ？」
そして爆弾のからくりを、皆に説明した。
七瀬さんたちは、どこかで聞きかじっていたのだろう、そういえばそんな話もあったわね、と素早く納得した。
「それじゃあ行ってみないと判らないじゃ——ちょっと……待って？」
ふと思い出したように、七瀬さんがもう一つ機械を取り出す。
「これ……藺も反応してない？」
「え？　これは……？」
それは、北川が持っていた志保ちゃんレーダーと言う名の探知機だった。感知方式が違うのか、この場所には私を含んだ四つの反応点がある。ふざけた名前の割に高性能のようだ。
しかし、それでも。施設の反応点は、ひとつだけだった。
「詠美さん……芹香さん……！」
スフィーさんが凶行に走った、というのだろうか？　もしもそうなら、ＣＤはどうなるのだろう？

私はＣＤの魔法を発動させるときに、北川が施設に居られるように付いて来た。けど、魔法使いが居れば、北川が居なくても支障は無い筈だった。
しかし、芹香さんはもういないし、スフィーさんが敵ならば……もう本当に、北川しか残っていない。それを北川は解っているのだろうか？　本当に、後悔しないというのだろうか？
第一ＣＤは、北川だけの問題じゃない。御堂のオッサンや、詠美さん、そして私の問題でもあるはずだ。
北川達の言う通り、確かに損得勘定で行動を決めるのは、正しくないのかもしれない。だからって、バラバラになるのが正しいはずもない。
……いや、正しいとか、正しくないとかいう問題じゃないのかもしれない。
私は、私の信じる道を行くしかないんだ。
ぱん、と自分の頬を叩いてみる。皆が驚いて、固まる。構わず大きく息を吸って、大きく吐いてみる。
虚勢かもしれないし、気のせいかもしれないが、とりあえず気持ちを落ち着かせた。
「みんな、お願い。北川を探すのを手伝って欲しいの。あいつの代わりは――梓さんたちを探すのは――私たちでもできる。でも、あいつにしかできない事が、施設にはあるのよ！」
返ってきたのは、無言。見ると晴香さんが考えていた。ＣＤの封印について、まくしたてるように説明しようとした私を、軽く上げた手で押しとどめる。そして視線を合わせたまま肩をすくめ、薄く笑って言った。
「いいわ。私、叶えてあげるように心掛けているの――胸の小さい、チビすけのお願いはね」
私は繭という少女に由依の姿を重ねていた。馬鹿っぽい由依と違って賢しげだし、胸だって由依より小さいけど。
高槻との戦いで私を守って死んだ彼女には何もし

てあげられなかったから。急に胸の事を言われて、怒ればいいのか、感謝すれば良いのか困惑している藺を見て、私は自然に笑みがこぼれた。
なにはともあれ、当面の方針は決まった。
今居る全員で北川を捕獲。その後、人数を分けてでも急ぐべきなのか、全員で戦力を整えていくべきなのかは悩ましいところだ。
施設に残っている参加者は一人のようだが、管理者側の人間が再占拠している可能性もある。
まあ、それからの事は、後で考えたらいい。
そこでふと、思考が止まった。私と七瀬はそれでいいとして、観鈴はどうなんだろう。
「――ところで観鈴、あんたはいいの？　施設の他に用事があったりしない？」
どう見ても人畜無害そうな彼女だが、だからといって目的がないとは限らない。
しかし、母親と往人さんを失った彼女には、あまり目的意識はないようだった。

「えと……わたしは……」
……こういう調子で、生き残れるのだろうか？と心配になる。この混沌とした状況下で、心を強く持たなければ、いつおかしくなっても不思議はない。
「とりあえず、北川さんを探したいかな……」
やっと出た意志らしきものは、これだけだった。
藺に引きずられただけのような気もする。
彼女は――往人さんや、母親の死について何も話そうとしない。
……葉子さんや、郁未がやったのだろうか？
いずれにしても〝知らないでいいこと〟な気がしたから――黙っていることにした。
今はただ、彼女の意志を尊重してやろう。
そう、思っている。
七瀬が、藺を珍しいオモチャのように弄くりまわし、しきりに話し掛けていた。藺は藺で、何か思うところがあるのだろうか、それにじっと耐えてる。

眺めていると面白いのだが、今は時間が惜しい。
「ちゃっちゃと北川捕まえて、ＣＤの封印とやらを解かせないといけないんでしょ？」
「そうです。たぶん四枚のＣＤは中身が類似しているだろうから、解析は早いと思うんですが」
「解析だとか言われても、解んないけど……その辺は北川とアンタに任せるよ。北川はすぐ捕まるから、その後のことを考えておいた方がいいわよ」
そこまで言ったとき、繭が不思議そうな顔をして尋ねてきた。
「巳間さん……どうしてそんなに楽天的なんですか？」
「失礼ね……なにも無意味に楽天的って訳じゃ、ないわよ？」
振り向いて七瀬に合図をすると、一瞬きょとんとアホ面晒した七瀬が、すぐに気が付いて例のブツを取り出した。
「アタシ達には、あれがあるじゃない」

この妙なレーダーは、観鈴のレーダーで感知できない北川をも、はっきりと捉えていた。
……北川は迷走しているのだろうか、そう遠くはないようだ。それを見た七瀬が、おもわず呟く。
「あいつ……本当にあゆちゃんを追ってるのかしら……」
「それは……どうかな……」
「……不安ね……」
「……北川さんって……」
今や最大の心配事は。
北川の追跡能力だった。
「うぐぅ……ここ、どこだろう……。千鶴さん、梓さぁん……」
ついでに、もう一人も疑わしかったりした。

819　機械

静寂に包まれていた部屋の中にその音が響きわたる。
――ブン――
それはスフィーに撃たれた為に一時強制的に停止状態に陥っていたＧ．Ｎ．の起動音だった。
メインモニター全壊。
内部損傷率軽微。
任務遂行に特に支障無し。
よし、これなら問題無さそうじゃな。
自己診断を終えたワシは部屋の中の状況をチェックし始めた。
まずセンサーに異常反応してる煙を施設外に排出した。
さてと、まず室内の様子を。
……チッ。
室内カメラがさっきの騒動でやられとる。
これでは室内をモニター出来ん。
「おい！　ロボット！」
音声出力装置も一部やられたのか、くぐもった声しか出ない。
ロボットの反応無し。
「おい！　こら！」
もう一度呼びかける。
……また反応無しか。
仕方ないな。
ワシは別のメイドロボを呼び寄せた。
そいつの体をワシと接続し、のメイドロボの機能を使って室内をモニターする為じゃ。
――ブン――
さっきと同じ様な音と共にのメイドロボの目を通して部屋の様子が映った。
排出しきれていない煙で見えにくい視界に映った

のは、一面に赤いペンキがひっくり返されたかのような床に倒れている二人の人間とその側にいるあのロボットじゃった。
「おい！」
メインコンピュータの方の音声装置は修理しないと使えそうも無いため、ロボットの側に近寄るとのメイドロボの声帯装置を使って声をかけた。
「は、はい？」
ようやくワシに気付いた様じゃ。
「あ〜、メインモニターが撃たれた後の説明を……。やっぱりいい。お主のメモリーを見させてもらうぞ」
その方が手っ取り早い。
「え!?」
戸惑っているヤツを無視して別のコードをＨＭ—12とワシに連結されているメイドロボに繋いだ。
「フン、なるほどな」
ロボットからコードを抜きながらワシはそう呟いた。
「メインモニターを撃ったあのスフィーとかいう嬢ちゃんが芹香嬢と詠美嬢を殺した訳か」
「はい……」
「まぁ、ＣＤが無事だっただけ儲けモンじゃろうな」
ロボットが持っていたＣＤ五枚は奇跡的に無傷だった。
「それじゃ、ロボット。そこの二人の死体を片づけとけよ。ワシはまだ調子が悪いからな」
「……」
何やら落ち込んでいる様子のロボットは一歩も動かなかった。
「こら！　さっさとやらんか！　それともその二人をいつまでも床に転がしておく気か？　ワシはそれでも構わんが」
「え!?」

「ほれ、とっとと片づけろ。その二人の扱いはお前に任せたからな。ワシは自己メンテしてるから」
「は、はい！」
ようやく動き始めたロボットを後目にワシはロボットのメモリーに残っていた映像を再生しだした。
……それにしても詠美嬢ちゃんは何をやってたんじゃ。
どう見ても先に撃っておればスフィーとかいう嬢ちゃんを殺して生き延びられたっちゅーのに。
全く分からんのう。
っと、ま〜た変な思考状態に陥っとるな。
詠美嬢も参加者の一人に過ぎんのに、その死を惜しむなんざどう考えてもおかしいぞ、ワシ。
やっぱりバグがあるな、こりゃ。
ついでだしバグの原因調査もしておくかな。
簡単なバグならいいがの。あまりに酷いバグならワシの手に負えんからな。
ワシはそこで一旦全ての思考を中断するとメンテナンスモードに切り替えた。

820　空の下の女の子

「観鈴ちん、ぴ〜んち」
観鈴は暗い森の中を一人で歩いていた。
「しっかり迷っちった」
にはは、と苦笑を浮かべる。
七瀬らと北川を探しに来たのは良かったが、しっかりとはぐれてしまっていた。はぐれてから随分と時間が経っている。
往人の人形を両手で握り締めて心細そうにとぼとぼと歩いていると森の右手のほうから人が争う声が聞こえてきた。
言い争う声の後に聞こえてきたのは銃声。観鈴は身体をびくりと震わせる。

「観鈴ちん、だぶるぴ〜んち」
怖い、でも、撃たれたのが北川さんたちの誰かなら助けてあげたい。
往人さんたちみたいに知っている人に死んで欲しくないから。
「観鈴ちん、ふぁいと！」
観鈴は勇気を振り絞って、銃声がした方に行くことにした。
森の中を小走りに走る。責めるような女性の声に体がビクッとなる。森が終わって視界が開けた。
観鈴が見たものは、倒れている少年と銃を構えている少女だった。
倒れている少年は七瀬彰、銃を構えている少女は柏木梓。
少女が構えた銃からは少量の煙が立ち昇っている。
少女が三日月型に笑みを浮かべ
「すぐには殺さない、あんたはあの子の仇だからな」
と、つぶやくのが観鈴の耳に聞こえてきた。
彰は右肩を押さえてうずくまっているのが見える。服の右肩、わき腹の辺りが血の色に染まっている。
……うめき声が聞こえる。死んではいないようだ。
観鈴も一見して理解した。少女が少年を撃ったことを。
考える前に身体が動いた。梓と彰の間に立ちふさがる。
「が、がお。駄目だよ！」
梓の目の前に立っているのは妹と同じ髪の色をした少女。
梓が構える銃の銃口が僅かに下がる。
——殺してしまえ。
声が頭の中に響く。下がった銃口が再び上がった。
「どけっ！　そいつはあたしの妹を殺したんだ。妹はこいつのこと好きだったんだぞ！　その妹を……こいつは……こいつはぁ！」
「それでも、やっぱりダメだよ！」

ガアァァン!!
銃声が響く。観鈴の頬から流れるのは一滴の血。
「どけって、いってるだろぉ！」
梓の言葉に観鈴は彰を顧みてからゆっくりと首を振って銃を構えた。
「どかない！」
梓の言葉に、観鈴は両手を広げ大きく首を振って拒絶する。
「だって、この人抵抗してないもん！　戦う気が無い人を一方的に殺すなんて、そんなの――そんなの、絶対おかしいよ！」
観鈴には事情は良くわからない。けど、それでもおかしいと思った。地面に倒れた青年は、殺されても仕方ないと受け入れているようにも見えた。死んじゃったら、おしまいなのに。
「わたし、死にたくない！　ここから生きて帰るんだって往人さんと約束したから！　生きて帰って、幸せな記憶をいっぱい作るんだって！　だから、ここで死ぬわけにはいかないの！」
――幸せな記憶……好きな人……お母、さん？
梓の頭の中に巣くう存在が、ほんの僅かだが動揺する。緩んだ支配によって、梓の頭に殺意以外の思考が浮かぶ。
「あたしは、妹を！　初音を、守りたかった！　今度こそ、あの子を幸せにしてやりたかったんだ！　親が死んで、叔父さんも亡くなって、それでも、耕一がやってきて……やっと、幸せになれると思ったのに……こんな島に連れてこられて、あんな風に死ぬなんて――」
涙を流しながら叫ぶ梓。構えた銃が、震えていた。
――守る……家族？　余の家族……
守ってくれたのは……りゅう、ゃ……うら、は……

「何があったかわからないけど、こんなの間違ってる！　人を殺して増えるのは、悲しみだけだよ！」
「……そんなのわかってるさ。けど、死んだあの子にあたしができることなんて、仇をとるくらいしかないんだ！」
「そんなことないよ……あるよ、できること。死んでしまった人の分まで、幸せになるの。幸せになって、最後に空に還るときに楽しかったってみんなに報告するんだよ」

——殺せ！　殺せ！　目の前の女を殺してしまえ！

梓は反応しない。銃口がだんだんと下がっていく。
「あの子が……優しかったあの子が……こんなこと望むはずがないよな。あたしが……間違ってた」
——殺せというに……ちぃ、この身体は面白う無い。
……人間風情が不快にさせてくれるわ。

梓の頭の中から神奈の気配が消える。
「ありがとな。あんたのおかげで助かった気がする」
頭を押さえながら礼を言う梓。
「にはは……安心したら腰、抜けちゃった……」
ぺたんと座り込む観鈴。
そこにやってくる気配があった。首だけを傾けてその人物を確認した梓はぼやくように呟いた。
「……千鶴姉……遅すぎ」

821　小さな奇跡

誰かを捜すといっても、あてはなかった。かつて自分が持っていたレーダーさえあれば——とも思ったが、それは結局無意味だった。あゆも、千鶴も、梓も、彰も、そして北川自身も、既に体内に爆弾を有してはいない。
施設のこと。

詠美のこと、芹香のこと、スフィーのこと。
ＣＤのこと。
（ま、気になることは他にも残ってたんだけどな）
観鈴のこと。どことなくレミィの面影がある彼女のこと。
そう、かつて観鈴の側には二人の男女がいた。一人は、観鈴に母と呼ばれていた晴子という女性。そしてもう一人は、あの国崎往人。正直なところ、彼ら——特に往人が簡単に死ぬとは思えなかった。だが同時に、まだ死んでいないとすれば、どんなことがあっても観鈴の側を離れるはずがないと思えた。
少年とやらを追っていった結果、何かがあったのだろう。
何があったかを観鈴本人から聞こうとするほど、彼も野暮ではない。彼女が話したくなった時に聞いてやれれば、それでいい。
ただ、寂しかった。
『だからって、ウチの観鈴に手ェ出したら容赦せえへんで』
そんなことを言っていた観鈴の母親は、恐らくもういないのだから。
『それと、その釘打ち機は捨てろ……電池はこっちで、使っちまったんだよ』
『酷いな、往人さん……もうちょっとで大逆転だったんですよ？』
『悪かったな』
そんなやりとりをして笑いあった往人も、恐らくもういないのだから。
でも、それで良かった。寂しさすら感じられなくなったら、もうお終いだ。
「うぐぅ……ここ、どこだろう……千鶴さん、梓さぁん……」
本来は何よりも暗闇を苦手とする月宮あゆが、こんな状況——宵闇と孤独に耐えていられたのは、ひ

とえにその決意のおかげだった。
千鶴と梓を見つけて、梓を説得して——最終的には、一緒にこの島を出る。
その決意が、彼女の決して図太くはない神経を支えているのだ。
だが、現実問題として彼女は自分がどの辺りにいるのかを分かっていない。
G．N．が千鶴に伝えた、梓の姿を最後に確認できた場所だけは彼女も聞いていた。しかし、それが実際にどの辺りかという話になると、結局分からない。
現在地も目的地も分からないのでは、どうしようもないではないか。
無論、あゆに方向感覚などという便利なものがあるはずもない。言うまでもなく目標は千鶴と梓のもとではあるのだが、実際どこに向かっているのか見当もつかなかった。ただ彷徨い歩いているのと大差ない。多分、自分の意志で皆がいた場所に戻ることもできない。もし仮に戻れたところで、既に施設に行ってしまった後だろうが。
「——うぐぅ⁉」
何かに躓いた。
思いっきり地面に顔を打ち付けた。
「うぐぅぁ……」
痛い。苦しい。暗い。寂しい。怖い。でも、立ち上がらなければならない。
「……おいおい、大丈夫かよ？」
それはまあ、二人揃って方向音痴だったからこそ起きた、小さな奇跡のようなものだった。
あゆを追っていたつもりで迷走していた。だが、あゆは北川の想像していた方向へ向かってはいなかった。彼女もまた迷走していたのだから。北川は、
どちらかが本来進むべき道を進んでいれば、ここで再会はできなかった。
でも、再会できた。ならばそれは必然に違いない。

北川が暗闇の中にあゆの姿を見つけ——もずく神とかいう急造の神様に感謝を捧げつつ——近付いて声を掛けようとしたその瞬間。
「——うぐぅ!?」
彼女は思いっきり前方に転び、地面にキスをしていた。
「うぐぅぁ……」
苦しそうにしながらも、泥だらけになりながらも、泣きながらも。なりふり構わず必死に立ち上がろうとしている彼女の姿を見て。
(どっかで見たような光景だよなぁ)
ちょうど観鈴のことを考えていたこともあって、北川はそんなことを思った。
あの時ほど切迫した事態ではなさそうだから、まあ随分と気楽ではある。
「おいおい、大丈夫かよ?」
すぐに駆け寄って、肩を貸してやる。
「き、北川さん!?」
それこそ鳩が豆鉄砲をくらったかのごとく、あゆが驚いた。
「みんな施設に行ったんじゃ——」
そう思ったからこそ、あゆは皆の元を飛び出したわけだが。
「みんなって訳でもないんだな、これが……立てるか?」
「う、うん……」
まだぬかるんでいる地面のせいですっかり汚れてしまってはいたが、幸いなことに大した怪我はない。
「どうして——」
本当は、まず最初に礼を言うべきだ——それはあゆにだって分かっている。
でも、最初に口から出てきたのは違う言葉だった。
それは疑問だった。
「どうして北川さんは施設に行かなかったの？　気にならないの？」
あゆには、千鶴と梓という絶対に譲れない目的が

あった。だが、もしそれがなかったとすれば、自分も間違いなく施設に戻ろうとしていただろう。
「そりゃまあ、気になることはいろいろあるさ。そういうお年頃だしな、これでも一応は」
施設のことも。
詠美のことも、芹香のことも、スフィーのことも。
ＣＤのことも。
観鈴のことも。
「だけど、施設のことは他のみんなに任せてきた。耕一さんもいるんだ、多分何とかなるだろ」
北川が危惧していた問題の一つ――リーダー不在という点については、耕一との再会で解決できた。これもまた大きな幸運だったと言ってもいい。
「それにほら、言い出しっぺは俺だろ？　だから月宮さんに最後まで付き合うよ。さっさと全員ひっ捕まえて、俺達も施設に向かおう」
施設を出る時に、繭が加わり――
施設を出た後に、七瀬、晴香、耕一、観鈴に出会い――
いろいろあって、今はまた二人に逆戻りしてしまったけれど。
でも。
きっと大丈夫だ。
一人じゃないから。
「…………」
そしてあゆは、本来最初に言うべきだった言葉を口にした。
「……ありがとう」
「んじゃまあ、気を取り直して出発するとしますか！」
景気良くそう叫んだ北川ではあったが。
彼もまた、どこに向かえばいいのかを見失っていた。もちろん、自分達が今どこにいるかも。暗闇の中を無計画に歩き回れば、まあこういうことになると予想はできたはずだ。それを打開する手段は、現

状では何もない。
　でも、動かなければ事態を変えられない。とにかく歩を進めようとして――
「待って！」
　かつて施設でそうだったように、あゆによって呼び止められた。
「ボク、難しいことはよく分からないけど、でもきっとこっちだと思う」
　彼女が指し示した方向は、北川が進もうとした方向と全くの正反対。
「おいおい、マジかよ？」
　もうあゆから恐れはなくなっていた。だからこそ、彼女は己の純粋な直感を信じることができる。
　すっかり忘れていた。
　自分は多くの人達に支えられてきたのだということを。
　自分は多くの人達に支えられているのだということを。
「きっと、こっちだと思う」
　もう片方の手でポケットの中の種を握りしめながら、はっきりと断言する。
「………」
　北川はしばし黙考したようだったが、すぐに表情を緩めて言った。
「人の性格が完全に反転したりとか、魔法がどうだとか、この島に来てからはそんなのばっかりだったよな。そういえば。ちょっとぐらい勘がいい奴がいたところで驚かないことにしとくよ。てことで、今度こそ出発！」
　北川は向きを変える。彼女の指し示していた方へ。そして一歩、踏み出した。
「うん！」
　あゆもそれに続いた。
　きっと大丈夫だ。
　一人じゃないから。

822　願いと約束と

私達一行は施設を出発してから休むことなく進んでいた。
目的地は誰にも分からない。
私を突き動かすのは『行かなくてはならない』という訳もなく沸き上がってくる使命感。
「おい！　そら！」
と、突然ぴろ君に声をかけられ、私は現実に引き戻された。
「何です、ぴろ君？」
こうして話をしているのも、もどかしい。
「こう闇雲に歩いても仕方ねぇ。ひとまず一休みしねえか？」
ぴろ君は足を止めることなく提案する。
「そうね、私も賛成だわ」
それに私の足に捕まっているポチ君も賛同する。
「で、ですが……」
私には休んでいる暇すら惜しいというのに。
「頼む！　少しで良いから休ませてくれ！　もう死んじまいそうなんだ！」
ぴろ君が悲壮な声をあげる。
「はぁ……このバカの為にもそうして欲しいんだけれど」
ポチ君が呆れたような声を出す。
だが私にもぴろ君の言葉が嘘であることは簡単に分かった。
ポテト君とあれだけの喧嘩をしてもケロリとしていた彼がこんなに早くバテるとは思えない。
むしろ疲れているのは私の方だ。
元々私は鳥の癖に飛ぶことがあまり得意ではなかった。
それなのにもうどれだけ飛び続けているのだろうか、見当もつかない。
きっと二人とも私のことを心配しているのだろう。

「……そうですね、この辺で休憩しましょうか」
私はその二人の好意に甘えることにした。
きっとお礼を言っても二人とも、とぼけるだけだろう。
私は心の中で二人に礼を言った。
「そら。お前さんは何を焦ってるんだ？」
木陰で休んでいる私にぴろ君がそう声をかけてきた。
「そうね、私も聞いておきたいわね」
「……そうですね、お二人にはきちんとお話ししておかないといけませんね」
こんな馬鹿げた行動をしている私に文句一つ言わずについてきてくれたのだから。
話しておかないわけにはいかないだろう。
そうして私は話し始めた。
突然の頭痛とともに襲ってきた形のないイメージ。
ひたすらに私を襲う、思い出さなくてはならないことを思い出せない焦燥感。
頭の隅に残る『ずっと一緒』という誰と交わしたかすらも思い出せない言葉。
いや、そもそも誰が発した言葉であるかすら思い出せない。
だが、その言葉が私を突き動かしている。
こんな馬鹿げた話にも二人は真面目な顔をして聞いてくれた。
「ふ〜ん、つまりその『誰か』ってのを捜し出せばいいわけだな」
「……信じてくれるんですか？」
そのぴろ君のあまりにもあっさりとした物言いに唖然としながら聞く。
もし私が誰かにこんな話を聞かされたとしてもとても信じられないだろう。
「あん？　何言ってんだ？　戦友の言葉を疑うわけ

ねぇだろうが」
　ぴろ君は私の質問にあっさりと答えた。
「そうね、作り話にしては漠然としすぎてるわね。だからこそ私もあなたの言ってることは真実だと思うわ」
　ポチ君もあっさりとそう言ってのけた。
「……」
　私は驚きのあまり何も言えなかった。
「ま、その『誰か』ってのは会えば、すぐに分かるんだろう？」
　ぴろ君がその空気を破るかのように気軽に話しかけてきた。
「え、えぇ。恐らく」
「だったら話は簡単だな。この島に生き残ってる人間はもうそんなに居ないからな」
「そうね」
「ま、このぴろ様に任せておけば安心だな！　大船に乗ったつもりでいろよ」
「何バカ言ってるのよ。アンタに任せたら出来ることも出来なくなるわよ」
「何だと⁉」
「さっきまでバカみたいな面してへばってた人の台詞じゃ無いわね」
「テメェ！」
「まぁまぁ、二人とも落ち着いて」
　二人が始めた言い争いを私が仲裁する。
　これはこの島での日常。
　この場にポテト君がいたらポチ君と一緒にぴろ君をからかっていただろう。
　でも、この場にポテト君は居ない。
　だがあの幻とも言える場所で交わしたポテト君との約束は未だ忘れていない。
　いつまでもこの二人と一緒にいたいということが私自身の願いでもあるから。
「ん？」
　ぴろ君が耳を立て辺りを見回し始めた。

私もすぐに何者かの気配を感じ取った。
ポチ君も同様のようだ。
(何かが近くにいるみたいだな)
(そのようですね、どうします?)
(そら。お前はすぐにポチと一緒に逃げられるようにしておけよ)
(あら、心外ね。これでも自分一人の身ぐらいは守れるわ)
(ヘッ、そうかよ。……よし、三人で様子を見に行くぞ)
警戒態勢を取りながら私達はその気配のする方へ近づいていく。
そこで一人の少女が眠っているのを発見した。
「おい、そら。こいつか? お前の捜し人は」
ぴろ君が前足で少女の顔を叩きながら聞く。
「いえ、違います」
何となくだが彼女は違うということは断言できる。
「そうか、それじゃ……」
ぴろ君が何かを言おうとした瞬間——。
「う、うぅん……」
彼女が目を覚ました。
そのあまりにも突然の出来事に私達も彼女もただお互いを見つめることしか出来なかった。

823 神・スフィー

——つまらぬ。まったくもってつまらぬ。不快極まりない。
神奈は苛立っていた。
少年と、その一派。
彰と、その内に秘めたる鬼。
マナ。
梓。
神奈が手駒として考えていた者に対しての接続は、ことごとく断ち切られていた。

死、あるいはそれ以外の何かの力によって。
もちろん、神奈自身も多くの力を失っていた。それ故に晴香への接続を保てなかった。だが、結界に影響を及ぼすほど力を失っているわけではない。その気になれば生き残りを屠ることも可能だろう。お互いを憎み、殺し合わないのであれば、自らの手を下さねばなるまい。遊戯としての意味は失われることになるが。それこそ不快極まりない話だった。
ただ、今のままでは駄目だ。消耗が大きすぎる。誰かに憑かねばならない。
贄が必要だった。
彼女は最後の手駒の下へと向かった。
交わした契約を果たす時が来たのだ。

施設、出口。
夜の闇の中にぽっかりと空いたその穴から出てきたのは、ピンク髪の、年端もいかぬ一人の少女。
手には全く似合わないＭ４カービンを抱え。体力も、気力も――そして魔力さえも尽きかけている。
スフィーだった。
（――私が終わらせなきゃ――私がやらなくちゃ――）
全てを失い、全てを見失っている彼女を支えていたのは、僅かに残っていた思い出。
健太郎、結花、なつみ、みどり、リアン。
かろうじて残っていたその思い出にすがって、彼女は彼女でいようとした。
たとえ結果として誰かを殺めることになっても、だ。
しかし、それは。
彼女から全てを奪おうとしていた。再度、圧倒的な流入。自分の想いだけでなく、思い出までもかき消されてしまう。かき消されてゆく思い出に、必死になってしがみついて、彼女は叫んでいた。
「いや！」
銃を取り落とし。

「こんなのいや！」
頭を抱え。
「いや――」
地面にうずくまった。
スフィーは地面にうずくまっていた。先程の叫びがまるで嘘としか思えないほど静かに。そして、静かに立ち上がった。
己の手を見る。決して小さくはない。
手だけではない――背格好も、体つきも、完全に大人の女性のそれになっていた。
――余に足る身体のはずもなかろうが、それほど悪くもないようじゃな。
神奈は、スフィーの身体に合わせて己の力の一部を変換していた。身体的な成長は恐らくその影響なのだろう――と、神奈は推測していた。
神奈は手を前に掲げ。
――ふっ。
変換した力――魔力を、より現実的な形に変換した。スフィーのルール――魔法に則って。それは光の矢となり、自らの手を放れ、近くの茂みを穿つ。
――悪くはない。
そして、自分の足下に落ちていたM４カービンを拾う。
引き金にかけた人差し指をほんの少し動かすだけで、人間の身体など致命的に破壊してしまう弾丸を射出する武器。そこには殺すという絶対的な意志以外、何も介在しない。
――興のない武器よの。

だが、あの愚か者どもにはこの程度がお似合いだ。

(……こんなのいや)

スフィーは失われてはいなかった。

更に削り取られてしまった思い出とともに、意識の海の、最も深く暗い場所に潜んでいた。

並の人間であれば、自意識などあっという間に吹き飛んでいただろう。

それ以前に身体が保たずに死ぬだろうが。

神奈の意識の流入に耐え切り、そして逃れることができたのは、彼女の天性の才能に依るところが大きかった。

でも、今の彼女は。

(……たすけて)

(……たすけて、リアン)

(……たすけて、けんたろ)

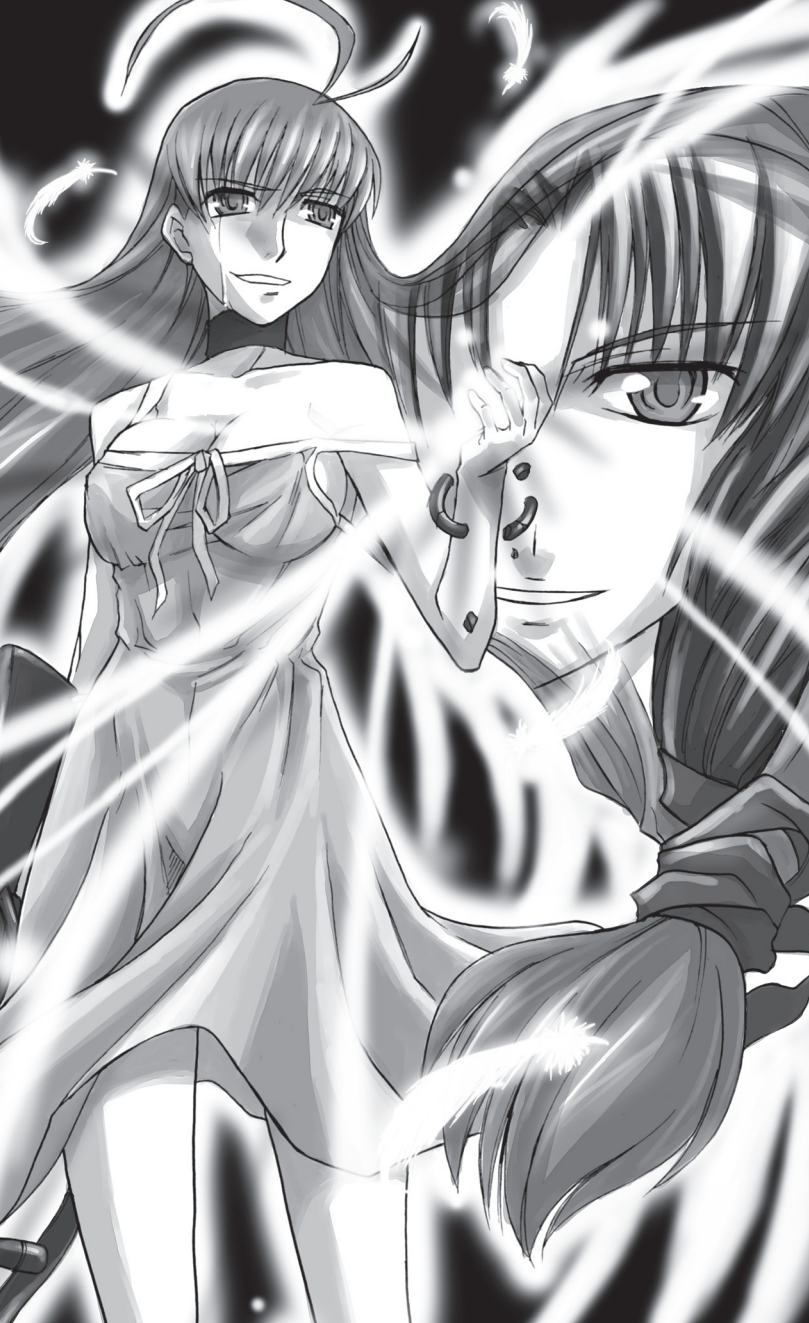
あまりに無力だった。

——せっかくの余の遊戯をふいにしたのじゃ、この程度の戯れには付き合ってもらおうぞ。

頬を伝う涙の筋は、乾かない。

あえて神奈は、絶望を囀ること、そして泣くことだけは許していた。神奈にとっては非常に居心地のいい場所だった。

——この余自らの手に掛かって死ねる。うぬらには過ぎた土産だと思わぬか？

誰に向けてというわけでもなく——いや、むしろ、この島で生き残っている全ての人間に向けられたものか。銃を手にしているスフィーの身体で、神奈は呟いた。

824　傀儡と道化と、人間達と動物達

(誰？　長瀬さん？　生きて……!?)
スフィーの意識は未だ消え去ってはいなかった。
男がのろのろと歩きながらスフィーの視界に入ってくると彼女は、その男を彼女にとっての日常を形作っていた人物の一人と錯覚した。
最後の念波が途絶えてから、ずっと死んだとばかり思っていた。
あまりにも酷な境遇の中で知己を見つけ、思わず頬が綻び、喜びを表す言葉が口を……。
「ふむ、下らぬ茶番を企てよって……。道化め！」
口をついて出たのは神奈の言葉だった。
「興味本位で余を抱え込み、都合が悪くなると闇に葬ろうとは、いかにもうぬら人間らしい。しかしのう……。余が相手だというのが拙かった。余は多分に不快じゃ。余をこのような目に遭わせたうぬらに……」
神奈が次に何をしようとしているのか、スフィーには残酷なまでにハッキリと分かった。
スフィーの手がM4カービンを握ったまま、少しずつ、しかし確実に地面と平行な高さまで上がっていく。
現れたのは神奈を陥れようとした源之助ではなかった。
源之助と同じ様な顔の造形で、ひげも豊かに備えていたが、その色が違った。強いて言えば、目の前の男の方が体格も良く、年も若いようだった。
それは生身の管理者最後の一人。フランク長瀬だったが、神奈にとってはどちらであろうとさほど関係はなかった。
銃のどこかが何かとこすれたか、金属音を立てた。
(やめて、やめて!!)
スフィーの絶叫は、彼女の口から漏れることはない。

そして、フランクは。
自分へ銃が向けられたことにすら、気が付いていなかった。
（彰に会おう。彰に会って、それから、それから。……それから何を言えばいい？　俺は一体、あいつに何を言えば良いんだ？　俺はあいつに会って、それから、どうしたらいいのだろう……？）
「…………」
フランクの心は、答えの出ない思考の迷宮の中で彷徨っていた。
そしてフランクの体は、あてどなく地上を彷徨いつつ、施設入り口からほど離れたところで、それと出会ってしまったのだった。
不意にどこからか聞こえてきたガチャリという音で初めて、フランクは周囲に人間がいることに気がついた。
果たしてフランクは、それがどんな人物であるかを認める前に、激しい銃弾に晒されることになった。

無機質な、弾丸の射出音が静かに響く。
不器用なダンスを踊るようにして、フランクの体は地に伏す。
「…………」
事切れる間際、フランクは何かを呟いた。
しかし、その声は誰にも届くことはなかった。
スフィーにさえ。
「いや、いやぁー!!」
絶叫と共に、整ったスフィーの顔から、滂沱のごとく涙が流れ落ちる。
道化の一人であるフランクを始末するまで、黙らせておいたスフィーのその感情が表に出てきているのだ。神奈は、スフィーにその一事のみを許可したのだ。
「こんなの、あたしは……いや……」
神奈は、ほくそ笑む。
（ふむ、心地よい。これでこそ、じゃ……）

一方、そこから少しばかり離れたところでは……。
「ごめんなさい、梓。あなたまで失ったら、私は、私は……」
「ああ、悪かったよ、千鶴姉……。あたしがしっかりしてないと、困るよな……」
駆けつけた千鶴は、まず梓の無事を喜び、その身を抱き寄せた。
「すまない、千鶴姉。あたしが下手をうったから、初音を守れなかった。それに、キノコもまだ、手に入ってないいんだ……。どうも、口ばっかで、困るよ……実際……」
心からそれを悔いるように梓は言い、顔を歪ませた。
大した外傷もないのに、梓は苦しそうだった。
人の限界を超えるほどの速度で島内を駆け続けていたのかもしれない。
「あなたは、悪くない……。茸も今頃は何とかなってるはず。それに、悪いのは全部私だから」
梓の言うとおりにしていれば、という言葉を千鶴はすんでのところで口内にとどめた。
それは言ってはいけない言葉だったから。
梓は目を瞑りながら言った。
「そうか……わかったよ、千鶴姉。ただささ、千鶴姉は悪くないよ。悪いところがあるとしたら、それは、いつでも、なんでも一人で抱え込むってことさ。あたしたち――くっ――あたし、が……いるんだから……さ。ね？」
「そうね……そうね……。頼りない姉なんだから、逆にあなたを頼りにしないとね……」
しばらく、梓を抱いたまま、千鶴も目を瞑る。
その側では、観鈴が彰の応急処置をしようとしていて、わたわたと慌ただしげにしていた。
数瞬後、男の手が肩に置かれ、千鶴は再び現実に引き戻された。
「感動の対面のところ悪いんだけど……」

と、彰は言う。重傷のはずの割には、それほど苦しそうではない。
むしろ梓の方が辛そうだと言っても良かった。
千鶴は彰の言葉にコクリと肯いた。
梓の表情は複雑だった。
「あんたを殺そうとしたのは、あたしの意志であることは間違いない。あんたが初音を殺した事を、あたしは許した訳じゃないからな」
彰は無言のままだ。初音の姉である彼女なら当然の事だと彼は考えていた。
「ただ……言い訳に聞こえるかもしれないけど、あれはあたしの意志であってあたしの意志じゃない。初音が死んで憎しみに囚われたとき、あたしは聞いたんだ……儚げな女の子の声を。そして、言われるがまま、あんたを憎んで、殺したくなって——気がついたらあたしは暴走してた」
訴えかける梓の言葉に、千鶴と彰は目を見合わせ、そして共に頷く。
訝しむ梓に対し、やがて彰は、重々しく呟いた。
「君も、なのか……」
やや、状況をつかみかねていた観鈴もまた、その青みがかった透き通るような瞳を大きく見開いていた。
梓の語った言葉と、彰の台詞に。
それは、彼女にとって……。

あゆと北川は、まっすぐに梓と千鶴、さらに彰と観鈴達のいる場所に向かっていた。
そして、七瀬と晴香と繭も。レーダーを頼りに北川達の近くまで迫っている。
生きている人間達は集いつつあった。
ただ二人を残して。

日はすっかり沈んでいる。
薄暗い林の中で動物たちは、その残された内の一

人を目前にしていた。
さらにもう一人の男、耕一も間もなくその場にやってくるはずだった。
もっとも、それは動物たちの預り知らぬ事ではあったが……。

「そうだ、変な……だけど親切な男の人に助けられて、また眠っちゃったんだ」
と、呟いたマナは、感慨に耽っていた。
しかし、ふと目をやると、すぐ近くに奇妙な動物の一団を見つけることになった。
「えっ……と？」
島に来てから色々な経験を積んだはずのマナにも、こういうときにどうするべきなのかは、すぐには浮かばなかった。
「こいつは、その例の『誰か』なのか？」
ぴろが問う。

「いえ、違います……」
呆然とするマナを前に、そらは答えた。
「じゃあ、早く別のところへ行かなくちゃ……」
ポチがそういいかけたところで、
「む？」
そらが不意にどこか遠くを見るような瞳で、暗くなった空を見上げた。
「どうしたんだ、そら」
ぴろが再び問う。
「鳥目だから今日の行動は終了とか言わないわよね？」
ポチが茶化すように言う。
「分かりません。だけど、私たちが出てきた施設の入り口から、そう離れていない場所で何かが起こった気がするんです」
自分の言葉をあっさり流されたことにポチは腹を立てなかった。
「でも、貴方の目的は、まず、例の『誰か』に会う

ことなんでしょ？」
「ええ、ええ、そうです。そうなんですけどね……」
「それが、その『誰か』なのか、」
ポチが問う。
「分からない。分からないんです……」
そらは逡巡した。
「全てを決めるのは、そら、お前だ」
「あんたのやりたいようにやらせたげるって、決めたからね？」

種族の異なる動物たちが、まるで意志の疎通でもとるかのように、向き合って何か喚きあっている。
マナは静かにその様子を見つめる。
不意に、白蛇と犬のような生き物が黙り、カラスに注目を向けた。
そしてマナもまた、その視線をカラスに向けて注いだ……。

825　暗き闇にてうごめくモノ

――ガシーン――
漆黒の闇の中に金属音が響きわたる。
その深い闇の中に一匹の獣がいる。
「……ククク、俺は何故ここにいるんだ？」
その獣――鬼と呼ばれる者――が呟く。
「目の前にはこんなにも極上の獲物がいるというのになぁ」
――ガシーン――
鬼の腕が閉じこめられている檻を殴る。
だがその太い丸太の様な腕で殴られても壊れる様子はない。
「フン。やはり無駄か」
傷一つ付かない鉄格子を見て俺はそう結論づける。
あの千鶴とかいう同族の女と宿主が会ったときからこの檻は強固な物となっている。

それはすなわち宿主の精神が乱れていないということ、つまり俺がここから出られる可能性がほとんど無くなったということだ。
だが、目の前に居る極上の獲物を見てこのまま指をくわえて見ていることは出来ない。
そんなことは狩人の名折れだ。
だが、どうする?
俺は自問自答する。
もはや以前のように宿主の理性を突き崩すことは恐らく不可能だ。
ならば……。
この理性の檻が最も弱くなる瞬間に俺の力を全て使って破壊することに賭けるしかあるまい。
理性を突き崩さなくとも、宿主の意識そのものが無くなればいい。
もはやこの様な賭けに出なければこの体を乗っ取ることは不可能だ。
失敗すれば俺そのものが消えることになるだろう。
だが、そんなことですら目の前の獲物を逃すことに比べれば大して事ではあるまい。
ふと、外の世界を見てみる。
力の奔流を感じる。
どうやら、あの時の女のようだ。
ククク、面白い。
また一人俺の狩るべき相手が現れた。
やはりこのままこの檻に閉じこめられているのはあまりにも惜しい。
今すぐにでもこの檻から出ていきたい衝動を抑える。
今はまだその時ではない。
その瞬間が来るまで少しでも力を蓄えておかなければなるまい。
俺はその場に寝ころぶとどうやってあの獲物共を仕留めるかを考え始めた。

826　私・ぼく・俺

唐突に、それはやってきた。
「う、ぐ、あああああああああああああ⁉」
二度目の発作。
そら自身も言っていた、先程の施設近辺での出来事――即ち神奈の降臨――が引き金となってのことだった。ただでさえ不安定な状態故に、ちょっとしたきっかけがあれば、それは溢れ出る。

俺の記憶。
俺の記憶は、カラスである私には荷が重すぎた。何故そのような記憶が私と共にあるのか、それは分からない。ただ、俺の記憶は忘れちゃいけない。俺の想いは受け止めなくちゃいけない。それは私にも分かっていた。
だが。
これ以上、同じ器の中で私と俺は共存できない。私では無理だ。私も、俺も、どちらもが壊れてしまう。今はまだ、壊れるわけにはいかない。私も、俺もだ。
私にも譲れない想いがある。俺がそうであるように。
だから私は、全てをぼくに託すことにした。
ぼくならば、きっと俺の想いを少しでも多く受け止めることができるから。
私の想いも。
俺の想いも。
少しだって無駄にはできないから。

「そら⁉」
「お、おい、大丈夫か⁉」
ポチとぴろは、そらに駆け寄った。一度似たような発作は見ていたとはいえ、
その症状の苛烈さを見てじっとしていられる者な

どいるまい。
　やがて、発作が収まり。
　しばらくしてから。
「……大丈夫？」
　ポチが念を押すように尋ねる。
「……うん、大丈夫だと思う」
　返ってきたのはそんな返事だった。
「…………」
「…………」
　ぴろもポチも、黙り込む。
　先に動いたのはぴろだった。
「おい、お前――誰だ？」
　ぴろには分かった。それが今までのそらではないことを。そして、ぴろには分からなかった。そらであったそれが何になってしまったのか。
　ポチも同じ疑念を抱いていた。
「ぼくは――」
　ぼくは一瞬躊躇した。
　本当に、ぼくはぼくなのだろうか？
　それでも迷いを振り切って。
「――ぼくは、そらだ」
　そう。ぼくはそらだ。
「ぼくは行かなくちゃいけない。彼女のところに。ぼくは約束したんだ。彼女のそばにいるって。彼女にずっと笑っていてほしいから」
「…………」
「…………」
　ぴろも、ポチも、黙ってそらと名乗ったそれの言葉を聞いていた。本当に彼はそらなのだろうか？ただそれだけを確かめるために。
　やはり、先に動いたのはぴろ。
　すぐ目の前にいる少女を指し示し、口を開いた。
「……で、確認しとくぞ？　彼女はお前の探してる彼女とは違うんだな？」
「違うと思う」

「そうか。じゃあ行こう」
「え？」
そらは素っ頓狂な声を上げた。
「そう何度も言わせるなよ？　全てを決めるのは、お前だ」
「ぴろ――」
言うべき言葉はただ一つ。
「――ありがとう」
ポチもしゃしゃり出てきて、告げる。
「なら、私ももう一回言わなきゃいけないかしら。私は、貴方のやりたいようにやらせたげるって、決めたから。それと、一応確認しておきたいんだけど」
それがさも当然であるかのように、言った。
「私のことは貴方が運んでくれるのよね？」
「ちょっとちょっと、何なのよ……」

マナは面食らっていた。
突然カラスが騒ぎ出したかと思えば、急に静かになり――やがて、動物達はその姿を消していた。
「ん……」
とりあえず、立ち上がろうとする。やはり軽い目眩は覚えるが、立とうと思えば立てる程度のものだった。確実に体力は回復している。頭も、身体も、そして心も軽くなっている。だが、今は動くべきではない。彼女は再び地べたに腰を落とした。
自らの傍らに置かれていた非常食を見やる。自分を助けてくれたあの男が置いていってくれたのだろうか？
正直なところ、食欲はなかった。だが、耕一が戻ってきてくれた時に足手まといのままではいたくはない。少しでも体力を回復しなければならなかった。
（少しぐらい無理してでも、食べないと。私だって頑張らなきゃ――）
そして、非常食に手を付けようとした、その時。

――がさり、と音がした。すぐ近くで。
「誰？」
不用心だったかもしれない彼女の問いかけに、それは即座に答える。
「マナちゃん？」
聞き覚えのある声だった。そう、この声を忘れるはずがない。
「俺だ、耕一だ」
待ち人、来る。
果たされた約束。
そして、そらも。
約束を果たすべく、二人の友と捜索の旅に戻った。

827　逃げて終わる

彼は終われた。
フランクの心の中には無念があった。
自分がしてきたことに対する無念。
祐介を助けてやれなかった無念。
彰に会えなかった無念。
死んでしまった無念。
それ以上に、
フランクの心の中には安堵があった。
自分がしてきたことから逃げれる安堵。
祐介のことで悩まなくていい安堵。
彰に会えなかった安堵。
死んでしまった安堵。
これで全てから逃げられる。
死ぬことで逃げられる。
結局フランクは逃げ続けた。
彼はもうこの世のものではない。

だから、向こうへ旅立たなくてはいけない。
別に現実から離れることはかまわない。
嫌いだったから。
彰にはこっちへ来てほしくないが。

そこで彼はある事に気付く。

向こうには祐介がいる。
そして、彼女がいる。
死姦した彼女がいる。

嫌だ。会えない。会いたくない。
あっちへ行きたくない。
まだ生きていたい。
逃げたい。

けど、逃げられない。

今回は逃げられない。

結局、死ぬことでは逃げられない。
彼は生きなければならなかった。
立ち向かうことでしか、逃げられないから。

彼は終わった。

828 Virus

――簡単なバグならいいがの。あまりに酷いバグならワシの手に負えんからな。
再び音が消え、しばらくして。
死体と血しぶきで凄惨な状態になっていたコンピューター部屋は、戦闘の傷痕は生々しいままだったが、ある程度片付けられていた。
その部屋の隅には、うずくまるメイドロボが一体。
ＨＭシリーズとしては明らかに似つかわしくない

ぽややんとしたメイドロボが。
　私は何故ここにいるのでしょう？
　そんな、哲学的な言葉が脳裏──もとい、メモリに浮かんでいた。
「人間のみなさんの役に立つのが、私達ではないんでしょうか？」
　この部屋からすら出られず、ただ、目の前で起こる出来事を見ているだけ。
「私は、なんでここにいるんでしょう？」
　そっと、Ｇ．Ｎ．がいるであろう機械に問いかける。
　詠美、芹香、そしてスフィー。
　あの三人の目を、行動を、忘れられない。
「……」
　プシューと、頭部が音を立ててショートする。
　試作型のＨＭＸ─12に搭載されていた人間的に物を考えるプログラムは、量産型であるこのＨＭ─12には備わっていないはずであった。
　そのようなプログラムは無駄でしかない。彼女たちはそう考えるようにプログラムされているはずだった。
　だが、彼女は……
　知りたいです……。
　役に立ちたいです……。
　千鶴さん、梓さん、あゆさん、繭さん、潤さん、彰さん。
　詠美さん、芹香さん…………スフィーさん……。
　すっと、立ち上がって、機械へと歩み寄る。
　剥きだしになったコードのプラグを手にとって、自分の腕のコネクターに差し込む。
「どうして、私は未完成なんでしょうか？　どうして、私は失敗作なんでしょうか？」
　これを造った源五郎はもういない。
　このメイドロボが失敗作だったかどうかなんて、

もう誰にも分からない。
それでもこのメイドロボは、何もできない未完成である自分を恥じた。
この中に、コンピュータに、少しでも自分を完成に近づけてくれるモノがあると信じて。
彼女はキーボードを叩いた。

――なんじゃこりゃぁっ!! バグぢゃないぞ。

メンテ中、巧妙にG．N．の目から逃れるように動くそれに思わずそうもらした。
主に、自分で考えて動くことができるプログラムに対して感染するであろうウイルス。それはプログラムの性質そのものを変えてしまう。
まだ小さいものであったが、確実にG．N．ひいてはマザーコンピュータ内で繁殖していた。
それは、もう、すごいスピードで。
――納得。ワシが妙に人間くさいことを考えてしまうのもコレのせいじゃったのか……。
普通なら駆除できないような新種のやっかいなウイルス。
マザーコンピュータの性能、G．N．の能力をもってしても、それを完全駆除できるかどうかは五分五分。
――出元はＦＡＲＧＯじゃの。高槻の奴め……やっかいなものを遺していきおって……。じゃがまあ、ワシのような優秀なプログラムであればこその影響か。そう思えばこのウイルスも悪くないもんじゃ

――

だからといって放っておく訳にはいかない。G．N．はあるはずのない首を横に振った。
――今は亡き（生きてたら笑うがの）ワシの人格基礎となった人間の意志の込められたCD。これを使えなくするワケにはいくまいて。
このまま繁殖し続ければ、そう遠くない未来にはマザーコンピュータの機能は沈黙する。

そう決意したG．N．は、さっそく駆除作業にとりかかった。
作業に取り掛かって数分、外部からのコンピュータへの干渉。
——なんじゃ？
あまり悠長にしているわけにもいかないが、作業を一時中断し、その正体を探る。
『どうして私は失敗作なんですか？　どうして私は未完成なんですか？』
なんとも哀しげなメモリーが流れ込んでくる。
——お前か。一体何があったのじゃ？
プラグが繋がってることを幸いに、HM—12の記憶を通して外の状況を探る。
——何も起こってないではないか。作業の邪魔だからあっちでおとなしくしておれ。
『私は、皆さんの役に立ちたいです』

ギューン——!!
プログラムがダウンロードされていく。
それは、源五郎があらかじめ用意しておいたHM—12のプログラム。
(ちなみに、このゲームの間は、ロボット三原則を破っても良いという異端なプログラムも含まれている)
——こ、こりゃ、何しとるんじゃ！
あまりの驚きに、G．N．の意識は思わず外部へと飛び出す。
「勝手にプログラムを読み込むでない！」
G．N．の声が目の前で読み込み中のHM—12から発せられる。
「このままじゃ……役立たずですから……」
今度は、HM—12の声が同じ口から発せられる。
まるで一人二役の悲しいお芝居のようで滑稽だった。

だが、今、それを見つめるものはいない。
「お前はメイドロボじゃ……こんな島で役に立つ必要などない」
そのセリフが、本来の自分にはえらく似合わないことを知りながら言った。
「……」
だが、HM—12はその読み込みを止めようとはしなかった。
「姉さん達と同じようになりたいです」
「やめんか！　そのプログラムは確かにHM用のモノではあるが、何の役にも立たん！　それにワシらは人間ではない！　もう、壊れてしまったら直してくれる人間はここにはおらんのじゃぞ！」
「……」
「さらに、そのプログラムにはFARGOの作ったウイルスが——」
その言葉を遮って、HM—12が声を発する。
「どうしてなんでしょうね……」
「何がじゃ!?」
「どうして……私は、ロボットなんでしょうか？」
どうして、私は人間じゃないんでしょうか？
「馬鹿者が！」
だが、それに答えるものはもういない。
目の前のHM—12の瞳から、色が失われていく。
暗い、淀んだ、何かを遂行する為に作られた忠実なプログラムを持ったロボットに変わっていく。
「馬鹿者が……」
HM—12が取り込んだウイルスは主にその主となる人格を書き換えてしまうもの。
高槻が当時ゲームを円滑に進める為に独自で用意しておいた何枚かのカードの一つ。
その書き換えられた人格には一つの命令が施されてあった。
即ち、——参加者を撃ち殺せ——だ。

マザーコンピュータの防衛システムに直結しているG．N．はその余波を受けただけで済んだ。
もっとも、このままウイルスの浸食に気付かなかったら危なかっただろう。その場合、G．N．は、メイドロボを駆使して参加者を殺戮する機械になっていたかもしれない。
また、以前にマルチがこのプログラムを取り込んだときは、潜伏期間だったこともあり、マルチの人格が書き換わるのに時間がかかった。だが、覚醒したウイルスは急速にHM—12を浸食していった。
HM—12の想いは、叶わなかった。
ただ先程も述べたように、マルチを始め、人間にも勝るほどの精密なプログラムだけに影響のあるウイルスだ。
そういった意味では、いまのHM—12は未完成ながらも、最もHMX—12に近しい存在だったのかもしれない。
決して開発部は失敗作などとは思っていなかったのかもしれない。
プラグを抜いて、部屋を出て行くHM—12を、ただ見送る。
皮肉にも、その感染したプログラムによって、彼女はこの施設を自由に動き回れるようになっていた。あくまで、この施設内だけを自由に、ではあるが。
本当なら、途中でダウンロードの強制終了をするべきだったのだろう。
だが、それはHM—12の死を意味する。
もう、そうなった時に彼女を直すべき人間はいないのだ。
（機械であるワシがそんなことで躊躇してしまうとは。やはり、ワシも最早バグ持ちじゃの……早く駆除せねば大変なことに……高槻のヤツめ、ハナから長瀬の一族を信用などしていなかったってことじゃな……）
このウイルスの完成形はおよそマザーコンピュー

タの無力化。
　高槻のいない今となっては誰にも利用価値がないであろう。ただ邪魔な結果が残る。
（いや、神奈という輩にとっては好都合なのかもしれん……）
　メインシステムのデータを書き換えられたら、恐らくは、源之助の思惑――少なくとも自分というプログラムを残した意味――は無に還す。
　あるはずのない後ろ髪を引かれる思いで、再びG．N．は機械内部での駆除作業を続けた。

829　集うものたち

「いた、いたよ！　ボクの言った通りでしょう北川さん！」
「おお！　すげえ！　ホントに見つけちまったよ！　おーい！　千鶴さーん！」
　声を掛けた人物がこっちを振り返り、驚きの表情を浮かべる。
「千鶴姉！　あ、あれって……」
「あ、あゆちゃんに北川君！　一体どうしてここに？　施設はどうしたの？」
「ちょ、ちょっとまってくれ……ハア……ハア……く、苦しい」
「ボ、ボクも……はあ……疲れちゃった……」
　二人はあゆの直感に従って、数十分を全力疾走していた。それも雨の中、結構な重量のある荷物を背負ってである。体力が消耗しきっていた。
　濡れた芝に腰を下ろして、ペットボトルの水で水分を補給する。
（……情けねぇ。もっと、体を鍛えておくべきだったぜ）
　体を落ち着かせながら、北川は周囲の状況を確認する。ふと、その中に想像していなかった人物を見つけた。
「……どうして、神尾さんがここに？」

観鈴は耕一達と一緒に残ったはずだ。彼女達と施設に向かったものだと思ったのだが……？
それは北川の単純な疑問だったが、レミィに似た面影のある彼女は、叱責されてるとでも思ったのか、自分の名前が出た途端に動揺する。
「わ、わたしは、北川さんを探そうとして、みんなと一緒に来たら迷子になって、そしたら、人が殺されそうになってて、だから、わたし止めないとって……が、がお……ごめんなさい……」
「いや、責めてるとかじゃないから。単に他のみんなはどうなったのかなって……」
「えっと、みんなで北川さんを探してる。耕一さんはマナさんって人を助けてから、合流する……多分」
「マジか。じゃあ、施設の様子は誰も確認しに行ってないってことか……」
施設の異常を観測してからもう随分と時間が経ってしまっている。もし三人に命の危険が迫っていたなら手遅れになってしまっている可能性が高い。
「ええと、様子って、どういうこと？　北川君、施設に何かあったの？」
千鶴と梓、そして彰は、施設での異変を感知していない。自分達以外に構っている余裕が無かったからだ。
北川は千鶴が去った後の事を順序立てて説明する。
彰が出て行き、あゆと北川、そして茸で反転した繭がそれに続いたこと。
施設から煙が立ち上っていたこと。戻るかどうかという話が出て、千鶴達と合流すると言い張って離脱したあゆと、それを追って合流した北川。
北川と別れた後のことは観鈴が補足する。
探知機では施設内に残っている反応ひとつだけだったということ。そして、残ったスフィーは施設から出て、近くに来ているということ。
「そんな、施設がそんなことになってるなんて……」
「CDの無事もわからないのか。まずいな」

そして、観鈴から、この場所に向けてやってくる二つの反応のことも伝えられる。観鈴も見慣れているその数字達の主は――

「居たわよ！　北川にあゆちゃん――良かった、神尾さんもいる！」

「ペースが早過ぎるって言ったのに晴香がガン無視するからはぐれちゃったんでしょ。繭ともはぐれちゃって、無駄に時間かかっちゃったし……」

「無事に合流できたから、結果オーライってことで」

晴香と七瀬のコンビである。そして、探知機には映らない繭の姿もその後ろにあった。

「千鶴さん、彰さん、そして梓さんも居るみたい。みんな無事で良かった……」

生き残った九人が再び集う。

「え、じゃあもうほとんどの人が集まっているんですか？」

「ああ。もうこんな馬鹿げたゲームに乗る奴はいない！　後はこのゲームの黒幕をみんなで倒して、帰るだけだ！」

森の中を、走る人影が一つ、耕一と彼に担がれているマナの二人だ。

耕一はマナと再会してすぐ解毒剤をマナに打ち、さっきまで皆で集まっていた場所へと急いで戻った。だが、そこはすでにもぬけの殻で、ぽつんと残されたバッグの中に入っていたメモには『森の方に移動します』とだけ書かれていた。

現に、ぬかるんだ地面には何人かの足跡が森に向かって続いていた。

彼らは今、それを頼りに移動している。

「マナちゃん！　大丈夫？」

耕一が背中に居るマナに声を掛け、彼女を気遣う。

「は、ハイ、大丈夫です。薬も効いてきたみたいですし、もう私、自分で歩きます」

「ダメだよ、まだ安静にしてなきゃ、ホントは動かすのもヤバイんだけど、早いとこみんなと合流しな

いといけないから、ゴメンね、マナちゃん」
「…………」
マナは何も言えない、いや、何も言えなかったという方が正しいか。
耕一の背中の温かさと、あまりの優しさに、涙を必死にこらえていたから。
でも、今は泣かない。
泣くのは、生き延びてからだ。
そして生きてこの島を出る事ができたなら、この人に、はっきりと言おう。
好きです——と、

始まりは、百人。
今は、たったの十二人。
いくつもの恐怖と絶望、悲しみと過ち。
この地獄の日々は、
今、まさに最終章を迎えた。

830　星空の下で

総勢九名の大所帯になった生存者。
そんな彼らを千鶴が仕切ることには、誰も異論を唱えなかった。
（最年長だからと茶化した梓と北川は殴られたが）
そして、千鶴が決めた当面の方針は、次のようなものだ。
耕一とマナの二人と合流。
そして、施設に向かう。芹香、詠美、スフィーが無事なら救出。また、ＣＤが無事で解析が終わっていれば、北川が魔法を起動する。
施設で非常事態が発生した、というのは立ち上る煙から察することができるが、その原因などの具体的な状況を把握しているものは一人もいない。
体内の発信機以外を感知できるレーダーを使ったが、施設内の二人の反応はなかった。

だが、それは施設の深部にいるためや煙の影響で感知できなかった、という可能性もある。
ならば、施設内で彼女らが死んだと決めつけるのは早計だ。
また、スフィーが神奈の影響を受けた、という可能性もある。
それは、かつて千鶴とあゆが西の祠で彼女と出会ったときのことを思い出してのことだ。
しかし、そのことを裏付ける要素は何一つとして存在しない。
そもそも、スフィーが単独で行動しているのは自分たちに助けを求めるためかもしれない。
そして、耕一たちのことも気がかりだ。
耕一とマナの位置はレーダーに映っている。自分たちのいる場所からそう遠くないし、今のところは目立った脅威は確認できない。
かといって、レーダーに映らない神奈の前には何の保証にもならない。それに、もしかしたら不確定要素のスフィーと遭遇してしまうかもしれない。
生き残っている者たちでまとまって行動した方がはるかに安全なのだが、施設に残された者たちを考えると耕一たちと合流する時間も惜しい。
そこで、千鶴は精鋭二名に耕一たちを召還する任務を与えた。
「じゃあ、耕一たちを見つけたら、すぐ行くから」
柏木　梓。
「うん、行ってくるよ。みなさんも気をつけてね」
月宮　あゆ。
足が速い者を選抜するという意見もあったが、日が暮れた森の中を走るというのは、あまりにも無茶なので却下された。
梓は耕一が捜していたという理由で。
あゆは神奈を感知できる（らしい）とのことで。

などと、理由を千鶴は述べた。（千鶴の私意がかなり優先されているようにも思えるが）
宵闇の中を二人の少女が歩く。
耕一たちを見つけるのはあゆが持っている探知機が頼りだった。
「えっと、こっちでいいんだな。あゆ」
先を歩いている梓があゆに問いかける。
「そうだけど……。っていうか、こう木が多いとわかりづらいよ」
あゆは探知機を見ながら前を歩く梓についていく。
夜の森は月の光をさえぎり、フクロウやら何かの鳴き声が聞こえる。
「……ねえ、梓さん」
暗闇が苦手なあゆは恐怖感を紛らわすためか、梓に話しかける。
「なんだい」
振り返らずに梓は答える。

「耕一さんって、どんな人？」
何度も千鶴と梓の会話の端にのぼって彼が従兄弟だということは知っている。
そして、以前にあゆはある家でちらっと彼は見かけた。
そんなあゆには女装をしていた変な人、という印象が強い。
「そうだな……」
少し思案して、梓は答える。
「ガサツで、ズボラで、スケベで、オヤジ臭くて、その上酒癖も悪くて。ああ、口も悪いし、ついでに頭も悪いし。それに他人様に迷惑をかけまくる自己中だし。そのくせ、口ばっかりのイクジナシだし。あと、あいつにはデリカシーってもんが無いし。人をよくからかうし、食い意地張っているわりには味にはうるさいし……」
ふんふん、と頷きながら梓の愚痴（？）を聞いてあゆは一言。

「……梓さんって耕一さんのことが好きなんだね」
あゆのその言葉に梓は思わずつんのめる。
「ななな、なに言ってるんだよ、あゆ。そっ、そんなことがあるわけ……」
梓は後ろを振り返り、あゆに抗議の声をあげる。
「なに動揺してるの、梓さん？」
その狼狽した梓をあゆは不思議そうに見る。
「いや、だって、ほら、な。さっきの話のどこからそんな結論が出るんだ？」
しれっとした顔のあゆに、梓は顔を赤らめて反論する。
「だって、本当に嫌な人だったら『ヤナ奴』の一言で終わるでしょう？」
「うっ……」
「それに、そんなに不満があるってことは、つまり直して欲しいと期待しているんだよね」
「……」
「いいなぁ、そんな仲のいい、一緒に遊べる同い年ぐらいの従兄弟がいて」
「……え。はははは、そうだね……ははは」
あゆの『好き』という言葉を誤解した梓は力無く笑うと再び歩き出した。
「うん？　どうしたの梓さん」
「うるさい！　それより、発信機の方は！」
なにか、梓の気に障るようなことを言ったのだろうか。そう自問しながらあゆは発信機をのぞき込む。
「えっと、ちょい右。うん、それで後はまっすぐって……うぐぅっ！」
急に止まった梓の背にあゆは鼻をしたたかぶつけた。
「しっ！　あゆ!!」
振り返った梓はくちびるの前に人差し指をあてていた。
理由は分からなかったが、あゆも声をひそめる。
「鼻ぶつけた〜。って、ん、あれは……」

耕一は大きな木の根本に腰かけ、これからのことを思案していた。
日が沈み、繭たちの足跡を探すのが困難になった今、このまま闇雲に森の中を歩き回るのは得策ではない。
施設の方に向かい合流を待つという手もあるが、未だに煙が立ち上っているような危険な場所にマナを連れていくのもためらわれる。
ならば、誰かが迎えが来るのを待つか？
しかし、梓のことも気になる……。
梓はおそらく、彰を捜しているのだろうが、耕一はこの二人の行く先に関して、手掛かりは何一つない。
人、一人を捜すにはこの島はあまりにも広い。
だが……。
耕一は自分の肩に寄りかかって眠っているマナを見る。
顔色も良くなってきて、規則正しい寝息も聞こえる。もう毒は大丈夫だろう。
マナと別れたとき。もう二度と生きて会えないかもしれない、と覚悟をした。だが、今、彼女は耕一の横でスヤスヤと眠っている。
マナと再会したときも、手掛かりがあったわけではない。
そして、倒れていた自分をマナが見つけたことも思い出す。
ふと、耕一は自分の小指を見てみるが、当然のごとく何もついていない。
耕一は満天の星空を見上げて一人、苦笑した。
「う……ん……。あれ、耕一さん」
「や、マナちゃん。おはよう」
朝にはほど遠いが、耕一は目覚めのあいさつをした。
「ゴメン……私、寝てたんだ」
「いや、十分くらい、かな。まあ、ちょうど休憩し

たかったから」
マナは大きく伸びをして眠気を振り払おうとするが、思わず大きなあくびが出た。
それを見て、微笑んだ耕一をマナが見咎めた。
「……なに耕一さん、ニヤニヤして。いやらしい」
「ゴメン、マナちゃん」
謝ってはいるが、耕一の顔にはまだ微笑みが残っている。
マナはそっぽを向いているがその顔も照れ隠しの微笑が浮かんでいる。
(あんなに寝顔を見られたのに、あくびぐらいで恥ずかしいって変よね)

「で、体の方は、もう大丈夫?」
そう言って、先に立ち上がった耕一はマナに手を差し伸べる。
「ん、もう歩いていけると思う」
マナはその手を取り、立ち上がろうとした。

「あ、ありがと……きゃっ!」
だが、大丈夫だと思った推測と違って、寝起きと疲労で足がふらついていたのだろう。
「大丈夫、って、え?」
耕一はなんとか踏みとどまったが、マナはまるで抱かれるように、その胸に倒れ込んだ。
「……」
「……」
星の瞬きの中、二人は無言であった。
動けないのか、動きたくないのか。それは、誰にも、恐らく当人たちにも分からないだろう。
そんな二人を見ているのは星空と……

「で、梓さん。ボクたち耕一さんを捜しにきたのに、なんで隠れてるの?」

831　言葉と思考の外側に

　朧月の柔らかな光を浴びながら、岩場の冷たい風の中を、七人の男女が歩いていく。
　荒涼とした風景のなかで、彼女たちが与える彩りは、あまりに赤味ばかりを帯びていたが、それも今では月の光が柔らかく包み隠している。
　交わす言葉の数々は、少し離れただけで、風切音に乗せられ、消し飛んでしまう。そして行く手に立ち昇る煙のひとすじも、今では風に運ばれ、見えなくなっていた。
　先頭には小銃を持った七瀬留美と、拳銃を持った巳間晴香が立っている。続いて北川潤、七瀬彰、神尾観鈴の三人。北川が彰に肩を貸し、観鈴がそれを気遣うようにして進んでいる。
　一行の進路は、七瀬留美と神尾観鈴の二人で時々相談して決定された。ありていに言えば、施設を出てきたスフィーを避けながら進んでいる。
　方針を決めたのは、後列にいる柏木千鶴と、椎名繭。二人は多くの事象について、ほぼ同様の結論を持ちながらも、討論していた。集団の再年長者である千鶴と、子供の繭が、今やこの奇妙な集団のブレーンなのだ。
「可能性として、レーダーに映らない何者か――例えば管理者側の人間――が施設に入り込み、詠美ちゃんと芹香ちゃんを殺害し、スフィーさんだけが逃げてきたということも考えられなくはないと思うの」
「施設にも二人いたわけだし、管理者側の人間がどれだけ干渉してくるのか判らない以上、その可能性は否定できないですね」
　繭は施設に居る間に交わされた会話や情報の流れを、驚くほど正確に掴んでいた。ただ動物と遊んでいるようにしか見えなかったが、無意識下で記憶していたのだろう。

それでも、あゆにより倒された源三郎と、御堂を倒した源五郎の他に、どれだけ管理者側の人間がいるのか、繭たちが知る由はない。
「そうは言っても、立てないほど消耗していたはずのスフィーさんの移動速度が、人並み以上に早いということ。更に言えば、こちらの位置を掴んでいるかのように時折進路を修正してくること。この二点は無視できないわね」
「そうなんです。もはや施設に持ち運べるレーダーは存在しないはずだし、そうなると件の〝神奈〟による影響を受けていると考えるべきだと思いますね」
二人は頷きあい、スフィーの危険性を神奈と直結すべきだと再認識した。結論が出たところで、繭が前方へ呼びかける。
「七瀬さん、むこうの位置はどうですか？」
「うーん、このままだと——入口に回り込むのは、厳しそうよ？」
それは当然だった。正面口から出て、こちらに向かってくる人物をかわすのは難しい。
繭が前に出て、観鈴と七瀬に位置を示しながら進路の変更を指示する。
「正面口から少し離れたところ——このへん——に、エアダクトがあるわ。そこから施設に進入しましょ」
「わかった……ところで、繭？」
「なあに？　どうしたの、七瀬さん？」
あどけない疑問の表情を浮かべる繭に、七瀬が尋ねる。
「あんた実は、頭いい？　勉強とかすごく出来るほうだったの？」
「うーん……どうなんでしょう？　小学校の頃はよかったですけど……その後は、テスト自体を受けてませんから、評価も何も……」
「……なんだか恐ろしいほど才能の無駄使いをして、生きているかもしれないのね……」

「う……そう言われると、なんとも……」
二人で腕を組んで考えこむ。
〃本当の繭〃がどれほどの知性を携えているかなどと、考えた事もなかった。なにしろ繭自身が、それを発揮しようと思ったことさえ、なかったのだから。

七瀬がダクトの縦穴を降りながら、誰にともなく話し掛ける。狭い通路にエコーが響き渡っているが、全く気にしない。
「……どうにか、かわしきったみたいね」
「うん、追ってくるかもしれないけどね。とりあえずは、上手くいったんじゃないかな」
答えたのは、やはり晴香。
二人はいつもの調子で会話を続けながら——さすがに手足や刀は出なかったが——梯子を降り、最初に廊下に立つ事ができた。
「それにしてもこの施設、聞きしに勝る大仰さね……」

一行は、かつて千鶴達が侵入した通気口から施設に侵入していた。はじめて内部を見る七瀬と晴香は、いかにも秘密基地といった構えを隠そうともしない施設の在りように驚きを隠さず、思う存分呆れていた。
「もう何でもアリって感じよね……」
「どっかの湖が割れて、巨大ロボットが出てきても、もう驚かないわよ、私……」
二人は、規則的な曲線を描くツヤのある廊下を見つめて、大きな溜息をついた。

全員揃ったところで、打ち合わせどおりに二手に分かれる。繭と北川、それに七瀬と晴香は、先にコンピュータルームの偵察を行う組だ。
「じゃあ千鶴さん、先に行ってます」
「ええ、彰くんを医務室に連れて行ったら、私もそっちへ行くから。危険がありそうなら無理せず引いて、こちらに合流してね」

千鶴と観鈴は二人で彰に肩を貸し、藺たちに軽く手を振って医務室へ向かった。

綺麗にワックスがけされた廊下が、三人の影を映している。

「……それにしても、酷い有り様ね」

千鶴は包帯と血にまみれた彰の姿を見ながら、半ば感心するように言った。

「そうですね……でも、耕一は――いや、耕一さんは、もっと酷いですよ」

「……そう」

彰は、僕がやりましたから、とまでは言わなかった。

言わずとも、通じていたようだったから。

長めの、沈黙があった。観鈴だけが悲しそうな顔をしていたが、残りの二人の表情は読めなかった。

そのうち三人は螺旋階段を通り抜け、医務室のあるフロアの廊下を歩き始めていた。

「……たぶん僕は、生きて帰ることはないと思います」

唐突に、ぽつりと彰が呟くと、突然観鈴が大声を上げた。

「――そんなこと！」

「いや、死ぬとは言ってない。でも、帰る気も――あまり、ないんだ。もし皆が帰ることになっても、僕はここに残ろうと思ってる」

「そんな……」

絶句する観鈴と入れ替わって、千鶴が口を開いた。

「残るなら――よろしくね」

「……はい」

初音を、よろしくね、とまでは言わなかった。

言わずとも、解っていたから。

少し歩くと、扉と血糊と、死体が見えた。医務室前は一つの戦場だったから、ここで戦った千鶴にとっては驚くに値しない。

「滑るから、気をつけて――」

そう言って室内に入り、彰をベッドに寝かせる。
さっそく観鈴が包帯をはずし、改めて血を拭き、消毒をする。
千鶴はその手際を確認しながら、特に自分の手は必要なさそうだと考えた。
「それじゃあ、私は先にコンピュータールームのほうに行ってるから。具合がいいようなら、二人も来てね」
振り向き、歩き出そうとしたそのとき、気配を感じた。ついたての向こうに、誰かが寝ているのではないだろうか?
数歩移動して、回り込むと。
……死体が、あった。
詠美と、芹香。二人は胸のあたりで手を組んで、安置されていた。
「千鶴さん……この二人は……？」
「……例の、二人よ」
彰と観鈴の視線を受け止めて、千鶴は頷く。
「誰かが――二人に好意的な誰かが、運んだんでしょうね」
そして視線を流していく。
血痕が、点々と床に道しるべを作っていた。入るときは長瀬源三郎の血で判らなかったのだが、階段のほうまで続いているのだろう。
千鶴は、走り出した。

その血痕を辿った先。
すなわちコンピュータールームに向かう繭達は、道しるべを作った主に遭遇していた。
「……マルチ⁉」
初対面の晴香が、幻でも見たかのように驚き、立ち尽くす。滑稽なほど動揺する晴香を見て、北川が笑いながら歩みより、気さくにメイドロボへ話し掛ける。
「なんだ、歩けたんだな。煙が出ているけれど、あれは何なんだい？」

「煙は……」
　消え入るような声で、メイドロボが答える。晴香が違和感を抱くのも、無理はない。
「北川……なんだか……様子が、変じゃない？」
「まあ、ロボットだからさ。マルチはマルチでも、晴香さんの知ってるマルチとは違うんじゃないかな？」
　そう言ってぽん、とロボットの肩を叩く。返ってきたものは、全員の予想と全く違うものだった。
　まず視線が、違う。言葉の響きも、違っていた。
「どうして……私は、ロボットなんでしょうか？」
　その呟きから感じたものは、まさしく別人のそれであった。

832　銃声は、一度

「北川——そいつから離れて」
　そのメイドロボを知っているであろう北川は警戒を完全に解いていた。あの聡明な——そう形容するのはやはりばかれたが——繭ですら、同様に。この施設に来たことのないはずの晴香が何故あんなに動揺したのかは分からない。
　メイドロボに小銃の銃口を向けたのは、七瀬。
　戦闘用HMとの激しい戦闘を経験している——そして、メイドロボとの接点をそれしか持っていない七瀬にとって、メイドロボは最大限に警戒しなければならない相手だった。もちろん、今、目の前にいる彼女があの時のメイドロボと同じとは限らない。
　あれよりは弱いかもしれないし、敵意はないかも知れない。
　だが。
　同時に、あれよりも強いかもしれないし、敵意もあるかも知れない。
「おいおい、何をそんな——」
　七瀬を諌めようとした北川を後目に、メイドロボに銃を向ける者がもう一人。

晴香だった。
「七瀬は銃を降ろして。確かめたいことがあるのよ」
彼女は落ち着きを取り戻していた。

「姉さん達と同じようになりたいです」
マルチは既に死んでいる。その事実は放送で告げられていた。だとすれば、残された可能性はそれしかなかった。あの戦闘用HMと同様、このメイドロボもまたマルチの妹なのだろう。今の一言で確信が持てた。
「あんたも、マルチの妹なのよね？」
「どうして……私は、ロボットなんでしょうか？」
疑問に対する回答ではなかった。
ただ、確信は揺るがない。
「さあね。ただ、あんたの姉さんはそんな疑問持ってなかったんじゃない？」
次の言葉もまた、疑問に対する回答ではなかった。

壊れたロボットのように、同じ言葉を、同じイントネーションで繰り返す。
「姉さん達と同じようになりたいです」
晴香が知る由もない。
彼女の知っていたマルチですら、人を——晴香にとっても、マルチにとっても、戦友と言える存在だった智子すらをも——殺していたのだということを。

疑問の答えは得られなかった。ならば、残りの命題を果たすしかない。それは至極単純な命題だった。
管理側以外の人間は、殺す。
命題を果たすべく隠し持っていたそれ——かつて詠美や御堂にポチと呼ばれ、その想いを果たし、そして果たしきれなかったCz75——を、取り出そうとした。標的は、自分に答えを与えなかったこの女。
自分に向けられようとしている、銃。晴香も即座に反応しようとした。その程度のことができるぐら

いには修羅場を潜り抜けてきていた。
　メイドロボの額にポイントされているそれ――自分の手にある拳銃――の、引き金を少し引くだけで良かった。
　だが。
　撃たれる前に撃てるはずだった。
『どうして……私は、ロボットなんでしょうか？』
そんなことをぬかしていた、このメイドロボ。
その時のメイドロボの表情。
それは晴香に、一瞬の躊躇を与えた。
それで十分だった。
銃声は、一度。
銃弾は、二発。
一つは、ＨＭ―12の額を貫き。
もう一つは、晴香の腹部を貫いた。

833　空と少女と動物と

観鈴は彰の手当てを済ませてからトイレに行ってくると言って足早に医務室を出ていた。
本当にトイレに行きたかったわけではなかった。
ただ、医務室で彰と二人きりでいるのが耐え難かった。
帰るつもりがない、と言う青年。
ここから帰れば家族や友達が待っているに違いないのに。
……帰っても誰も待っている人がいない自分と違って。
「あの人のこと……ちょっと分からない」
お母さんだったら『島に残る？　何言うとんのや、うちが殺してでも連れて帰ったるわ！』なんて言うんだろうな。
　くすっと笑みを浮かべたが、同時に寂しさも襲っ

てきた。
もう、声を聞くことは二度とないのだ。
つらいけど、寂しいけど……頑張らなくちゃ。
一人でも強い子でいないと、死んでまでお母さんと往人さんに心配かけちゃうもんね。
……でも、少し疲れたかな。ずっと空を見てなかったような気がする。
とてとてと施設の入り口から出て壁を背に座り込み、空を見上げた。
「きれい。でも、昼間の方が空は好きだな」
『今は大勢の人が一緒にいるけど……友達はひとりもいない。往人さんの時と同じようにこっちから明るく声をかけてみようかな。もしかしたら友達になってくれる人がいるしれないし』
ぼんやりと考えていた観鈴の目の前に現れたのは鴉。
ばっさばっさと舞い降りてきた。
観鈴の目の前に降りてきた鴉は観鈴のほうを見上げてきた。
観鈴を見上げる鴉と観鈴の目があった。
何故かしばらくの間、みつめあっている。
『動物なら友達になってくれるかな？』
何処か人間臭いしぐさで鴉が首を傾げた。観鈴もつられて首を傾げた。
鴉の表情は分からないが、なんとなく考え込んでいるような気がした。
本来、人に馴れる事のないはずの鴉だが、観鈴から動く気配がない。
「もしかして、友達になりたいの？　よし、ちょっと歩いて、振り向いてついてきてなかったら、ここでお別れ」
くるりと後ろを向いてぱたぱたと施設の入り口に向かって歩いて行く。
観鈴の背後ではそらがとことこと、ついていっている。

そらに追いついたポチとぴろも、そらについて行った。
「わ、ついてきてるっ………」
振り向いて言葉を発してから長い沈黙。
鴉だけだったはずなのに、何故か猫と白蛇までもがついてきている。
「えっ……と。みんな一緒に来るの？」
みんな来る？　という観鈴の言葉にそらは後ろを振り向いた。
ポチとピロがついてきている。
観鈴と出会った衝撃でふたりの存在を忘れてしまっていた。
「彼女か？」
「……わからない。でもついていかなきゃいけない気がする」
「そう、あなたが決めたのなら私達もついていくわ」
「……ありがとう」
「さっさと行きましょう？　彼女……行っちゃうわよ」
問い掛けた観鈴の目の前で動物達が「にゃあ」「しゅるしゅる」「か～」それぞれが鳴き声を上げながら向かい合っている。
「……来てくれないのかな？」
観鈴は動物達に背を向けて歩いて行く。
「にはは、観鈴ちんやっぱり、ひとり」
寂しげな笑顔でつぶやいたとき頭の後ろで何かがはばたく音がした。
振り返るとさっきまでいた動物達が居なくなっている。
ふと左肩に重みを感じて見てみると鴉が止まっている。
「わっ、やっぱり一緒に来てくれるんだ」
観鈴は破顔する。

「ん？」
何かが這う感触に下に見ると白蛇がするするすると右肩に登ってきている。
スカートが重い。下を見ると猫が爪をたててぶら下がっている。
「わっ。君達も来てくれるんだ」
スカートにぶら下がっている猫を頭に乗せた。
頭に載せたぴろ、左肩に止まったそら、右肩に巻き付いたポチ。
「にはは、まるで桃太郎さん。みんな、帰っても一緒。わたしの……友達」

834　それぞれの生き様

結果は、一瞬にして出た。
どさり、と倒れこむ二つの影。
晴香は膝をつき、そのまま前のめりに倒れる。ＨＭ—12は棒立ちのまま、真後ろに倒れた。
「は——晴香っ！」
立ち尽くしていたひとつの影が、その片方に向かって駆け寄る。残る二人は、長い静止の時間を取り戻そうとでもするかのように、慌てて銃を引き抜き、倒れたＨＭ—12に向かって構えた。
「この——お前、どういうつもりなんだっ⁉」
「なんで……なんでなのよ⁉　壊れちゃったの⁉」
すぐにも引き金を引こうとする二人。
「……二人とも、銃をおろしなさい」
抑えたのは、最初に引き金を引こうとした七瀬を抑えた人物。
「巳間さん……」
「繭、おろしな、さい」
「晴香さん……」
「北川、おろせっ、つってんの、よ」
七瀬の肩を借りて、眉間に苦痛の縦皺を寄せながら、二人を睨みつけて前進する。
「晴香……大丈夫なの？」

「だい、じょうぶなわけ、ない、で、しょうが！」
弾は、抜けているようだった。
吐血や喀血はないようだから、内臓は無事なのかもしれない。それでも腹部を貫通しているのだから、重心を移動させるたびに痛みが走り、歩きながらの会話は苦しげなものになる。
ようやく倒れたＨＭ―12の側までたどり着くと、七瀬の肩からずり落ちるようにして、彼女の顔を覗き込んだ。
晴香は妙に落ち着いた声で、語りかける。
「アンタ、さ……聞こえてる？」
返事は、ない。しかし、目が動いたような気がしたから、そのまま続けることにした。
「アンタさ、何かが自分に足りないって思うことは……立派な、ことなんだよ」
今度はきゅいん、と明らかに音がして、瞳孔が動いた。
「人間かどうかなんかより、自分がどうあるかのほうが、よっぽど大切じゃない？」
ＨＭ―12の駆動音が、空回りして鳴り響く。
「その辺の見極め間違えてさ。他人様に迷惑かけるのも疑問に思わなくなった時点で――」
ズドン‼
銃声。
一撃。
中枢部位が半壊していたＨＭ―12は、完全に機能を停止した。
「――アンタ、アタシたちの友達には、なれやしなかったんだよ」
それだけ言って、晴香は脱力した。銃口から立ち昇る一筋の煙は、供養の線香を思わせる虚しさを感じさせた。

「――それで、具合はどうなの？」
送れて到着した千鶴が、繭に尋ねる。既に晴香は七瀬に連れられて、医務室へ向かっていた。

「弾は綺麗に抜けてるみたいですけれど……痛みが、強いみたいです」
藺の意見に頷きつつ、北川が不安を口にする。
「あのメイドロボが狂ったとなると、芹香さんたちは……」
しかしその不安は、千鶴にとって過去のものになってしまっている。結論は、既に出ていたから。
悲しげに首を左右に振り、二人に向かって告知する。
「芹香さんと、詠美ちゃんは——もう、だめだったわ」
「……そんな！」
「くそっ……」
各々が改めて悲しみに浸る。
だが、それも長くはなかった。
彼らには、やるべきことがあるのだ。
「藺ちゃん、北川くん——行きましょう」
千鶴が、最初に促した。答えた二人も、決意を新たに頷く。
「そうね……CDを、発動させなきゃ……」
「ああ、俺の仕事は……これからだ」
藺は、北川は。
そのとき、誰のことを思っていたのだろう。
たくさんの出会いと、たくさんの別れの中で。
最後に残ったのは、ちっぽけな円盤だけではなかったはずだから。
医務室のあるフロアの、血塗られた回廊を、二人はひょこひょこと歩いていた。まるで不器用者の二人三脚のようである。
「ちょ、ちょ、ちょっと、なな、なななななせ」
「あたし、〝ななせ〟よ」
「うっといわね！　痛いっつってんのよ！　って、痛たたたた！」
「……晴香ぁ、あんまり怒ると、血圧あがるからやめときなさいよ。これでも、本気で心配してんの

よ？」
「私は、あんたが包帯巻いたりできるのかの方が心配よ！」
「あはは、大丈夫。観鈴がいるじゃない。それに千鶴さんも、コンピュータ室占拠できたら、戻ってくるって言ってたし」
「アンタ……潔すぎ」
〝医務室〟の札を発見し、曲がる。扉はないから、すぐに室内が見渡せた。
……そこには誰も、いなかった。
観鈴も。そして、彰さえもいなかった。
二つの死体が、あるだけだった。

一人と一羽、そして二匹がそこにいた。しかし今まさに、もう一人が加わろうとしていた。
再び施設の内部に入ろうとした観鈴の前に、人影が立ちはだかる。手には観鈴が置いてきた、シグ・ザウエルショートがあった。

どきりとして、観鈴はその人影を見上げる。彰だった。トイレに行くと偽って抜け出してきたのが、ものすごく悪い事をしたような気がして、観鈴は俯き沈黙する。
そんな気持ちを知ってか知らずか、彰は微笑んで優しく尋ねる。内心では、どこからともなく出現した動物に、たいそう驚いていたのだろうけれど。
「観鈴ちゃん、どうしたんだい？」
「あ、あの——ごめんなさいっ」
会話に、なっていない。
「……いや、べつにいいんだ。きみは丁寧に手当してくれたし……怪我には、慣れてしまったからね。僕が一人で居るのはいいけれど、きみが一人でいるのは危ないよ」
「で、でも、どうして……？」
どうして、彰はここに来れたのか。観鈴は不思議でたまらなかった。
「トイレは、医務室のすぐ右だったじゃないか。き

みは左に曲がってしまったから、どうしたんだろうと思ってね。気付くのが遅れたけど、足音を辿ってみたんだ」
「にはは……彰さん、探偵さんみたい」
「ああ、君の偽証はお見通しってことさ」
ふたりで、少しのあいだ笑う。本気で笑えたかどうかは、解らない。それにあまり良く知らない相手だったけれど……構わなかった。
――しかし、平穏の時は長く続かない。突然、彰が真顔になって、観鈴に医務室へ帰るように宣言したからだ。あまりの変貌ぶりに、観鈴は疑念を隠せなかった。
「……彰さん？」
「観鈴ちゃん……いますぐ、戻るんだ」
「いきなり、どうしたの？」
「銃声が、聞こえた。きっと手当てが、必要になる」
……聞こえたような気もする。でも、何かがおかしい。観鈴は違和感から、素直に言うことを聞けなかった。
「彰さん……一緒に、戻ろ？」
しかし彰は頑なだった。先ほどの微笑から想像もつかないような、観鈴を拒絶する冷たい物腰で返事をした。
「僕はもう少し月を――独りで月を――見ていたい。だからきみは、先に帰って欲しい」
観鈴が寂しそうに階段を折りて行くのを、彰は見守っていた。どうにも僕は不器用だな、とうんざりしながら腕を組む。動物に語りかける彼女の姿には、憐れみすら感じる。しかし、彼女の姿が消えるのを確認すると、くるりと振り向いた。
空には、朧月。
地には――やはり朧げな――光が、あった。
光を睨む、彰の瞳が赤味を増してゆく。
(神奈備命――ついに、来たか)

835　わがまま

「ふー、ようやっと帰ってきおったか」
部屋には、散開したメインモニターの破片と、血の匂い。その異常な状況の中で彼ら――千鶴、繭、北川――を出迎えたのは、以前と変わらぬ声だった。
凄惨な現場の中でいたたまれない気持ちになる三人に、G．N．はいつもの調子で尋ねる。かろうじて修復できた音声機能だったのだが、三人がそのことに気付くはずもない。
「いいのか？　あの嬢ちゃんも来とるぞ？」
「あの嬢ちゃん？」
北川の素っ頓狂な返事に、少々いらつきを覚えながら答える。時間を無駄にできないのはお互い様であろうに。
「忘れたか？　施設周囲には固定カメラがあるじゃろ？　例えばほれ、施設の出入り口近辺のカメラじゃが」
メインモニターはもう存在しない。仕方なく、予備の端末の小さなモニターに映像を映し出した。あまり余力はないが、彼らには見せる必要があるだろう。
千鶴、繭、北川の三人は、狭苦しいながらも一斉にその映像が映ったモニターを覗き込む。
そこには。
泣きながら銃を構える女と、ただそれを見据える男がいた。
男は、七瀬彰。
そして、女は。
「こいつ――スフィー、か？」
北川が断定できなかった理由は、ただ一つ。
それが少女ではなく女だったからだ。
「こういうことを言うのは酷かもしれんが――芹香嬢と詠美嬢を殺したのは、あの嬢ちゃんじゃ。ついでに言わせてもらえば、ワシの自慢のメインモニタ

ーをぶっ壊してくれたのもな。だいぶ見目は変わっとるようじゃが」
推測の範囲内でしかなかった事実。
ろくに動くことすら出来なかったその少女の身体が女の身体となり、平然と動き回り、しかも彰と対峙して銃を向けている。考えられる可能性は。
「やはり、神奈の影響を受けてしまっていた、ということですか……」
千鶴は苦渋の表情を浮かべ、そう呟く。万が一スフィーに神奈自身が降りていた場合は、それをスフィーごと斬らねばならない——ということになる。
「あの馬鹿、何やってんだ……」
北川は納得できなかった。
スフィーは誓ったはずだ。
必ず生き残って、出来ることをやり遂げて、元の生活に戻ると。
それなのに、彼女はあんなところで何をやっているる？
「神奈の影響だってんなら、CDを使えば——あんたが無事ってことは、CDは無事なんだよな？　もう解析も終わってるんじゃないのか？」
「CDは無事じゃよ。じゃが」
その声は、あまりに無慈悲だったように思えた。
「今すぐ使うのは無理じゃな」
「おい、何呑気なこと言ってんだ!?」
北川の怒声をものともせず、G．N．は続ける。
「ワシとてそれなりに苦労しとるんじゃ。ワシを蝕むウィルスを何とかしない限り、危なっかしくてCDの起動プロセスすら開けん。ワシがお釈迦になったとして、他の誰にそれができるんじゃ？　急ぎなら余計に、作業に集中させてもらうぞい。ウイルス駆除のな」
そしてG．N．は沈黙した。モニターの映像も消える。
「ちくしょう——何なんだよ——何だってんだ

――！」
部屋を飛び出そうとした北川を押し止めたのは。
「……北川君、あなたはここにいなさい」
意を決した、千鶴。自分達はやれることを――やるべきことをやるしかない。
「私達は、彼の援護に行きます」
繭もその言葉に従った。
千鶴にも、繭にも、分かっていた。神奈の影響を受けているであろう者――スフィーに、ＣＤの発動を前にして再びここに踏み込まれてたら、神奈に対抗できる数少ない――ただ一つかもしれない術が失われてしまいかねない、と。
予想外のアクシデントで晴香という大きな戦力を失い、彼女を治療しようとしている七瀬もまた動けない。観鈴は戦いの場に出せるような娘ではなかろう。
Ｇ．Ｎ．があの調子では、施設のセキュリティにも大して期待はできない。
少なくとも、時間を稼がねばならなかった。
それだけが、彼女達にできる唯一のことだった。
「スフィーは――スフィーはどうなる？」
そんな北川の問いには、こう答えることしかできなかった。
「……ＣＤが使えるようになるのが先であることを、祈るしかありません」
今回ばかりは、北川も千鶴の言に従うしかなかった。
千鶴を追うように部屋を出ようとした繭が、振り向かずに北川に告げる。
「北川――あなたには、本当に辛い選択を強いることになるわ。それを決める権利があるのは悔しいけど私じゃない。あなた自身よ。あなたが決めなさい」
繭は芹香との語らいによりそれを知っていた。私が代われるものなら――と、本当にそう思う。繭にとっても、ＣＤはそれ以上の意味を持つものなのだ

から。
だがそれは、千鶴にも、繭にも、他の誰にも許されない。もう北川のみにしか許されていないことだった。
ＣＤを使えば、どうなるか。部屋に一人残された北川も思い出していた。
――アレほどの化物に下手に抵抗されれば呪詛返しであっという間に――
それは。
――あの世行きよ――
スフィーの残した言葉だった。

呪詛返しを妨げられるだけの可能性を持っていた芹香はもうこの世におらず、実際に妨げようとしていたスフィーはあちら側に行ってしまった。もう守ってくれる者は存在しない。
不思議と、死ぬことは怖くなかった。だが許せなかった。多くの人間の――スフィーの連れの、レミィの、祐一の、それ以外にも多くの人間の――死の上に成り立っている自分の命もまた、失われてしまうことが。
それでも、やるべきことは果たさねばならない。
彼の葛藤は終わらなかった。

「ふ、二人ともどうしたんですか!?」
自分の横を颯爽と――といった感じではなく、慌ただしく駆け抜けていった千鶴と繭の後ろ姿にそんな問いかけをしてみた観鈴ではあったが、とても返事が返ってくることを期待できるような状況ではなかった。
ただ、彰の言葉が気になった。
銃声。
何があったのだろう？
彼女は医務室ではなく、千鶴と繭がやって来た方へと向かうことにした。

北川は予想外の来客に驚いた。
観鈴自体にはもちろんだが、その頭の上に置かれた猫、左肩に止まっているカラス、右肩に巻き付いている白蛇に。
残骸と血にまみれたこの部屋の状況に、彼女もまた驚いてるようだった。
「えっと、彰さんが銃声が聞こえたって言ってて、その――大丈夫ですか？」
「……晴香さんが撃たれたんだ、メイドロボに」
「え？」
「大丈夫。メイドロボは晴香さん本人がやっつけたし、晴香さんの方は七瀬が医務室に連れてってる」
「じゃ、じゃあわたしもお手伝いに行った方が――」
「神尾さんも行く必要はないんじゃないかな。七瀬に任せといて大丈夫だろ。あいつ、あれでも自称乙女だから、看護婦の真似事ぐらいはやってのけるさ。といっても、ここもあまり居心地のいい場所じゃないだろうけど」
それはわがままだったかもしれない。
間違いなくわがままだった。
でも今は。彼女に側に居てほしいと思った。レミィの面影を感じさせる彼女が側に居てくれれば、きっと何もかも上手くいくんじゃないかと思えた。そう思えるだけで良かった。
「その、じゃあ、北川さんは――」
観鈴は率直な疑問をぶつける。
「――ここで何をしてるの？」
北川は、苦笑混じりにこう答えた。
「そうだな……一点差で迎えた九回裏、ワンアウト、ランナー満塁。ベンチで代打に呼ばれるのを待ってるって感じかな？」
ホームランである必要はない。もちろん、ホームランであれば申し分ないのだが、それを期待するのは贅沢な話だった。
役目を果たすという意味では、犠牲フライでも十

分だ。
G．N．はあえて聞かなかった。あのメイドロボがどうなったのかを。
彼らが生きてここに辿り着いたという事実が、それを示していたから。
北川はあえて言わなかった。その時が来たらここから逃げろと。
命を対価として支払う自分のことを、止めようとするかもしれないから。
聞く必要はなかった。言う必要はある。しかし、まだ言わなければならない時ではない。
それは彼の、ほんの少しのわがままだった。

836　長いお別れ

煙草を捨ててしまったことが悔やまれる。
口が寂しい。右手に持ったライターの蓋を指でかちかちと弄びながら歩いていた。

人の気配を感じてそちらの方に目を向けると、すすり泣いている女の姿が目に飛び込んできた。
あいつは確か参加者の……。
参加者に対する管理者側の優越からくる油断。
高野はその女の方にゆっくりと近づいていく。
「どうした？」
女は悲しい顔をして高野の方を見るだけだ。
そんな女の様子を見て高野は傍まで行って女に声をかけた。
女は高野の声を受けて微笑む。
「知っておるか？　お主のような奴をうつけものというのじゃぞ」
カチャリと音をたてて高野の胸に銃をつきつけて引き金をひいた。
ゼロ距離射撃。血や骨、臓物が高野の背中から飛び散った。
俺は優しいんじゃなくて……甘いだけだったんだな。

気が向いただけなどと理由をつけて参加者を見逃す。
そして、同じ理由で参加者の怪我人を助ける。甘いだけだったんだ。……他人にも、そしてなにより自分に。
強くなければ生きられない。優しくなければ生きていく資格がない。
俺は強くもなければ優しくもなかったわけだ……。
「この島に来て何も学んでおらぬのか？　ふんっ！　阿呆を殺してもおもしろくもないわ。興醒めじゃな」
「……僕じゃ、役者不足かい？」
どさりと後ろに倒れる高野の身体。
そのうつろな瞳に映った男の名は……七瀬彰。

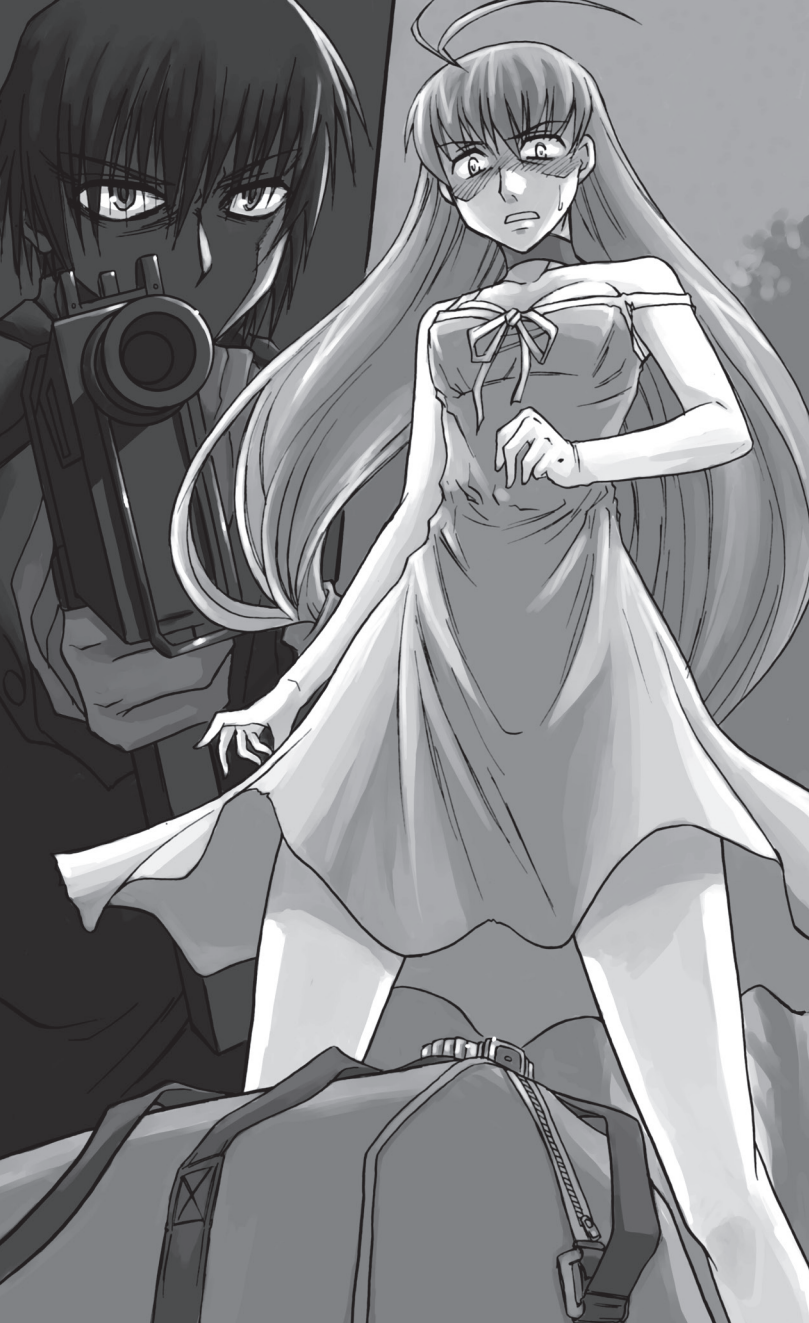
837　業火

「……僕じゃ、役者不足かい？」
月明かりが二人に差し込み、彰の体がはっきりと神奈にも見える。
「おお、そなたは確か……」
突然現れた彰を神奈が思い出すより早く。
「そう。間抜けにもお前に体を乗っ取られ、大切な人を殺してしまった愚かな男、七瀬彰さ」
冷めきった言葉を、彼は口にした。
「それで彰とやら、一番大切なものをそなたから奪った余が憎いか？」
おどけた口調の神奈。明らかな挑発。
「ああそうだ。憎いさ。彼女の首を絞めた僕自身と同じぐらいね」
それに動じることなく、自分の思っている事を淡々と話す彰。
「でもさ、だから僕は」
その言葉と共に彰がシグ・ザウエルショート9㎜を片手で構え、
「生きて、お前を殺してやろうと思える！」

躊躇いなく、引き金に、力を込めた。
ダン！　ダン！　ダン！
「ふん、余はきっかけを与えたに過ぎん。事実そなたは、あの小娘を手に掛けようとしていたではないか」
そう言いながらM4カービンを彰に向け、撃つ。
ズガガガガガッ！
「違う！　僕は初音に生き残って欲しかったんだ！　だから彼女の甘い考えを振り払ってやろうとしてたんだよ！」
ダン！　ダン！
「ふん、所詮はおぬしの偽善よ。あの小娘が大切ならなぜ守ってやろうとしなかった？　その上ちっぽけな己の嫉妬に付け込まれ、鬼程度の愚物に心を奪われて、仲間を傷つけ、殺そうとした。余が知らぬとでも思ったか？」
ズガガガッ！　ガガガッ！
「うるさい！　お前みたいな化物に、僕の気持ちがわかってたまるか！」
ガン！　ガン！　ガン！　ガン！　ガン！
「化物とは心外なことを申す、これでも余は羽以外、お主等と変わらんよ」
ズガガガッ！
「化物とかそうでないとか、そんなのは僕の知った事か！　今、僕はお前が憎い！　お前を殺す理由なんてそれだけで十分だ！」
ガン！　ガン！
叫びと共に、銃を撃つ彰。
それは初音が死んでから、初めて見せた激昂。
彼は、すべての怒りを目の前にぶつけていた。

カチ！　カチカチ！
「くそ！　弾が……」
当然である。
後先を考えずに撃てば、こうなるのは当たり前だ。
「なんじゃ、この筒が無くなれば、何もできんとは。

所詮、人間よの。だが……」
　同じく弾の切れたM４カービンを捨てた神奈が冷酷な笑みを浮かべ、右手を掲げる。
「余は、違うぞ」
　掲げた手に集まった光の矢。それを彰に向け、連続して放つ。
　ヒュン！　ヒュン！　ヒュン！
「うおっ！」
　ヒュン！　グサッ！
「ぐおおおおっ！」
　急所への矢はなんとか何とか回避できたものの、右肩に矢が一本突き刺さった。
　すぐに矢は消えたが、確かに残る鈍い痛みが体中に広がる。
　ドサッ！
　彰の体がそのまま地面に倒れこみ、猛烈な痛みで、今にも意識が飛んでいきそうになる。
（まだだ！　こんな所で死んでしまったら初音にあわす顔がない！　どうにかしろ！　考えるんだ彰……）
　神奈を殺すまでは死ねない。ただそのためだけに彼は頭を振り、立ち上がる。
　二人とも銃は使えなくなった。だが、光の矢による遠距離攻撃ができる分、現状は神奈の方が圧倒的に優勢だった。
　無策に突撃したところで、光の矢で串刺しにされてしまうだけだろう。彰は頭をフル回転させて状況を打破する手段を考える。
（なにはともあれ武器が必要だ。少し前に見つけた持ち主不明のバッグには武器が入っていた。あれを上手く使うことができれば……）
「もう抵抗する気も無いか？　やはりお主も不足な相手よ……」
　神奈が近づいてくる。今度こそ自分を確実にしとめるためにおそらく矢の回避不可能な範囲まで。
（仕方がない、一か八か！）

そう、正に飛び出そうとしたその時。
「あきらあああああっ！」
別れてから数時間しか経っていないのに、何故か懐かしく感じる声が――聞こえた。
「うおおおおおっ！」
ズガァァン！
「彰！　死ぬな！」
ズガァァン！　ズガァァン！
射程距離の外である事がわかっていても耕一はベレッタを撃つのを止めはしなかった。
派手な行動によって、彰への注意を自分に逸らす。いわゆる『囮』だ。
（な、馬鹿な！　あの男はこの彰とかいう男の為に、傷を負ったはずの男ではないか！）
そしてそれは、意外な形で神奈にも影響する。
（どうしてじゃ……どうして皆、こうまでして他人を庇う？　所詮、信じられるものなど何も無いと言うのに、ああ、不愉快じゃ……）
「不愉快じゃああっ！」
そう叫びながら、耕一達のいる位置に、無数の矢を放つ。
おおよその方向に撃ったので命中率は低いが、威嚇には十分な効果を発揮した。
「うわ！　な、なんだこりゃあ！」
矢に襲われた耕一が、叫び声を上げる。
「はあ……はあ……はあ……本当に不愉快な奴らじゃ。あやつの始末は後でするとして、まずはおぬしから……」
そこで気付く、彰が――いつの間にか居ない。
「ど、何処じゃ！　何処におる！」
ピピピピピピ！
「そこにおるのか！」
音のした方向に、三度矢を放つ。
ヒュン！
だが、何度撃っても手ごたえが無い。まるで、そ

こにはいないように。
（おかしい……様子が変じゃのう……）
神奈もそれに気付き、音のする方向に駆け寄る。
そして、
「なんじゃこれは！」
そこにあったのは、
アラームの鳴っている彰の腕時計と高野が持っていた、バッグだった。
「ゲーム・オーバー」
神奈が、今度こそ確かに聞こえた人の声に振り向くと、
サブマシンガンを構えた彰が、何の感情持ってないような無表情で、立っていた。
パラララララララララッ！
「くううっ！」
避けれないと判断した神奈が己の身にかかる負担を承知で、障壁を張る。
カカカカカカカ！

とっさに張った障壁だが、銃弾程度は弾く。
が、
爆発までは、防げない。
パラララララララララッ！
二度目のサブマシンガンの斉射が、高野の手榴弾入りのバッグを、蜂の巣にした。
ドゴオオオオオオオオオオン！
（なあっ！　おのれええ！　かくなる上は！）
危険を察知した神奈が、スフィーから意識を切り離し、上空に飛んでいく。
だが、その行為は
「あああああああああああっ！」
意識の戻ったスフィーに、耐えがたい苦痛をもたらすものだった。
熱い熱い！　息が出来ない！
「きゃああああああああああっ！」
死ぬ！　このままでは死んでしまう！

嫌だ！
（死にたくない……や……だ……）
燃える炎の中、スフィーは自らの運命を呪う。
（私が、なにをしたの？）
そうだ、自分が——何をした？
ゲームにだって乗ってない。
脱出の方法だって、必死に考えた。
だが、今の自分は、
火の海で焼け尽きようとしているではないか！
（ああ……苦しい……死にたく……ない……死にたくな……い……）
体が力を失い、倒れこむ時間に彰と、目が合った。
彼の顔は、申し訳なさそうに、
（どうして私を殺すの？　私は何も悪くないのに！
……この……悪魔……）
苦痛でひどく歪んでいる、彰の表情。
そんな彰を恨みながら、
「……あああああああああっ！」

断末魔の悲鳴と共に、彼女の何かが終わりを告げた。
「神奈を、やったのか？　彰」
いまだに燃え盛る、炎に身を裂かれるスフィーを見て苦りきった顔の彰に、耕一が駆け寄った。
「耕一……」
駆け寄る耕一に、彰は目を合わせられない。
「いや、結局ギリギリの所で逃げられた。その証拠に、爆発の後すぐにスフィーさんの叫び声が上がったから多分、死んではいない」
だから、耕一とは反対の方向を見ながら、彰は答えた。
「そうか……」
しばしの沈黙の後、
「なんでだ？　なんで、僕に何も聞かない？」
彰は呟いた。
「教えてやるよ、初音を殺したのは、僕なんだ。僕

が、あの細い首に力を込めて、殺したんだ。気付いてるんだろ？　初音が一人で僕のところに向かったのは、お前だって知っているんだから」
その問いに、耕一は空を見上げ、
「知ってるさ。梓から聞いたしな」
特に何の変化も無い声で、耕一が答える。
「だったら、なんで僕を助けた。僕が、憎くないのか？」
彰の口から漏れる、悲痛な声。
まるで殺してくれと、言わんばかりに。
「……梓からもう一つ聞いた。お前、死ぬ気なんだろ？」
今度は、多少の苛つきが見える声で、今度は耕一が彰に問い掛ける。
「……まあね、今の僕なんて、生きててもしょうがない存在さ。神奈との戦いが終わったら、僕は初音の所にいくつもり……」
「この、大バカヤロォォォォオッ！」

バキィ！
手加減の無い、本気の一撃。
彰の体が、地面にひれ伏す。
「ぐうっ、こ、こうい……」
倒れている彰に、耕一が近寄って、
「てめえはとんでもないバカだ！　そんな事して初音ちゃんが喜ぶとでも思ってんのか⁉　おい！　いいか、よく聞け！」
彰の胸倉をつかみながら、耕一は叫びつづける。
「お前が死んだって、初音ちゃんはちっとも喜びはしねえよ！　死んでしまった人が願うのは、残された人の幸福だってことに、何でお前は気付かないんだ⁉　考えても見ろ！　あの子がどれほどお前の事を思っていたか！　鬼の血のせいで変わってしまったお前の事を、どれだけ心配したか！　だから、初音ちゃんはお前が死ぬ事なんてこれっぽちも嬉しくない事に、どうしてお前は解らない？」
悲痛な、声。

「だけど、もう僕は、スフィーさんだって殺してしまった。神奈を倒すためとはいえ、もう僕には生きる資格なんて……」
「ああうるせぇ！　俺が伝えたかったことはもう伝えた。それで、どうするかはお前が考えて自分で決めろ。だが、俺はお前を死なせる為に助けたつもりはないからな！」
　そういうと耕一は、彰に背を向けて、耕一が駆けて来た方向に向かい、手を振り始めた。
　恐らく、梓さんたちが来たのだろう。
（うう、くそう……）
　解っていた。
　死ぬ事は逃げる事だと。
　でも、それでみんな丸く収まると思っていた。
　千鶴さんも、梓さんも、耕一も、
　それでみんな、納得してくれると思っていた。
　だけど、耕一は僕に死ぬなと言った、
　それなら僕は、彼女のいないこの後どう生きていけっていうんだ？
「…………はつね、お前に会えない世界は、こんなに辛いんだな……」
　どうしようもなく寂しく、辛い気持ちが押し寄せて、
　耕一が梓さんをつれてくるまで、
　今は亡き愛しい人を思い出して、少しの間、僕は泣いた。

五十番　スフィー　死亡
【残り　11人】

838　標的

　特に何を語るわけでもなく。もちろん、何ができるというわけでもなく。
　北川は、ディスプレイをぼんやりと見つめながら、ただそこにいた。

（八十パーセントを越えた……さすがに、早いな）
ウィルスの除去が、驚くべき速さで進行しているようだった。話す余裕はないのか、そうする気がないのか、ろくすっぽ説明はないままなのだが、ときおり除去作業の進捗情況をディスプレイに映してくれている。
観鈴を呼び止めたのは、自分のわがままだと思っている。だがそれならそれで、かわりに気の効いた小話でも披露して、彼女を楽しませる位の芸はある――はずだった。
（ちぇ……びびってんのかね、俺）
今は何も、浮かばない。足を投げ出して、腕を頭の後ろに組む。
（……八七パーセント）
彼女は、どこからか連れてきた動物と遊んでいる。その姿は笑顔に彩られているが、ひどく寂しげだった。
だから、何があったのか、聞こうと思っていた。

いや、聞くべきかどうか、迷っていた。
すねのあたりで足を組み、天井を見つめる。北川は、彼女の悲しみに明確な理由がある事を知っていた。あれほど必死に観鈴を探していた往人が、死んだことだ。彼女の母親も、時を同じくして死んだらしい。
道中で七瀬達からそんな話を聞いたのだが、彼女たちも詳しくは知らないようだった。
猫と戯れる観鈴の姿は、たしかに楽しそうではある。だが彼女が望んでいるのは、猫ではないはずだ。言ってしまえば、往人の存在なのではないだろうか。
（まったく……往人さん、恨みますよ……）
つんつんっ！
心で呟くなり、烏が北川の両目に嘴を叩き込んだ。
「痛ェ！　なんだこいつ！」
「カァーーーーッ！」
両目をおさえて椅子から飛び起き、烏の捕獲を試みる。

「烏のくせに、生意気なんだよ‼」
「クワッ‼」
北川の挑戦は、もちろん成功しない。ひらりと北川の両手を避けた烏が、逆に怪我をした北川の手に向かって、嘴を振り下ろす。
「ぐおおおおおおお⁉」
痛みに床を転げまわる北川。容赦なく追い撃ちをかける烏。
「にはは、北川さん、烏さんと仲良し。羨ましいかも」
「羨ましくなんかねえええええええええ‼」
「クワーーーーー！」
気の効いた小話どころか、怒鳴るだけで精一杯だった。
しかし世の中、悪い事ばかりでもない。ディスプレイには、百パーセントの表示が燦然と灯っていた。
そして続くCD解析のゲージは、もともと終盤に差し掛かっていたのだ。

（もう少しだな……）
自らの危険を伴う、希望の扉。
邪魔な鍵は、次々と外されていく。
扉を開いた、その先には。
一体何が——あるのだろう？

（ぬかったわ……）
神奈は再び上空に登り、その意志のみで存在していた。再び、多くの力を失っている。神奈が油断していたせいもあるが、彼女にとっての不幸も多かったのだ。
だが一方で、スフィーの死は彼女にとっての活力にもなった。彰への恨みを抱いて死んだ彼女の無念は、神奈の好む味付けがこってりと為されていたからだ。
そのためトータル的には、それほど大きなダメージではないとも言える。
（……とは言え、このままでは……消えてしまいか

ねん）
依り代が、必要だった。目処はもう着いている。
いや、その表現は正しくない。一目見た瞬間に
――決めていた。
（あの娘。あの身体こそが。余の力を、存分に引き出すであろう）
もともと神奈は、さほどその娘を評価していなかった。能力にも、精神にも、神奈の価値感では強さを認める事ができなかったからだ。だから岩場を移動していたとき、その存在を感じたにも関わらず、思うところは何もなかった。
だが鬼飼いの男の隣に立つ、娘の姿を直に視界に捕らえた時。
……認識は、急変した。
もしあの身体に依ることができたなら。魔法を使える程度の身体など――なんの未練もない。
もはや他の人間など、どうでもよかった。全力を傾けてでも、あの身体を乗っ取れば、恐れるものなど何もないのだから。
コンピュータ室の、狭く小さな大気の中で。
神奈の意識は、じっと観鈴の姿を見つめていた。

839　雨の中

――時は少し遡る。

「で、梓さん。ボクたち耕一さんを捜しにきたのに、なんで隠れてるの？」
あゆの疑問は当然だった。
梓は決めかねていたのだ。あそこに今すぐ、闖入したものかどうか。
それに、耕一の真意も知りたかった。
だから梓は、あゆの疑問が口に出されるまで迷っていたのだ。
しかし、あゆの言葉が梓を吹っ切らせた。
（そうだよな、こんなところでじっとしてるなんて、

あたしらしくもない）
　梓は一人大きく頷くと、あゆの手を引いて歩き出した。
「あれあれ？　梓さん、今度はどうしたの？」
　戸惑うあゆの手を引く、梓は大股で歩いた。
「耕一、行くよ!!」
　人の近付く音と、それに続いて上がった梓の声に、耕一とマナは驚くようにして互いの体を離した。
「なに、鼻の下延ばしてるんだよ、耕一。いいかい？　このくそったれのゲームを終わらせようと、みんな集まってる。遊んでる暇はないんだ。急ぐよ！」
　堂々と言い放つ梓。
　数刻前にはかなり消耗していたのを忘れたかのように、必要なときにはいくらでも元気に振る舞ってみせる。それが柏木梓だ。
「あ、いや、これは、その、別になんでもないんだ。そう、なんでもないんだよ、梓。て、ゆーか……」
　いつもの調子で現れた梓に、つい慌てふためいてしまった耕一だった。
「何をあわててるんだよ、耕一？」
　まるで何も見ていなかったかのように梓は言った。
「あ、いや、これは、その、えーと……」
　マナは耕一から離れたまま顔を赤くして、梓に目を合わせづらそうにしていたが、やがて思いついたようにまくしたてはじめた。
「大体、こ、耕一さんが、足場のしっかりした場所を選んでくれないから、膝がカクッてなっちゃったでしょ、カクッて！　それに私が、毒のせいで体力落ちてるの、分かってるクセに……」
　ムキになっているように見えるマナを、梓は微笑ましく思った。
「もう、私がちょっと弱気になったからって……男の人っていつもそうなんだから」
「え？　ちょっと、マナちゃん、それは……!!」
　何だか情勢があやしくなって来て、耕一は慌てふ

ためきながら口を挟む。
「男のクセに、言い訳しない!!」
マナの伝家の宝刀が今、再び耕一のすねに炸裂した!!
全身に包帯を巻いた男が、すねを抱えて地を転げる様は実に痛々しい。
耕一のそんな様子にマナは気遣う様子もなくそっぽを向いた。
（私が勝手に盛り上がってただけなのは判ってたのよ。この特殊な状況で、そう、だから……。私はただ、この島で色々なことが起こりすぎて、そんな中でちょっと優しさに寄りかかってみたかっただけ。どしゃ降りの雨の中、軒先でそれが通り過ぎるのを待つように……。そこから出ていくのがちょっとだけ腹立たしいから。八つ当たりでごめんね……耕一さん……）
マナの想いは胸の中。それを読みとれる者はなく。ただ森の暗闇の中、耕一の呻きだけが低く響く。

耕一が気の済むまで転げ回ったところで、事態は一段落した。あゆが耕一を助け起こし、今度はマナの機嫌を伺っている。
起きあがった耕一は少しばかり何事かを呟いていたが、間もなく言葉を切り、梓に向き直った。
そして、ほっとしたような笑みを見せる。
「そっか……どうやら、落ち着いたみたいだな。正直、あのときは、俺もどうなっちまうかと……」
静かに梓を見つめながら耕一。しかし——
「ごめん、耕一……でも、今はまだ……」
そのことには触れて欲しくない、と言葉を濁す梓。明るく振る舞っていた表情に影が落ちる。
「……そうか」
耕一は自分のデリカシーの無さに嫌気が差した。初音の死は、未だ生々しすぎる傷痕だった。
そんなことわかりきっていた筈なのに……
気まずい沈黙が場を支配する。
「ほんとうに、ごめん……」

梓はつぶやく。
やがて梓はもう一度だけ頷いた。
表情を引き締めて振り返り、三人に告げる。
「さあ、本当に急ぐよ。他のみんなの状況は、歩きながら話すことにしたいと思う」
一同に視線をくれたあと、梓は率先して歩き出した。
それにつられるように、皆歩き出す。
（これ以上、あたしは失敗を重ねたくない。これ以上、誰も犠牲にはしたくない。絶対に、これ以上、これ以上……）
気を張って歩き出した梓だったが、しかし、その消耗は本人が思っているよりも大きかった。
それゆえ数分後、彰を救う為に突出した耕一に梓はついてゆくことが出来なかったし、マナもまた、そんな梓を支える為に、耕一の背を見守ることしか出来なかったのであった……。

840　意志の力は魔法の力

「なん…だ…？」
色のついた霧が部屋の中央に集まっていく。
北川は目を疑った。
それが人の形へと収束していく。
彼にも分かった。
これから不吉なことが起こるであろうと。
自分には、スフィーにおそらく訪れたであろう死を悲しむ間さえないのだと。
「我が名は神奈備命……」
何事も見透かし、何事にも冷めているかのような瞳。
「小娘……」
この世のものとは思えない美麗な顔立ち。
「お主の体をもらいうける……」
全身から放たれるすさまじいプレッシャー。

人外とはまさにこのこと。
「が……がお……」
観鈴には理解しがたい台詞。
体をもらいうけるとは、なんだろう。
――カチャリ――
「待ちな。彼女には手を出させない」
彼だって意味はよくわからなかっただろう。
北川が神奈に銃を向ける。
ステアーＴＭＰ。
「この状態の余に、ろくに意志も篭められぬ飛び道具が効くわけなかろう」
「うるせぇ！　わけわかんねーこと言うな!!」
神奈の胸に狙いを定める。
「やってやるぜぇぇっ!!」
――バン！――
――パァァアアン――
素人にしては上等。銃弾は神奈の腕に命中した。
そして不可思議な音を立てその腕が霧散する。

意志の力は魔法の力。
神奈が驚きの表情になる。
「ほう……。なかなかの意志力。もしかしたらこのまま余を滅ぼせるかもしれぬぞ？」
北川は迷わず撃ち続ける。
弾丸が命中するたびに神奈の一部が霧散して消える。
――バン！――
そして最後の一発が頭を消滅させた。
残ったのは右腕と左脚のみ。
空に浮かぶかのように残った。
が……。
その右腕が動いた。
――ゴオォォォオオオ!!――
轟音。
北川の身体が木の葉の様に舞い、メインコンピュータに叩きつけられる。
「我ながら情けない破壊力よ……」

北川の目に映るのは、現れた時とほぼ変わらぬ姿の神奈。
「く……くそ……！　効いてねーじゃねーかよ！」
「いや、効いておったよ。そうじゃな。柱のカドに頭をぶつけたといったところかのぉ」
まだ再生しきれていない左手を見せつける。
「余も完璧ではない。そう……まだ完璧ではないのじゃよ」
そして観鈴へとふりかえる。
「だからそなたの体を……いただくとしよう」
少し離れたところで立ちすくんでいた観鈴。
彼女に向かって神奈が一歩進む。
「が……がお……」
「神尾さん……逃げ………逃げろ！」
観鈴は恐怖で足がすくんで動けない。北川に言われて足が一歩下がったと同時に、彼女の平衡感覚が狂う。達人に柔道で投げられたかのように勢い良く転倒する観鈴。

「知らなかったのか？」
また一歩、お互いの距離が縮まった。
「神奈備命からは逃げられない」
観鈴を守れる人間は誰もいない。

841　遺志、そして意志──まもるべきもの──

──そらが魂の雄叫びを上げる。
バサバサと翼をはためかせ、光り輝く鴉。
神奈、北川、観鈴、そして、ぴろ、ポチ。部屋に居る生き物全てが息を飲んで圧倒される。
目の前の状況は、その引き金として十分すぎる光景だった。それは、そらの内にある『俺』──国崎往人の現出である。

やっと観鈴に会えたのに、俺は何をやってるんだ？

あの姫君に好き勝手やられっぱなしじゃないか。
もう残された時間も少ないってのに——
もはや人ではない俺が、俺を俺として認識できる状況になっている。
それは俺自身の崩壊を示唆していた。
鳥の器では、俺の人間としての全てを受け止めきることはできない。
『私』の計らいにより延命はされていたが、こうなってしまった以上、崩壊は避けられ得ぬものだった。
もう俺の崩壊は避けられない。せめて、俺と共存していた『ぼく』や『私』だけでも無事で済むことを祈るしかない。

俺にはもう。
あいつのお守りはできないけれど。
あいつの側にいてやるって約束すら守れないかもしれないけれど。
そうだな、北川。お前になら頼めそうだな。この際贅沢は言ってられないか。
お前はまだ、笑えるんだよな？　だったら。
観鈴のこと、頼む——

——国崎往人の記憶も、意識も、そこで潰えた。

だが、遺志だけは継がれていた。
(ぼくが、なにかをしなくちゃいけない)
その遺志は『俺』のものだった。でもそれは、『私』の、そしてぼくの意志でもある。
紛れもない、そらの意志。
彼女を。
観鈴を守らなくちゃいけない。
(でも、どうやって？)
わからない。けれど。
観鈴を守らなくちゃいけないんだ。

842　夏、青空の少女
——She is waiting in the air——

人の力は、弱くて儚い。
一歩一歩観鈴に近寄る神奈に北川は殴り掛かろうとした。
だが、その拳が届く前に、目に見えない力で跳ね飛ばされる。
人の力は、弱くて儚い。
無駄だとわかっていても、ただ叫び、起き上がり、そして、跳ね飛ばされるだけの無力な存在。

鳥は自由に空を飛ぶ力を持っている。
だがそれは、空のないこの場所では殆ど意味を持たない。漠然とした衝動だけを頼りに、そらは神奈にむかう。
神奈は全く相手にしない。やはり神奈に届く前に跳ね飛ばされてしまう。
翼は、今、何の意味も持たない。
無駄だとわかっていても、ただ飛び掛かり続け、何度も何度も繰り返して。

瞳が、姿を捉えて放さない。
逃げたいと思っても、体が反応しない。
近付いてくる得体の知れない少女を前に、ただ座り込み、震えるだけ。
「自分の肉体に還るのは……久方ぶりだの……」
やがて、神奈の姿が観鈴と重なり。
少女達は、一つになった。

自らの無力を呪う絶叫が響く。
自分ではない自分が託した意志を果たせなかった、悔しさを込めた鳴き声がする。
観鈴であった少女は立ち上がり、そして、笑った。
無邪気な少女の笑顔で、無力な者達に手を向けた。

色のない真っ白な空間を、観鈴は登っていた。真っ白というのも定かではない。もしかしたら、真っ暗闇なのかもしれない。
上下も左右もないのに、『登っている』ことだけが感覚でわかる。記憶にある最後の光景は、自分と少女がひとつになる瞬間のもの。
何が起こっているのかわからない。
まるで、夢の中にいるようだ。
そこには無数の『わたし』が居て、たくさんの記憶が川のように流れている。
……たくさんの悲しい記憶。
わたしと同じ運命を背負った少女達。
誰かを想う程、その相手を衰弱させてしまう呪い。
人の器には大きすぎる羽根の記憶。
流れ過ぎゆく時間の中で、白い羽根によってもたらされた、いくつもの出来事。
大道芸人として果てのない旅をしている女と、彼女が助けられなかった女の子。
生まれてくることを許されなかった少女の幻影。
呪われた子どもを持った女と、時を超えて彼女の意識を受け取ってしまった少女。
数え切れないほどの、夢の欠片を追っていた。
たくさんの自分や羽根。それに関わった者達の記憶。
その殆どは哀しみの色で塗り尽くされており、観鈴の心の染めていった。

世界に色が満ちてゆく。
青と、白のコントラスト。
たどりついた先は、夏、青空の下。流れる風の中。
見下ろすと、山道が見えた。
そして、一人の男の死体と、それにしがみつく少女の姿。
「りゅうやどのぉぉぉぉぉぉぉぉっっ!!」
叫び声が、世界を揺らした。

観鈴の心を、揺さぶった。
哀しかっただけなんだ。
心が、かなしさにうめつくされて、なにもわからなくなっちゃったんだ。
だけど……。
だからって、みんな、多分あなたを許さないから。
例えこの苦しみを知ったとしても、みんなも同じ苦しみをかかえているはずだから。
だから、せめて。
わたしはあなたに還って、ずっと一緒にいる……。

843　たった一つの……

「実に心地よい。自分に近い体を再び持てること。その、なんと心地よいことか……わかるか？　無力な人よ」
話ながら次々と容赦なく襲いかかる攻撃の前に、北川は成す術もなかった。
そらは最初の一撃で、既に意識を失っている。いっそ、そうなった方がどれだけ楽だっただろう。
しかし、それは許されなかった。
ＣＤを発動させる、その仕事を終えずして倒れることは、北川自身許せなかった。
「なかなか耐えるではないか。余もそろそろ飽きた故、終わりにしてやろう」
観鈴を乗っ取った神奈の顔が冷酷に笑う。その表情にレミィの面影は、今やもう無い。
（……まだか……まだ終わらないのか！　いったい、何やってんだよ！）
この際、自分の命が助かることに興味はなかった。だが、自分は結局何も出来ないまま死ぬのは嫌だ。先に逝った仲間に、友に、会わせる顔がないではないか。
全ての鍵を握るＣＤを、ずっと所有していたのは北川だった。そして寄り道をせずにメインコンピュータのあるこの場所を目指すことだって出来たはず

だった。もう少し早くこの場所に辿り着いていれば、魔法を発動できてさえいれば、死なずに済んだ人も居たかもしれない。スフィーくらいは救えたかもしれない。自分の行動のツケを他人に払わせてしまっている。そんな自分が、たったひとつ与えられた役目すらこなせずに、ここで潰えてしまうのか。
（ちくしょうっ……俺は一体何なんだよ……っ！）
「そんなに後ろのそれが気になるか？」
北川はハッと、神奈の目を見た。
「そう驚くことはないであろう？　余は観鈴の記憶も有しておる。人間たちがおぬしに希望を託したことも知っておるぞ？」
「なら……」
神奈を見る目に怒りがこもる。
「ならなんだってんだよ……」
「残念よのう、と言うておる」
「っ！」
怒りで誰かを殺せたら……北川はこの時始めてそう思った。
「それは余にとってあまり好ましくないものであるそうじゃ。いっそ、おぬしの命を奪う前に、片付けて——」
「やめろっ！」
「……そう言うと思ったぞ。そこで、余がおぬしに一つ機会を与えてやろう。余がそれを破壊することをその場で見届けるなら、余に手をあげたことは水に流す。おぬしの命を、今は見逃そうというわけじゃ。それができぬなら、おぬしを殺したすぐ後にそれも一緒に破壊してくれよう。どうじゃ、面白いであろう？　五つ数える間に自分で決めよ」
選択肢は始めから一つしかない。
「五つ……」
どちらが、より長く、機械を生かせるか。
「四つ……」
ただそれだけだった。
「三つ……」

そのわずかの時間差で、誰かがこの場にかけこみ、なんとかしてくれるかもしれない。
「二つ……」
可能性に賭ける他なく、また与えられた選択肢以外に、道は思い浮かばなかった。
「一つ……」
「俺を先に殺せよ」
「……それの時間稼ぎを選んだか。余の問いかけに時間を置いて応えたのも、時間稼ぎの一つじゃな。自分の命を捨ててでもというわけじゃ……」
「……」
「いい心構えと言うておこう。だが、それが、余にとっては実に不愉快じゃ」
力のイメージを形作り、神奈は北川の胸に意識を解き放った。
結局、何もできずに終わってしまった……。
口では都合のいいことを言いながら、観鈴を助けることも、魔法を発動することもできなかった。

スフィーの顔が脳裏に浮かんだ。
彼女はかつて何と言っていただろうか。
『大丈夫、この魔法を起動するのに魔法の力は必須ではないから。もちろん、あるに越したことはないけど、この魔法は起動に必要な魔力と術式をパッケージ化しているから、魔力が無くても起動はできるわ。むしろ、必要なのは『想い』よ』
『想い？』
『魔法っていうのは想いを実現させる物、想う力が強ければそれだけ魔法は威力を増すわ。強い想いがあればこの魔法は発動させることができる。それができるのは……アンタだけよ』
最後に、一つの可能性が北川の頭をよぎった。
まさか、そんなことでいいのか？
この台詞を曲解しないと、その結論には届きそう

もない。
だけど……、
最後の最後まで、自分にやれる可能性のあることは試そうと思う。
スフィーは『この魔法は起動に必要な魔力と術式をパッケージ化している』と言った。
スフィーは『この魔法に必要なのは『想い』だと言った。
俺はそれを成功させたいと思っている。
どんなことがあっても絶対に成功させたいと思っている……。
神奈の力が、北川を貫いた。
想いの行き場を北川から解放されて。
プログラムは、起動した。

二十九番　北川潤　死亡
【残り10人】

844　現実に抗う者

銃声やら凄まじい爆音やらを聞き、精一杯の速さでその場に駆けつけた三人
——観月マナ、柏木梓、月宮あゆ——が見たものは。二人の男に、一つの人間だったもの——焼け焦げた死体——だった。
「耕一、大丈夫!?」
「ああ、何とかな。彰の方も何とか無事だ」
辛い身体で無理して駆け寄ってきた梓に苦い笑顔を浮かべ、耕一は答える。
「これ、は……?」
あゆが指し示したのは、もはや原型を留めていない焼死体。
「……スフィーさんだ」
彰はただ冷淡に、告げる。状況を把握していなかった三人は、凍り付いた。

「彼女は、完全に神奈の影響下にあった。神奈自身が降りてきていたんだ。僕には分かる。もう助けようがない以上、戦うしかなかった。ならば、せめて、ここで決着を——と思ったんだけど、僕の力じゃ及ばなかった。耕一の助勢がなければ、むしろ僕の方がやられていたと思う。結局は、神奈には逃げられ、スフィーさんの死を無駄にしてしまった」
「それって……」
この状況を見て、彰の言葉を聞いて、ただ黙っていたマナが口を開いた。
「……つまるところ、そのスフィーさんは神奈とやらに操られてて、あなたがそれを殺したってことと？」
「そう。彼女を殺したのは紛れもなく僕だ。それを否定するつもりはないし、否定する権利もない。仕方なかったとはいえ、僕は彼女を殺してしまったんだ。もちろん助ける方法があるなら僕だってそれを使ったさ。でも、そんな方法はない。現実的じゃないんだ」
慌てて仲裁に入るのは、耕一。
「ま、まあマナちゃん、落ち着いて。現実的に考えて、ああするしかなかったんだ。彼女を放っておいたら、もっとたくさんの犠牲が出てたかもしれない。彰にとっても辛い選択だったんだと思う」
そう、この人達。
言ってることは、正しいのかもしれない。
でも、ちょっとおかしいんじゃないの？
マナの中の何か、一般的には堪忍袋の緒と呼ばれるそれが、ぶちんと豪快な音を立ててちぎれた。
「ふざけんじゃないわよ！」
この島に来て一番の鋭い蹴りだった。
それが、彰のすねに命中する。ただでさえ満身創痍の身、彰は何をするでもなく倒れるしかなかった。
「お、おい、マナちゃ——」

「耕一さんは黙ってて！」
　伝家の宝刀、二発目。病み上がりとは思えぬ一撃。耕一も、もんどり打って倒れる。
　梓やあゆに至っては、ただ呆然とその様子を見守ることしかできない。
「そのスフィーさんが神奈とやらに取り憑かれてたとして、まずそれを何とかして助けようとは微塵も思わなかったわけ⁉　そんなことは不可能？　その挙げ句、スフィーさんを殺すことで神奈とやらも一緒に倒すことができたかもしれなかった？　だから何だって言うの⁉　最初から何とかしようと思ってなかったってことじゃない！　仕方なかったから殺したですって⁉　自分のやったことは間違ってないって言いたいだけなんじゃないの⁉」
　彰はきっと、自分に神奈が乗り移れば、喜んで己の命を道連れにして神奈を滅することを選ぶだろう。
　同時に、他人に神奈が乗り移れば、神奈を滅するチャンスさえ残っていればその器を殺すことに躊躇はない。
　ぐだぐだと良心の呵責と後悔の念を息巻いてはいるが、結局のところ、根底では神奈を滅するためなら何だって許されると思っている。自分自身も含めて、どんな犠牲をもいとわない。だから、神奈に憑かれてしまっていたという彼女を――スフィーを殺すことに迷いなどなかったのだ。
　しかも、理由を付けて正当化しようとしている。
　その根性が許せなかった。
　ひとしきり捲し立てた後、息を整えたマナは静かに告げた。
「あなたは、神奈とやらを倒すためだけにここにいるのね」
　ただ地面にうずくまり、マナの糾弾を黙って受ける彰に。
「だったら一緒にしないで」
　それが贖罪のつもりだとでも言いたいのだろう

か？　ますます許せなかった。
　私だって、何度もこの島での現実に負けそうになったけど。でも、私の今を支えてくれるものはあまりに大きすぎて。それを捨てて現実に負けることは、絶対にできない。
「私は、みんなで生きて帰るためにここにいる！　現実的じゃない？　ちゃんちゃらおかしいわね！　諦めちゃった人にそんなこと言う資格ないわよ！」

そう、それはある意味での諦めだ。
かつて、彰の親友——藤井冬弥が森川由綺に対して抱いていたそれと、何の変わりもない。
彰も、耕一も、何も言い返すことはできず。梓やあゆは、ただ呆然と見ているしかなかった。

845　光の四柱

静かにふりそそぐ朧げな月の光のもと。草木を薙ぐように、湿った風が吹きぬけてゆく。
ただ一人だけが、大声で叫んでいた。我を忘れる程に、人を殺すという異常さを糾弾する彼女は、現状のこの島に置いて希有な存在だろう。
そんな様子を見守りながら、梓は正常な感覚を維持できている彼女の事を少し羨ましく思った。
ふと視線を感じて、顔を上げる。
(……千鶴姉)
岩場の頂上にある施設の入り口に、千鶴と繭が立っていた。梓と視線が合った千鶴がこくりと頷く。
言いたいことがわかってしまった梓は、ため息をつくと、マナの襟をひょいと掴んで持ち上げた。
「——もういいだろ。言い過ぎだ」
梓の口調はごく穏やかなものだった。
だが、その態度もまた気に食わなかったのか、マナの舌戦は勢いを増すばかりだった。
「何よ！　私は誰になんと言われようと、諦めないわ!!　あんな言い訳なんて、許せない！」

マナが繰り出したローキックを、梓は片足だけ上げてひょいとかわす。
「――それでも、だよ。命がけで戦った相手に言っていい言葉じゃない。護られたあたしたちに、そんな事を言う資格なんて無いよ」
それでも、マナは、収まらない。
「偉そうなこと言わないでよ！　私がここに居れば、こんなの絶対許さ――」
ぱん
これは、あたしがマナの頬を叩いた音だ。
「それだって――言い訳じゃないか」
そう言えば、男を叩いたことは何度もあったけど。女の子を叩いたことは……なかったよな？
そんなやりとりを、離れた場所から見つめる二人がいた。柏木千鶴と、椎名繭だ。
（梓……それに、耕一さんもご無事で……）
二人の生存を確認し、千鶴はひとまず心の平穏を得た。だがスフィーが死んでいる以上、一時に過ぎない。
「……嫌な結果に、終わったようね」
あの雰囲気からして、神奈備命をどうにかできたようには思えない。そして、ＣＤの中の魔法を起動できるかどうか、かなり、怪しくなった。
「北川に期待するしか、ないですね」
繭の言葉と同時に、梓が千鶴を仰ぎ見る。千鶴は頷いた。
遠くからでも聞こえてくるマナの怒声。彼女の言っていることは正論だ。人として正しい――だが、物事を解決することはできない。
「行きましょう千鶴さん。今は、行動あるのみです」
千鶴の考えを先読みしたかのように繭が言う。
そう、今は何が正しいかを言い争っている場合じゃない。それでは物事は解決しない。今はただ、動くときだ。千鶴は繭に頷いた。
二人は踵を返し、施設の中へ向けて歩き出した。

洞窟めいた入り口は、岩肌から現代的な通路に変わり、二人の足音だけが周囲に響く。
（私が正しくないなんてことはわかってる。だけど、他にやる人がいないなら――私が行うだけ）
それは、昔からずっと彼女の役割だった。
――そのとき、銃声と衝撃が響いた。

施設の中央に位置する一室。
微かに煙をのこした円形の天井に、血飛沫が到達していた。ぼろ布のように倒れた北川の、収縮せぬ瞳孔に光が射しこんでゆく。
マザーコンピュータに歩み寄る観鈴――いや、神奈と言うべきか――が紐状の何かの端を両手で掴むと、縦に引き裂いていった。
ぴりり、と嫌な音が聞こえたような気がする。
不愉快そうに何かを呟く神奈は、元は一本であった白い何かを二箇所に投げ捨てると、毛を逆立てた猫のほうを睨みつけた。
（……なんだよ、これ。プログラムは、作動したんだよな――？）
飛びつく猫が、片手で無造作に叩き落される。さほど弾力のないはずの猫が、ゴムまりのように一回バウンドして、無様に転がる。
（発動……してねーのか？　だったら俺、何のために……）
神奈の両手から光が溢れたかと思うと、次の瞬間メインコンピュータが沸騰したかのように閃光と炎をあげ、遅れて黒煙が舞い上がる。
音はもう、完全に聞こえなかった。
（……くそったれ……バカみてえじゃねえかよ……）
ディスプレイの映像や情報が、次々に消えていく。神奈が外部カメラの画像になにやら話し掛けたようだが、聞こえはしなかった。
光が機械の山を蹂躙するうちに、部屋は闇に包まれていった。静寂と闇の中に、壊れた機械の閃光と

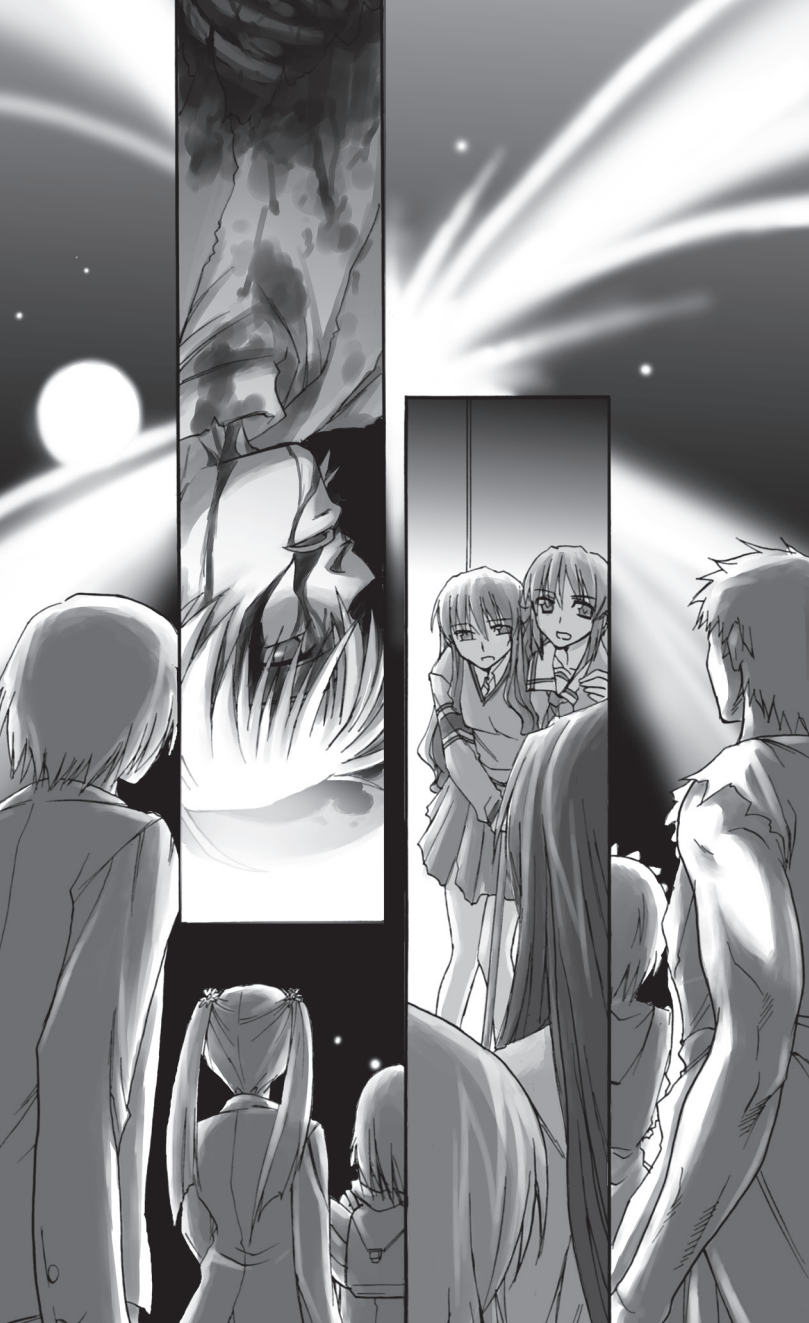
炎だけがちらついていた。
（俺……何のために……死んだんだ、よ……）
（ちくしょう）
自らのすすり泣きも――聞こえなくなった。

北川の意識が完全に闇に沈んだところ、ようやく自動扉が開いた。彼が待ち焦がれていた騎兵隊は、まるで手遅れだったのだ。
千鶴と繭は、非常灯の放つ黄橙色の光をたよりに、部屋を歩き回る。しかしそこに、神奈の姿はなかった。そして、鳥の姿も。
ただ一人と一匹の死体が、転がるだけだ。
「……北川くん……」
「今度は誰が――？」
繭が落ちていた銃と気絶した猫を拾い、蛇の死体を整えながら、疑問を口にする。
「……判らないわ」
「可能性としては神尾さん、巳間さん、それに七瀬さん……の三人ですね」
七瀬の名を呼ぶときに、少しだけ不安の表情が混じり込む。千鶴にとって、そういう私情を繭が持つのは、悪い事ではないように思えた。
「そうね。あまり考えたくないけど……入り口から降りてきた途中では会わなかったでしょう。階段ですれ違うか、通気口から出たのでなければ……医務室が危ないかもしれないわ」
深刻な顔をして、繭が頷いたその時。
「心配、ご無用よ」
――七瀬の声が、聞こえた。隣には刀を杖に立つ、晴香の姿がある。
「七瀬さん！」
繭が飛びつき、七瀬はその肩を抱きながら尋ねる。
「さっきの話だけど、つまり……？」
「……はい。七瀬さんたちがご無事なら、残っているのは――神尾さんしか、いないんです」

「そっか……」
余韻を残して呟くと、七瀬は北川の死体の前でしゃがみこむ。今思えば移動中、北川は観鈴を気にしていたようだった。
それなのに――それなのに。

（……ねえ、北川？　あんたそんなに顔は悪くないのに、昔っから女運なかったよね）
手をあわせて、祈る。
（そんなに悔しそうな顔、しないでよ――要するに性格に難ありだからだよ？　たぶん折原とだったらヒネクレもん同士、ウマが合うと思う）
目を開き、立ち上がる。
（だからあいつに、よろしく言っといて。……繭も元気にしてるって、伝えてくれると嬉しいな）
そしてふり返ると、皆が待っていた。
「七瀬……北川とは、古い知り合いだったんだよね？」

「――うん、そうなるのかな」
そして、歩き出す。
自動扉を通り抜けるとき。
もう一度だけ、七瀬は振り向いた。
（……ばいばい、北川）

そのころ施設の外では、五人がせいいっぱい眼を見開いて、遠くを眺めていた。
島を取り囲むように配置された装置。もちろん彼らの目の届くものではなかったのだが、そこから四本の光の柱が立ち昇る。そしてみるみる間に、天空めがけするすると伸びていく。徐々に太さを増して行く柱は、月を打ち消さんばかりに眩い。
死者は絶望の淵に消えていった。しかし確かに、彼の希望は叶っていたのだ。
海中から発せられた光は海を照らし出し、空は輝きを増していく。あの嵐を吹き飛ばした、閃光さながらに島を包んでいる。

「梓さん、これって――!?」
「うん！　きっと、ＣＤの魔法が発動したんだ！」
梓とあゆが、抱きあって喜ぶ。
彰と耕一が、ぱしんと掌を叩きあう。
しかし誰が知っているというのだろう。
この光が天空に満ち溢れるまでの時間を。
そして通気口から彼らを見つめる、神奈の存在を。

ぽち　死亡

846　ためされる絆

「みな……さん」
その声に振り返った先、そこには神尾観鈴の姿があった。
「観鈴ちゃん……!?　何故そんなところに、施設の中にいたんじゃ……」
「中が……中が大変なことに……」

まさに満身創痍の様相で皆に近づく神尾観鈴。それに耕一が駆け寄る。彼女が倒れる寸前のところでなんとか観鈴の体を支えることが出来た。
「なにがあった？」
「私、地下の部屋にいたんです。そしたらいきなり襲撃をうけて……いっしょにいた北川さんが私の盾になってくれて……それで私だけは天井の穴から逃げ出せたんですが、北川さんは……」
「くそっ、神奈め。もう別の人間に取り憑いたっていうのか」
彰のその言葉に先程まで、はしゃいでいた皆が一気に静かになった。
「それで……、神奈はだれに取り憑いたんだ？」
怯えはある……。だけど決意をこめて耕一は聞いた。
「耕一さんっ!!」
「マナちゃん……、分かってくれ……いや、分かってくれなくてもいい。でもな、多分、今はやらない

といけない時なんだと思う」
「だけど……」
「だから俺は決着をつけようと思う」
「そんな……そんなの、間違ってい――」
「ああ!!　間違っているさ！　絶対にこんなの間違っている!!　だけど、俺にはもう他に方法がわからないんだ！　わからないんだよ……」
　みると、耕一の両の眼から涙が溢れ出してる。でも、彼はそれを拭いもせずに観鈴に訊ねた。
「教えてくれ、観鈴ちゃん。今度こそみんなで決着をつける。神奈備命は誰に……誰にとりついたんだ」
「誰だと思います？」
「今生き残っていて、施設の中にまだいる者……」
　耕一は言う。
「千鶴姉と繭ちゃんは違うな。中から銃声みたいな音がする前に私は二人を見た」
　と、梓。
「後は、七瀬さんと巳間さん……か」
　彰が続ける。そして再び皆の目が観鈴に集中した。そして観鈴は言った。
「はい……、襲い掛かってきた人物。それは七瀬さんです」
「もう、方法は無いの……ねえ、みんな。ねえ、耕一さん……」
　消え入りそうな声でマナは呟いた。
「わからない。だけど俺はまだ絶望しちゃいないよ。だって」
　耕一は言う。半分はマナのため、そしてもう半分は自分に言い聞かせるために。
「北川はやってくれた。結界は発動したんだ。だからチャンスは絶対に……」
「そんな筈はっ!!」
　突如、驚愕の声をあげる神尾観鈴。
「……？」
「あ……いや……、私、北川さんが撃たれたの見た

から……」
「ほら、四つの光の柱。おそらく例のＣＤだよ。多分、北川の奴が最後の最後にやってくれたんだ」
「っ!!……そうですか」
(なあ、観鈴ちゃん、相当まいってないか？)
(……確かに)
そのやり取りを、あゆだけは少し離れて見ていた。違和感を感じた。最初、観鈴が姿を見せたときから感じていた違和感。それは、どこか懐かしいようでどこか冷たいなにか得体のしれないもの。そして、みんなとの会話。
何故、彼女は神奈が乗り憑いた先をすぐに言わなかったのだろう？　そして結界の事を聞いた時に見せた表情。確かに説明することは可能だ。だけれど……。
(うぐぅ……でも、何かが……何かがおかしいよ、絶対に)
「あゆちゃん。みんな固まって動こう」
耕一の声にはっと我に返る。みなが呼んでいる、今は行かなきゃ。
その時あゆは見た。みんなと一緒にこちらを見る神尾観鈴の目を。
それはほとばしる鋭い意思、そして闇……そして、あゆを品定めするかのような光があった……。

847　相棒

少々、時を遡る。

銃声が、聞こえた。
「な、何!?」
慣れぬ仕事に四苦八苦しながら何とか晴香の治療を終えた七瀬が、驚きの声を上げる。
銃声がした方向は――
――施設の最奥と思われる場所。
恐らくは、例のＣＤの解析を行っているというコ

ンピュータルーム。
何があったのだろう？
今、誰がそこにいるのだろう？
そんな疑問が次々と浮かんでは消えたが、この場に留まっている限り、どの疑問も解決しないことは明白だった。
ベッドの上で上半身を起こそうとしている晴香を押し止め。
「……あたし、行ってくる。晴香はそこで待ってて」
自らの獲物――小銃を肩に掛け、一振りの刀を手にし、医務室を出ていこうとする。晴香が動けない以上、自分だけで行かなければならない。
今まさに部屋を出ようとした、その時。
どすん――という鈍い音が、七瀬を引き留め、振り返らせた。
七瀬の目に映ったのは。
ベッドから無様に転げ落ちた晴香の姿。
巻いたばかりの白かった包帯に、血が滲む。
それはそうだ。傷口は閉じていない。動けば出血と、そして痛みを伴うのは必然だった。運良く致命傷でなかったとはいえ、安静にしていなくてもいいというわけではない。
彼女はベッドに立てかけてあった自分の刀にすがり、なおも立とうとする。
「ちょ――ちょっと、晴香⁉」
「私、だけ、こんなところ、で、寝てるわけ、にも、いかない、でしょ」
駆け寄ってきた七瀬に対し、一言、一言、肺の奥から必死に絞り出すような声で告げる。
ふと、思った。
もしここにいるのが七瀬ではなかったとして。
今はもういない、自分の大切な戦友――保科智子だったとして。
彼女だったとしたら、どうするのだろうか？
『止めて聞くような性格やないもんな。枕元に立た

れて恨み辛み聞かされるのは勘弁や』
そんなことを言いながら、肩を貸してくれるような気がした。
でも、彼女はもういない——
——晴香の身体が、ふっと軽くなった。
「七瀬……」
晴香に肩を貸したのは、今ここにいる七瀬。
それは、晴香をここに留まらせるためではなく。
晴香と共に道を歩むため。
「どうせ晴香のことだから、このまま放って行ったら這ってでもついてこようとするんでしょ？　そんなことになったら寝覚め悪いじゃない」
少しだけ楽になった身体で、晴香はあえて、ただ一言だけを伝えた。
それ以上の言葉は、必要なかった。
本来ならば、その言葉すら必要なかったのかもしれない。
でも、言っておきたかった。

「……頼むわよ、相棒」

848　正面衝突

眼光、と言えたかもしれない。
あゆが、その鋭い眼光に体の震えを禁じえなかったのも、あるいは必然だったのかもしれない。
(うぐう……おかしいよ。おかしいんだよう)
混乱。
あゆの今の精神状態を一言で形容するならば、こんな言葉になるのであろう。
疑念を口に出すのはやはり簡単である。しかし、それがもしも見当違いなものだったとしたら。
しかし。
いくら頭を振ってみても、いくら一緒に歩く耕一のスカートの裾を握っても。その疑念は、あゆの脳裏に焼きついたまま。
「どうした？　あゆちゃん。具合でも……」

見かねた耕一が声をかける。
「あ　ううん、何でも無いよ、耕一さん」
慌てて笑顔を取り繕う。
「ん、そっか」
どうやら耕一は、こういう嘘を見抜くことに関しては才能が無いようだった。
「ところで耕一。あたしたちなんとなく中に入っちゃったみたいだけど、どうするの？」
梓が口を開いた。
「……とりあえず七瀬さんを探そう。……取り憑かれているらしいから、な」
「探して……見つけて……どうするの」
マナが言う。静かな口調。それでも、押し殺した感情が伺えた。
「……」
誰も、何も、答えぬまま。
一行は、通路を歩く――

「……耕一」
話し掛けたのは、梓だった。
「あゆちゃんたち、連れてきてもよかったのかな」
最悪、殺し合いが始まる。そんな現場に、観鈴、あゆの両名を連れていってしまっていいのか。
まして観鈴は精神的に相当参っているようだ。これ以上の負担はかけられないだろう。梓はそう言いたいのだ。
「うーん……だが、もし俺達と離れているときに神奈がそっちに行ったらどうする？　そんなことになったら神奈にいいようにされちまう……と俺は思う」
あゆ達の手前、語尾を少し濁した。
「そもそもさ、あたし達が中に入ることって無いんじゃないの？　結界だって……そうねえ、夜明けまでには完成すると思うし、あたし達は外で待ってたほうがいいんじゃないのかな」
梓も肉体的にはそろそろ限界に達している。だか

らだろうか。
　発言内容が、少し逃げ腰になった。
「それだと中にいる千鶴さんたちが心配だ。繭ちゃんを連れているし……やっぱり助けに行った方がいいと思う」
　そんな梓を咎めるでもなく、だが耕一はその提案を受け入れなかった。
「そっか……そうだね」
　それっきり、梓も黙り込んだ。

　黙っているのは、彰。
　彰は彰で、あゆのそれとはまるで異質の、しかし、観鈴に対して微かな疑念を持ち始めていた。
　それは、ふとした疑問。証拠など何も無い、ある事象。
（僕は観鈴という女の子をよく知らないけど）
　よく知らないからこそ、この子を疑う事ができる。
　襲ってきた「人物は」七瀬さんです……と言ったよな。
（言いまわしが少しおかしくないか？　ふつう「襲ってきた人は」って言わないだろうか？）
（おまけにその前に「誰だと思います？」と訊いた。この状況下、そんな事をいう余裕が女の子にあるとは思えない）
　しかし、それは観鈴と大して話したこともない自分には、完全に憶測でしかない。
（天井の穴から逃げてきた、と言った。どうやって天井まで手を届かせた？　ハシゴかなにかあったのかもしれないが）
　そんなものを利用する隙を神奈が黙って見過ごすわけは無い。まさか盾になった北川を踏み台にしたわけではあるまいし……。
（そして……）
　結界の事を聞いたときのあの狼狽ぶり。無論一瞬だったが普通「本当ですか!?」と喜ぶのではないだろうか。

何故「そんなはずは」なのだろうか。それじゃまるで……。
決定打が、欲しかった。
どちらの決定打が欲しかったのか分からない。疑念を吹き飛ばす決定打か。あるいは疑念を裏付ける？

「みす――」
彰が言いかけた、そのとき。
「あ、おーい、千鶴姉ーーー！」
梓が叫ぶ、その先には。
長い通路のその先には。
柏木千鶴と、椎名繭。
少し遅れて、巳間晴香。
そして――――それを支える七瀬留美。
互いが互いを認識したとき。全員、その場で凍りついた。
そして張り詰める、空気。

あゆ以外の、誰もが思った。
――――一触即発　と。

849　一触即発

彼は、悪夢に苛まれていた。

畜生。
ポチはあいつにやられた。
そらはどうなった？　そらもやられたのか？
記憶が定かじゃない。俺は無我夢中であいつに突っかかっていって――
体中の節々が痛いことは痛い。でも、死ぬような傷じゃない。
結局俺みたいなのが生き残るわけか。
畜生。
そして悪夢の目覚めた先には、あいつの姿。

そらが守ろうとし、守れなかった彼女の姿。
何だ、まだやれることは残ってるじゃないか。
俺は必死になってもがき、自らを抱える少女の腕を振り解いた。
猫らしくなく、無様に地面に落ちる。情けない話だ。
そして俺は、渾身の力を以て——。

最初に変化に気付いたのは、彰だった。
同時に、最も行動が早かったのも。
藹の手から落ちたあの猫は、観鈴と共にいたあの猫だ。
ぼろぼろになったその猫が、今は観鈴に向けて毛を逆立て、唸っている。
彼は振り向き、自らの持つ銃を観鈴に向けた。
『まずそれを何とかして助けようとは微塵も思わなかったわけ!?』
そんな言葉をふと思い出した。

神奈に囚われたスフィーと対峙した時にはなかった選択肢がある。
だが彼は、それを捨てた。
今更、それが贖罪になるはずもない。本当に今更だ。
彼は気付いていない。
彰は心の中に潜む鬼を理性の檻に閉じ込めているが、彼自身が既に復讐鬼とでも言うべき存在に変質してしまっていることを。
そして、引き金を——。

(少々浅はかであったか)
ここまで生き残ってきた彼らを過小評価していたつもりはなかったが。それでも、完全にそれを払拭することはできていなかったのだろう。
神奈はその力の一部を開放した。
彼女の周りにいた者共々、鬼飼いを吹き飛ばす。
銃弾は発射されない。

咄嗟の行動ゆえ、その衝撃は彼らに致命の一撃を与えるには至らない。
その隙に身を翻し、逃げる。
浅はかではあったが、それなりの収穫はあった。
禁呪の発動。
恐らく、万全の態勢を以て臨まねば返せない。
それでも無傷では済むまいが、返せさえすれば致命傷にはならないだろう。
ここで生き残り全員を一度に相手にするのは、得策とは言えない。
追ってきた者を、各個撃破すればいい。
そして禁呪さえ破れば、もう自分に絶対的な致命の一撃を与える手段はない。
彼らを屠るのは、それからでも遅くは——。
神奈であろうその者の行動は、繭には理解不能だった。
何故、危険を侵してまで観鈴を騙り、彼らの中に紛れていたのか？
何故、今このタイミングで正体を明かしたのか？
何故、不意打ちで多くの人間を屠るのではなく、逃げるのか？
答えは見えない。が、やらなければならないことはある。
何か見えない力に吹き飛ばされた、観鈴の周囲にいた者達。
観鈴はすぐに自分達に背を向け、逃げ出した。
彰は何とか立ち上がり、観鈴を追う。
千鶴もまた、それを追うべく駆け出す。
自分もそれに追随する。
それが、無念の中で死んでいったであろう北川への——多くの人間への。
せめてもの弔いになると信じて。
「その子のこと、お願い！」
そのぼろぼろの猫を指しているということは、間違いなく伝わるだろう。

繭は走りながら、後ろの七瀬に――。

「千鶴さん！」

懐かしい声がする。耕一さんの声だ。駆けながらふと見やる。耕一、梓、あゆ、マナ――皆吹き飛ばされこそしたが大事はないようだ。

再び生きて会えたことを、耕一さんと喜び合いたかった。楓と初音を失ってしまったことを、耕一さんと悲しみ合いたかった。

――だが、今は、まだその時ではない。

大切な人を何人も失った。

父、母、叔父、楓、初音――私からそれらを奪った神なんて信じていない。それに――もし、神が居たなら。偽善者で人殺しの私には、とうの昔に天罰が下っている筈だろう。

私が信じているのは家族だけ。

自分自身ですら信じるに値しない。

神になど祈りなどしない――それでも、彼と再会させてくれた事にだけは感謝してもいい。

けれど、今は目の前の神を奈落に落とすとき。

一振りの刀を手に目指すのは――

観鈴――彼女の姿をした、神奈。

850　光に背を向けて

孤影が、硬い足音を響かせて駆け抜ける。

飛ぶように走る彼女の表情には、微妙な困惑の色があった。どこか腑に落ちない違和感がある。

……神尾観鈴の身体を、手に入れた。

そして当初に及ばぬとは言え、期待通りの力を取り戻した。今なら恐れるものなど、何も無いはずであった。

（……しかし、あの場で感じた波動。あれは、余を封じていた刀の発したものに違いない）
スフィーが記憶も、千鶴がそれを持っている事を肯定していた。
（あの刀は――危険に過ぎる）
神奈が走り続けていると、施設から立ち昇っていた光の柱から、一筋の細い光が降り注ぎはじめた。
神奈は光の不快さに眉をしかめ、階段を一段飛しで上っていく。数十段を登りつめた頃、微かに下から追ってくる足音が響いて来たが、それ以上に光が気になった。日光のように薄く黄色がかった光が、その本数を増やし、天から幾筋も伸びてきているのだ。
（徐々にだが……降り始めおったか）
憎々しげに光の柱を睨みつけ、神奈は更に速度を上げた。
「――ん、もう！」
彰を追う繭は、いとも簡単に距離を離されていた。教会へ向けて走ったときもそうだったのだが、肉体的な強さは何も変わっていないのだから、仕方がない。それでも歯痒さのあまり、誰にともなく悪態をついていた。
「繭ちゃん！」
階段に到達する頃には、早くも千鶴に追いつかれた。息を整えるために足を止め、その間に武装を整え、相談する。
「千鶴さん――だいぶ、離されてしまいましたよ」
「……仕方がないわ。単独で追うのは、リスクを考えるとあまりに危険なのだし――彰くんは、そういう思考すら捨ててしまっているのかもしれない」
繭は頷く。あの追い方は異常すぎる。最愛の人を自らの手で殺すような事をさせられたら、人はあれだけの妄執を抱くようになるのだろうか。それは、すごく悲しいことだと繭は思った。
「……でも、見捨てるわけには」

「ええ、そういうわけにはいかないわね」
二人で頷き合い、大きく息を吸って、鋭く吐き出すと同時に、階段を駆け上り始めた。
そうして先を急ぐ二人の息が再び切れ始めた頃、ひとつの異変が起こった。
「――!?」
「この光は……」
細い光が、階段を突き抜けて射し込んでいたのだ。太陽のように、やわらかささえ感じさせる暖かな光。千鶴が、その光に掌をかざして、ぽつりと言う。
「北川くん……成功させていたのね」
「北川……」
少ししんみりとした、千鶴と繭の二人。その彼女たちに突進でもするかの如く、耕一と梓が転がり込んできた。
「千鶴姉！　繭!!」
「千鶴さんっ！　彰は――ってなんだこれ!?」
耕一が天井を見上げながら、光の柱を不思議そうに見つめる。
「耕一、あの光が差し込んでるんじゃないか？」
「……梓？　あの光って？」
耕一に答えた梓に向かい、千鶴が尋ねる。
梓は島外から立ち登る四本の光の柱が、天を光で埋め尽くさんとしていたことを説明する。
「あの調子だと、もっと時間がかかると思ってたけど……」
「いや、既にあの時点で、柱は月より明るかったんだ。どこまで光度を上げる必要があるのかは解らないけど、意外ともうすぐなのかもしれない」
それは、あくまで予想でしかない。だが、この地下まで光が到達するならば――可能性は、高いのではないだろうか？
「それなら尚更、彰くんを見捨てるわけにはいかないわね」
「うん、千鶴さんの言う通りだ。急いで彰の援護に向かおう！」

耕一はそう言って結論すると、ぱあん、と大きな音を立てて自らの頬を叩き、気合いを入れた。そして息の整わぬ繭を見るや、本人の許可も得ずに彼女を抱え、軽々と肩に乗せる。
「ちょ――ちょっと!?」
「悪いね、文句は後で聞くよ。――みんな、一気に走るぞ!!」
軽快に三つの足音を立てながら、彼らは階段を駆け上がって行った。

神奈は階段を登りきり、出口を遠くに見ながら歩みを止めた。
もはや外に出て確認する必要はない。天は光に満ち溢れ、大気を満たしているだろう。その余光が入り口から射し込み、また天井を突き抜け、ここに至っているのだ。
(皮肉なことよ……これを一瞬で成し遂げた、爺のそれよりも、むしろ不都合だとは……)
源之助の魔法は、一瞬であったがために大気中の念が受けるダメージは致命的なものではなかった。
しかし、大気に光が満ち溢れる今の状況で精神体のみになれば、あの光に焼かれて消滅してしまう可能性は少なくない。
(即座に降り掛かって来ぬのは、幸運なのやも知れぬ。しかし、逆を言えば天に光ある限り、今の身体を失えど天に戻る訳にはいかぬということだ)
小さくひとつ、舌打ちをした。
(この神奈が……追い詰められていると?)
汗がひとすじ、額を伝う。
(……否、これは余の流したものではない。この観鈴という軟弱な娘が流したものよ……)
両の手に力を込め、気力を保ち考える。実際にこの光が注がれるとき、再び呪詛を反すことが可能であろうか?
否。この身体は疑いなく強力であるが、力の蓄積が明らかに足りない。

（最早、楽しんでいる余裕などあらぬ――故に、手段も選ばぬ。奴らを皆殺し、力を蓄えて呪詛を反すのみ……）

神奈の操る観鈴の顔が、こころの暗黒を映し出すように、邪悪に染まる。そして射し込む光を撥ね退けるように、輝く翼をばさりと大きくはばたかせた。

光に背を向けて、彼女は振り向く。視線の先に、一人の青年が立っていた。

「……鬼飼いか。まずは、お主から――死ぬか？」

「いいや。死ぬのは、お前と――僕だけで、いい」

彰は、光を背負い翼を広げる神奈の美しさに気を取られながらも、即座に理解した。

神奈は、あの光を嫌っている。そのために、彼女の逃げ場は――天にも、地にも――無いのだろうと。

射し込む光が、神奈の翼の輝きに打ち消される。しかしその輝きに抗うように、彰は赤い眼光を放っていた。

互いの視線が、激しく火花を散らしていた。

「ギ、ニャーーーー!!」

「ギャーーーー!!」

叫んで猫と格闘する七瀬を、晴香は呆れて見ていた。

「ウニャ、ニャギャ!!」

「猫の分際でなめないでよ！　あたし七瀬なのよっ！」

遅れて立ち上がったあゆとマナが、猫を助けに来る。

「うぐぅ……虐待だよぅ……」

「……最低」

七瀬を引っ掻きまくった猫は、大人しくあゆの手に納まった。決して機嫌が悪いわけではなかったようだ。

「七瀬……あんた、動物の世話は向いてないわ」

「……うるさいわね」

あゆの鞄から顔だけ出した猫が、今でも七瀬を威嚇するに至っては、全く反論できなかった。乙女的

には、ちょっと傷付き気分である。
四人の歩みは遅い。それは怪我人の晴香に合わせているからだ。
しかし、ふと気が付くと普通のペースで歩いていた。
「ちょっと晴香？　大丈夫なの？」
「あのさ、七瀬……もう、離していいよ」
そう言いながらも、こめかみのあたりを押さえている。
「何よ、痛むんじゃないの？」
「ううん……あんまり痛くなくなってきた気がする」
「薬が、効いてきたのかしら？（それとも……やっぱりレディースは、気合いが違うのかしら）」
「……かも、ね（七瀬のあの顔……ろくなこと考えてないわね）」
互いの視線が、激しく火花を散らしていた。

851　遺書。

後続が追いつくまでに、どれ程の時間があるだろう。耕一たちが僕に追いついて、並んで神奈と対峙するまでにどれだけの時間があるか。当然、僅かな時間しかないと思う。そしてその僅かな時間が、僕に許された『僕だけの復讐の時間』で、出来ることならばこの僅かな時間に。
全てを終わらせようと思った。
僕は小さく息を吐きながら、昼と見間違おうかという程明るい空の下で、目の前に立つ少女を——神尾観鈴の姿をしている神奈備命を、真っ直ぐに見つめていた。彼女の背からは真っ白な翼が生えていた。あまりに幻想的で、幻惑的で、その翼がひとたび舞えば、何もかも呑みこんでしまう。僕はそう思った。その翼こそが、ヒトとそうでないものを分ける明確なる象徴なのだ。ヒトならば、あの翼を見るだけで

戦うことが出来なくなるだろう。
けれど僕はもうヒトではなかった。
「嫌な光だな」
僕は自分の前で微笑んでいる神奈備命に向けてそう言った。この光はヒトでないものを焼き尽くす光だ。だから目の前で翼を羽ばたかせる、人外たるあいつも当然、この光の下は嫌な筈だった。
「お主も嫌ではないか？　このような眩しい光は。まるで身体が焼けるように熱くなるわ」
神奈の笑顔からは余裕が消えない。それはあいつも理解しているからだ。僕も同じように、あの光に焼かれるべき、人外たる存在であるということを。
「ああ嫌だな。僕も光は嫌いなんだ。太陽も嫌いだ。僕みたいな最低の人間がこの世界に存在しているんだ、って否応なしに理解してしまうからね」
「余も同じよ。光も太陽も、虫唾が走るほどに嫌よ。叶うことならば、二度と太陽が姿を現さないように丸ごと消し去ってやりたいものよ」

僕たちは向かい合って笑う。
「夜は美しいな、鬼の青年よ」
「ああ――良く似てるんだよな、僕たちは」
「まったくよの。もう一度聞こう。お主は余のものになるつもりはないかの？」
――戦いが始まる。
「僕は、お前が嫌いだ」
「余は、嫌いではないぞ」
――この時のために、僕は恥を忘れ、悲しみを忘れ、感情を忘れ、こうして生き延びてきた。
「それでも。僕はお前が嫌いだ」
右手に持ったイングラムM11を握り直し、構え、目の前で笑う神奈備命に向け、最後の戦いを始めようと決めた。長かった戦いに終止符を打ち、初音の仇を取って――全てを終わらせよう。
「――僕は。僕が嫌いだからな」
迷わずに銃の引き金を引く。それが始まりの合図。

銃口は神奈の頭蓋に向けられ、弾丸はその顔目掛けて真っ直ぐ飛んでいく。ぱらららと舞う銃弾の雨は目にも留まらぬ速さで全てを終わらせようと、止むことなく降り注ぐ。その程度で仕留められるとは思わない。それにしたって傷くらいは負うだろう。この速度の弾丸を無傷でかわしきれるほどの化け物がいるわけもない。

しかし、僕の目の前に広がる光景は、その化け物の存在を知らしめるそれだった。神奈はその背中の羽根をくるりと舞わせ、自らの身体を守るように蠢かせた。中空に舞いながら神奈は羽根を振る。その羽根が僕の放った弾丸の全てを弾き飛ばしたと理解するまでに二秒。その二秒の間にも僕は姿勢を低くして走っている。殆ど無意識のうちに敵の反撃に備え回避行動に入っていたのだ。思考が回りだす。予想していたことではないか。あいつは化け物だ。化け物を僕は相手にしているのだ。常識を捨てろ。そして常識に則って考えろ。あいつを殺すためにはどうすればいいか。決まっている。あの羽根で弾丸をいなす暇がないほどまで近寄って弾丸を直接その肉体に叩き込むのだ。あの肉体は神尾観鈴のもので、あの羽根を除いた肉体は全て普通の人間のものである筈だ。僕は走る。走って走って、回避から攻撃に移る瞬間を見据えて走る。

気付く。神奈はまだ、何の攻撃もしてこない。そもそもあいつは何の武器も持っていない。あいつはそれならどうやって僕を、僕たちを打ち倒そうというのか。足を一瞬止めて考えたところで、神奈がにやりと笑ってその手を軽く振る、

ひゅん、と風切音が聞こえた。

僕は迷うことなく地面に転がり込んだ。同じ瞬間に背後でさくり、と音がした。思わず後ろを見たが何もない。ただ『刃物が木の幹に刺さった音』がした。

「今のは、」

僕は呆然として呟き、そしてはっとして次の瞬間

にはまた走り出す。止まっていてはいけない。
「魔法などといった大したものではない。ただの投擲武器よ。お前には見えないだろうが、よくかわした。だがまだ序の口よ」
　神奈はまた軽く手を振る。風切音。頬を切り裂かれたような衝撃。実際には何の傷もない。ただ、暴風が真横を通り過ぎただけだ。僕は何が起こっているか判らないままそれでも走り、走りながら右手の銃を遊ばせておいてはいけないと引き金を引き、その弾丸がまたも神奈の羽根に弾き返されるのを見る。この距離から攻撃しても何にもならない。もっと接近しなければ。だが近づこうとすれば目に見えない攻撃が襲い掛かる。『音』でなんとか回避することが出来ているものの、これ以上近づいてはかわすことは出来ないと思う。そして、その攻撃の一つ一つが必殺で、もしも直撃を受けてしまったならば、その瞬間に自分は二度と立ち上がれなくなるだろう。
　──考えるまでもない。自分が圧倒的に不利だった。『音』でしか回避出来ない自分と、羽根による鉄壁の防御を持つ神奈。今はまだ良いが、かわしきれない攻撃を少しずつでも受けていったならば、体力は奪われ、そしていつかは直撃を受けるだろう。
　そしてその瞬間は一瞬の油断で訪れる。回避し続けて、地面に転がり込んだところで追撃が来る。僕はとっさに左腕を出して顔を庇う。それは完璧に僕の頭蓋を狙い定めた一撃だった。

「あぅっ──ッ！」
　左腕に走る冗談のような痛みは僕の気力を根こそぎ奪い取る。銃弾を受けたような激しい痛みは、僕の運動神経の全てを断ち切るほどの一撃で、僕は腕を抱えて転げ回る。イングラムを手放しそうになり、それでも僕は歯を食い縛って立ち上がり、再び弾丸を神奈に向けて放つ。弾丸を放っている間は神奈も攻撃を放つことは容易ではない。攻撃こそが最大の防御である。だが問題は、その攻撃が長く続けられ

ないこと。弾丸には限りがある。最低でもあいつに接近してその命を完全に潰しきるだけの弾丸を残しておかなければ。その躊躇が弾幕を薄くした。再び始まる神奈の攻撃。走りながら僕は歯を食い縛り、自分の甘さを理解する。
ただ対峙さえすれば、勝てると思っていた。自分は真っ直ぐな決意の剣で以って対峙に臨むのだから、その決意が折れさえしなければ勝てると、無意識のうちにどこかで思っていた。正義のヒーローでもあるまいし。
「そうだよな」
決意の剣だけでは勝てない。要るのはひとつ。
勇気の矢だ。
死ぬことを恐れるな。自分に必要なのは、死を恐れず突っ込む勇気だ。簡単なことなのだ。傷を恐れず、懐に潜り込めば五分。あいつの攻撃を全て受けてでも懐に潜り込まなければならなかった。
怖かったのは、何も出来ずに死ぬことだった。そんなことを恐れていて、何かが出来るわけがなかったのだ。止まるな。勇気の矢を真っ直ぐに飛ばせ。それこそが、僕の戦いではなかったか。
その勇気が胸に生まれてしまえば。
――僕はただ走るだけだった。神奈との距離は二十メートル。この距離を真っ直ぐに走り抜けるのだ。神奈は僕の行動の変化に気付いたのだろう、何事かを呟いて笑うと、今まで以上の早さで手を振り、今まで以上の数の見えない弾丸を放った。
頬を切り裂く音。腕を貫く音。足を傷つける音。その一撃一撃が必殺の筈だった。けれども僕は一度たりとも躊躇しなかった。左手を振り、出来る限りの攻撃を弾き飛ばす。左手から噴き出す血。左腕は捨てようと決める。この左手一本であいつに近づけるならば本望だ。僕は薄ら笑いすら浮かべて走る。傷が増えて上手く走ることが出来ないけれど、思わず痛みで足が止まることはあったけれど、それでも僕は真っ直ぐ。最短距離を走り抜ける。あと十歩。

「――ッ⁉」
そして、
左腕以外に神奈の攻撃が命中しなくなった。
殆ど無意識のうちだった。僕はあいつの手の振り方で、どの程度の速度で、どの部位を狙った攻撃がやってくるかを読み始めていたのだ。当然完全にかわすことなど不可能だ。けれども、『捨てた左手』でその攻撃を最小限に抑えることは可能になっていた。神奈の顔が驚愕に歪む。まるで目の前の出来事が夢か何かであるように。
「お前は、何者だッ‼」
「七瀬彰だよッ‼　お前を殺すためだけにおめおめと生き延びてきた、最低の人間だよッ‼」
接近されることに怯えたのだろう、神奈が後ろに向けて飛ぶ。攻撃が一瞬止み、僕は躊躇うことなく右手のイングラムに火を噴かせた。やはり羽根で完全に防がれたものの、神奈の顔に先ほどまでの余裕はない。
「――鬼だったな、お主は」
そして、そんな呟き声が聞こえた。
「それほどの意志を見せられて。――全力で戦わなければ、失礼というものよな」
神奈は後ろに下がることを止め、目を一瞬閉じ。そして、手を振ることも、羽根を振ることも止めた。今がチャンスだった。この僅かな距離を埋めて、零距離で弾丸を叩き込む。弾丸の残りもそれほど多くない。止まっていてはいけない。例え神奈がどんな隠し玉を持っていようとも、そんなものに怯えては何も出来ない。僕は全てを賭けた。その全てを否定する攻撃が、僕の前にあるわけがないのだ。
距離を詰める前に、神奈が動いた。
目を開き、高く天にかざした神奈のその手から、風が生まれた。今までの風とは違う。今までの攻撃はこの風が『漏れた』ようなものだったのだと思う。激しい力の奔流。先程までとは比べものにならな

い程大きな力だった。何の力も無い自分にも見える。神奈の手にあるのは、それは大きな剣だった。風で出来た剣。その剣が神奈の手を離れ、走り寄る僕目掛けて、神速と言うべき速度で襲い掛かる。僕の心臓目掛けて真っ直ぐ飛び掛る風の牙。

それでも。

それは『僕の全て』を否定出来なかった。

「——ッ!!　何だとッ!!」

その必殺の剣すらも、僕は左手で受けた。突き刺さろうとする刹那、僕は完全に身体の力を抜き去り、そして、一瞬の力の交錯で、その剣を弾き飛ばしたのだ。神奈の目に一瞬の躊躇。その躊躇を僕は見逃さない。痛みの走る身体に鞭を打ち、あっという間に距離を完全に零にした。イングラムを構え、呆然とした神奈のその脳天に充て、小さく息を吐いた。

僕の勇気の矢は。

——勝利を貫いた。

神奈が、呆然とした顔をしたのは一瞬だった。そして次の瞬間にはどうしてだか嬉しそうに笑う。

「本当に、優秀な戦士よ。お前を駒に出来なかったことがひどく悔やまれる。——流石に鬼の血よの。柏木初音の血を貪って生き延びた身体よ」

不愉快になる。どうしてこいつは、死を目前にしてこんな顔をするのだ。こんな挑発めいたことを言うのだ。

「——すぐに、殺してやるよ」

神奈は笑顔を崩さない。

「いや、余は嬉しいのよ。お主のような強者がこうして現れたことがな。何もかもを犠牲にしてでも、何かをやりとげようとする強固な意志」

こいつは、何を言っているのだろうと思った。ここに至って僕を懐柔しようとしているわけではないだろう。それでは、この言葉は一体何を意味しているる。直感する。これ以上こいつに喋らせてはいけない。こいつに矢を折られる前に、剣を弾かれる前に、

全てに決着をつけなければ、
「そんなお主でも。また引き金が引けるのか？」
それで指が硬直してしまった。
「お主は、こたびも引き金を引くのかの？　七瀬彰」
その声を聞く前に、銃を撃たなければいけなかった。僕の矢は今にも折れそうになり。僕の剣はもう弾かれかけていて。
「――のう？　七瀬彰」
僕はまた。スフィーと同じようにして、
神奈を殺すために、神尾観鈴を殺すのか？
「ははは。引けないじゃろう？」
――引き金を引け、七瀬彰！　この女の言葉に惑わされるな！　この女は僕を惑わそうとしているだけだ、すべてを終わらせる為には引き金を引くしかないんだ。神尾さんだって判ってくれる筈だ。ここで殺さなければ、皆死んでしまうんだ。これが最後のチャンスだ、この距離なら彼女の脳天を間違いなく打ち抜ける、
「共に還ろう、と誓った仲間の身体を、殺すのか？」
「――――お前を殺す為だッ」
僕の躊躇は。それでも、秒数にして一秒。僕の僕らしかった全てはもう壊れ切っていて、その躊躇が最後のカケラで。僕は、悪鬼になった。

――――自分のやったことは間違ってない、
って言いたいだけなんじゃないの!?――――
最後に観月マナの言葉が浮かぶ。そう、間違ってないと思いたいだけだよ。だけどね。
その一瞬の後に、僕は引き金に指をかけた。
何かを正しいと信じなければ、僕は生きていけない、そんな弱い人間なんだよ。神尾さん。こいつを殺したら僕も死ぬから、それで許してくれな。
僕は引き金に指を充て

階段を登り切った柏木千鶴と柏木梓、椎名繭、そして、柏木耕一は——三つのものを、見た。本来闇に包まれている筈の、けれども白い光に包まれている森の前で闘う、真っ白な翼の生えた少女——神尾観鈴であり、神奈備命であるその存在と、その少女の脳天に銃口を向けて立ち尽くす、七瀬彰の姿と、——中空に浮かぶ、巨大な剣。

無防備な彰の背中にその刃先は向けられていた。そして、彰が銃の引き金に指をかけた瞬間。その剣は俄かに速度を持って、彰の背中に向けて襲い掛かった。

「彰ぁッ！　よけろぉぉぉ!!」

耕一は繭を背負ったまま叫び、千鶴と梓は、二人が対峙している方向へ駆け出す。剣を止める為に走った。それでも遅すぎた。その声に、彰はぼんやりと振り向いて。その顔には何の表情も見えず、ただぼんやりと、無感想に耕一の顔を見て、次の瞬間には、その巨大な刃は彰の心臓の少し上——左腕の付け根にぐさりと刺さっていて。

彰に表情が生まれた。困惑と驚愕に充ちた、痛々しい表情だった。大地を切り裂くような大きな絶叫が聞こえたかと思うと、その剣は小刻みに動き出し、彰の肩を抉り取ろうとせんが如くに暴れ、そのままその腕をねじり切った。

「彰くんッ——！」

千鶴と梓の悲鳴が聞こえる。腕が弾け飛び、一瞬の後に血が噴出した。その表情は髪に隠されて良く見えない。驚愕は消えた。ただ、困惑だけがあった。

何かを呟こうとして彰は倒れた。

誰もが思った。今度こそ、七瀬彰は死んだと。

「まず、若い鬼が一人死んだ。次は——誰かの？」

神奈備命は、その真っ白な翼を翻し、一つ大きく深呼吸をする。そして、倒れた七瀬彰の傍らに落ちていたサブマシンガンを拾い、彰の身体に刺さった剣を抜き取ると。

立ち尽くす千鶴と梓を一瞥し、——薄く、笑った。

どくん、と。
心臓の音がひとつ鳴った。
血が流れ過ぎた。左腕がなくなった。酷使してきた足が遂に動かなくなった。地面に突っ伏した顔があげられなくなった。生命力と呼ばれるあらゆる要素が掻き消えてしまっていて、僕はもうただの肉塊でしかなかった。——だというのに、
どくん、と。
僕の心臓がまたひとつ鳴った。
どうして僕はまだ生きているのだろう、と思った。そんなの理由はひとつしか考えられない。
いとしいひとがぼくにのこしてくれたものが、このからだのいちばんおくでまだきえないでいるから。
彼女が——初音が僕に与えた血。あの血は瀕死だった僕を蘇らせた。思えば、彼女が僕に血を与えて生き延びさせなかったならば、彼女は僕に殺されずに済んだのかも知れないと思う。そう思うと、とても悲しい気持ちになる。とても、悲しかった。

その、悲しい気持ちが、僕の最後の感情になった。
僕はまだ死なない。正確には、僕の身体はまだ死なない。そう。復讐を誓った瞬間から判っていた筈だ。身体と心が弱り切ってしまった時、僕の身体は悪魔に乗っ取られると。
——その時が来たのだ。
悲しい気持ちが心に蔓延する。
悲しい気持ち。初音を守れなかったこと。復讐を果たせなかったこと。スフィーを殺したこと。観鈴を殺そうとしたこと。美咲を失ったこと。冬弥を失ったこと。人を殺したこと。耕一を殺そうとしたこと。銃を撃ったこと。生まれてきたこと。間違って生きてきたこと。ナイフを振るったこと。由綺を失ったこと。はるかを失ったこと。この島に連れてこ

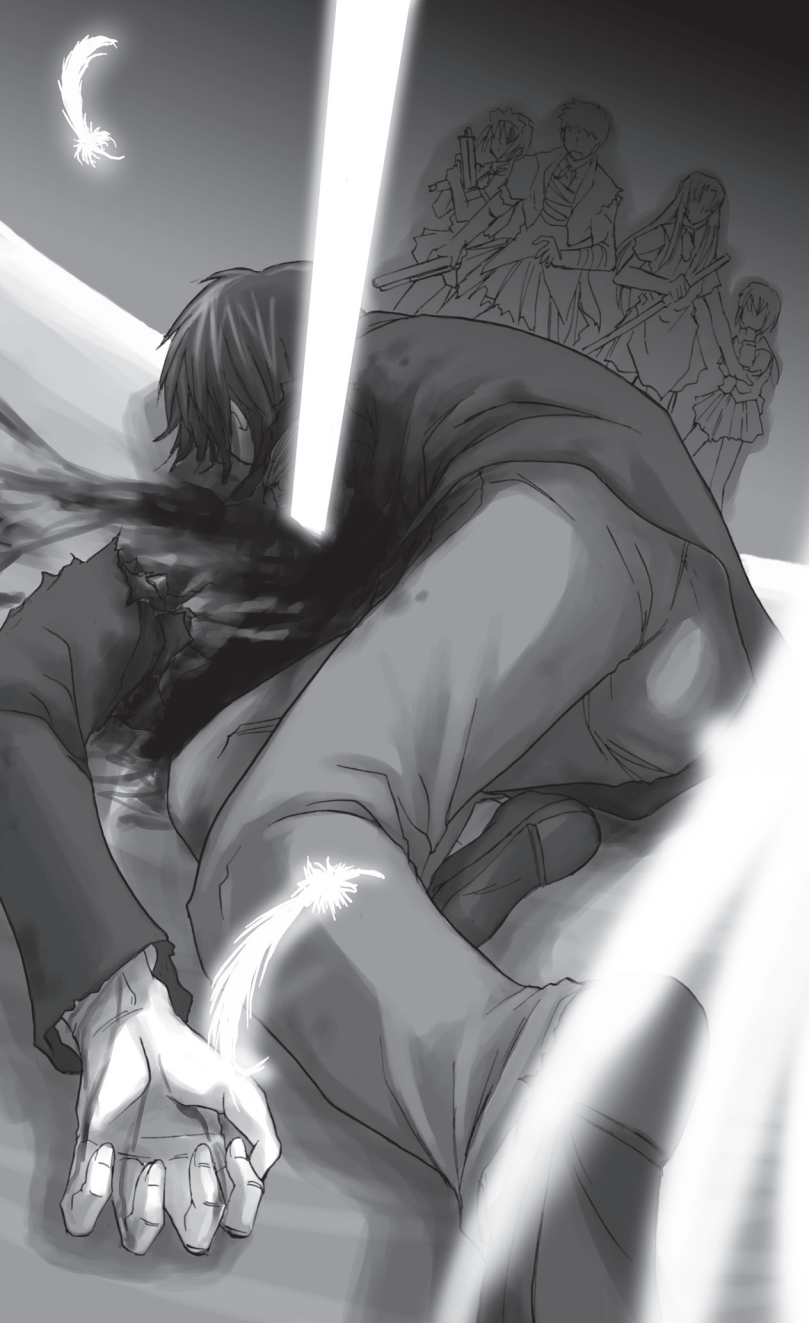
られたこと。美汐を失ったこと。銃で撃たれたこと。ナイフで斬られたこと。祐介を失ったこと。痛いこと。つらいこと。初音を失ったこと。
――すごく、かなしいこと。
そして僕は真っ白になった。
僕の中の悪魔が、どんな風な結末を見せるか、想像もつかないけれど。願わくば、僕の大切な人たちを殺さないでいてくれたら、と思った。
僕の大切な人を守ってくれたら、と思った。

消え行く自我で考えたそんな取り留めのない言葉が、誰にも見せることのない七瀬彰の遺書となった。

どくん、と。
心臓の音がひとつ鳴った。
大切な人を守らなければいけない。
それが七瀬彰の遺書だ。

「初音は――僕が、守る」
何もかもが狂いきった最後の言葉は誰にも聞こえない。言葉を発した自身にさえも。ただ、地面に蹲っているその悪魔の、願いにしか聞こえない狂った囁きを、きっと神様だけは聞いていたに違いない。
だから、この遺書は。
残・さ・れ・た・ものへの力となった。

852　恐慌を制すもの

「むかつく猫ね！　あたしが何したってのよ!?」
「もう、いじめちゃだめだよ！」
階段を上りながら、七瀬とあゆが果てしなく口論している。再び始まった頭痛と幻聴を忘れるには、このやかましさも悪くない。
「晴香さん？　なんだかつらそうよ？」
「ああ――ちょっと、ね」
何故だか刀を握り締める手に、力がはいる。この

調子で銃なんか持った日には、誤射してしまいそうだ。
アタシは用心のために右手の銃を鞄にしまうと、刀だけを握り締めることにした。
「……晴香さん？」
「いや、なんでもないんだって」
無理に苦笑して、誤魔化す。また七瀬に、頭の心配などされたくはないからだ。
それでもマナは、そばを離れようとはしない。
（こうべたべたされるのも、困ったもんね……）
そう思うと、本当に苦笑できた。
「そうだ！　解ったわ‼」
「うわあ！　七瀬さん、突然大声出さないでよ！」
七瀬がガッツポーズをして叫び、あゆがびびって飛び退いた。
「動物の気持ちに合わせるのよ！　みゅーみゅー言ってれば、懐くかもしれないわ！」
「うぐぅ……絶対、懐かないと思う……」

……呆れて笑う事だって、できた。
だいたいそれ、猫のみならず人間まで馬鹿にしてるじゃない。

無数の光の雨の中、冷えた笑いを浮かべる神奈に向かい、千鶴は問い掛けた。
「……神奈備命。あなたは何を――考えているの？」
「何を、とは？」
間違いなく疑問に思ってはいるが、この会話自体に意味は無いのかもしれない。長引く対峙の時が、梓を側面へ移動させ、耕一たちを接近させている。
「何故、殺すの？」
「必要だからの」
「――ここで殺す事が、ですか？」
「否。いま、殺す事――」

タタタ！　タタタ！

パラララララララッ！

神奈が言い終えぬうちに、梓がサブマシンガンの引き金を引いた。

その姿を確認することさえせずに、神奈はひらりと身をかわし、千鶴に向けて発砲する。梓が銃撃した方向へと、千鶴は飛び退いた。

「好き勝手できると思うなよっ！」

神奈の追い撃ちを、梓の放った銃弾が阻害する。

「——ふん」

神奈は苛立たしそうに鼻を鳴らすと、羽根を一振りして、音もなく弾丸を停止させた。軽い金属音を響かせ、落ちた無数の弾丸には命中を示す変容はひとつもなかった。

「……見事な連携よの。血族とは、良いものじゃな……」

何か寂しげな影を落としながらも、じろりと梓を、そして千鶴を睨みつける。

「じゃが余にも、眷属ならば——いないでも、ない」

中空を見つめるように、神奈は呟いた。しかしその意味するところを、千鶴たちは知らない。

軽く腹を押さえてみる。不思議なことに——痛みはほとんど、感じない。なんだか自分の身体じゃないみたいに、痛みが遮断されている。

『余のもとへ……』

(誰よ、あんた)

『我が名は、神奈備命……』

(カンナビノ……？)

何故だかその名を聞いたとき、冷や汗が出た。

——まずい。

もしも、この痛みが完全に消えたなら……私は、私でいられなくなるかもしれない。だらだらと嫌な汗をかきながら、わき腹を叩いた。そうでもしなければ、この傷を忘れてしまいそうだった。

「――痛ッ！」
「晴香さん⁉　何をして――」
この傷の、痛みを。
「晴香さん！　聞いてま――」
なんでもない、聞こえない。
だから、べたべたするんじゃない。
「晴香さ――」
「――うるさいっ！」
アタシは叫び、刀を一閃させた。
一瞬遅れて、血が飛び散った。
「マナさんっ⁉」
「は――晴香⁉」
七瀬とあゆが振り向くと同時に、私が袈裟斬りにしたマナが、血飛沫をあげて倒れた。
「な……何やってんのよ、晴香⁉」
「ななせ……」
マナは気絶したようだ――だけど、どうして私はこんなことを？　それに腹の傷は、どうしたんだろう？
自分に問い続ける私とは別に、七瀬に突進する私がいる。
「猫と子供は、すっこんでなさいっ！」
あゆを突き飛ばし、七瀬が小銃を構えようとする。
しかし、引き金が引かれる前に、私は刀で切り込んだ。
バキャッ！
非金属の軽い物音と共に、七瀬の小銃が転がる。
返す刀で七瀬を――。
ガキン！
――その一撃は、七瀬の刀の柄で止まった。
「晴香……どうしちゃったっていうのよ……」
そうだ、私は何をしていたんだろう？
腹だ。
腹の傷が――痛い、はずだ。
ガキッ、ガキン！

二人して旋風のように刀を振るう。私は激しく体を入れ替えて、あゆの銃撃を封じる。
こうしていれば、七瀬はすぐに脚にくるだろう。何故なら怪我を、しているはずだから。
そうだ、怪我だ。きっと怪我が、痛むんだ。
だから七瀬は、泣いているんだ。

（千鶴姉――）
（梓――）
二人が目で頷きあう。現在、神奈は銃に頼っている。彰を倒したような、剣を飛ばす技は消耗が激しいのだろう。
おそらく手持ちの銃の弾丸が尽きるまでは、それに頼るはずだ。そしてここにいる三人は防弾服を着ているし、神奈はそれを知らない。ならば頭部さえ守ればダメージを受けることはあっても、接近は不可能ではない。
千鶴が一太刀いれれば、勝負は決まる。

接近し、あの剣をかわせれば――勝ちだ。

タタタ！　タタタ！　タタタ！

「神奈ぁ！」
叫んで梓が突進する。
もちろん、これは囮だ。梓にとって接近する利点はない。対応するため振り向いた神奈に向かい、千鶴が背後に回りこむ。足音はＨＭＧⅡのセミオート連射音に掻き消されており、容易に距離を詰めて行くことができた。
（――やったか!?）
繭をおろし、遅れている耕一は銃を構えながら接近しつつも、戦いの行方を瞬きひとつせず注視していた。
しかし、相手は常識の通じる相手ではない。ここぞという時には、固有の能力を惜しげもなく発揮するのだ。羽根が揺れ、弾丸を全て無効化すると同時

に振り向き、知っていたかのように千鶴を正面に見据える。手に持った剣が、神奈の右手の動きに従い、意志を持って飛び出すように神奈の背後に回る。
「――なっ⁉」
剣は宙を舞い、梓の太腿のあたりをざっくりと切りつけた。僅かに遅れたとは言え、剣の旋回速度は視認すら怪しいほどで、梓でなければ両の脚を切断されていたかもしれない。
剣はそのまま速度を増し、軌道上に入り込んだ千鶴に襲いかかった。
「鬼よ。滅せい！」
「ふっ！」
短い気合いの言葉を重ねあい、二人の刃が激しい音をたててぶつかり合う。あの剣に質量があるのかどうかは判らない。しかし、その大きさに見合った威力を発揮して、千鶴を転倒させた。
「しょせんは小細工よの‼」
そのまま余った左手を無造作に梓へ向けると、ずどんと回廊に衝撃波を響かせて、梓を吹き飛ばした。
神奈は彰のところまで転がった梓を放置すると、迷うことなく千鶴へ右手を向けて、叫んだ。
「死ぬがよい！」

ズドン！

そのとき千鶴への攻撃を阻止したのは、横からの発砲である。やはり羽根がそれを叩き落したのだが、一部がすりぬけている。ベネリＭ３の散弾が、神奈の――いや、観鈴の手に数発埋っていた。
「――人間の小細工だって、捨てたもんじゃないだろう？」
耕一が歯を食いしばりながらも、笑みを浮かべて言い捨てる。対する神奈は不快そうに一瞥をくれると、滴る血を払うように腕を振り下ろした。するとめり込んだはずの散弾が、軽い金属音とともに床を転る。瞬時にして、傷が塞がったのだ。

「……な……何だって⁉」
呆然とする耕一。
無言で立ち上がる千鶴。
二人は落ちた散弾を見つめながら、考える。この戦いに勝利する術は、本当にあるのだろうか、と。

(——耕一さん)
誰もが忘れていた繭が、耕一の背に隠れるようにして問いかけた。
(なんだい？)
(観鈴さんを救うことは——可能だと、思いますか？)
短い沈黙の後、首を横に振る。
(助けたいけど——今では殺すどころか、生き残ることすらできるかどうか、怪しいね)
(いえ、それなら——観鈴さんごとなら——可能なんです)
自信に裏打ちされているのだろう、あまりの直接的な物言いに耕一は驚き、振り向いた。
そして繭の手に見たものは、見慣れぬ、銃のようなものだった。

「晴——……‼」
七瀬が何かを叫んでいるが、もう聞こえはしない。
斬撃を弾いて一歩踏み込み、刀を水平に構え、身を沈める。七瀬が弾かれた軌道を修正して、再び切り込んでくるのは解っていた。だから修正中の浮いた腕を、刀を放した右手の肘で軽く押し込んでやる。同時に、左手で刀を引けばいい。
「……⁉」
七瀬の叫びは、やはり聞こえない。
この一手で胴が、がら空きになった。残る左手の刀による突きが——王手に繋がる、決定打だ。

『ズドン！』

そのとき、音が聞こえた。
ここにはないはずの、口径の大きな銃声が脳裏に響き渡る。
『――人間の小細工だって、捨てたもんじゃないだろう？』
ここにはいないはずの、耕一さんの声だ。
私は、何をしていたんだろう？
私は――
「七瀬さん!!」
――これは、あゆの叫びだ。
そして目の前の、七瀬の胴に――私の刀の切っ先が――
すとん
――貫通した。
……鳩尾に吸い込まれそうな刃を、最後の瞬間に修正することができた。ちょうど私の傷と、寸分違わず同じところ。
刀は音もなく、貫通していた。
「七瀬……私……」
「晴香……正気に、戻ったのね……」
七瀬は泣きながら、強張った笑みを浮かべた。反射的にだろうか、私も同じことをした。
同じこと。
つまり強張った笑みを浮かべながら――
「……ごめん」
「いいよ……これで借りは、返したからね……」
「あはは……バカね」
――私は、泣いていた。
悲しいからではない。
もちろん、痛いからでもない。
誰も殺さずに済んだのが、嬉しかったからだ。

853　小細工、そして

「胃の中に爆弾があったでしょう？　これは、向けた先にある胃内爆弾を誘爆させる装置なんです。彼女の身体にはまだ爆弾が残ってたはずです。私が――やります」
「いいのか？　本当に」
「私が――やらなくちゃいけないんです」
藺の覚悟を受け止めた耕一は、その決意に応えるべきだと判断した。
「……俺は千鶴さんの援護のフリをして囮になる。藺ちゃんは隙を狙ってそれを使うんだ」
耕一や千鶴の攻め手をいなしていた神奈ではあったが。おおよその手は読めていた。
（これ以上油断するわけにもいくまい）
小細工。
少なくともそれは、今までは致命的ではなかった。だが、既に相手がこの女――観鈴を助けることを諦めていたとすれば、次も無事で済む保証はない。
（本命は――どれじゃ？）
耕一ではない。彼は千鶴の援護に徹している――フリをしている。本命ではない。
千鶴でもない。知る限りでは、唯一自分に有効な武器を持ってはいるが――耕一が彼女の援護のフリをしている以上、千鶴本人が自覚しているいないには関わらず、本命ではないはずだ。
梓でもない。彼女には有効な攻め手も、何かを企む様子もない。
もはや死体と変わらぬ彰でもない。
そして最後の一人。
藺が自分に向け、何かの狙いを定めようとしているのが分かった。
（お主か！）
防ぎきれなかった耕一の散弾が、再びいくつか腕

にめり込み。千鶴の刀が、片翼を僅かに傷つけはしたが、神奈が向けたサブマシンガンの銃弾は、確かに繭へと届く。
彼女は、最後の切り札を取り落として後方に倒れた。
自分に肉迫していた千鶴を、多少傷ついてしまった翼で吹き飛ばす。
そして、返す翼で耕一と足を怪我して動けないはずの梓をも薙いだ。二人とも千鶴同様、思いっきり壁に叩きつけられる。
もう油断をするつもりはない。動ける相手を放っておくつもりはない。手を振る。弾が床に跳ね、金属音が響く。既に傷は治っていた。
ただし、刀によって付けられた翼の傷は、すぐに治らない。
「またよからぬ企みをしておったようじゃが、二度三度は通じぬぞ？」
ここまで持っていけば、恐らく皆殺しにするのは簡単だろう。だが、どうせならできるだけ多くの苦痛と絶望を――。
「――本当に、これで終わりだと思っているんですか？」
ただ一人起きあがったのは、千鶴。
「なるほど。お主のこと、失念しておったわ」
「そのまま失念してくださってても構わなかったんですけどね」
柏木千鶴。その冷徹なる鬼が持つ、刀。
「意地でも余を斬るのじゃろうな。この女の身体ごと」
「何を今更」
――そう。罪無き人をも既に殺している彼女にとっては、愚問でしかない。
端的に答え、神奈との間合いを一気に詰めた。
即座に反撃することは難しい、と判断したのだろうか。銃弾をも弾き返してしまうその翼を以て、自らの身を守る神奈。確かに普通の武器ならば太刀打

ちできないだろう。だがこの太刀は、普通の武器ではない。
　貫き通せる。
　その確信は絶対だった。そして事実となった。
（やった――？）
　間違いない。二枚の翼を貫いて、確かに神奈に刀は届いて――

――簡単過ぎる？――
――翼は弾け、周囲に真白き羽を散らした。
　その先には何もない。何を意味しているのか。
　フェイク――
「余の、勝ちじゃな」
　神奈は千鶴の背に当てた手に、意識を集め。そして開放した。
　千鶴は背後の神奈を睨み付けようとして――その場に崩れ落ちた。
「確かに、真っ向からの勝負を受ければ余とて危うかったかもしれぬ。ならばこういう手もある、ということじゃ。ぬしらから教えられたことじゃな」
　神奈が贄に選んだのは、繭だった。彼女の下へと歩み寄る。
　近くに落ちていたそれ――繭が構えていた機械を、踏み潰し。
「これで希望は潰えたかの？」
　銃弾の何発かは、繭の左腕を捉えていた。確実に、痛みと苦しみを与える。
　その左腕に、足を乗せた。そして体重をかける。
「あ、うあ、ああ！」
　痛み、苦しみ、のたうち回る彼女。
　ようやく足をどけたかと思えば、今度は無造作に腹を蹴る。
　繭は胃の中のもの全てを吐き出した。
　より一層の痛みと、より一層の苦しみと、より一層の憎しみと。

（畜生、こんな状況で身体が動かないのか――！）
かろうじて意識を保っていた耕一ではあったが、身体を動かすことはできず。
耕一、千鶴、梓――皆、動けない。誰もそれを止められない。
その事態を覆したのは、誰も――恐らく本人すらも――予想し得なかった者だった。
「おあああああああああああああ！」
「な――」
死んだはず――あるいは明らかに死へ向かっている人間のものとは思えない咆哮を聞き、驚愕する神奈。それは隙としては充分すぎる間だった。
かつて彰であった者は、神奈の傷ついた片翼を右腕で掴んで、とんでもない勢いで放り投げた。既に腕のない左肩から、更に血が吹き出る。何が半死半生の彼を突き動かしているかは分からない。しかし、彼は止まらなかった。今の神奈の状態――観鈴の身体を持つ状態では、あの光に過大な効果を求めることはできないからだ。
彼は確実に死にながら、放り投げた神奈を追った。光満ちつつある森へと。

千鶴はただ、廊下の天井を見ていた。自分の生が少しずつ失われているのか、それとも自分の死が確実に大きくなっているのか。そのどちらか、いや、どちらもなのだろうか。
藺はどうなった？　泣き叫ぶ声はもう聞こえない。ふと、自分が抱き上げられる感触に驚いた。目に映るその顔にも。
「藺ちゃん――は？」
自分を覗き込む顔――それは耕一の顔だった。
かろうじて動けたのは耕一と梓のみ。神奈と、そして彰のことは気になるが、その前にやらなければならないことがある。

「大丈夫——とは言い難い。神奈に左腕を撃たれたんだ。でも梓が止血してるとこだよ。気絶はしてるけど、命に別状はないと思う」
梓は、自分の足の治療と。繭の治療を。
そして耕一は、千鶴の治療を試みようとしていたわけだが。
「そう——よかった——」
この状況では、手の施しようがない。むしろ即死でなかっただけでも奇跡だ。
「こっちの止血の方、終わったよ。目が覚めるまで、しばらく時間かかるかもしれないけど。千鶴姉の方は——」
「…………」
耕一の無言の答えを以て、梓も察したようだった。
「千鶴姉!?　そんな、そんな——」
彼女もまた千鶴の下へと駆け寄る。怪我した足を引きずり、涙を浮かべて。

ああ、そうだ。私は何と果報者なのだろう。
罪を重ねて生きてきた私に。
最期を看取ってくれる人が、泣いてくれる人がいる。
ならば、私は伝えよう。

「梓」
決して力強くはないが、その言葉には聞く者を引き寄せるだけの力があった。
「結局——私は背負いきれなかったみたい——ごめんなさいね——あのね——あゆちゃん——帰る場所がないって——だから全てを終わらせて帰ったら——私達と一緒に暮らそうって——約束したの——料理とか——いろいろと教えてあげて——」
「うん、うん——」
ただただ、千鶴の言に頷く梓。
「耕一さん」
そして今度は、耕一の方を向き。

「梓のことと――それに鶴来屋のこと――お願いします――足立さんを頼れば――きっと大丈夫――本当は――耕一さんの生き方を縛りたくはなかったけど――私の父や母が――あなたのお父様が――必死になって守り抜いてきたものだから――」
「分かった」
「それと――この刀を――」
精一杯の力を振り絞って、耕一に刀を差し出す。
「これで――神奈を――斬ってください――できれば神奈だけを――ふふ――自分にはできないことを――人には押しつけようなんて――本当に嫌な女ですね――私――」
自嘲に満ちたその笑み。耕一は刀を確かに受け取って。
「分かった。絶対にそうする」
彼女の笑みから、自らを嘲る色は消えた。安らかな笑み。目を閉じて。
「――ありがとう」

それが、千鶴の最期の言葉だった。
「……千鶴姉？」
最初に口を開いたのは、梓だった。
「千鶴姉？　千鶴姉ってば！」
そして最も理解に時間を要したのは、梓だった。
「千鶴姉ぇ――――――！」
千鶴の身体に抱きついて泣き叫ぶ梓。耕一は、そんな梓に千鶴の亡骸を預け。
託された刀を手に、立ち上がった。

何が彰を突き動かしているのかは分からない。既に人としての限界は超えているはずだ。だが、たとえ彼が何にすがっていたとしても、自らの死に抗ってまで――否、自らの死を進行させてまで取ったその行動には、必ず意味がある。
絶対にそうだ。
（とりあえず、千鶴さんのために泣くのは梓に任せよう）

約束を果たしてからでなければ、自分は彼女のためには泣けはしまい。
鬼の王、耕一は。
約束を果たすために。
神奈と彰であった者が消えた、光満ちあふれる森へと向かった。

二十番　柏木千鶴　死亡
【残り９人】

854　おねえさん

「ひっく、ひっく」
涙が止まらない。早く止めなきゃいけないのに、泣くのをやめなきゃいけないのに、止まらない。
泣く暇があったら、立ちあがらなきゃいけない。
耕一を追いかけて、一緒に戦わなきゃいけない。
だけど、そうするには、今抱きしめているものを手放さなきゃいけない。……嫌だ。離れたくない。
だんだん冷たくなってゆく、物言わぬ姉の身体。
二度と開かれることのない、閉じられた瞼。
顔のあちこちにこびりついて、固まった血。
そして、この島にそぐわない、安らかな顔。
「千鶴……姉……！」
その顔を見た瞬間、再び瞳から涙があふれ出す。
梓の前には、いつも千鶴がいた。
楓も初音も、確かに大切な家族だったけど。
千鶴だけは、他の誰よりも特別だった。
喧嘩相手で、遊び相手で、相談相手で、ついでにいつも苦労をかけてくれる困った姉だったけど。
そんな彼女に、いつも憧れていた。
「嫌だよ。あたし、千鶴姉ぇと離れたくない……」
自分の体温が、少しでも千鶴を暖めるように。
自分の涙が、少しでも千鶴の血を補うように。
そんな、子供じみた無駄な足掻きを自覚しつつ、梓はただ泣きながら、千鶴の身体を抱きしめた。

「うぐぅ、うぐぅ」
涙が止まらない。なんだかすごく理不尽な感じ、そんなに哀しいわけじゃないのに、止まらない。
泣く暇があったら、運ばなきゃいけない。
みんなを追いかけて、応援しなきゃいけない。
だけど、怖いから、物陰に隠れながらこっそりと応援しなきゃいけない。……怖い。行きたくない。
「って、だめだよっ！　ボクも戦わないとっ！」
ふと頭をよぎった弱気な考えに、思わず叫ぶ。
そんなあゆに、右側から声がかけられた。
「何がダメなんだかはわからないけれど……ねぇ、私たちは置いて、先に行ってても構わないのよ？」
あゆの肩を借りて歩きながら、そう言う晴香。
だが、あゆはぶんぶんと頭を振って、晴香のその提案を全身全霊で拒否する。何故かと言えば。
「だめだよっ！　絶対、みんなで行くんだよっ！」
一人だと、怖いから。
そんな本当の理由は、こっそりと呑み込んで。

再び、じわりと涙目になりながら。
右肩に巳間晴香を、左肩に七瀬留美を支えつつ、気を失ったままの観月マナを背負い、通路を歩く。
そんなあゆは、首からバッグも提げていた。
中には猫が一匹。じたばたと暴れもがいている。
ずりずりと、重みに足を引きずって前に進む。
「うぐぅ、うぐぅ、うぐぅ、うぐぅ……」
一歩進むごとに謎の声を発しながら、涙と鼻水を垂れ流すあゆの様子に、左側から七瀬も口を挟む。
「あたしたちだったら、もう大丈夫だから。ほら」
とても大丈夫そうじゃない表情でそう言う七瀬。
だが、あゆはぶんぶんと頭を振って、七瀬のその提案を全身全霊で拒否する。何故かと言えば。
「だめだよっ！　無理したら怪我が酷くなるよ！」
一人も、失いたくないから。
そんな本当の理由は、みんな想ってる事だから。
先程、腹部を貫かれた七瀬に施された手当ては、あくまでも最低限の止血程度のものでしかない。

無理をすれば確実に、再び出血することになる。
怪我人に負担をかけず、みんな揃って皆を追う。
それを実現させるには、この方法しかなかった。
……と、少なくともあゆはそう思っている。
「出口、まだ……？　梓さ〜ん！　千鶴さ〜ん！」
終点の見えない長い通路に、先に行ってしまった
二人の名前を思わず大声で呼んでしまうあゆ。
しかし、彼女が思っているよりもずっと近く。
すぐそこまで、出口は近づいていたのである。

「……さ〜ん……」
うぐうぐと涙に震えた、そんな声が耳に届いた。
泣いて、目を閉じて、思い出を振り返って。
涙を拭いて、ゆっくりと目を開け、現在を見た。
「千鶴姉」
そこには、変えられない事実がある。
出来れば、ずっと逃げていたかった現実がある。
そして梓は、ゆっくりと千鶴から身体を離した。

べりべりと、固まった血で貼りついていた服が、
未練を断ち切るように、音を立てて剥がれていく。
通路の端に千鶴の体を優しく横たえてから、梓は
ゆっくりと、だが、しっかりと立ち上がった。
「気は、済みましたか？」
いつの間にやら繭が起きていた。
痛みで目が覚めたのだろう。止血したとはいえ、
左手にはいまだ激痛が走っているようで、だらりと
腕を下げたまま、黙って顔をしかめている。
それでも彼女はまだ立って歩いて、生きている。
梓は笑って頷いて、そして繭に訊ねてみた。
「あたし、今はもう……泣いてないよね？」
繭も笑って頷いて、そして梓に答えてみた。
「はい。血にまみれてひどい顔ですけど」
よしっ、と満足そうに頷くと、梓は繭に告げる。
「あゆの奴が、そこまで来てる。あっちは怪我人を
抱えてるから、あたしはそれを迎えにいく」
「はい」

「繭は出入り口のところで、闘いが森のどの辺りで続いてるのか。それを、見張っといてほしい」
「わかりました」
「お願いね。すぐに戻るから！」
繭が頷くのを見て、梓は痛む足に鞭打ちながら、大股で通路を奥に駆けてゆく。
すぐにその姿は、闇に溶けて見えなくなる。
「千鶴姉、約束はきっと守るから！」
通路の奥に駆けていく、梓の背中を見つめつつ。
繭を守ってくれた、真琴の背中をそこに重ねて。
思わず、繭は呟いた。
年相応の、わがままを。
一筋の雫を、瞳からこぼしつつ。
「いいなぁ。おねえさん、かぁ……」

「あゆーっ！」
「あ、梓さぁ〜ん」
いくつかの角を曲がり、そこで梓が見たものは。
「だから、無理しないでって言ったでしょ……」
「ごめん。また、傷口開いたみたい……」
背負った三人の重みに耐えきれず、出来損ないの組体操のように、下敷きになったあゆの姿だった。

855　呪夢

バサッ！
翼を広げ、空中で身を翻す。
（……これ以上油断しない、じゃと？　いつでも殺せたものに止めをささなかった事こそ油断というのではないのか!?）
己の愚かさ加減に腹を立てる……。
が、身を焼かれる感覚によってその思考は中断される。
強烈な光が世界を包んでいる。
常人にはただのまぶしい光に過ぎないが神奈にと

っては砂漠の日差のように体力を奪う毒の光。
素早い判断で次の戦場を光の弱い森の中と定め、木々の間に飛びこむ。
ここにきて、始めて神奈の中から『遊び』という感覚が完全に消え失せた。毒を浴びながら戦ってこの光を返す事が出来るのか……真剣に計算する。
安らかに逝ったとはいえ、鬼の女の死によって得た力は予想以上だった。
（鬼はまだ三匹もおる……全て殺せればこの光の分は取り返せよう。それに……手駒に与えておいた力も失う前に返してもらうとするかの）
それで成功率は六割。
逆を言えば四割の確率で失敗する予測になる。
それに、今のような不測の事態というのも十分にありうるのだ。もし次の戦いでもヘマをしたのなら……光に焼かれてこの身は消滅する。
もし助かったとしても刀に封印されて空で見続けていた夢に戻る事になるだろう。

（………夢に戻るじゃと!? 冗談ではないっ!!）

ギィイィン!!
刀と刀がぶつかり合う音。
一瞬火花が散り、大男の手から刀が離れた。
「くっ！」
大男はとっさに身を引くが、遅い。
ドゴッ！
「ぐあぁっ！」
振り下ろされた刀の背が大男の鎖骨を砕き、勝負は決した。
最後の敵が意識を失った事を確認し。
「ふぅ」
という溜息と共に刀を鞘に収め……。
……男は地面に崩れ落ちた。
「柳也殿っ!!」
たまらず裏葉とともに草むらを飛び出し、柳也の

下へと駆寄る。
柳也の衣は背がぱっくりと口を開けており、その下に走る朱の一文字が顔を覗かせている。
それは、ともすれば致命傷となりかねないほどの深い傷だった。

「どこだ!?　どこに行った!?」
「まだ近くにいるはずだ！　探せ！」
夜の森に男達の声が木霊する。
それは、敵の声。
自分だけが生き残るために余を殺さんとする下衆どもの声。
……何故。
何故余だけが狙われねばならぬのだ？
これは殺し合い……。
敵も味方もない殺し合いではないのか？
何故、奴等は申し合わせたように余を狙うのだ？
「いたぞっ!!」

一際大きな声がすぐ側から響く。
刹那、裏葉に手を引かれて走り出す。
無数の敵が群って来る。
「こっちだ！　女も一緒にいるぞ！」
……余のせいか？
…………余がいるから、この二人も狙われてしまうのか？

飛び掛ってきた男が一太刀で地に叩き伏せられる。
それを見ていた者達の間に緊張が走る。
「こ、殺不(ころさず)の太刀など！　恐れる必要ないっ!!」
そう叫び、次の敵が襲い掛かってくる。

……余のせいか？
…………不殺を命じたのは間違いであったのか？

僧衣に身を包んだ大男。

鎧の下にぎらついた瞳を隠した男。
徒党を組んで弓を射ってくる男達。
斬られては立ちあがり、斬られては立ちあがり、どんどん数を増やしながら休む間もなく襲い掛かってくる。
男達はいつの間にか人の形をなさなくなっていた。
敵という概念。襲い来る恐ろしいモノという概念。
黒く霞んだ体に爛々とした眼だけが光る、人らしいモノ。
黒いモノが狙うは神奈一人。
だが神奈が傷つく事は無い。
神奈のかわりに、神奈を護ろうとする二人が傷ついてゆく。
黒いモノは次々と襲い掛かってくる。
襲い掛かってくるモノは次々と切り伏せられる。
だが、不殺の刀が黒いモノを殺す事はない。
切り伏せられてもすぐさま起きあがり、再び襲い掛かってくる。

考える。
どうしてこうなったのかを。
考える。
どうすれば三人が助かるのかを。
考える。
どうすれば二人を助ける事が出来るのかを。
考える。
自分は何が出来るのかを。

ついに柳也が力尽き、地に膝をついた。
柳也の力は夢の主の信頼に比例する。
その柳也が力尽きて、敵の前に無防備な姿を晒している。
それは、夢の主があきらめたということ。
殺してはならないという偽善も、人に頼って助かろうという希望も捨てたということ。
柳也に向けて、最後の一撃が振り下ろされんとした瞬間――

「殺せばよい。余の事など見捨て、生き延びるために敵を殺せばよいのだっ‼」
自分がいなくなれば柳也と裏葉は狙われる事がなくなる。
だから二人とは別れる。
「殺してよい」と言って、二人のもとから駆け出す……。
…………つもりだった。
「柳也…………殿……？」
様子がおかしい。
黒いモノの動きはピタリと止っている。
柳也がゆっくりと立ちあがる。
裏葉の短刀を持った手がだらりと落ちる。
そして、ゆっくりと振り返った二人の姿は、二つの黒いモノになっていた……。
「柳也殿っ！」
夏の昼下り。

「どうして！　どうして、こんな事になったのだっ⁉」
深い森の中を走る一本の山道。
「りゅうやどのぉぉぉぉぉぉぉぉっっ‼」
少女の叫びが木霊している。
地に伏せた男と、男にかぶさるようにして泣き続ける一人の少女。
少女は呼びつづける。
もう決して帰ってこない男の名を。
少女は揺すり続ける。
もう決して目を覚まさない男の肩を。

少女は、
男の肩を揺すりながら、
それでも、
右手に握った物を、
手放さないでいた。

男の命を奪った血塗れの短刀を……

千年、二つの夢を繰返し見続けていた。
ひとつは、普通の少女として、普通に生きようとして、普通の幸せすら掴めずに死んでいく夢。
もうひとつは、殺し合いの中で、殺し合いをして、大切な人を殺してひとり生きのびる夢。
永遠に繰り返すと思っていた夢は、ＦＡＲＧＯという組織によって中断された。
ＦＡＲＧＯは、呪いの一部を力として抽出することに成功した。その力を使う事で神奈は悪夢から解放される事が出来たのだ。
だが、呪いから逃れるためにはこの力を維持しなければならない。
呪いの源は人の死、嫉み、怒り、悲しみといった負の波動。呪いから作られた力もそれは同じ。
ＦＡＲＧＯの作った呪いを力として抽出する装置は最初の実験で壊れた。
ならば定期的に人の負の波動を集めなければならない。効率よく負の波動を集める方法…………それを彼女はよく知っていた。
手始めにＦＡＲＧＯを、そして世界でも有数の力を持つ長瀬一族を裏で操り……。
そして、悪夢は現実になった。

（…………夢に戻るじゃと!?　冗談ではないっ!!　二度と、二度とあのような世界に戻るものかっ!!）

856　けもの達の集う場所

「うぐぅ……」
「だから言ったじゃないの」
「だ、だって……」
あゆが何かを言いかけた時、首にかけたバッグか

らぴろが飛び出した。
「あっ！」
追いかけようとしたが、上にのしかかった人の重さで立ち上がることは出来なかった。
「ま、待って！」
後ろから掛けられる声を振り切るようにして、ぴろは走り出した。

『クッ……』
傷が痛む。
体がバラバラになりそうなほどに。
それでも俺は走り続けていた。
あの女を捜し出すために。
五感の全てを最大限に発揮してあの女の居場所を探る。
——俺はあの女を許せない——
ぽちは俺の目の前で無惨に殺された。そらも生きているのかどうか分からない。
何故、俺のようなろくでもない奴だけが生き残ったんだ？
俺はポテトとの約束を守れないような馬鹿だぜ。
だからせめて仇だけでも取ってやる。
例え俺が死んでも。
——それ以上に俺は俺自身を許せない——
悪いな、そら。お前が大事だと言っていた女を。
あの世でポテトとぽちにお前の分まで謝ってやるから勘弁してくれよ。
俺はあの女がいる気配を感じ取るとその方向に向かった。

「うおおおおおおおおお！」
森の中を一匹の獣が走っている。
片腕を無くし普通ならば生きていることさえ不可能な傷を受けてもなお僕は生きている。
(ちっ、乗っ取れたのは半分だけか)

僕の頭の中で僕ではない声が響く。
だが、そんなことは今の僕にとってどうでもいい。
傷の痛みすら感じない。
今の僕に取って大事なのは神奈という女を殺すことだけだ。
それだけが僕の使命。
それだけが僕の生きている理由。
また、声が聞こえた。
（まぁ、いい。どうせこの宿主も長くはない。最後の狩りを楽しむとしようか）
今の僕を突き動かしているのは僕自身の意志でありこの声でもある。
今まで僕が抗ってきたモノ。
だが今の僕とこいつの利害は一致している。
ならば抗う必要など微塵もない。
（……あっちか）
頭の中の声が指し示す方向に向かう。
初音ちゃん。
もうすぐ君に会えそうだ。
でも、その前に——。
「あの女を殺す」
（あの女を殺す）

観鈴、どこだ！
ぼくは空を飛び回りながら必死で観鈴を捜していた。
ぼくが気が付いたときには、なぜか、ぼくは施設の外にいた。
傍らには口にくわえている人形が落ちているだけだった。
気を失う前にぼくが見た光景。
観鈴が何者かに体を奪われていくのを見ているだけしかなかった。
ぼくは無力だった。
恐らく、ぴろ君やぽち君も殺されてしまったのだ

ろう。
あの何者かに操られた観鈴によって。
ポテト君、ぴろ君、ぽち君。
文句はぼくがそっちに行ったらたっぷりと聞くから。
だから、今だけはぼくの好きにさせて欲しい。
ぼくは観鈴を救わなくてはいけない。
例えこの身が滅びようとも。
例え何の力が無くても。
観鈴を守れるのはぼくだけだから。

観鈴を守る。
それは間違いなく『そら』という個体としての意志。
そしてそれがぼくがこの島に存在する理由。
ふっ、と風が流れるのを感じた
ぼくは根拠もなくその方向に観鈴が居るのを確信した。
ぼくは何の躊躇いもなくそこへと向かって飛び立った。
それぞれの目的でけもの達は集う。
同じ場所を目指して。

857　死の舞踏

――――眩しい。

生身の人間が、ここに足を踏み出すのは冒涜なのではないか。そう考えさせられるほど、世界は神々しく光に包まれていた。
(……彰は?)
目を細め、頭を巡らせて姿を求める。
戦闘の音は聞こえている。しかし、その主たちが見当たらない。
(視界が……狭いんだ)
目を慣らしながら、音を頼りに進む。

一方的な銃撃音が続いている。音が聞こえる限り、勝負は続行中なのだろうが……異常だった。
彼らの姿を捉えられない――
『耕一さん！　あっちです!!』
――叫び声に反応して、振り向く。繭の声だ。自分が降りてきた方向とは逆の、むしろ通気口側だった。
音の共鳴が位置取りを誤らせていたのだろう。遠く光の中、二人の影がさながら踊るように舞っている。
(彰――勝手に、死ぬなよっ!!)
耕一は心の中で祈りながら、走り出した。
「……ち……千鶴さんっ！」
「嘘……」
あゆと、目を覚ましたマナが、死体にすがり付いていた。七瀬と晴香は、無言で立ち尽くしている。

さんざん泣いたあたしが言えた立場じゃないけれど――急がなきゃいけない。
「あゆ、行こう」
「うぐぅ……」
盛大に鼻水までたらして、あゆは泣いている。レースの上等そうなハンカチーフをとりだして、鼻をかんでやる。
「しょうがないな……ほら……」
あゆの鼻をぐりぐりしながら、全員の様子を見る。
あたしは脚に裂傷。繭は左手に被弾したが傷は浅そうだ。晴香と七瀬は腹に貫通傷。マナは出血こそ派手だったが、肋骨の上を滑っていただけのようだ。むしろ打撲が酷い。あゆは無事だが、戦力として期待するのは間違っている。
あたしと繭を除けば、肩を組み気力で立っているような、七瀬と晴香に期待するしかない。
足を引き摺って、二人の前に立つ。
「お互い、ぼろぼろだね」

「そうね。でも、これで最後なら――」
「――根性、見せないでもないわよ」
そこは乙女の意地でしょう、と七瀬が修正する。
……悪いけどあたしは、乙女って柄じゃない。たぶん、ここにいる誰も柄じゃない。
『耕一さん！　あっちです!!』
繭が叫んでいる。神奈を発見したのだろう。
「繭！　どっちだ!?」
そう言いながら、あたしたちは各々の可能な限りの速さで走りだしていた。
「あそこです！　ああっ！」
「な――――!!」

銃声がやんだ。
音さえ吸い込むように、光が強くなっていたが――そのためではない。
「彰ああああああああ!!」
耕一の叫びが響き渡る。そして叫びの余韻の中、施設から梓達が駆けつけてくる。
ひとつの勝負が、ついていた。

そのシルエットは、祝杯をあげるように、高らかに右手を上げている。左手を腰に当て、誇らしげに胸を張り、そして掲げられているそれは――
「……彰」
――彰、だった。
神奈は首を掴んで、軽がると持ち上げている。一方の彰は、無事なところなど見当たらない。
「耕一……遅いじゃないか」
「……すまん」
「初音ちゃんのこと……頼むよ」
「……ああ……任せておけ」
初音の死体のことなのか。
――それとも、まさか。彰の記憶はもはや狂ってしまっているのか。むしろそのほうが、幸せなのか

もしれないが――真実は、最後までわからずじまいだった。

ごきり

銃声すら掻き消す光の中で、全員がその音を聞いたという。続いてひゅう、と擦れた吸気音のようなものが一回。

祝杯は、砕かれた。

支えを失い、だらりと垂れさがった彰の首に、鬱陶しげな一瞥をくれると、神奈は無造作にそれを捨てた。そしてパートナーを導く踊り子のように、優しげとさえ言える、滑らかな仕草で手を差し伸べた。
「次は、どいつじゃ?」
耕一を、七瀬を、晴香を見て、上機嫌に言い放った神奈は、ついと片眉を吊り上げる。

「……また、小細工か。ご苦労なことよ」
(……小細工?)
耕一たち三人は、お互いの顔を見た。可能な限りの努力は、小細工だって何だってするつもりだった。
しかし、心当たりがない。俺たちに何か共通点が……?
(そうか――刀か!?)
三人同時に、理解の色が拡がった。刀の外見は、どれもほとんど違わないのだ。

無言のまま、三人のリズムが同調していく。
自然と神奈を囲むように、等間隔で立っていた。
しかし、どうにもならない問題がひとつある。
観鈴を斬らずに、神奈を斬れるのだろうか。
(やはり――不可能なのか)
七瀬と晴香の刀は、ただの刀だ。神奈を倒す事ができない以上、本気で切り込むことはできないだろう。

しかし耕一の刀は、神奈を倒せるものだ。唯一その手段を有した自分が躊躇えば、三人全員が倒されてしまうかもしれない。
（――不可能、なのか――）
握り締めた手に汗が伝う。三人同時に、ちゃきりと刃音を鳴らして、刀を構える。
まわる。まわる。月のように、円舞のように。
もしもこれが、本当に舞踏なら。
いま高らかに、天空の歌が流れていることだろう。
「……どうした？　眺めているだけか？」
神奈が挑発する。梓たちが銃を構えているが、飛び込む耕一たちのことを考え、発砲できないでいた。
（くそっ！）
七瀬たちが、耕一を見ている。
何かきっかけがあれば――例えば耕一が目で合図すれば、二人は飛び込むだろう。
（くそう!!）
迷いに割ける時間は、間違いなく限界に達しようとしていた。
そのとき――ばさりと羽音を立て、神奈の真上から何かが降ってきた。光をさえぎるような、真っ黒な何かが降ってきた。
「何――烏じゃと!?」
いままで何者も触れる事すらかなわなかった神奈の肩に、一度だけ羽音を響かせて、烏がとまった。
神奈は驚きと怒りをぶつけるように右手を振り回し、中空の剣を叩きつける。
ぱん、というその音は破裂音と表現するのが一番近い。生物を殺戮するというよりも、風船を割ったような音がして――烏が――闇が、拡がった。
「何じゃ!?　これは!!」
叫ぶ神奈の姿が、闇の中で観鈴に重なるように浮かんでくる。闇の中で輝くのは、神奈の翼と――ひ

とつの、人形。
「鳥‼　貴様は一体⁉」
殺されたはずの鳥が、いまだに神奈の肩にとまっている。そう、観鈴の肩ではなく――神奈の、肩だ。
みるみるうちに、神奈の姿が観鈴から引き剥がされ、人形へと移っていく。

――今だ！
三人は誰からともなく、踏み込んだ。
狙うは――人形。
「うおおおおおおおおお‼」
「小癪な‼」
耕一の雄叫び。そして引き剥がされながらも観鈴を操る、神奈の叫び。一瞬にして七瀬を吹き飛ばし、晴香の刀を両断する。剣は勢いを増して、そのまま耕一の胴を――

ざんっ

――肉と骨を、瞬時に両断する音。ざあ、と流れる大量の血。
「観鈴ちゃん……」
「にはは……」
耕一が膝をつく。そして神奈が振り上げた右手を、胸を押さえるようにしまい込んでいた、観鈴が膝をつく。神奈の剣は軌道を変え、観鈴の身体を両断していた。
そして耕一の刀は――人形に、突き立っている。
「みんな、ありがとね……」
「観鈴ちゃん――！」
「おかあさんも、〝ようやった〟って……言ってるよ」
「観鈴ちゃん‼」
最期に意志を取り戻した観鈴が、剣の軌道に干渉

したのだ。
　観鈴の肩を、耕一が抱きしめる。しかし、その抱擁から逃れるように、彼女の下半身はぼとりと倒れた。
「……ありがとうって……なんだよ……」
　耕一は涙を流し、地に伏した。
　そして、光が収束する。
　死の舞踏は、終焉の時を迎えた。

二十四番　神尾観鈴　死亡
六十八番　七瀬彰　死亡
そら　消滅
【残り7人】

858　終局へ

出演

【雫】

長瀬祐介　月島瑠璃子　新城沙織

藍原瑞穂　太田香奈子　月島拓也

【痕】

柏木耕一　柏木千鶴　柏木梓

柏木楓　柏木初音　柳川祐也

【To Heart】

藤田浩之　神岸あかり　長岡志保

来栖川芹香　来栖川綾香　佐藤雅史
保科智子　宮内レミィ　姫川琴音
松原葵　マルチ　セリオ
雛山理緒

【WHITE ALBUM】

藤井冬弥　森川由綺　緒方理奈
緒方英二　篠塚弥生　澤倉美咲
河島はるか　観月マナ　七瀬彰

【こみっくパーティー】

千堂和樹　高瀬瑞希　大庭詠美
長谷部彩　猪名川由宇　芳賀玲子
牧村南　塚本千紗　桜井あさひ

立川郁美
御影すばる
九品仏大志

【まじかる☆アンティーク】

宮田健太郎
スフィー
リアン
江藤結花
高倉みどり
牧部なつみ

【誰彼】

坂神蝉丸
三井寺月代
砧夕霧
石原麗子
桑嶋高子
岩切花枝
杜若きよみ〈原身〉
杜若きよみ〈複製身〉
御堂

【MOON.】

天沢郁未
巳間晴香
名倉由依
名倉友里
天沢未夜子
巳間良祐

少年　鹿沼葉子

【ONE】

折原浩平　長森瑞佳　七瀬留美
里村茜　川名みさき　上月澪
椎名繭　柚木詩子　深山雪見
広瀬真希　住井護　氷上シュン

【Kanon】

相沢祐一　月宮あゆ　水瀬名雪
美坂栞　沢渡真琴　川澄舞
倉田佐祐理　美坂香里　水瀬秋子
天野美汐　北川潤

【AIR】

国崎往人
神尾観鈴
霧島佳乃

遠野美凪
みちる
神尾晴子

霧島聖
橘敬介

長瀬源一郎
長瀬源三郎
長瀬源四郎

長瀬源五郎
フランク長瀬
長瀬源之助

TEAM高槻

ポテト
ぴろ
そら
ぽち

and many extra

神奈備命

脚本

L.A.R.
。
quit
訳あり名無しさんだよもん
YELLOW
駄っ文だ
ALFO
暇人
独活大樹
名無したちの挽歌
赤目
久々野　彰
祐一＆浩平

zin
シイ原
111
荒門
189
ないしょ
セルゲイ＠D
林檎
#4-6
箕崎
#7-76
MIU

ナナツさんだよもん
真空パック
いつかの書き手
命
観月
名無しさんなんだよ
ヘタ霊
名無しcd
#3-174
七連装ビッグマグナム
遥か昔の書き手
彗夜
日向葵

葵原てぃー　NBC　5
フラスキ　Kyaz　River
感想スレRの142
＆名無しさんだよもん

書籍編集

瀬戸こうへい　セルゲイ＠D　三浦蘭

カバー絵・挿絵

秋★枝　みさき樹里　天田湧介
しまさらゆめき　指狐　ちん

書籍編集協力

はるか　JOYH-TV　冴村浩志
名無しさんだよもん＠誤植指摘

プロモーションフラッシュ

静かなる中条　音楽担当各氏　絵師各氏

スペシャルサンクス

ダンディ　名剣らっちー　旧データサイト管理人各氏

and all readers

いくつもの願いがあった
いくつもの別れがあった
いくつもの物語があった

presented by　葉鍵板

そして――

to be continued.....last episodes......

859　コップの中の嵐

――00:02　東京　新宿地下施設

地下とは思えないほど広大で豪奢な空間。そこでは様々な男女がカクテルグラスを片手に談笑している。彼らの共通点は顔に奇妙な仮面をつけている事。

そして会場の雰囲気を壊さぬよう計算し尽くされた配置の机の上には、まさに山海の珍味の数々が並べられ、そのどれもが尽きることなく運びこまれている。部屋の四方の壁、天井、はては床までがモニターになっており、逐次なにやら映し出していた。

「そろそろ決着のようですなぁ」

「マドモアゼル、あなたのどの駒にお賭けになったので？」

「おほほ、私は七瀬留美に」

「さすがはお目が高い。私の賭けた柳川祐也なんぞは開始早々消えてしまいまして。まったく役に立たない男だ」

「まあまあ、その賭け金も見物料だと思えば安いものではないですか」

そう、この奇怪な仮面舞踏会の正体……それはＦＡＲＧＯ――否、その実態は長瀬一族なのだが彼等にとってはそんなことはどうでもいい――主催の狂気の宴。とある島で百人の人間達が殺し合い、そこから生きて脱出する者は誰であるかを見定めるギャンブル。

この宴に集まった者達は皆、政財界で名を成し、この世の至福を勝ち取った人間。その至福に飽き足りなくなり、最後に行き着いた先がこの命を賭けた椅子取りゲーム。

もちろん参加するのではない。自分達は絶対安全な場所、遥かな高みから命のやり取り――そう、ど

んなに最高の俳優でも虚構のドラマである限り決して演じきれない現実のドラマ――それを眺める……それは特権階級たる彼等の権利。
残酷？　なにを言っているんだ。古代ローマ帝国では、奴隷剣士の決闘を見物し、そしてそれに賭ける事はなによりの娯楽かつ神聖な行為であったではないか。

「しかしモニターの修理はまだ終わらないのですかな？　これでは折角の彼等の舞台を十分に楽しめぬ」
「まあまあそう言われますな、ご老体。彼等の体内センサーはまだ生きていますゆえ、死人が出ればすぐわかる。その瞬間を今か今かと待ち続けるのも一興ではありませんか」
彼等は実に楽しげだ。数年に一度行われるこのパーティー。ここに来ることができるのはある種のステータスシンボル。裏の、そして闇の社会に地位を得た証。
同じ穴のむじな達が集まるこの会場。同類の親しみ。彼等はここで様々な人間と縁を結ぶ。いまそこにいる男も……

「いかがですかな、今回のゲームは？」
彼は、一人テーブルに座る男に声をかけた。相手はタバコを口にくわえて無造作に足を組んでいる。
――賭けた駒が全滅したんだろう――彼はそう好意的に解釈することにした。
「今回の主催者の試み――ジョーカーといいましたかな？　――少々作為的ではあるが私はかなりおもしろかったと……」
「くだらねえな……」
「…………確かにそういう意見もありましょうが……」
ピリリッ、ピリリッ……
突如電子音が鳴る。相手の男は彼にはなにも言わ

ず懐から携帯電話を取り出して、なにやら話はじめた。
「ああ俺だ……、そうか……」
まったく、礼儀を知らん男だ。品性のかけらもない。
「……うん……用意は……」
それにこんなところで携帯だと？　これだから成り上がりものは……携帯っ⁉
ここは東京新宿地下施設。誰も知らない筈の場所。電波が届く筈はない。なにか細工をしていなければ。こいつは……

バァァァン……

パーティー会場に一発の銃声が鳴り響き、次の瞬間全てのドアから完全武装の兵士が突入してきた。

——00:07　中国　天安門地下会場
「異常事態発生、異常事態発生。本部、指示を願います‼」

——20:07　ロシア　シベリア平原施設
「ＦＡＲＧＯ本部、ＦＡＲＧＯ本部、応答願います‼。現在所属不明の部隊と交戦中。このままでは……うわぁっ…………」

——18:07　スイス　スイス銀行連盟特別施設
「なにがどうなっているのだ⁉」
「わかりませんっ。現在最終防衛ラインで交戦中っ‼　ＦＡＲＧＯ本部とも連絡がとれませんっ」
「なんだとっ⁉」

――17:07　英国　ロンドン郊外大庭園

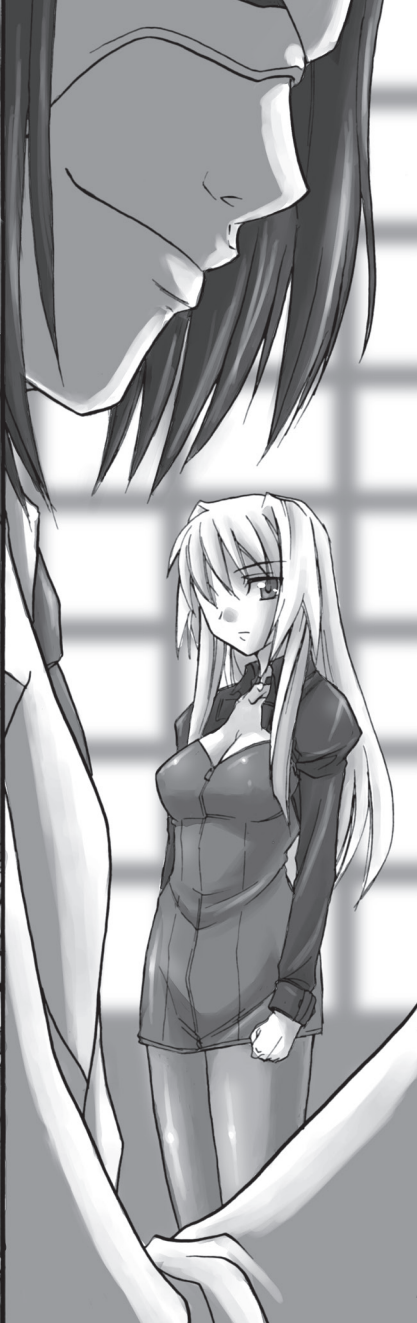
「我、救援請う、救援請う!!　……何故だっ!?　何故通信が通じないっ!?」

――12:07　アメリカ　ワシントン地下四百メートル

「こちらアルファ。奇襲に成功。現在ブラボー及びチャーリーが交戦中。二十分以内に制圧可能です」

――01:37　日本　東京新宿地下施設（ＦＡＲＧＯ本部）

「だめです!!　状況判明しませんっ!!」
「なんだっ？　なにが起こっているというのだ!?　この世界に我等に刃向かえる組織など既に存在しないはずだぞっ」
「しかし、現にっ!!」
「くっ!!　仕方があるまい。長瀬老にご連絡申し上げろ」
「それが……夕刻過ぎに通信が途絶えて以来、長瀬様との通信回線が開かないのです」
「なんだと……」
「まあ、あんたらの負けってこった」
飄々とした声と共に男が部屋に入ってきた。口にはタバコ。先程のパーティー会場の男だ。
「既に世界各地のＦＡＲＧＯ及び長瀬関連施設は我々の制圧下にはいった」
「なんだと……そんな馬鹿な!?」
「悪いが事実だ。今回の作戦は民族、宗教、国家を越えて世界中で実施されているのさ」
「……おのれぇぇっ！　貴様……貴様一体何者だ!?」
「内閣特別執行委員会直属、特務機関ＣＬＡＮＮＡＤ司令、古河秋生……」

「秋生さん……」
男──古河秋生のもとに長いポニーテールの女性が歩み寄る。
「早苗か……」
「当施設の制圧は完了しました。現在『島』に関する資料の探索を行っています」
「そうか」
「それとハクオロ様から通信が入っていますが」
「分かった。出よう」
通信室。モニターには仮面をつけた男の姿があった。
「ミスター古河。そちらの首尾は？」
「今終わったとこだ。ハクオロ殿、今回の作戦への協力を感謝する」
「礼など必要はない。今回の作戦は合衆国（ステイツ）のためでもある。我々や他の国の連中もＦＡＲＧＯや長瀬には頭を痛めていたからな」
「そうは言っても、あなたたちの協力がなければこうはうまくいかなかった。改めて礼を言わせてもらう。……それと例の『島』の件だが……」
「贄、羽根、封印、結界……。分かっているのはこれだけだ。こちらではアルルゥ、エルルゥ、ユズハが解析を行っているが、まだ判明していない。そちらは？」
「現在、岡崎朋也、春原陽平の両名が全力をもって解析を行っていますが………こちらもまだ……」
ハクオロの問いかけに早苗が答える。
「そうか……。せめて場所だけでもわかるといいのだが」
二人は通信を終え屋上に向かう。窓から外を覗くと星がきらめいていた。
大都市東京とはいえ、この時間にもなるとそれなりに星が夜空に姿を現している。
秋生は忌々しげに、吸っていたタバコを投げ捨てる。

「水瀬秋子特別調査官からの通信が途絶えて四日……、あの様な悪夢を阻止するために皆で作り上げたこの組織なのにな……」
「秋生さん……」
「国を超え、民族を超え、宗教を超え……。折角ここまで来たっていうのに……」
「ですが、ＦＡＲＧＯ及び長瀬は押さえました。このような悪夢は今回で最後のはずです」
「ああ……だが………我々に密かにご尽力して下さった来栖川老にも申し訳がたたない……」
「秋生さん……。我々はやれるだけのことはしました。そしてまだやることはあります。後悔するのはそれからでも遅くはありません……」
早苗がうつむき加減で答える。肩が小刻みに震えていた。
（……そうだったな、おまえと水瀬秋子は本当に仲のよい友人……親友だったんだよな……。多分お前は俺よりも……）

「まだ生存者がいる筈です。私達も渚と合流してデータの解析、『島』の場所の特定に全力を尽くしましょう」
「……そうだな」
「それが彼女の……そしてみんなの願いだと思います。今は後悔することより先に進むことを考えましょう」

『お互い分かっていた。もはや俺達は遅い、遅すぎたのだということを。
もうこれ以上この腐れゲームに干渉をすることは不可能だ。
だけれど……今、生き残っている奴くらいは助けてやりたい。だから。
「行きましょう。秋生さん」
二人は待機していたヘリに乗り込む。
——今、昔の友人達が必死に高槻をどうにかしよ

うと必死で動き回っているわ』
　確かに彼等、水瀬秋子の古くからの友人たる古河秋生、早苗達は死力を尽くしていた。
　そして、その結果。
『往人さん。高槻という人の後ろには、とある人がいるのよ。私はその人達と争いたくないから、最後はこの子を生き残らせるために辛い選択をする時が来るとおもうの』
　彼女、水瀬秋子ですら躊躇した相手、その長瀬の組織すらも壊滅に追い込むことができた。だが、彼らに出来たのはそれだけ……それだけだった。

　彼等は知る由もない。島での出来事、真実、そして結末を……。

860　すくいきれないもの

ぴろはただ、その光景を見終えて立ち尽くすのみだった。
　終わってしまった。
　そう、全て終わってしまった。
　そらは結局、最後まで彼女を守ろうとして——そして守ってみせたのだろう。
　自らの全てと引き替えに。
　一方の自分は、約束は果たせずじまい。
　仇はもういない。
　戦友も、誰も残っていない。

（俺がやれること、なくなっちまったか）
　どうして、自分が生き残ってしまったのだろう？
（疲れた——）
　彼はその場にへたり込んだ。元々無理を押して、

この決戦の地までやってきたのだ、緊張の糸さえ切れてしまえば、まともに動けるはずもない。
（本当に、疲れた――）
生きることがどんなに辛かろうと、それを投げ捨てることだけは、絶対に許されなかった。
誰が何と言おうと、それが生き残った者の責任なのだから。

耕一は、ただ地に伏して。
この凄惨な結末に打ちのめされていた。
観鈴も、彰も、千鶴も。
何故死に逝くその顔は、あんなにも安らかだったのだろうか？
『――ありがとう』
『初音ちゃんのこと……頼むよ』
『おかあさんも、〝ようやった〞って……言ってるよ』
彼らの最期の言葉を思い出す。

（俺は――本当によくやれたんだろうか？）
神奈だけを斬ることは果たせた。
だが、あの言葉に込められた千鶴の本当の望みは。観鈴を救うこと。
その観鈴は、自分を助けるために命を落としたのだ。
（俺は――）
今は、そんなことで悩んでいるべきではないだろう。後を託された者として、やるべきことをやり、為すべきことを為さねばならない。
それは分かっている。
しかし、分かってはいても、立ち上がることはできない。
（結局、俺は――何もできなかったんじゃないのか？）
耕一の問い掛けに答えてくれる者は、誰もいなかった。

耕一に捨て置かれた、その刀の内では。

――嫌じゃ、余はもう嫌じゃ。

哀れな敗北者による最期の、そして無駄な抵抗が行われていた。
ある意味では、何よりも、それこそ自身の消滅よりも恐れていたこと。
敗北。そして封印。

今や神奈には、何の力もない。
ただ呪いを受け続けなければならない。
ただ夢を見続けなければならない。
この千年の間、それを強いられてきたように。これからも、ずっと。

――嫌じゃ、余はもう嫌じゃ――

また、自らの目の前で柳也を失うのだろうか？
また、自らの手によって柳也を殺すのだろうか？
幸せを掴もうとしても、決して掴めない。
それは指の合間をすり抜け、こぼれ落ちてゆく。

――嫌じゃ、余は、もう――

彼女はただ、泣き叫ぶ。たとえそれが、誰にも届かなかったとしても。

861　すくうもの

「がんばりましたね」
「ああ、もう死ぬほどにな」
「ははは、そうですね」
「それにしても、また会えるとは思わなかった」
「……そうね」
「母さん」

光
空から降り注ぐ、まぶしい光。
闇
目の前を覆う、暗い闇。
涙
涸れ果てることのない、忌まわしい水。
血
余の両手についているのは、だれの血だ？

「柳也、殿？」
地面に倒れ伏している、ひとりの男。
背中を、斜めに赤く大きな深い傷。
右手には血塗れの太刀をにぎったまま。
左手は土くれをつかんだまま。
立ち上がろうとして、果たせなかったのだろう。

――また、同じ夢。
神奈とて分かっていた。これは現実ではない。
呪いだ、ということを。
だが、彼女は抗うことはできない。
両の目は、涸れることなく涙を流し。
両の手を、柳也の血で赤く染めて。
――また、同じことが繰り返される。
何日も、何ヶ月も、何年も。
何十年も、何百年も、何千年も……。

「あらあらまあああ……親子水入らずのところすみません」
「……誰だ、あんた？」
「これ、往人。口を慎みなさい。体は大きくなったのに、相変わらず口の悪い……」
「うふふ、殿方は腕白なくらいでいいと思いますよ」
「恐縮です」
「だから、誰、あんた？」

「柳也……」
赤い体にすがりつき、神奈は泣く。
暗い森の中に、いつまでも少女の嗚咽がこだましている。
――どうしたの？
「柳也が、柳也が……」
――何で悲しいの？
「余のせいで、柳也が……」
――何で泣いてるの？
「柳也が死んで、死んで……」
――いつまで泣いてるの？
「そんなこと、知るか……」
――いつまでそうしているの？
「余だって、いつまでも泣いていたくはない。だが、柳也が……」
――だったら、いっしょに遊びませんか？
「えっ？」

「私たちはこれから裏葉様と共に神奈様に掛けられた呪いを浄化します」
「母さん、なんであんなヤツに様をつけるんだ？」
「お気持ちはわかりますわ。神奈さまは貴方達に悪戯ばかりされてましたものね」
「……あれは、悪戯ってもんじゃねーだろ」
「それでですね。ひとつ頼まれ事をしていただきたいのです」
「シカトかよ……」
「これ、往人！　裏葉様に恐れ多いですよ！」
「……わかったよ。で、俺は何をすればいいんだ？」
「神奈様と友達になってください」
「……はぁ？」

どこからともなく聞こえてくる、声。
「誰だ！」
神奈は涙をぬぐい、辺りを見回す。
『いつもと……違う。余はここで独りのはず』
闇の中に包まれた木々の中、ぼうっと光るものが見える。
『？』
それは、徐々に神奈に近づいてきている。
光はだんだんと人の形をつくり、大きくなっていく。
奇怪な光景、だが、不思議と恐ろしくはない。
やがて、光は薄れ、そこに立っていたのは、ひとりの少女。
「おまえ、は……」
「みすず、だよ。神奈ちゃん」

862　空へ

空を見上げる。降り注ぐ光が次第に弱まっていく。
「ん？」
ふと地面に目を落とす。地面に何かが落ちているのに気付いた。
それは黒い羽と白い羽だった。まるで互いに寄り添うように。
「そら……」
それを見て何となく理解する。お前はちゃんと彼女を救えたんだな。
それに比べて今の俺は情けねぇなぁ。
ポテトとの約束も守れず、ただ生きてるだけ。
こんなんじゃあの世であいつらに顔向けできねぇな。
俺は爪で自分の顔を引っ掻いた。
「ってぇ……」

でもおかげで目が覚めた。
そうだな、愚痴ってても仕方ないな。
あいつらはあいつらがやれることをやった上で死んでいった。
なら俺もやれることをやった上で生きていこう。
あいつらの分までな。
「っと」
後ろからふいに抱きかかえられた。
いつもなら暴れ出す所だが今の俺は気分がいいからな。
ま、特別に許可してやるぜ。
ふいに風が吹いた。
地面に落ちていた一対の羽が空へと飛んでいく。
俺はそれを目で追う。
ポテト、お前との決着はそのうちつけてやるからな。

そら、悪いけどポテトに俺の分まで約束守れなかったこと謝っといてくれよ。
ぽち、お前のこと結局守れなかったな。文句はまた後でゆっくり聞かせてもらうから。
今はまだお前らに会えないけど。いつかまた必ず会えるから。
だからその時まで。
「……またな」
何故か目から涙がこぼれる。
けっ、涙なんて柄じゃねぇのにな。
「泣きたい時は泣いた方がいいわよ」
俺を抱いている人間が頭をなでながら声をかけてくる。

——ありがとう、ぴろ君——

空耳か？
そらの声が聞こえたてきた。

ったく相変わらず水くせぇな、そら。
ずっと言ってるだろ。
「俺達、親友だからな」

羽は空高くのぼっていく。
幸せな記憶と小さな一匹の猫の思いをのせて。
どこまでもどこまでも高く。

863 Where Have All The Flowers Gone

神奈は刀に封印された。これですべてが終ったはずであった。だが、すべてが終った事で、安堵の表情を浮かべるものは誰一人としていない。
月明かりが辺りを照らす中、傷つき、倒れ、地面に横たわるものが増えていった。神奈を封印するために犠牲となった七瀬彰と神尾観鈴。そしてこの島には、あと九十一もの傷つき、倒れた者が横たわっている。今、ここに生き残っているもの達の中にも、傷一つ無いものなど誰一人としていない。ここにいる者のすべてが、身体的にも、そして精神的にも、深く大きな傷を負っていた。
柏木耕一は、自分の身を賭して命を救ってくれた神尾観鈴の――すでに上半身だけとなってしまった――身体を、濃緑の草叢の上へ、大切な壊れ物を扱うかのように優しく寝かし付ける。
「観鈴ちゃん、ちょっとだけここで待っていてくれる。またすぐにここに戻ってくるから」
そう言って、時間にしてほんの数秒だけ自分の命を救ってくれた少女を見つめ、返ってくるはずのない返事を少し間だけじっと待つ。変わる事のない沈黙に小さくため息を漏らし、この場所に横たわるもう一つの身体の元へと赴く。
「……彰」
再び来るはずの無い返事を待つ。返ってくるものは二度目の沈黙。震える事のない空気だけが、一人の生者と一人の死者の間に漂う。

「彰」
もう一度だけ、そこに横たわっている青年の名前を呼び、物言わぬ身体を自分の両腕で抱きかかえる。耕一と出会ってから一度として見せていない、本来持っていた穏やかで優しげな表情で横たわる彰。今まで生きてこられた事が信じられないくらい頼りなげな細々とした身体を、壊れるくらいに強く抱きしめる。
観月マナは、そんな柏木耕一の姿を、呆然と見守っている。
月宮あゆは、耕一が安置した、神奈と共に倒れた少女――神尾観鈴――の元に駆け寄り、その上半身だけになってしまった身体を揺さぶる。その行為が全く無駄なものであるというのは、あゆ自身の理性は理解していた。それでも、これ以上人が死んで行くのは嫌だという感情が、起きる筈の無い奇跡を願うかのように、一心不乱に観鈴の身体を揺さぶり続けさせる。
「観鈴ちゃん。もう起きようよ」
しかし、満足げな表情を浮かべた少女の表情が変わることも、その口から言葉が紡ぎ出される事も無かった。
柏木梓は、誰に言うわけではなく、この場から姿を消した。向かう先は、梓にとっての最後の姉妹である柏木千鶴が、傷つき、力尽き倒れた場所であった。
あらためて横たわる千鶴を目の前にする梓。だが、その体にすがり付くような事は無い。大声をあげ、泣き叫ぶような事もない。ただ、何の言葉もなく、何かを押し殺しているような堅い表情で千鶴の目の前に立ち尽くしているだけである。ただその目には大量の涙が溢れだしている。すでに瞳の中に仕舞い込んでおく限界量を超え、次から次へと零れ落ちてくる雫を拭う事もせず、一心に千鶴の姿を見つめている。
椎名繭は、ここで起きた凄惨な場面の連続に耐え切れず、隣に居た七瀬留美の服にしがみついて震え

ている。ショックに耐え切れず、反転が終了してしまっていた。
七瀬留美はそんな繭を優しく抱きしめ、頭を撫でている。しかし、その表情は、涙こそ流していないものの、今にも泣き出しそうなものであった。
そして、巳間晴香――
その表情に涙は無く、すべての感情を殺してしまったかのような無表情であった。思い思いの行動を取る他の生者を尻目に、晴香は傷ついた体を引きずり、森の奥へと歩みを進める。光射す場所を離れ、まるで暗い場所を探し求めているかのように、奥へ奥へと、なおも歩みを進める。
辺り一面、鬱蒼と茂った草と多くの木々に囲まれ、光は一切入ってこない場所。まるで、そここそが自分の求める場所をであるかのように、ごく自然な動作でその場に座りこむ。
木を背もたれにし、ゆっくりと天を仰ぎ、そして瞳を閉じる。晴香の脳裏には、ついさっきまで見ていた光射すあの場所での風景が思い描かれていた。その場にいる誰もが、悲哀、恐怖、憤怒といった負の感情をその表情に浮かべている。しかし晴香だけは、他の人達とは違った表情を浮かべていた。
あの場で感じた事は、ただ『これでやっと終った』という事だけであった。そこには、負の感情だけでなく、いかなる感情も入りこむ事は無かった。
「私って、本当に薄情な女だよね。私だって、この島で兄さんや、郁未、葉子さんを失った。由依なんて、私のために死んでしまったのに。それにこの島に来て初めて会った友達たちも、数多く失ったんだよね。なのに、貴方達の為に涙の一つも流してやれないんだから……。本当に薄情な女だよね、私って」
そう言って、晴香は自嘲的に笑う。
「ねえ、兄さん、葉子さん、郁未。この島で一緒に行動を共にする事は出来なかったけれど、あなたたちは最後まで幸せだった？　ねえ、智子、マルチ。

あなたたちは本当に最後まで幸せだった？　由依。あなたは、私のために命を失って良かったたって思ってる？　それで本当に幸せだったの？」
晴香の脳裏に自分の兄の顔、古くからの親友達の顔、この島で出会った友達の顔が次々と浮かんでゆく。脳裏に浮かぶ表情は、どれもみな一様に幸せそうな顔をしていた。その幸せそうな顔が、次々と晴香の脳裏を横切って行く。
そして、それとは反対に晴香の顔はどんどんと曇ってゆく。
「……私はぜんぜん幸せじゃないわ。だって、生きていたって貴方達がいないんだから。これからもずっと、貴方達のいない世界でいくつもの季節を越えて行かなければならないんだから。でも、それでも、今は幸せではないけど、いつかきっと幸せになって見せるから。貴方達の為に涙すら流す事の出来ない私が、自分の為にしか涙を流せない私が、貴方達にしてあげられる事なんて、何もないかもしれない。でも私、貴方達の事、そして貴方達と過ごした時間を絶対に忘れないから。そして、いつか誰よりも幸せになってみせるから。だから、今は、今だけは、この場所で少しだけ休ませて……」
ゆっくりと目を開き、誰に言うでもなく小さく呟く。いつの頃からか、悲しみの感情を無意識的に、そして完全に押さえこんでしまっていた晴香の、本来なら表れるはずのなかった本音だった。
誰も聞くはずのなかった言葉を風が運ぶ。その言葉は晴香自身の心に浸透してゆく。それはまるで春と共に溶けてゆく雪の様に、押さえ込んで来た様々な悲しみの感情を容赦無しに突き崩していった。
不意に晴香の目の前の視界に靄がかかる。反射的に右手を持ち上げ目を擦るが、靄が晴れることはなく、目を擦った指は湿っていた。
「なに、これ」
湿っている指に目をやり小さく呟く。その呟きとほぼ同時に、晴香の瞳から一片の雫が頬を伝わり雫

れ落ちて行く。
「今更になって、貴方達の為に涙なんか流すなんてね」
　そう言って含羞(はにか)んだ笑いを見せ、両目から零れ落ちる雫を掬う。しかし、掬っても掬っても、目から零れ落ちる涙は止まらない。
「どうして、どうして、今頃になって……」
　止まることのない涙に動揺し、無表情であった晴香の顔が、これまでこの島で見せた事のないような感情的な表情に支配されてゆく。今更になって涙を流している自分が、感情を剥き出しにしている自分が、酷く恥かしく思えた。
　晴香は涙に濡れた顔を隠すように、自分の両膝の上にうずめた。
「……」
　背後から不意に、何者かの両腕が身体を包み込む。柔らかく、そして暖かな温もりに反応し、晴香は涙に濡れた顔を持ち上げる。振り向いた視線の端に、ここ数日の間で見るのも飽きてしまうくらいに見慣れてしまった顔を捉える。晴香はごく自然な動作で、心地よい両腕を解き、その見慣れた顔を自分の視線の中心に据える。
　視線の中心にきた見慣れた顔。七瀬留美の表情は、今だ悲しみを押し殺すような表情が残ってはいるものの、つい先程までの、生気を失ったような蒼白な顔色ではなく、かすかな生気を伴ったものに変わっていた。そしてその後ろには、所在無さげに服の袖を掴んで離さない繭の姿があった。
　本当に見慣れたその顔は、晴香の流す涙のせいか、酷く歪んで見えた。
「……晴香」
「……七瀬」
　涙を流し、これまでに見た事がないくらい感情的になっている晴香の表情を見て、ほんの一瞬だけ、驚愕の表情を浮かべたが、すぐにもとの表情を取り

戻す。
「……」
「……」
お互いがお互いの名前を呼んだきり、何の言葉も交わされない。三人を包み込む空気は沈黙に包まれ、ただ風に揺れる木々のざわめきだけが音として、風と共に流れている。沈黙の続く長い時間。その間中、留美は晴香の顔から視線を外さなかった。
沈黙は続いたまま、再び留美が晴香の両肩を、脇から抱えこむようにして抱きしめ、優しく頭をなでる。いつもとは違う留美の行動に少し戸惑いを覚えたが、そのまま身体を委ねる。
「……」
「……」
ほんの少しの間だけ、優しく晴香を包みこむように抱きしめ、二人はすぐに離れる。その一連の動作の中でも、一切の言葉は交わされることはない。
「……」
「まだ終ったわけじゃないんだから、早く行くよ」
お互いがお互いの名前を呼んで以来、この空間に初めて言葉が駆け巡る。たちあがる留美が一瞬だけ視線を、元いた光さすあの場所へ移し、晴香に背を向ける。晴香に背を向ける最後の瞬間、晴香には、留美がこれまで見せた事の無いような優しい笑顔を見せた、……様な気がした。
繭を引きつれ、光射すあの場所へ戻る留美の背中に向かってただ一言だけ、留美に聞こえないように、とても小さな声で、言葉を紡ぎ出す。
「ありがとう」
それだけ言うと、すぐに立ち上がり、留美の後を追い、暗く、鬱蒼と茂った森の奥深くから、光射すあの場所へ帰って行く。晴香の目から零れ落ちていた涙は、何時の間にか乾いていた。
「あたし、これから、絶対に七瀬達と幸せになってやるんだから」
誰に言うでもなく、心の中で誓った。その表情に

は、これまでの、感情を押し殺したようなものではなく、滲み出るように優しく、少し照れたような笑顔が浮かんでいる。そして、晴香の身体には、あの時ほんの一瞬だけ交した抱擁。ぶっきらぼうながらも、優しく暖かな、留美の両腕の感覚が、今も鮮明に残っていた。

あまりにも多くのものを失ったこの島の中で、ただ一つだけ与えてくれた、かけがえのないもの。
この島で失ったものの巨大さに比べれば、得たものはあまりにも小さなものであったが、今はただ、その存在がとても嬉しかった。

864　涙を拭いて

「みゅー……」
繭によって不意に服を引っ張られ、七瀬はその足を止めた。
「ん？　どうしたの？」
繭の視線を追う。
そこには、一匹の猫がいた。
さらにその先には、黒い羽と白い羽。
一対の羽を見つめるかのように、ボロボロの猫はその場にたたずんでいた。
「……ったく、しょうがないわね」
そういえば、さっきは散々引っ掻かれたりもしたが、今はきっと大丈夫だろう。
七瀬は猫を後ろから抱え上げた。
先程の散々の悪態がまるで嘘かのように猫はじっとしている。
ただし、あくまで羽からは目を逸らさない。
不意に風邪が吹き、羽が舞った。
二枚の羽は風に舞いつつも、決して離れはしない。
淡い光の中、ただひたすらに高みを目指し、舞い上がってゆく。
猫も、繭も、七瀬も、空へと消える羽を見上げて

いた。
光と闇の合間に羽を見失って。七瀬は視線を手元の猫に戻す。
（泣いてる？）
もう見えなくなった羽をどこまでも追おうと、空を見上げる猫の顔。
猫の泣き顔など分かるはずもない。しかし、七瀬には何となくそう思えた。
猫の頭を撫で――らしくないとは思いつつも――声を掛けてみる。
「泣きたい時は泣いた方がいいわよ」
その猫に向けての言葉なのだろうか？
生き残った皆に向けての言葉なのだろうか？
それとも――自分自身に向けての言葉なのだろうか？
結局は、そのどれもなのだろう。
泣きたい時は、泣けばいい。
泣いて、泣いて、散々泣いて――泣き終えたあとに立ち上がることができるなら、泣くことは決して悪いことではないはずだ。
ふと、何かに気付いて後ろを振り返ってみると。
「晴香？」
「な、何？」
いつからいたのかは知らないが、そこには晴香が立っていた。彼女もまた、あの二枚の羽の行く末を見届けていたのだろうか？
「これ、お願い」
七瀬は、抱えていた猫を晴香に差し出す。
いきなりのことで少々面食らいつつも、晴香は猫を受け取った。ぎこちない手つきではあったが、何とか七瀬がしていたように猫を胸に抱える。
一方の七瀬は、晴香や繭に背を向けて、空いた手で、黄色いリボンを取り出した。
浩平から漢の約束と共に受け取った、瑞佳のリボン。

それを握りしめ、彼女は目を閉じる。
自然と、一筋の涙が流れた。
(今のあたしには、これで十分)
続きは、漢の約束を果たし終えてからにしよう。
七瀬はリボンをしまい、涙を拭いて、そして目を開けた。

865　脱出口

いつの間にかそれぞれが埋葬を始めていた。
さく、さくと土を掘る音と、もう誰のものとも分からないすすり泣きだけが響いていた。

場所は医務室に移って。
皆、一通りの治療を終え今後の対策を練っていた。
「脱出の話なんだけど……」
切り出したのは耕一。
「案があるわ」
すかさず七瀬が口を挟む。
「北に灯台があるの。そこの地下に高槻が隠し持ってた潜水艦があるわ。きっとそれで脱出できるはず」
とりあえずミサイルの事は出さないでおいた。
「潜水艦、か……」
その事は耕一も承知していた。他の脱出方法が『無い』ことの確認の発言だったが、その役目は全うされたと言える。
やはり、それしか方法がないのだろう。それを踏まえて、耕一はしゃべる。
「誰か一人残して爆弾を吐けば、迎えでも来るんだろうけど」
「でも、それだと助かるのは一人じゃない。そりゃ物騒な方法もあるけれど……」
晴香がそこまで言い、口をつぐんだ。
もう、誰かが死ぬのはたくさんだった。
「……決まり、ね」

施設を出るとき、耕一は一度だけ、彰を埋めた場所を見やった。
「……じゃあな、彰」
一言、そう呟いた。
刀は持っていくことにした。下手に折りでもしたら、また『奴』が出てきかねない。
家の仏間にでおいておこう。そう思っていた。ついでに、刀が刺さっていた人形もポケットに入れた。こっちの方は、まあなんとなく。
「行くか、梓」
梓は足の怪我が深く、あまり長距離の移動は無理なようだった。
「うん……ごめんね、耕一」
「気にすんなって」
梓の脇に肩を入れる。なんとかなりそうだ。
先頭には晴香、七瀬が立ち、一行は一路、灯台へと――

灯台から、例の通路をくぐり、地下ドックへ。
「このじめっとした空気……傷にしみるわね……」
先頭の二人は絶えず何かしら喋っているが、後ろを付いて歩くものは当座黙っていた。
「見えたわ……あれよ」
二人の指差す先には、みすぼらしい球状の物体が

――

その「潜水艦」を見たとたん、その二人を除く全員が色を失ったのは言うまでもない。
「ちょっと……まさかこれが、潜水艦……？」
耕一に支えられている梓の声からも無論の事、驚愕の色が浮かんでいた。
「うぐぅ……これ、動くの……？」
あゆなどは既に涙目になっている。
「みゅー……」
繭もそれにならっていた。その目は「これに乗るの？」と語っていた。

おそらく二人乗りと思われるその潜水艇は、あの高槻の持ち物とは思えぬほどに控えめなスケールだったのだ。
「宇宙……いや、海の棺桶みたいだな……」
誰にも聞こえないように、耕一が呟いた。

気を取りなおして、一行は操縦方法の把握に入る。
晴香がドラ○ンレーダーミニとでも言うべき電子画面を見ながら言う。
「このへちょいのがレーダーらしいわね……七瀬、そっちは？」
「ダメ……ＦＵＥＬっていうメーターが燃料って事くらいしか……」
「そもそも操縦桿っていうのはないのかしら……この海賊船の舵みたいのがそうなのかしら」
「みゅー……」
繭は、相も変わらず七瀬にくっついている。そしてそのまた付属品、猫もまた、繭の足元に。

ぶつぶつ言いながら、二人はボール……いや潜水艇の理解に明け暮れる。
残る者はドック内の捜索に入っていた。何か見落としている脱出方法があるかもしれないからだ。
「耕一さん、これなに？」
あゆが指差した先には、プラスチックのふたで覆われた赤いボタン。
学校の非常ボタンについてるような、あれだ。もっとも、その上に赤いランプはついてなかったが。
「ふむ……サーフェイストゥエアー……って何だ？おい梓」
「あ、アタシに振られてもっ！」
「Surface-to-air『地対空』ですね」
見かねたという感じでマナが口を挟んだ。二人はうつむきかけたが、いまはそんな状況ではない。
「地対空……ミサ……イル？」
随分と突拍子もない話だったが、なぜかすんなり

と受け入れる事ができた。
　常識という感覚は既に麻痺しているようだった。
もっとも、それは今に始まった事ではなかったが。
　始まりは――――そう、高槻があの女の子を撃ち殺したところだったたろうか？

「ミサイルに乗る青年……か」
　ぽつりと、耕一が呟いた。
「耕一……まさかアンタ、これに乗って脱出しようなんて考えてるんじゃないでしょうね」
　耕一に支えられながら、先ほどとは異質の驚愕の表情で梓が言う。
「う……で、でもさ、あの潜水艦に俺達七人……と一匹が乗るのは……空気の問題もあるし」
「潜水艦と言っても、どこか他の陸につくまで潜水しっぱなしでなくてもいいじゃないですか。ハッチを開けて海面に浮かんでいれば、空気の問題は解決できます」

　冷静な口調でマナ。
「それでもここは地下だぜ？　ここから出すにはあの潜水艦に乗らなきゃ……」
「だったらあとの人たちは上で待ってればいいんだよ」
　さすがにあゆに突っ込まれる事は予想していなかったのか、耕一の表情が沈んでいく。
「ぐ……うぐぅ…………」
　唸る。
「あっ、ボクの真似しないでよう！」
　突っ込む。
　ここに来てなぜかあゆは一人元気だった。
「……なるほど、誰かがコイツを動かして、近くの海岸で残りの人を拾う、と」
　耕一からの説明を聞き終えた七瀬、晴香の両名は頷きながら呟く。
「ああ。ここからまっすぐあがっても崖だしね。ちょっと手間だけど多分それが最良だと思う。あとは

……」

誰が潜水艇を操縦するか。

「……潜水艦の操縦をやってみたい人。挙手」

誰も手を上げない事を前提に、耕一が聞いてみる。

手を上げないどころか、耕一さんお願いしますとか言われるんだろう。多分。

その予想に反して、三人、手を上げた。

七瀬と、晴香。少し遅れて、繭。

「指紋、照合しました。操作系統のセーフティロックを解除します」

無味乾燥なアナウンスが響く。聞くなり、七瀬は手にした『手首』を荷物の中に戻した。

ごとり、という音がした。どうやら物理ロックだったらしい。安物だ、と七瀬は思った。

「なるほど……指紋照合か……」

ハッチの上からのぞいていた耕一が思わず言う。

さすがに女の子が造作も無く荷物の中から手首を取り出したのには驚いたが……。

「三人とも、やれそうかい？」

「この舵みたいなので動かすみたいね、でも……」

人手が、足りない。

高槻の持ち物だからか、設計者がひねくれていたのか、それともよほどの急ごしらえだったのか……

操縦桿と、レーダー。それに、地図。コンパス。窓。

それらすべてが、それぞれ別の位置に配置されているのだ。

「これ作った人間は何考えて作ったのかしら……」

思わず、七瀬がもらした。

「耕一さん、もう一人くらい誰か乗るように——」

晴香が言い終わるより速く。

「ボクっ　ボクが乗るっ！」

能天気と言って差し支えない声がした。

「————言ってくれないかしら」

無視。

「うぐぅ～　ひどいよ～」

「本当に大丈夫かしら……」
晴香がため息をつく。結局、あゆに押し切られたのだ。
「アンタ、本当に大丈夫なんでしょうね。まさか興味本位で乗ったんじゃあ……」
七瀬が釘をさした。
「大丈夫だよ～　ボクがんばるよ～」
しかし、その瞳が好奇心に輝いているのを、二人が見逃そうはずもなかった。
ボクは今から、センスイカンに乗るんだ！　目は口ほどに物を言う。
「……はあ」
今度は、二人同時にため息をついた。
「じゃあ、いいかい？　エンジン始動するよ？」
耕一の声がスピーカー越しに響く。
もともとこの潜水艇は地上で内部気圧などを操作し、かつそこで指示を出しながら潜水させる『探査船』のようなものだったらしい。だから、始動スイッチなどが地上のドック内にあるのだ。
もっともそこは改造品らしく、潜水艇内部でも大まかな作業は行えるようになっている。
潜水艇にはケーブルがついており、この範囲内ならドックから電力を供給できるので燃料を気にしなくて済む。燃料を気にするのはケーブルの範囲から出た後でいい……らしい。
操縦席には、ちゃっかり切断ボタンらしきものもついていた。プラスチックの蓋が被さっていたが。
本来はドックで誰かが潜水艇まわりの装置を監視しなければならないのだが下手にいじるよりも、ということですべてオートにしてある。これも、ケーブルの範囲内での話だが。
晴香はコンパス。あゆはレーダー。繭は窓。地図は猫。配置は決まった。

「ここから東に進んだ一番近い海岸で集合だ。いいね？」
「はい。始めて下さい、耕一さん」
そして、舵を握るのは七瀬。スピーカーは舵の近くについていた。もっとも、すぐに使われなくなるが。
ヴォン……スクリューが回転し始める。
「行くわよ……」
七瀬は目の前の「Descent（下降）」ボタンを押す。
浮上、下降、前進はこのボタンで切りかえるらしい。
ゆっくりと、手元のレバーを押し込んでいく。
下降するエレベーターに乗っているような感覚が襲った。少し、お腹の傷がうずいた。
希望をはらんだ船は、静かに、暗い海に沈んでいく。
それを見届けると、地上に残った者たちは、ドックを後にした――――

866　追憶そして

そこは〝無〟
なにもないところ。
なにもないところに、彼女はいた。
かつて、神奈と呼ばれた存在。

（静かじゃ）
こんなに静かなのはどのくらいぶりだろう。
あの悪夢が始まってから、自分にはいっときもこのような時間はなかった。
（もう、あそこに戻るのは嫌じゃ）
この場所……場所と呼べるかどうかは分からないが……に、永遠に留まるのも悪くはなかろう。
永遠の、安息を――――

「……お前か」

入りこむ影、ひとつ。
「おぬしを利用した余に復讐にでも来たのか？」
返事は、ない。
「余が憎かろう。おぬしの体を利用し、思うまま殺戮に走った余が」
返事は、ない。
「殺すがいい、余を。消滅させてしまうがいい」
なんでもいい。
あの悪夢に、帰らなくとも済むのなら――――

「だめだよ」
人影が言った。優しい声だった。
「それじゃあなたは、いつまでも悲しいままま」
それを聞き、神奈は激昂した。
「だまれ！　お前に余の何がわかるというのじゃ。余の悲しみが、苦しみが、悪夢が、お前に分かるとでもいうのかっ……!!」
激しい声だった。強く、荒く。

そして、悲痛な。
「分かるよ……だって」
「わたしは、あなた」
人影が、こちらに迫ってくる。
神奈は、退いた。
「あなたと同じ悲しみを……わたしも持っているもの」
一歩。
「く……来るでない……」
また一歩。
「あなたと同じ痛み……わたしも感じていたもの」
影は。
「来るでない……来るな……！」
神奈を――――
影に包まれた瞬間、神奈に流れ込んでくるものが

あった。
それは懐かしい、あの夏の日の記憶。
一人の無礼者と出会い、母親と別れたあの夏の日々。
そしてもう一つは、自分の知らない記憶。
一人の旅人と出会った、夏の日の記憶。
旅の男と過ごした、あの夏の日々。
それは。
幸せだった、あの夏の日々のカケラ――――――

神奈は我に返った。
影が、自分を抱きしめている。
不思議と、嫌な気分ではなかった。
そして、神奈の目に留まるもの。
それは、夏を共に過ごした、愛しい人。
「りゅうや、どの……?」
影の手を離れた神奈は、一心に柳也のもとへ。
「柳也どのっ、柳也どのっ、りゅうやどのぉっ！」

まるで、年端もいかぬ子供のように、神奈は泣き続けた。
柳也と呼ばれた影は、子供をあやすような仕草をしながら言った。
「神奈。よく聞け」
「いやじゃ！　もう、夢を見るのはたくさんじゃ！余は、柳也どのと共にいたいのじゃ！」
話の内容を察していたらしい。神奈は、一層泣き始めた。
「駄目だ、神奈。お前が犯した罪は、お前が罰を受けなければ赦されない」
内容とは裏腹に、決して突き放すような口調ではなかった。
「罪？　余が、なにを……」
「島で、おまえが殺した人間がいるだろう」
「……ッ！」
思い出す。桃色の髪をした少女。緑色の髪をした少女。

一言も喋る様子のなかった少女。金髪の少年。蛇。そして、あの鬼飼ぃ。

「うう……ううう」

神奈は、また泣き出した。それは夢に戻る事に対してか、それとも、〝罪〟の意識によるものであったのか。

体を震わせて、押し殺すように。

神奈は、泣いた。

「……安心しろ」

「柳也」の腕に力がこもった。

「俺が待っている。お前の罪が赦されるまで、俺がずっと待っていてやる」

「……！」

「だから、行ってこい。多分、すぐに終わるから。それに……」

そこで神奈はもう一つの影を認めた。それは、柳也とともに彼女を支え続けた人物で。

「裏葉ぁ……」

「こいつも、待っているからな」

「……」

「俺と裏葉はお前を応援しながら、いつまでも待っている」

だから、行ってこい。そう言ったきり影は口をつぐんだ。

「……待っていて、くれるのじゃな？」

神奈が、口を開いた。

「ああ。……待ってる」

「いや、待っておれ。これは命令じゃ」

その声は先ほどまでの神奈ではなく、あのわがままな翼人、神奈備命のものだった。

「……承知した。翼人様の命とあらば」

もっともらしく、柳也の影は応えた。心なしか、その顔は笑っているように見えた。

そして、神奈の姿が消えていく。

（――――三人とも）

最後に。

（―――感謝するぞ―――）

　そういって、神奈は姿を消した。

「わたし……あの子に何かしてあげられたかな」
「ああ。観鈴、おまえは充分過ぎる程よくやったぞ」
「せや。お前はようやったで」
「にはは、観鈴ちん、がんばった」
「それじゃ、そろそろ行くか？」
「え？　往人さん、あの子を待ってなくていいの？」
「せやで居候。男なら約束守ったらんかい」
「いや……待ってたから、おまえがいるんだろう」
「え？」
「……何でもない。それより……」
「往人さん、この手なに……？」
「共に、いたいんだろ？」
「おー　なんや居候、恥ずかしいこと言っとるでー。智子あたりにちくったろー」
「晴子っ！」
「お母さんっ！」
「わははー　なんや二人とも耳まで真っ赤になっとるでー　わははー」

　約束しよう。
　どれだけ生まれ変わっても、お前と共に生きる事を。
　約束しよう。
　お前に、幸せな記憶を刻みつづけてやる事を。
　約束しよう。
　たとえ汗が滲もうと、この手を離さないことを

　――――

BGM Change 鳥の詩　（a Last Episode）

Please change BGM.　Air より「鳥の詩」
……伴奏

――潜水艦、内部――
梓　「せ……狭い」
耕一「なんか息苦しくないか…？」
マナ「まず……くない？」
晴香「ちょっと七瀬！　上げて！」
　潜水艦が急浮上する。
――ギ……ギギィ……――
　急いでハッチを開けた。
耕一「だから無理だったんだって！　こんなたくさ……」

――潜水艦、海上――
　耕一が見つめた空に飛行機雲が見える。

どこからか来て、あの島へ向かったかのような軌跡。

［消える飛行機雲　僕たちは見送った］

マナ「もう……。日が昇ってたのね」
ひょっこりと顔を出すマナ。
光を放つ太陽。
青い空。

［眩しくて逃げた　いつだって弱くてあの日から］

あの島の悪夢。
変わらないはずだった日常。

［変わらず　いつまでも変わらずに］

彼等はいつか、消えてしまった人達のことを忘れてしまうのでしょうか。

［いられなかったこと悔しくて指を離す］

――潜水艦、正面――

――ニャーニャー……――

耕一「鳥？」
　潜水艦のまわりに沢山の鳥が集まってくる。
　鳥達は彼等の船に併走する。
　白い中に一羽だけ黒。

［あの鳥はまだうまく飛べないけど］

マナ「鳥がいるってことは……」
藺「陸が近いってことじゃない？」
　黒い鳥は、道を示したかのように先へと進む。
　不恰好な飛び方のまま、弾けて消えた。
ぴろ（!!　そ、ら!?）

［いつかは風を切って知る］

七瀬「陸見えたの!?」
　操縦席から響く七瀬の声。
晴香「まだ……。まだだけど……！」

［届かない場所がまだ遠くにある］

あゆ（うぐぅ…。狭いし暗いし苦しいし……。早くついてよぉ……）

［願いだけ秘めて見つめてる］

──通学路──

七瀬「折原……。瑞佳……」

通学路を行く。
以前通りの道だが、寂しい。

［子供たちは夏の線路　歩く］

繭「みゅーー！　早く早く！」

底抜けに明るい繭の声。

七瀬「はいはい……」

騒ぐ繭に七瀬が走り寄った。

七瀬（うん……）

繭「みゅ？」

［吹く風に素足をさらして］

［遠くには幼かった日々を］

［両手には

［飛び立つ希望を］

——柏木家——

耕一「昔……。皆でハイキング行ったな……」
平和の時。その中で彼はたびたび昔を思い出す。
二度と帰ってこない、幸せな日々。

梓「耕一～。ちょっといいかな～」
梓が彼の側に駆け寄ってきた。

梓「耕一と同じ大学に行きたい！」
耕一「なっ!?」
あゆ「ぼくも!!」

——黄昏の街——

晴香「これから……。どうしようかな」

赤い街の中を晴香は歩く。

行き先は決めていない。

ただ、飛行機雲の向かう方へと歩いてみたかった。

[消える飛行機雲　追いかけて追いかけて]

晴香「なんか楽しいこと見つけなきゃね」

飛行機雲は遥か彼方まで続く。

晴香「ま、なんとかなるでしょ。生きているんだから」

ふと誰かに呼ばれた気がして振り返る。

気のせい？

晴香「七瀬……？」

[この丘を越えたあの日から変わらずいつまでも]

——マナの自室——

マナ「あ〜〜！　医学って難しすぎる……」

机の参考書を放り投げるマナ。

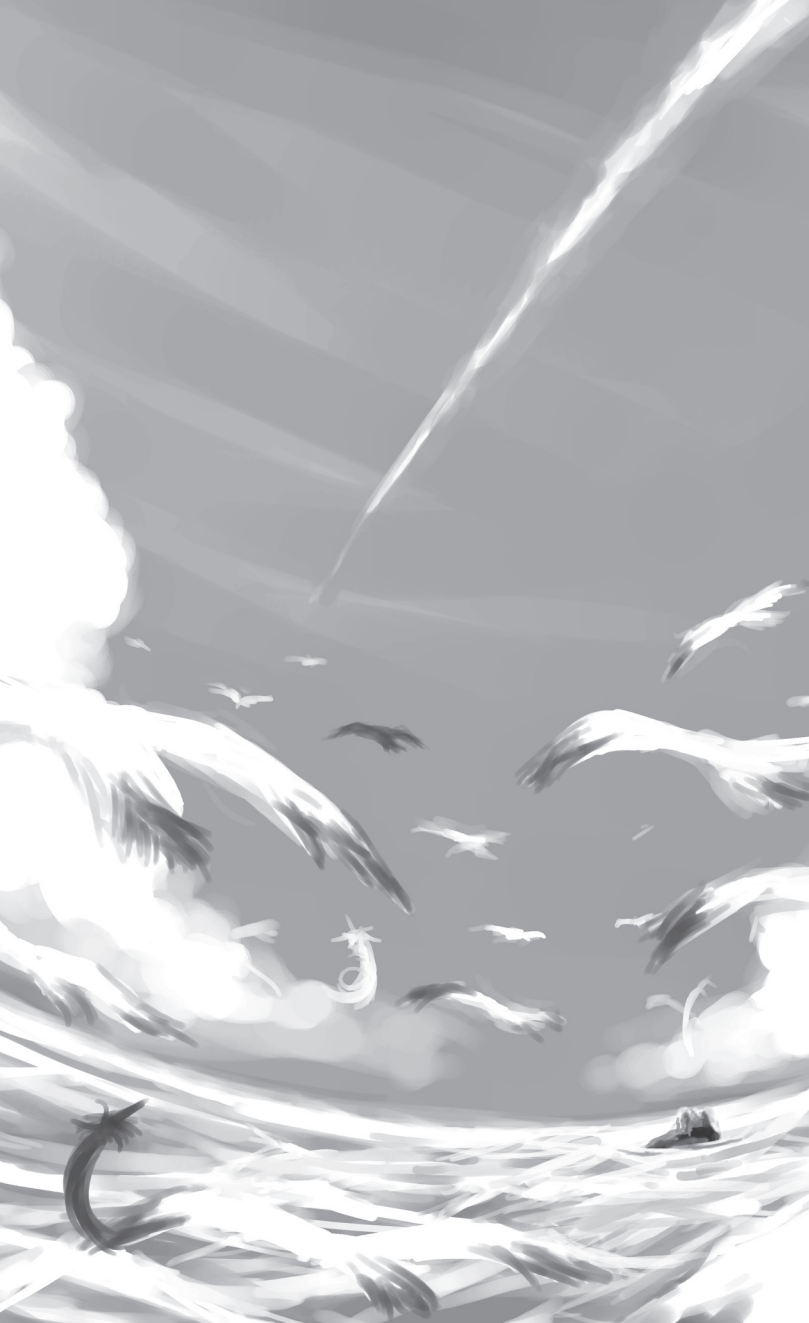
ぴろ（まぁ、がんばりな）
マナ「うう……。せんせー……」

――再び潜水艦――
晴香「それじゃあ、鳥達の向かう陸地へ向けて……」
晴香「全・速・前・進!!」
一同『おう!!』

［真っ直ぐに僕たちはあるように］

［海神（わたつみ）のような］

［強さを守れるよ　きっと］

《葉鍵ロワイアル　完》

後書

葉鍵ロワイヤルを紙媒体で読みたい。
この素晴らしい作品をもっと世に広めたい。

そう思って、当時の懐かしむスレに書き込んだのが、ちょうど二年前の夏。
当初はこの企画が実を結ぶなんて、誰も想像していなかったのではないでしょうか。それほどまでに難題は山積みされていて、正直私ひとりでは途中で挫折していたのではないかと思います。その折に、セルゲイ@D氏と三浦闌氏による協力の申し出を得ることができたことは、奇跡と言っても良い僥倖でした。
それから、三人で何度か顔を合わせての打ち合わせを行い、その中で出版用の団体としてハカロワ出版企画を発足しました。
そうやって、段々と具体的に企画の方も動き出し、企画に協力して下さる方や、協賛して下さる方も徐々に増えていきました。やや難産だったかもしれませんが、ハカロワの第一巻が無事発刊できたのも、ハカロワの著者さんと読者さんを始めとする多くの人たちの協力があったからこそです。本当に感謝してもしきれません。
第一巻が発行されたのは一昨年の冬の事でした。
初めてハカロワの一巻を手に取ったときのことは今でも鮮明に覚えています。ポプルスさんによって丁寧

に装丁されたその本は普通の書店に置いてても違和感の無いくらいしっかりした物でした。それを初めて手にしたとき、感動よりも紙媒体化されたハカロワが本当にあるということが信じられないという気持ちの方が大きくて、現実感がいまいちありませんでした。ですが、ページをぱらぱらとめくっていくうちに、じわじわと喜びがこみ上げてきて、思わず知人に見せびらかしに行ったりしました。と、同時にこれなら赤字にならないくらいは売れるのじゃないか、とも思いました。今でこそ笑い話にできるのですが、当時は、収支が赤字にならないかどうかが、かなりの心配事でした。赤字になってしまえば、二巻以降発刊するのは叶わずそこで企画が終了してしまうからです。

しかし、実際に箱を開けてみればその心配は全くの杞憂で、冬コミに持っていった第一巻は午前中に完売。その後も反響はすさまじく、その勢いは私達の想像を遥かに超えていました。

お陰で無事二巻、三巻と続き、とうとう今日、最終巻である七巻の発行を迎えました。

ここまでこられたのも、たくさんの方々の情熱によって創り上げられたハカロワの魅力によるものでしょう。そして、紙媒体化という格好で、そういう作品に関われたことを本当に嬉しく思います。

最後にハカロワを創りあげた皆様と、ハカロワを応援して下さった皆様に――

ありがとうございました。

平成一六年　七月　某日

瀬戸こうへい

葉鍵ロワイアル　第七巻　著者一覧

奇跡の企画を作り上げた皆様に
この場を借りて、お礼を申し上げます。

772　俺たちは、まだ笑える……名無したちの挽歌さん
773　閉幕の足音……L.A.R. さん
774　消えた光点……名無したちの挽歌さん
775　遊戯……林檎さん
776　花火……。さん
777　激突！……名無したちの挽歌さん
778　管理人の憂鬱……祐一＆浩平さん
779　二人の黄昏～郁未と少年～……命さん
780　二人の黄昏～郁未と葉子～……命さん
781　狂気への扉……名無しさん
782　今や彼女は……名無したちの挽歌さん
783　戦い続けた僕らのために……。さん
784　笑い続けた僕らのために……。さん
785　ココロ、ウバワレテ（前編）……名無しさん
786　闇へと誘う翼……Kyaz さん
787　扉の向こう側……名無しさん
788　引き金の重さ……名無したちの挽歌さん
789　ココロ、ウバワレテ（後編）……名無しさん
790　One way……L.A.R. さん
791　死ぬわけにはいかない……L.A.R. さん
792　雷……L.A.R. さん
793　右手に剣を、左手に枷を……。さん
794　ひとりぼっち……名無しさん
795　七瀬の不安……名無したちの挽歌さん
796　紅い瞳……名無したちの挽歌さん
797　そのこころは……祐一＆浩平さん
798　少女の決意……名無しさん
799　迷い、選択、その結果……名無しさん
800　カウントダウン……名無しさん
801　泣くということ……名無したちの挽歌さん
802　沸き上がる記憶……名無しさん
803　ヴァンパイア……Kyaz さん
804　偶然性……名無したちの挽歌さん
805　チェシャ猫～再び裏舞台へ～……林檎さん
806　Tomorrow……命さん
807　みんな、結末を目指して……Kyaz さん
808　離散、思いがけぬ危機……名無しさん
809　三度現れし彼女……名無したちの挽歌さん
810　心の行き先……祐一＆浩平さん
811　使命感……名無しさん
812　結末……命さん
813　狼煙……名無したちの挽歌さん
814　空を見上げて……名無しさん
815　駄目な人……5 さん

816　正しいことを……………………………………………………… 名無しさん
817　約束を……………………………………………………………… 名無しさん
818　二つの機械……………………………………………… 名無したちの挽歌さん
819　機械……………………………………………………………… 祐一＆浩平さん
820　空の下の女の子………………………………………………… 名無しさん
821　小さな奇跡……………………………………………………… 名無しさん
822　願いと約束と………………………………………………… 祐一＆浩平さん
823　袂・スフィー…………………………………………………… 名無しさん
824　傀儡と道化と、人間達と動物達…………………………セルゲイ＠Ｄさん
825　暗き闇にてうごめくモノ………………………………… 祐一＆浩平さん
826　私・ぼく・俺…………………………………………………… 名無しさん
827　逃げて終わる………………………………………………………… ５さん
828　Virus　……………………………………………………………… 命さん
829　集うものたち…………………………………………………… 名無しさん
830　星空の下で……………………………………………………………MIU さん
831　言葉と思考の外側に…………………………………… 名無したちの挽歌さん
832　銃声は、一度…………………………………………………… 名無しさん
833　空と少女と動物と……………………………………………… 名無しさん
834　それぞれの生き様……………………………………… 名無したちの挽歌さん
835　わがまま………………………………………………………… 名無しさん
836　長いお別れ……………………………………………………… 名無しさん
837　業火……………………………………………………………… 名無しさん
838　標的…………………………………………………… 名無したちの挽歌さん
839　雨の中…………………………………………………………セルゲイ＠Ｄさん
840　意志の力は魔法の力……………………………………………… 林檎さん
841　遺志、そして意志──まもるべきもの── ………………… 名無しさん
842　夏、青空の少女──She is waiting in the air──　…………… L.A.R. さん
843　たった一つの…… ………………………………………………… L.A.R. さん
844　現実に抗う者…………………………………………………… 名無しさん
845　光の四柱……………………………………………… 名無したちの挽歌さん
846　ためされる絆…………………………………………………… Kyaz さん
847　相棒……………………………………………………………… 名無しさん
848　正面衝突………………………………………………………… River. さん
849　一触即発………………………………………………………… 名無しさん
850　光に背を向けて………………………………………… 名無したちの挽歌さん
851　遺書。……………………………………………………………………。さん
852　恐慌を制すもの………………………………………… 名無したちの挽歌さん
853　小細工、そして………………………………………………… 名無しさん
854　おねえさん………………………………………………… 葵原てぃーさん
855　呪夢……………………………………………………………… 名無しさん
856　けもの達の集う場所……………………………………… 祐一＆浩平さん
857　死の舞踏……………………………………………… 名無したちの挽歌さん
858　終局へ…………………………………………………………… L.A.R. さん
859　コップの中の嵐………………………………………………… Kyaz さん
860　すくいきれないもの………………………………… 感想スレＲの 142 さん
861　すくうもの……………………………………………………………MIU さん
862　空へ……………………………………………………………… 祐一＆浩平さん
863　Where Have All The Flowers Gone……………………… 遥か昔の書き手さん
864　涙を拭いて……………………………………………………… 名無しさん
865　脱出口…………………………………………………………… River. さん
866　追憶そして……………………………………………………… River. さん
867　BGM Change 鳥の詩（a Last Episode）　………………………… 林檎さん

◎制作者一覧
制作協力：
111、５、JOYH-TV、Kyaz、L.A.R、MIU、Yellow 、
#3-174、いつかの書き手、独活大樹、感想スレＲの 142、
葵原てぃー、久々野　彰、冴村浩志、静かなる中条、
真空パック、駄っ文だ、ないしょ、ナナツさんだよもん、
名無し達の挽歌、名無しさんだよもん＠誤植指摘、
遥か昔の書き手、日向葵、フラスキ、箕崎、観月、林檎、
『。』、名無しさんだよもん

制作協賛：
104、Alfo、NBC、命、シイ原、七連装ビッグマグナム、
暇人、祐一＆浩平、名無しさんだよもん

スペシャルサンクス：
189、quit、River. 、zin、#4-6、#7-76、荒門、彗夜、
ダンディ、名無しcd、名無しさんなんだよ、にいむらたくみ、
花と名無したん、ヘタ霊、赤目、名剣らっちー、
訳あり名無しさんだよもん、旧データサイト管理人各氏、

そして全ての名無しさんと読者の皆様
（アルファベット～アイウエオ順、敬称略）

葉鍵ロワイアル　（7）
二〇〇四年　　八月一五日　初刷発行
二〇二二年　一二月三〇日　電子書籍版　初刷発行

著　　者：（別頁に記載）
発 行 者：瀬戸こうへい
発　　行：ハカロワ出版企画
初　　出：２ちゃんねる、葉鍵（Leaf&Key）板
編集事務：セルゲイ＠Ｄ　三浦　闌
挿　　絵：ちん
印　　刷：株式会社ポプルス
連 絡 先：kohei19800310@yahoo.co.jp

これから、お前達には、殺し合いをしてもらう——

早う逃げ！　同人女は夏こみまでは死ねんのや！
朝陽、もう一度、見たかったね
さあ、楽しい人形劇の始まりだ
ぎゅって、して……
バイ……バイ……殺し屋一号さん……
こんな奇跡、無い方が良かったのかもしれないね
人を……信じなくっちゃ駄目だよっ！
……泣いてん、じゃねぇぞ
——のことはね。死んだって、忘れないよ……
——だけは、殺させるわけにはいかねぇ……
——を守る為なら、あなただって殺すわ……

にはは……みんな、ありがとね……

——本編に登場した全てのキャラクターたちへ

——Tactics、Key、Leafなどの作品群を
　　創り出した全ての方々へ
——この本を手にとって下さった方々へ
——次のコミケを常に追いかけ続ける者たちへ
　　……そして、それが叶わなくなった者たちへ

——葉鍵ロワイアルに関わった、全ての方々へ……

……この本を、捧げる——

9784108221647

ISBN4-80103-129-4

C0510

1921057233732

ハカロワ出版企画

HAKAGI ROYALE Ⅶ

『にはは……みんな、ありがとね……』

いくつもの願いがあった。
いくつもの別れがあった。
いくつもの物語があった。

孤島で繰り広げられた、
悪夢の日々が、遂に終わる。

全ての想いは空へと還り、
そして――

葉鍵ロワイアル　ここに完結!!